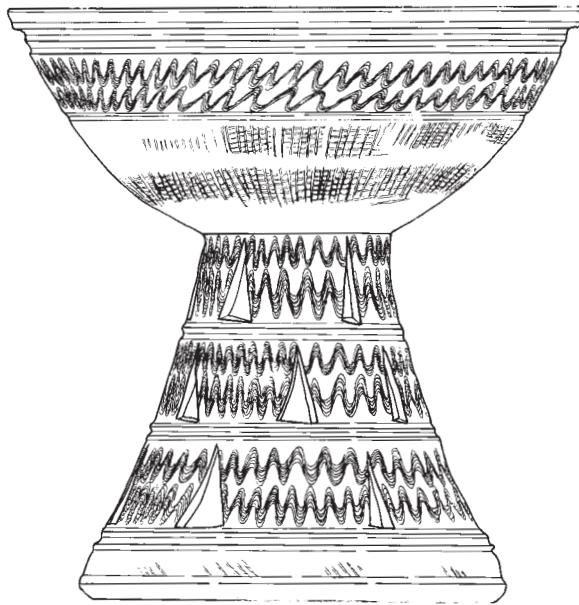


具同中山遺跡群Ⅲ－3

中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ



2002.2

高知県教育委員会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

具同中山遺跡群Ⅲ－3

中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ

2002.2

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

本書は、中村宿毛道路建設に伴って平成12年度に実施された具同中山遺跡群Ⅲ－3区の発掘調査報告書です。具同中山遺跡群の調査は、昭和61年度から実施されており縄文時代から近世に至る数多くの遺構や遺物が検出され、幡多郡の中心的な遺跡となっています。中でも古墳時代は、県内最大規模を誇る祭祀遺跡であることが確認され、四国の中でも有数の遺跡に数えられています。

今回の調査は、遺跡の立地する丁度自然堤防頂部に当たり、多数の土製模造品や石製模造品と共に土師器や須恵器を使用した祭祀遺構が数多く検出され、さらにこれまでの調査では初めてとなる竪穴住居跡と掘立柱建物跡が確認されました。合わせてこれまでで最も多い白玉の出土や初出土となる須恵器の把手付椀や器台も検出され、当時盛んに祭祀を行っていたことが伺えます。一方、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が祭祀に関連したものか、または、集落を構成していたのか、周辺部の調査を待たないと即断できませんが、当遺跡群を考える上での重要な要素であることには変わりありません。これら貴重な資料を収録した本書が古墳時代祭祀遺跡の研究、さらに埋蔵文化財の保護の一助になれば幸甚の至りです。

最後になりましたが、発掘調査の実施や報告書の作成にあたっては、埋蔵文化財に対する御理解と発掘調査に御協力賜った国土交通省中村工事事務所を始めとして地元関係者の方々に心から謝意を表すると共に、調査、報告書作成では関係各位に多大な御指導並びに御教示を頂いたことに心より厚くお礼申し上げます。

平成14年2月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 門田 伍朗

例言

1. 本書は中村宿毛道路建設計画に伴い平成12年度に実施した具同中山遺跡群Ⅲ-3の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。
3. 具同中山遺跡群は高知県中村市具同字中山に所在する縄文時代から近世にかけての複合遺跡であり、中でも古墳時代の祭祀に特筆される。発掘調査は平成12年5月から11月まで実施した。
4. 発掘調査は次の体制で行った。

総括―財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 門田伍朗
総務―同総務課長 島内信雄, 同主任 山本三津子, 同主幹 大原裕幸, 臨時職員 大橋真弓
調査総括―同調査課長 重森勝彦
調査担当―同調査第四班長 廣田佳久, 同専門調査員 田坂京子, 同調査員補助員 山本純代, 技術補助員 野町和人, 測量補助員 岡崎眞紀
5. 本書の執筆は調査を担当した廣田, 田坂, 山本がそれぞれ執筆し, 編集等は廣田が行った。現場写真は田坂, 山本, 遺物写真は廣田が撮影した。
6. 遺跡の略号は「00-3GN」とし, 出土遺物の註記等にはこれを使用している。報告書に掲載の縮尺率はそれぞれに示した。遺構についてはSB(掘立柱建物跡), ST(堅穴住居跡), SF(祭祀関連遺構), SX(性格不明遺構), SC(炭化物集中遺構)で表記した。また, 掲載している遺構の平面図の縮尺はそれぞれに記しており, 方位Nは公共座標におけるGNであり, 遺跡付近(国土基本図Ⅳ-KC17)の真北はGNに対し東に $0^{\circ} 20' 41''$, 磁北はGNに対し西に $5^{\circ} 31' 34''$ 振っている。なお, 調査区のはほぼ中心部(X=-2,892, Y=-54,480)は北緯 $32^{\circ} 58' 21''$, 東経 $132^{\circ} 55' 2''$ である。
7. 遺物については, 原則として弥生土器・土師器・須恵器が縮尺1/4, 土製模造品・石製模造品(白玉以外)・手づくね土器・鉄製品(鉄鏃)が縮尺1/2, 石製模造品(白玉)が原寸で掲載している。なお, 一部の遺物については縮尺を変えているが, 各挿図にはスケールを表示している。
8. 現地調査及び本報告書を作成するにあたって, 多くの方々のご指導並びに貴重なご教示, ご助言を賜りご協力頂いた。記して感謝の意を表したい。
9. 遺構, 遺物の測量及び写真撮影は各調査員, 技術補助員, 測量補助員が行い, 測量には新たに設置した3級基準点を使用した。
10. 整理作業は下記の方々に行って頂いた。また, 同センターの諸氏から貴重な助言を得た。記して感謝する次第である。

整理作業員

島村加奈, 岸本洋子, 元木恵利子, 坂本エリ, 竹村小百合, 森田直美, 松田美香, 岩井涼子, 吉野絵里, 森川 歩, 森沢美紀, 横山めぐみ, 原真由美, 西村美喜

11. 調査にあたっては、国土交通省四国地方整備局中村工事事務所、社団法人高知県建設技術公社、高知県中村土木事務所のご協力を頂いた。また具同地区長をはじめ地元住民の方々に、遺跡に対する深いご理解とご援助を頂き、厚く感謝の意を表したい。
12. 出土遺物、その他図面類の関係資料は財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章 序章

1. はじめに (廣田)	1
2. 契機と経過 (廣田)	2
3. 調査日誌抄 (田坂・山本)	3

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査の方法 (廣田)	9
2. 調査の概要	9
(1) 調査区の概要 (山本)	9
(2) 層序	9
(3) 堆積層出土遺物	12
① I 区 (田坂)	14
② II 区 (山本)	25

第Ⅲ章 遺構と遺物

1. I 区 (田坂)	39
(1) 古墳時代	39
① 祭祀関連遺構	39
(2) 古代	79
① 土坑	79
② 性格不明遺構	83
2. II 区 (山本)	84
(1) 弥生時代	84
① 土坑	85
(2) 古墳時代	86
① 掘立柱建物跡	87
② 竪穴住居跡	90
③ 祭祀関連遺構	94
(3) 古代	120
① 土坑	120
② 性格不明遺構	123
③ 炭化物集中遺構	124

第Ⅳ章 自然科学分析

はじめに	127
1. 試料.....	127
2. 方法.....	127
(1)放射性炭素年代測定	127
(2)樹種同定	127
3. 結果.....	127
4. 考察.....	128
(1)住居跡・掘立柱建物跡の年代	128
(2)柱材などの用材選択	129

第Ⅴ章 考察

1. 弥生時代について (山本)	131
2. 古墳時代について (山本)	131
3. 白玉について (田坂)	134
4. 古代について (田坂)	135
5. 製塩土器と土錘について (田坂)	136
6. まとめ (廣田)	138

挿図目次

Fig.1 中村市及び具同中山遺跡群位置図.....	1
Fig.2 具同中山遺跡群及び周辺遺跡の調査区位置図 (S=1/10,000)	2
Fig.3 試掘トレンチ及びⅢ区調査地区 (S=1/2,000)	3
Fig.4 発掘調査風景1.....	4
Fig.5 発掘調査風景2.....	5
Fig.6 発掘調査風景3.....	5
Fig.7 体験学習風景	6
Fig.8 記者発表.....	7
Fig.9 現場説明.....	7
Fig.10 調査区全体図及び基準点配置図 (S=1/1,000)	7
Fig.11 I区北壁セクション図.....	10
Fig.12 II区下層確認トレンチ柱状図 (S=1/40).....	11

Fig.13	I 区第 V 層出土遺物実測図(土師器・須恵器・土師質土器)	14
Fig.14	I 区第 V 層出土遺物実測図(土製品)	15
Fig.15	I 区第 V 層出土遺物実測図(石製品)	16
Fig.16	I 区第 VI 層出土遺物実測図(土製品)	16
Fig.17	I 区第 VIIIa 層出土遺物実測図(土師器1)	16
Fig.18	I 区第 VIIIa 層出土遺物実測図(土師器2)	18
Fig.19	I 区第 VIIIa 層出土遺物実測図(土師器3)	19
Fig.20	I 区第 VIIIa 層出土遺物実測図(土師器4)	21
Fig.21	I 区第 VIIIa 層出土遺物実測図(手づくね土器)	22
Fig.22	I 区第 VIIIa 層出土遺物実測図(須恵器)	23
Fig.23	I 区第 VIIIa 層出土遺物実測図(土製模造品)	24
Fig.24	I 区第 VIIIa 層出土遺物実測図(石製模造品)(112~115は原寸)	24
Fig.25	I 区第 VIIIa 層出土遺物実測図(石製品)	25
Fig.26	I 区第 VIIIa 層出土遺物実測図(鉄製品)	25
Fig.27	II 区第 V 層出土遺物実測図(土師器)	26
Fig.28	II 区第 V 層出土遺物実測図(須恵器)	27
Fig.29	II 区第 V 層出土遺物実測図(土師質土器・製塩土器)	28
Fig.30	II 区第 V 層出土遺物実測図(土製品・鉄製品)	29
Fig.31	II 区第 VI 層出土遺物実測図(土師器・須恵器・製塩土器)	30
Fig.32	II 区第 VI 層出土遺物実測図(土製品・石製品)	31
Fig.33	II 区第 VIIIa 層出土遺物実測図(土師器)	32
Fig.34	II 区第 VIIIa 層出土遺物実測図(手づくね土器)	33
Fig.35	II 区第 VIIIa 層出土遺物実測図(須恵器)	34
Fig.36	II 区第 IX 層出土遺物実測図(弥生土器)	35
Fig.37	II 区第 X 層出土遺物実測図(弥生土器)	36
Fig.38	II 区第 XI 層出土遺物実測図(弥生土器)	37
Fig.39	古墳時代遺構配置図(S=1/600)	39
Fig.40	SF-1出土遺物実測図1	41
Fig.41	SF-1出土遺物実測図2	43
Fig.42	SF-1出土遺物実測図3	45
Fig.43	SF-1出土遺物実測図4	46
Fig.44	SF-1出土遺物実測図5	47
Fig.45	SF-1出土遺物実測図6	48
Fig.46	SF-1出土遺物実測図7	49
Fig.47	SF-1出土遺物実測図8	50
Fig.48	SF-1出土遺物実測図9(353~472は原寸)	51

Fig.49	SF-1出土遺物実測図10.....	54
Fig.50	SF-2出土遺物実測図1	55
Fig.51	SF-2出土遺物実測図2	56
Fig.52	SF-2出土遺物実測図3	57
Fig.53	SF-2出土遺物実測図4	58
Fig.54	SF-2出土遺物実測図5 (496~509は原寸)	58
Fig.55	SF-2出土遺物実測図6	58
Fig.56	SF-3.....	59
Fig.57	SF-3出土遺物実測図1	61
Fig.58	SF-3出土遺物実測図2	62
Fig.59	SF-3出土遺物実測図3 (548~563は原寸)	63
Fig.60	SF-4出土遺物実測図1	64
Fig.61	SF-4出土遺物実測図2 (583~587は原寸)	65
Fig.62	SF-4出土遺物実測図3	66
Fig.63	SF-5出土遺物実測図1	68
Fig.64	SF-5出土遺物実測図2	69
Fig.65	SF-5出土遺物実測図3	71
Fig.66	SF-5出土遺物実測図4	72
Fig.67	SF-5出土遺物実測図5	74
Fig.68	SF-5出土遺物実測図6	75
Fig.69	SF-5出土遺物実測図7	76
Fig.70	SF-5出土遺物実測図8	76
Fig.71	SF-6.....	77
Fig.72	SF-6出土遺物実測図.....	78
Fig.73	古代遺構配置図 (S=1/600)	78
Fig.74	SK-2	79
Fig.75	SK-2出土遺物実測図	79
Fig.76	SK-3	80
Fig.77	SK-3出土遺物実測図	80
Fig.78	SK-4	81
Fig.79	SK-4出土遺物実測図	82
Fig.80	SK-5	82
Fig.81	SX-1.....	83
Fig.82	SK-5, SX-1出土遺物実測図	83
Fig.83	弥生時代遺構配置図 (S=1/600)	84
Fig.84	SK-1	85

Fig. 85	SK-1出土遺物実測図	85
Fig. 86	SB-1・2, ST-1遺構平面図(S=1/200)	87
Fig. 87	SB-1	87
Fig. 88	SB-1出土遺物実測図	88
Fig. 89	SB-2	89
Fig. 90	SB-2出土遺物実測図	89
Fig. 91	ST-1 2層遺物出土状態	90
Fig. 92	ST-1	90
Fig. 93	ST-1出土遺物実測図1	92
Fig. 94	ST-1出土遺物実測図2	93
Fig. 95	SF-7出土遺物実測図1	95
Fig. 96	SF-7出土遺物実測図2	97
Fig. 97	SF-7出土遺物実測図3	99
Fig. 98	SF-7出土遺物実測図4	101
Fig. 99	SF-7出土遺物実測図5	103
Fig.100	SF-7出土遺物実測図6	103
Fig.101	SF-7出土遺物実測図7	104
Fig.102	SF-7出土遺物実測図8(870~910は原寸)	105
Fig.103	SF-8出土遺物実測図1	107
Fig.104	SF-8出土遺物実測図2	109
Fig.105	SF-8出土遺物実測図3	110
Fig.106	SF-8出土遺物実測図4	111
Fig.107	SF-9出土遺物実測図1	112
Fig.108	SF-9出土遺物実測図2(965~973は原寸)	113
Fig.109	SF-10出土遺物実測図	114
Fig.110	SF-11出土遺物実測図	116
Fig.111	SF-12出土遺物実測図	119
Fig.112	SK-7	120
Fig.113	SK-6・7出土遺物実測図	121
Fig.114	SK-8~10	122
Fig.115	SK-8~10出土遺物実測図	123
Fig.116	SX-2	123
Fig.117	SX-3	124
Fig.118	SX-2・3出土遺物実測図	124
Fig.119	SC-13	125
Fig.120	SC-12・13出土遺物実測図	125

表目次

Tab.1	白玉計測表1.....	52
Tab.2	白玉計測表2.....	53
Tab.3	炭化物集中遺構計測表.....	86
Tab.4	放射性炭素年代測定および樹種同定結果.....	128
Tab.5	土錘計測表.....	137

図版目次

PL.1	調査前全景1(東より)	PL.13	SB-1・2(東より)
	調査前全景2(東より)		SB-1・2(東より)
PL.2	I区北壁セクション1(南より)	PL.14	SB-1柱根
	I区北壁セクション2(南より)		SB-2柱根
PL.3	II区南壁セクション1(北より)	PL.15	ST-1上層遺物出土状態1(北より)
	II区南壁セクション2(北より)		ST-1上層遺物出土状態2(南より)
PL.4	I区古代遺構検出状態(西より)	PL.16	ST-1上層遺物出土状態3(西より)
	I区古代遺構調査状態(北より)		ST-1上層須恵器把手付き椀(757)出土 状態
PL.5	SK-2(西より)	PL.17	ST-1(北より)
	SK-2(西より)		ST-1(北より)
PL.6	SK-3(西より)	PL.18	ST-1土師器甕(741)・高杯(745)出土 状態
	SK-3(西より)		ST-1(北より)
PL.7	SK-4(南より)	PL.19	SF-1(東より)
	SK-4(西より)		SF-1(南より)
PL.8	SK-5(南より)	PL.20	SF-1(西より)
	SK-5(東より)		SF-1(北より)
PL.9	SK-5(南より)	PL.21	SF-1(東より)
	SK-5(西より)		SF-1(南より)
PL.10	SK-3・4(西より)	PL.22	SF-2(東より)
	SX-1(西より)		SF-2(東より)
PL.11	SK-7~10(西より)	PL.23	SF-3(北より)
	SK-7~10(東より)		SF-3(西より)
PL.12	SK-10遺物出土状態(西より)		
	SX-3遺物出土状態(東より)		

- PL.24 SF-3落ち込み(北より)
SF-3落ち込み(西より)
- PL.25 SF-4(東より)
SF-4(東より)
- PL.26 SF-5(北より)
SF-5(東より)
- PL.27 SF-5(北より)
SF-5(西より)
- PL.28 SF-6(西より)
SF-6土師器鉢(687)・直口壺(681)出土状態
- PL.29 SF-7(西より)
SF-7(北より)
- PL.30 SF-8(北より)
SF-8(北より)
- PL.31 SF-8遺物出土状態(北東より)
SF-8遺物出土状態(北東より)
- PL.32 SF-9土師器甕(953・954)出土状態(南より)
SF-10遺物出土状態(東より)
- PL.33 SF-11遺物出土状態(西より)
SF-12遺物出土状態(西より)
- PL.34 I区古墳時代面完掘状態(東より)
I区古墳時代面完掘状態(西より)
- PL.35 I区下層確認トレンチ(西より)
I区下層セクション(南より)
- PL.36 II区下層確認トレンチ(西より)
II区下層セクション1(南より)
- PL.37 II区下層セクション2(南より)
II区弥生土器出土状態(南より)
- PL.38 II区弥生時代完掘状態1(西より)
II区弥生時代完掘状態2(南より)
- PL.39 第Ⅷa層土製勾玉(103)出土状態, 第Ⅷa層土製模造鏡(106)出土状態, SF-1須恵器杯身(325)出土状態, SF-1須恵器器台(330)出土状態, SF-1須恵器甕(331)出土状態, SF-1土製勾玉(333)出土状態, SF-1土製勾玉(334)出土状態, SF-1石製有孔円板(350)出土状態
- PL.40 SF-1石製白玉出土状態, SF-2須恵器甕(488)出土状態, SF-2須恵器甕(493)出土状態, SF-2土製勾玉(494)出土状態, SF-5土師器高杯(643)出土状態, SF-5土師器高杯(648)出土状態, SF-5須恵器高杯(679)出土状態, SF-6土師器椀(687)出土状態
- PL.41 SB-1のP-1柱根(735)検出状態, SB-1のP-2柱根(733)検出状態, SB-1のP-3柱根(734)検出状態, SB-2のP-4柱根(736)検出状態, SB-2のP-5柱根(737)検出状態, SF-7手づくね土器出土状態, SF-7検出手づくね土器(828), SF-7検出手づくね土器(837)
- PL.42 SF-7須恵器杯蓋(844)出土状態, SF-7土製模造鏡(854)出土状態, SF-7石製勾玉(868)出土状態, SF-10須恵器甕(987)出土状態, SF-11須恵器杯蓋・壺(997・998)出土状態, SF-11土製管玉(999)出土状態, SK-7須恵器杯(1024)出土状態, SX-3遺物出土状態
- PL.43 石製模造品(白玉)
- PL.44 須恵器(器台)
- PL.45 須恵器(甕)
- PL.46 須恵器(甕)
- PL.47 土製品(土錘)
土製品(土錘)
- PL.48 土師器(甕)
土師器(甕)
- PL.49 土師器(甕)
土師器(甕)
- PL.50 土師器(鉢)

- 須恵器(杯蓋・杯身)
- PL.51 土製模造品(模造鏡)
須恵器(杯蓋)
- PL.52 須恵器(杯蓋・杯)
土製品(土錘)
- PL.53 土製品(土錘)
土製品(土錘)
- PL.54 製塩土器
土製品(土錘)
- PL.55 須恵器(甕)
弥生土器(甕)
- PL.56 弥生土器(甕)
土師器(甕)
- PL.57 土師器(甕)
土師器(甕)
- PL.58 土師器(甕)
土師器(甕)
- PL.59 土製模造品(勾玉)
土製模造品(模造鏡)
- PL.60 土製模造品(模造鏡)
石製模造品(白玉)
- PL.61 石製模造品(白玉)
石製模造品(白玉)
- PL.62 土師器(甕)
土師器(甕)
- PL.63 土師器(甕)
土師器(甕)
- PL.64 土師器(鉢)
土製品(土錘)
- PL.65 製塩土器(外面)
製塩土器(内面)
- PL.66 土師器(甕)
土製模造品(勾玉)
- PL.67 土製模造品(模造鏡)
土製模造品(模造鏡)
- PL.68 石製模造品(白玉)
- 土師器(甕)
- PL.69 土師器(高杯)
土師器(甕), 土製品(土錘)
- PL.70 弥生土器(甕), 土師器(甕・高杯), 鉄製品(鉄鏃)
- PL.71 土師器(高杯), 須恵器(高杯・器台・甕), 石製模造品(紡錘車)
- PL.72 土師器(高杯), 須恵器(甕), 石製模造品(白玉)
- PL.73 土師器(高杯・甕), 土製模造品(模造鏡)
- PL.74 弥生土器(壺), 土師器(壺・甕・高杯)
- PL.75 土師器(壺・甕), 須恵器(把手付き椀)
- PL.76 土師器(甕・鉢), 手づくね土器, 石製品(叩石)
- PL.77 土師器(甕)
- PL.78 土師器(壺・甕・高杯)
- PL.79 土師器(甕・高杯・甕), 須恵器(甕), 土製品(管玉)
- PL.80 土師器(甕・高杯), 手づくね土器, 須恵器(杯身・高杯), 土製品(土錘), 土製模造品(勾玉), 石製模造品(有孔円板・剣形品)
- PL.81 土師器(甕), 土師質土器(杯), 製塩土器, 石製模造品(管玉), 石製品(叩石), 鉄製品(鉄鏃)
- PL.82 弥生土器(甕・高杯), 土師器(甕・高杯), 須恵器(高杯・子持ち壺・甕)
- PL.83 須恵器(甕・甕), 土製模造品(勾玉), 石製模造品(有孔円板・剣形品), 石製品(叩石・砥石)
- PL.84 土師器(甕・鉢・高杯), 石製模造品(白玉)
- PL.85 土師器(壺・甕・高杯), 手づくね土器, 石製模造品(白玉), 石製品(叩石)
- PL.86 土師器(甕・鉢・高杯)
- PL.87 土師器(鉢・高杯・杯・椀), 須恵器(杯身),

- 土製品(土錘)
- PL.88 弥生土器(壺・甕), 土師器(甕・鉢), 土製品(土錘)
- PL.89 土師器(鉢・高杯)
- PL.90 土師器(壺・甕・高杯), 手づくね土器, 土製模造品(模造鏡・土玉), 石製模造品(勾玉・剣形品)
- PL.91 土師器(甕・高杯・甗), 須恵器(杯身), 石製品(叩石)
- PL.92 土師器(甕・高杯), 製塩土器, 土製品(土錘), 石製模造品(白玉)
- PL.93 土師器(甕・鉢・杯・皿), 須恵器(杯蓋・杯身)
- PL.94 土師器(鉢・高杯), 須恵器(杯蓋・杯身)
- PL.95 土師器(鉢・高杯), 須恵器(杯身)
- PL.96 土師器(甕・鉢・杯)
- PL.97 弥生土器(甕), 土師器(高杯・杯), 須恵器(杯蓋・杯身・高杯), 土師器(椀)
- PL.98 土師器(鉢・高杯), 須恵器(杯蓋・杯身)
- PL.99 土師器(甕・鉢・高杯・甗), 須恵器(杯蓋・杯身)
- PL.100 土師器(甕・鉢・高杯), 須恵器(杯蓋・杯), 土製品(土錘)
- PL.101 手づくね土器
- PL.102 手づくね土器
- PL.103 手づくね土器
- PL.104 手づくね土器
- PL.105 木材

付図目次

- 付図 1 SF-1遺物出土状態(S=1/40)
- 付図 2 SF-2遺物出土状態(S=1/40)
- 付図 3 SF-3遺物出土状態(S=1/40)
- 付図 4 SF-4遺物出土状態(S=1/40)
- 付図 5 SF-5遺物出土状態(S=1/40)
- 付図 6 SF-7遺物出土状態(S=1/40)
- 付図 7 SF-8遺物出土状態(S=1/40)
- 付図 8 SF-9遺物出土状態(S=1/40)
- 付図 9 SF-10遺物出土状態(S=1/40)
- 付図10 SF-11遺物出土状態(S=1/40)
- 付図11 SF-12遺物出土状態(S=1/40)

第 I 章 序章

1. はじめに

本書は、高知県教育委員会が建設省四国地方建設局(現国土交通省四国整備局)から業務委託を受けた中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査について、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成12年度に実施した具同中山遺跡群Ⅲ-3区の発掘調査の結果をまとめたものである。具同中山遺跡群を始めとした一連の発掘調査は建設省四国地方建設局(現国土交通省四国整備局)中村工事事務所が実施している中村宿毛道路(高規格道路)建設工事に伴い工事区域内に所在する遺跡(埋蔵文化財)の内、工事の影響を受けるものについて事前に発掘調査を行い記録保存を図ることを目的としている。

この一連の工事に伴って調査された遺跡は具同中山遺跡群を含め10遺跡⁽¹⁾を数え、城跡を中心に祭祀遺跡や集落に関連する遺跡が確認されている。この中でも具同中山遺跡群は遺跡範囲が広く、平成6年度のⅠ区から本年度のⅡ-2区まで5ヵ年で7地区を調査し、関連の県道や市道の発掘調査を含めると8ヵ年で10地区の調査を実施している⁽²⁾。調査箇所は、遺跡が立地する中筋川左岸の自然堤防の北側縁辺部から東部の自然堤防上に当たり、自然堤防及びその周辺部では遺構・遺物の密度が高くなり、古墳時代の住居跡や掘立柱建物跡も祭祀関連遺構⁽³⁾と共に確認されている。

一方、この道路関係の発掘調査に先立って実施された河川改修に伴う発掘調査は自然堤防南東部の縁辺部を中心に実施され、5世紀後半から6世紀前半にかけての多数の祭祀跡が検出されるも明確な掘方を持つ遺構は確認されなかった。

このように遺跡全域に互って、古墳時代の祭祀跡や祭祀関連遺構が検出され、これまで具同中山遺跡群は古墳時代中期を中心とした祭祀跡として位置付けられてきたが、遺跡の中心部とみられ



Fig.1 中村市及び具同中山遺跡群位置図

る自然堤防上を調査するに至り、上部構造のある遺構が検出され、集落の可能性も視野に入れ検討しなければならなくなった。すなわち、今回報告する掘立柱建物跡は使用材種から集落に関連した可能性が考えられるが、隣接した竪穴住居跡は平成11年度に調査した具同中山遺跡群Ⅲ-2区の掘立柱建物跡と同じく使用部材にアワブキが用いられており、祭祀に関連した施設であったものとみられ、限られた範囲で性格を異にする施設が存在したことになり、集落と祭祀の両面からのアプローチが必要と考えられる。(廣田)

2. 契機と経過

具同中山遺跡群の中で、中村宿毛道路計画路線に係っている部分について平成5年度から確認調査が実施され、Ⅲ区⁽⁴⁾については平成5年度(Ⅲ-1区)、平成6年度(Ⅲ-2区)、平成11年度(Ⅲ-3区)の3回に分けて行われた。その結果、それぞれの地区から古墳時代の遺物包含層が確認され、標高の高い部分ではさらに弥生時代の遺物包含層や古代の遺物包含層も検出された。この結果に基づき、本調査は、Ⅲ-1区が平成8年度、Ⅲ-2区が平成11年度、Ⅲ-3区が平成12年度に実施された。Ⅲ-1区の発掘調査を実施した平成8年度時点では道路建設工法が決定していなかったため道路予定区域内の全面発掘調査を実施したが、平成12年度時点では上下線が南北に分かれ高架となることが決定していたためⅢ-2区及びⅢ-3区については、高架が設置される部分を発掘調査した。そのため、

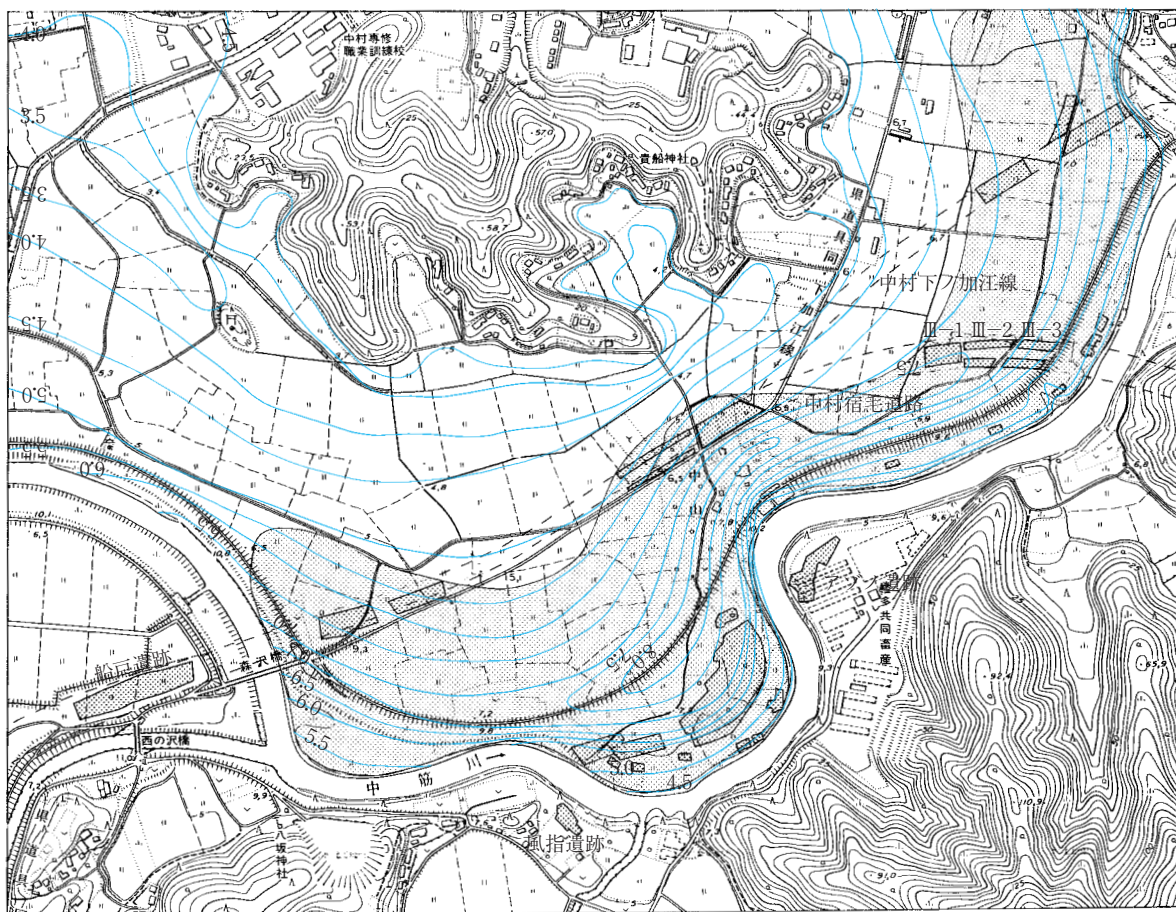


Fig.2 具同中山遺跡群及び周辺遺跡の調査区位置図(S=1/10,000)

それぞれ調査区が南北に分かれている。

今回報告するⅢ-3区は、平成11年度に行われたⅢ-2区の東隣の調査区で、市道高橋線から現堤防までの南側東西約46m、北側東西約45m、南北約38mの範囲が調査対象区域となる。このうち実際調査を行ったのはI区(南側792m²)、II区(北側884m²)の1,676m²である。調査は、遺構検出面が地表下2m以下で確認されているため鋼矢板の布設や排水施設の設置などの仮設工事を行った上で実施した。(廣田)

3. 調査日誌抄

I区 2000年5月22日～8月11日

- | | |
|---|---|
| <p>5.22 本日よりI区の機械掘削を開始する。機械掘削は地表下約1.5mまでとし、鋼矢板の縁には排水用の溝、南西隅には排水用のポンプ2台を設置する。</p> <p>5.23 本日も機械掘削を行う。調査区中央部以東から土師器片が出土し始めたため、掘削は地表下1.2～1.3mとした。</p> <p>5.24 本日も機械掘削を行う。</p> <p>5.25 引き続き機械掘削を行う。</p> <p>5.26 引き続き機械掘削を行う。</p> <p>5.29 引き続き機械掘削の土留め軽量鋼矢板を設置する。</p> <p>5.30 引き続き機械掘削を行い、上層の土層掘削を終了する。</p> <p>5.31 明日からの調査に備え、プレハブハウスの設置場所を決める。</p> | <p>6.1 本日より発掘調査を開始する。</p> <p>6.2 現場作業は中止する。</p> <p>6.5 調査区東部から遺物包含層の掘削並びに遺構検出を行う。</p> <p>6.6 引き続き遺物包含層の掘削並びに遺構検出を行う。調査区東部から古代の遺物が多数出土する。特に土錘の出土が目立つ。</p> <p>6.8 引き続き調査区東部の遺物包含層の掘削と遺構検出を行う。併行して調査区西部では古墳時代の遺物包含層上面まで機械掘削を行う。</p> <p>6.9 雨天のため現場作業を中止する。</p> <p>6.12 調査区東部の土坑と性格不明遺構の調査を行う。調査区西部では引き続き古墳時代の遺物包含層上面までの掘削を行う。午後、東中筋中学校の先生と生徒が見学に訪れる。</p> |
|---|---|

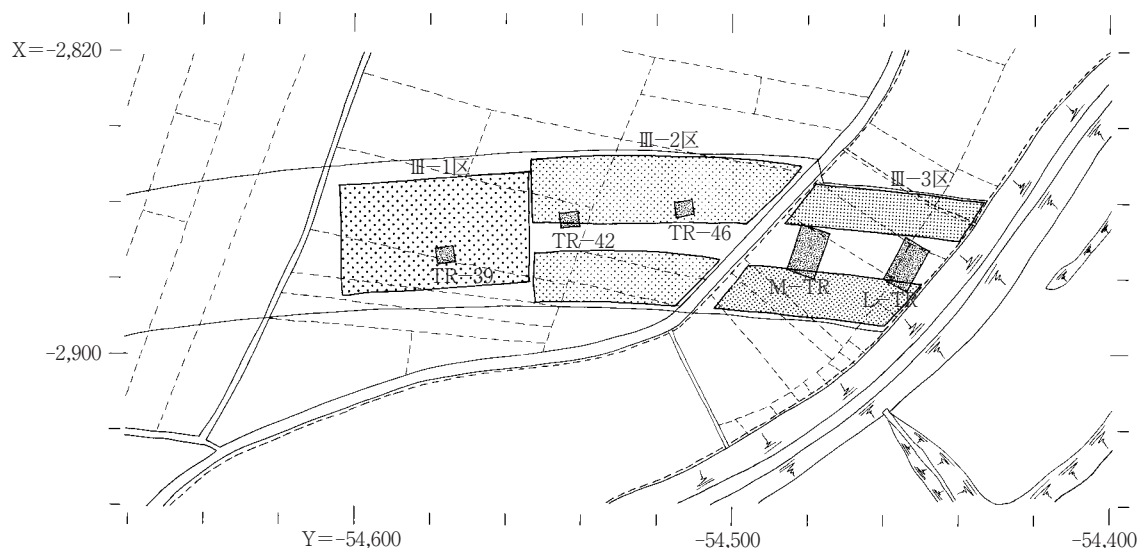


Fig.3 試掘トレンチ及びⅢ区調査地区(S=1/2,000)

6.13 雨天のため現場作業を中止する。

6.14 本日より調査区西部の古墳時代の遺物包含層の掘削を開始する。併行して、調査区の北壁セクションの分層、調査区東部の古代面の遺構平面図の測量と写真撮影を行う。

6.15 古墳時代の遺物包含層の掘削を行う。土師器の高杯や壺等が良い状態で出土する。

6.16 引き続き古墳時代の遺物包含層の掘削と遺構検出を行うと共に東部の古代面の調査を行う。

6.19 引き続き古墳時代の遺物包含層の掘削と遺構検出を行うと共に東部の古代面の調査を行う。

6.20 調査区東部では新たに検出した炭化物集中地点の調査を行う。調査区西部では土器が集中して出土し(SF-6)、写真撮影と平面実測を行う。

6.21 雨天のため現場作業を中止する。調査区の遺構配置図を作成する。

6.22 調査区北壁セクションの分層と写真撮影、調査区西部では引き続き古墳時代の遺物包含層の掘削と併行して出土遺物の平面実測、調査区東部では炭化物集中地点の調査を行う。

6.23 調査区西部では引き続き古墳時代の遺物包含層の掘削、東部では炭化物出土地点の調査を行う。

6.26 調査区西部では祭祀関連遺構(SF-4・5)の実測と写真撮影を行う。調査区東部では古代面の調査をほぼ終了した。

6.27 調査区西部では引き続き古墳時代の遺物包含層の掘削と検出遺構の調査を行う。

6.28 雨天のため現場作業を中止する。

6.29 雨天のため現場作業を中止する。

6.30 調査区西部で確認した祭祀関連遺構(SF-1)の写真撮影と平面実測を行う。

7.3 調査区西部では引き続き古墳時代の遺物包含層の掘削と調査を行う。東部も古墳時代の遺物包含層の掘削を開始する。

7.4 調査区東部でも祭祀関連遺構とみられる土器集中箇所を検出する。

7.5 調査区東部の祭祀関連遺構(SF-1)から白玉

が多数出土し始める。その他にも須恵器器台や土製模造鏡、土製勾玉等の祭祀遺物が出土する。

7.6 引き続き調査区東部の祭祀関連遺構とその他の祭祀関連遺構の調査を行う。白玉がまとまって出土する。周囲の土を洗浄するため持ち帰る。

7.7 調査区東部の祭祀関連遺構からは引き続き多量の白玉が出土し、その他の祭祀遺物と共に写真撮影、平面実測等を行う。

7.10 引き続き祭祀関連遺構(SF-1・5)の写真撮影、平面実測を行う。白玉の出土数は本日だけで100個を越える。

7.11 調査区北壁セクションの分層と写真撮影を行う。調査区東部の祭祀関連遺構の調査と併行して古墳時代の遺物包含層の掘削と調査を行う。

7.12 引き続き古墳時代の遺物包含層の掘削と調査を行う。白玉の出土は続く。

7.13 調査区東部と中央部の祭祀関連遺構(SF-1・4)の遺物出土状態の写真撮影と平面実測を行う。調査区東部では西部で確認した第VI層が消滅し、代って灰色粘土のブロックが多く混じる層に変化している。

7.14 引き続き祭祀関連遺構の調査を行う。新たに祭祀関連遺構が検出された。

7.17 引き続き祭祀関連遺構(SF-1・3)の調査を行う。

7.18 調査区中央部の祭祀関連遺構(SF-3)の調査を中心に行う。

7.19 中央部の祭祀関連遺構(SF-3)の下部から断面レンズ状を呈する浅い土坑を検出する。



Fig.4 発掘調査風景1

7.21 引き続き祭祀関連遺構(SF-5)と土坑の調査を行う。

7.24 新たに祭祀関連遺構(SF-2)を検出し、調査する。勾玉や須恵器が出土する部分と土師器だけが出土する部分がある。

7.25 残りの祭祀関連遺構の調査を行った後で、調査区全体の再精査を行う。

7.26 引き続き調査区全体の再精査を行う。

7.27 職員専門研修のため発掘調査は中止する。

7.28 本日も職員専門研修のため発掘調査は中止する。

7.31 台風6号による雨のため現場作業を中止する。

8.1 雨天のため現場作業を中止する。

8.2 雨天のため現場作業を中止する。

8.3 調査区全面の再精査を行う。

8.4 調査区の完掘状態の写真撮影を行う。下層確認のためのトレンチを設定する。

8.7 重機による下層確認トレンチの掘削を行う。併行してⅡ区の古代の遺物包含層までの機械掘削を

Ⅱ区 2000年8月7日～11月9日

8.7 重機による土層掘削を開始する。

8.8 引き続き機械掘削を行う。併行して排水溝を掘削する。

8.9 引き続き機械掘削と排水溝の掘削を行う。

8.10 引き続き機械掘削と排水溝の掘削を行う。

8.11 古代の遺物包含層直上まで機械掘削を行い終了する。

8.14 現場作業を中止する。

8.15 現場作業を中止する。

8.16 現場作業を中止する。

8.17 調査区東部から古代の遺物包含層の人力掘削を開始する。午後は雨天のため現場作業を中止する。

8.18 排水作業後、古代の遺物包含層の掘削を行う。

8.21 排水作業後、古代の遺物包含層の掘削を行う。

開始する。

8.8 引き続き下層確認トレンチの掘削を行い土層断面の写真撮影を行う。

8.9 調査区東半分の下層確認トレンチの掘削を行う。遺物はほとんど出土しない。併行して西半分の確認トレンチの土層断面図の実測を行う。

8.10 引き続き東半分の機械掘削を行い、併行して土層断面図の実測を行う。

8.11 下層確認トレンチの写真撮影と土層断面図の実測を行い、Ⅰ区の調査を終了する。(田坂)



Fig.5 発掘調査風景2

8.22 遺構検出作業を行い、SK-6を検出する。遺物包含層より鉄製品が出土する。調査区土層セクションの写真撮影を行う。

8.23 引き続き遺構検出作業および土層セクションの測量を行う。

8.24 遺構検出状態の写真撮影後、遺構の調査を開始する。

8.25 引き続き遺構の調査を行う。西部から土留め



Fig.6 発掘調査風景3

のために軽量鋼矢板を設置する。

8.28 古代の遺構の調査を行う。午後は雨天のため現場作業を中止する。

8.29 古代の遺構(SK-7~10)の調査を行う。調査区西部から古墳時代の遺物包含層直上までの機械掘削を開始する。

8.30 雨天のため現場作業を中止する。

8.31 雨天のため現場作業を中止する。

9.1 雨天のため現場作業を中止する。

9.4 古代の遺構の調査を行う。

9.5 引き続き古代の遺構の調査を行う。併行して西部から古墳時代の遺物包含層の人力掘削作業を開始する。

9.6 古代面の調査を終了し、完掘状態の写真撮影を行う。調査区西部でSF-11・12を検出する。

9.7 引き続きSF-11に移る。土製管玉が出土する。新たにSF-9を検出する。

9.8 調査区北壁の土層セクションの写真撮影を行う。午後は雨天のため現場作業を中止する。

9.11 台風による雨のため現場作業を中止する。

9.12 台風による雨のため現場作業を中止する。

9.13 午前中排水作業を行うが、午後から雨のため現場作業を中止する。

9.14 雨天のため現場作業を中止する。

9.18 引き続き古墳時代の遺物包含層の掘削と併行してSF-9・11の調査を行う。

9.19 引き続き古墳時代の遺物包含層の掘削を行う。機械による土層掘削を終了する。

9.20 SF-10を検出し、調査を行う。調査区西部で



Fig.7 体験学習風景

SB-1の柱穴を1個を検出する。

9.21 柱穴を調査し、柱根を確認する。引き続きSF-10の調査を行う。午後3時から雨のため現場作業を中止する。

9.22 雨天のため現場作業を中止する。

9.25 SB-1の調査を中心に行う。

9.26 引き続きSB-1の調査を行う。

9.27 古墳時代の遺物包含層の掘削作業を行う。

9.28 引き続き古墳時代の遺物包含層の掘削作業を行う。東半分を完掘し写真撮影を行う。

9.29 引き続き古墳時代の遺物包含層の掘削作業を行う。

10.2 引き続き古墳時代の遺物包含層の掘削作業を行う。SF-7を検出し、白玉が2点出土する。午前10時から雨のため現場作業を中止する。

10.3 SF-7から白玉を始めとして祭祀関連遺物が多数出土する。併行してSB-1・2の調査を行った結果、すべての柱穴から柱根が確認された。

10.4 引き続きSF-7とSB-1・2の調査を行う。

10.5 引き続きSB-1・2の調査を行う。

10.6 引き続きSB-1・2の調査を行う。

10.10 引き続きSB-1・2の調査を行う。新たにSF-8を検出する。

10.11 引き続きSB-1・2とSF-8の調査を行う。SF-8の下層からST-1を検出する。

10.12 引き続きSB-1・2とST-1の調査を行う。ST-1では特に東半分には焼土が集中、西半分には灰が多く堆積する。

10.13 引き続きST-1とSB-1・2の調査を行う。

10.16 引き続きST-1とSB-1・2の調査を行う。

10.17 引き続きST-1とSB-1・2の調査を行う。

10.18 引き続きST-1とSB-1・2の調査を行いSB-1・2の調査を終了する。

10.19 ST-1の調査を行う。東中筋中学校の先生と生徒6名が見学に来る。

10.20 遺構の測量を中心に行う。

10.23 下層トレンチの調査を行う。

10.24 引き続き下層トレンチの調査を行う。

- 10.25 現場作業を中止する。
- 10.26 現場作業を中止する。
- 10.27 現場作業を中止する。
- 10.30 現場作業を中止する。
- 10.31 現場作業を中止する。
- 11. 1 記者発表及び現地説明会の準備を行う。
- 11. 2 記者発表を午後1時30分から行う。
- 11. 5 現地説明会を午後1時30分から行う。
- 11. 6 重機による下層確認トレンチの掘削を開始する。西半分の掘削を終了する。

- 11. 7 西半分のセクション写真撮影を終了し、引き続き重機による東側の掘削作業を行ったところ弥生時代の遺物包含層を確認する。
- 11. 8 下層確認トレンチ内でSK-1を検出する。下層トレンチの完掘状態と土層セクションの写真撮影を行う。
- 11. 9 下層確認トレンチを拡張し、SK-1の残りを確認し、調査を行う。拡張区全体の写真撮影を行いⅡ区の調査をすべて終了する。(山本)



Fig.8 記者発表



Fig.9 現場説明

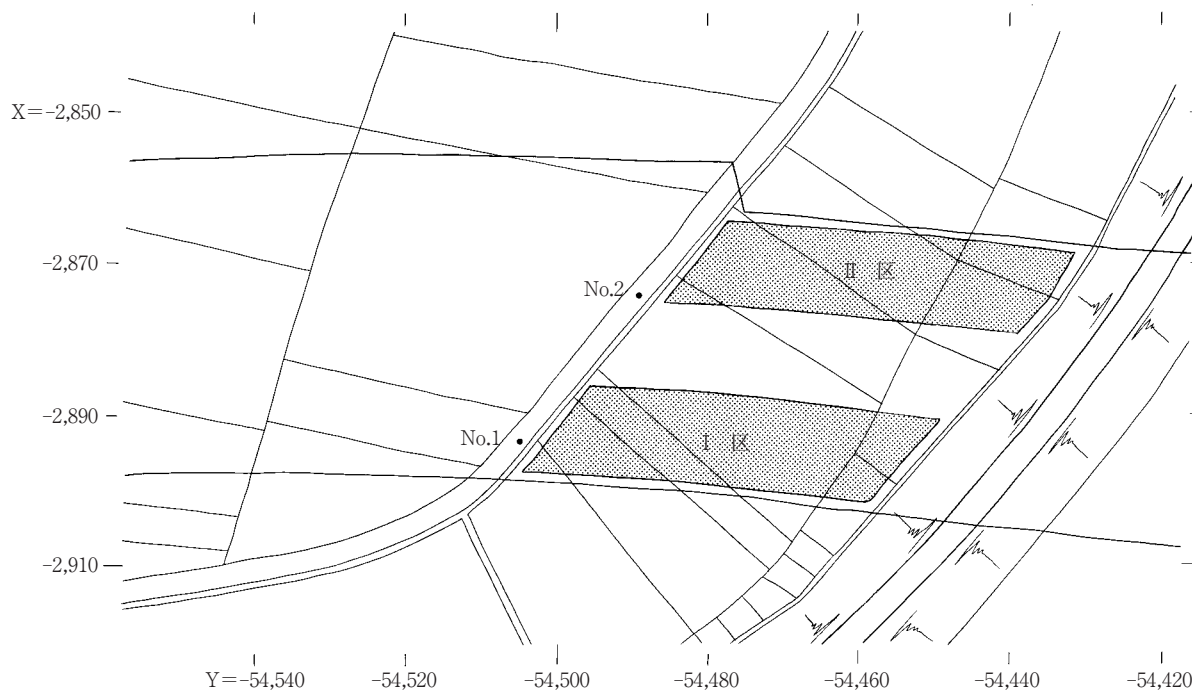


Fig.10 調査区全体図及び基準点配置図(S=1/1,000)

註

- (1) 中村宿毛道路建設に伴って発掘調査された遺跡は、東から具同中山遺跡群、船戸遺跡、浅村遺跡、間城跡、江ノ古城跡、ナハノシロ城跡、西ノ谷遺跡、久木ノ遺跡・城跡、神ヶ谷窯跡、サンナミ遺跡であり、四万十川以西の区域では平成13年度(2001年度)に実施している具同中山遺跡群Ⅱ-2区(南半分)が最後の発掘調査となる。また、昭和61年度から始まった具同中山遺跡群の発掘調査もこれで一旦終了するため河川改修に伴って実施された発掘調査の結果も含めこれまでの発掘調査の成果を平成14年度刊行予定の『具同中山遺跡群Ⅱ-2 中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ-』で総括したい。
- (2) 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『具同中山遺跡群Ⅱ-2』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第53集 2000年の第1表建設省関連埋蔵文化財発掘調査一覧表に掲載している。なお、平成13年度にはⅡ-2区の未調査であった南半分の調査を実施している。
- (3) 土製勾玉や土製模造鏡などの土製模造品、有孔円板や石製勾玉などの石製模造品または手づくね土器などの祭祀遺物を伴い祭祀跡と判断されるもの以外にも土器だけで構成され「土器集中」などと報告されたものについて、検出状況から判断する限り前者と異なった性格のものであるとは考え難く、今回の報告ではこれらを総称して「祭祀関連遺構」として報告する。なお、明確に祭祀跡と判断されるものについては「祭祀跡」という表現も使用している。
- (4) Ⅲ区にかかる報告書は、小区ごと下記の3冊が発行または発行予定である。
『具同中山遺跡群Ⅲ-1』-中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅵ-
『具同中山遺跡群Ⅲ-2』-中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ-
『具同中山遺跡群Ⅲ-3』-中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ-

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査の方法

平成6年度に実施した試掘調査の結果に基づき、工事予定区域を全面発掘調査することとし、南側をⅠ区(東西46m, 南北10m)、北側をⅡ区(東西45m, 南北10m)として調査区を設定した。

各調査区とも遺物包含層の深度が2m以上と比較的深いことから南側の調査を行った後、北側の調査を行うこととし、民地との境界及び市道との境部分については鋼矢板、法面については軽量鋼矢板をそれぞれ設置し、また、排水についてはろ過施設を設け、ろ過したうえで水路に排水した。

調査は、重機で遺物包含層に影響がない層位まで掘削した後、すべて人力で行った。なお、両調査区とも下層の遺物包含層(弥生時代中期末から後期初め)については、密度に散つきがみられることから調査区の中央部に幅2mのトレンチを設定し、調査を行ったうえで、明確な遺物包含層が確認された部分について拡張した。

測量については、平成11年度に設置した3級基準点・水準点を使用し、報告書ではこの成果に基づき、図面には公共座標値を記している。なお、調査区付近は日本国土地標系の第4座標系(Ⅳ系)の第3象限に当たる。(廣田)

2. 調査の概要

(1) 調査区の概要

本調査区は、中筋川が形成した自然堤防上に位置し、平成11年度に調査したⅢ-2区よりも標高が高くなっており、東側約50mには中筋川があることから自然堤防頂部の西側に当たるものとみられる。

調査の結果、現地表下約1.50mで古代の遺物包含層(Ⅰ・Ⅱ区)を確認し、以下古墳時代初頭～中期(Ⅰ・Ⅱ区)及び弥生時代中期末～後期初頭(Ⅱ区)の遺物包含層が確認された。検出遺構は古代の土坑、古墳時代初頭および中期の掘立柱建物跡・竪穴住居跡・祭祀関連遺構・土坑、弥生時代中期末から後期初頭の土坑などであった。(山本)

(2) 層序

基本層序については仮設道路(幅5.00m)を挟みⅠ区北壁、Ⅱ区南壁において土層の観察を行った。基本的に同様の堆積がみられるが古代の遺物包含層に若干の違いがみられる。層名についてa・b層は一時期に堆積した堆積土のうち表面で空気に触れた部分、または生活行動による土壌化が進んだ部分をa層とし変化が及ばなかった岩屑部分をb層として分層を行った。なお、調査区(Ⅰ区北壁・Ⅱ区南壁)で確認された層序は下記のとおりである。

第Ⅰ層 褐灰色(10YR6/1)シルト質粘土層(表土層)

第Ⅱa層 にぶい黄橙色(10YR7/2)シルト層

第Ⅱb層 にぶい黄橙色(10YR7/2)シルト層で鉄分を多く含む。

第Ⅲ層 におい黄橙色(10YR7/2)粘土質シルト層でマンガンを多く含む。なお、下面には鉄分粒が沈積する。

第Ⅳ層 におい黄橙色(10YR7/2)粘土質シルト層で第Ⅲ層より粘性が強い。

第Ⅴ1層 灰黄褐色(10YR6/2)シルト質粘土層で粘性が強く、灰色粘土の小ブロックを含む。

第Ⅴ2層 灰黄褐色(10YR5/2)粘土質シルト層でマンガンを多く含み、第Ⅴ1層よりマンガンにより多く含む。また、明青灰色(5BG7/1)粘土の小ブロックを含む。

第Ⅴ3層 明褐色(7.5YR5/6)粘土質シルト層でマンガンを多く含み、褐灰色(7.5YR6/1)粘土の小ブロックを含む。第Ⅴ層は古代遺物包含層となっている。

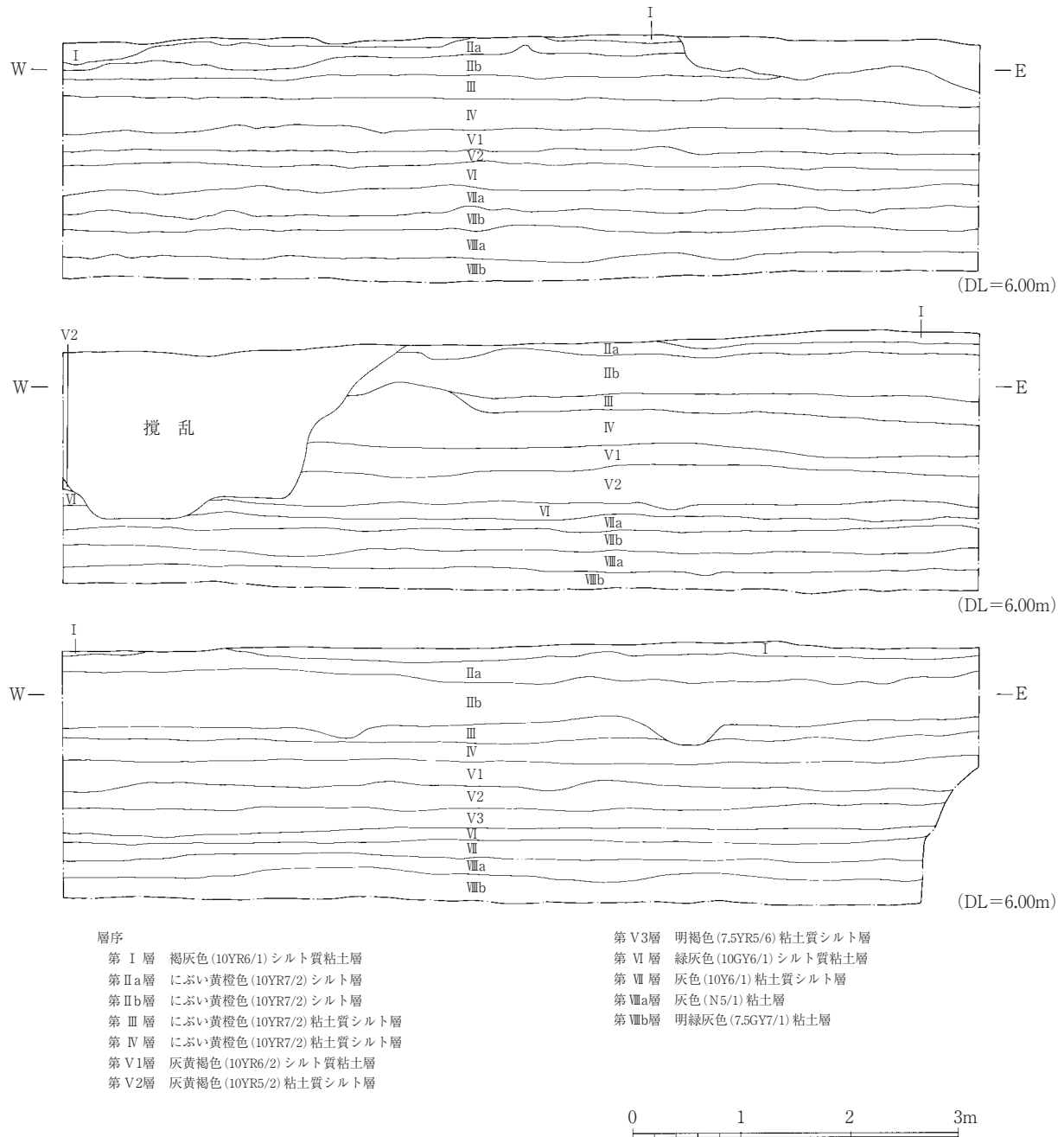


Fig.11 I区北壁セクション図

第Ⅵ層 緑灰色(10GY6/1)シルト質粘土層で炭化物を含み、古代の遺物包含層となっている。

第Ⅶ層 灰色(10Y6/1)粘土質シルト層

第Ⅷa層 灰色(N5/1)粘土層で古墳時代の遺物包含層となっている。

第Ⅷb層 明緑灰色(7.5GY7/1)粘土層

第Ⅸa層 灰色(10Y5/1)粘土層で炭化物を含み、灰白色(10Y7/2)粘土をブロック状に含む。弥生時代の遺物包含層となっている。

第Ⅸb層 オリーブ灰色(5GY6/1)シルト質粘土層

第Ⅹa層 褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土層で炭化物を若干含み、弥生時代の遺物包含層となっている。

第Ⅹb層 灰オリーブ色(5Y4/2)粘土質シルト層

第Ⅺa層 灰色(5Y5/1)粘土層でオリーブ灰色シルト質粘土粒を含み、炭化物を非常に多く含む。弥生時代の遺物包含層である。

第Ⅺb層 灰色(5Y5/1)粘土層

第Ⅻ層 灰白色(10Y7/1)シルト層で、洪水などで一時期に堆積したとみられる。

第Ⅼ層 オリーブ灰色(10Y6/2)シルト層で炭化物をわずかに含む。

第ⅭVa層 緑灰色(7.5GY6/1)シルト質粘土層で炭化物を若干含む。

第ⅭVb層 明緑灰色(7.5GY7/1)シルト質粘土層

第Ⅰ～Ⅳ層は無遺物層である。第Ⅰ～Ⅲ層は新・旧の耕作土で、Ⅰ・Ⅱ区とも標高6.60m・6.40m・6.00mとほぼ水平に堆積していた。

第Ⅲ層はやや粘性が強く、下面には鉄分の沈澱が観察される。

第Ⅴ・Ⅵ層が古代の遺物包含層である。第Ⅴ・Ⅵ層ともⅡ区(北側)の方が約10cm標高が高くなっている。調査区全域に広がるが、遺構・遺物が確認されたのは東側約1/3の範囲に限られている。第Ⅴ層は東部では黄褐色や橙色を呈す酸化鉄、褐色を呈すマンガンが層中に多く含まれており、長期間空気に触れて乾燥、土壌化が進んだものとみられる。また、色調の差やブロック状に含まれる粘土

物包含層である。第Ⅴ・Ⅵ層ともⅡ区(北側)の方が約10cm標高が高くなっている。調査区全域に広がるが、遺構・遺物が確認されたのは東側約1/3の範囲に限られている。第Ⅴ層は東部では黄褐色や橙色を呈す酸化鉄、褐色を呈すマンガンが層中に多く含まれており、長期間空気に触れて乾燥、土壌化が進んだものとみられる。また、色調の差やブロック状に含まれる粘土

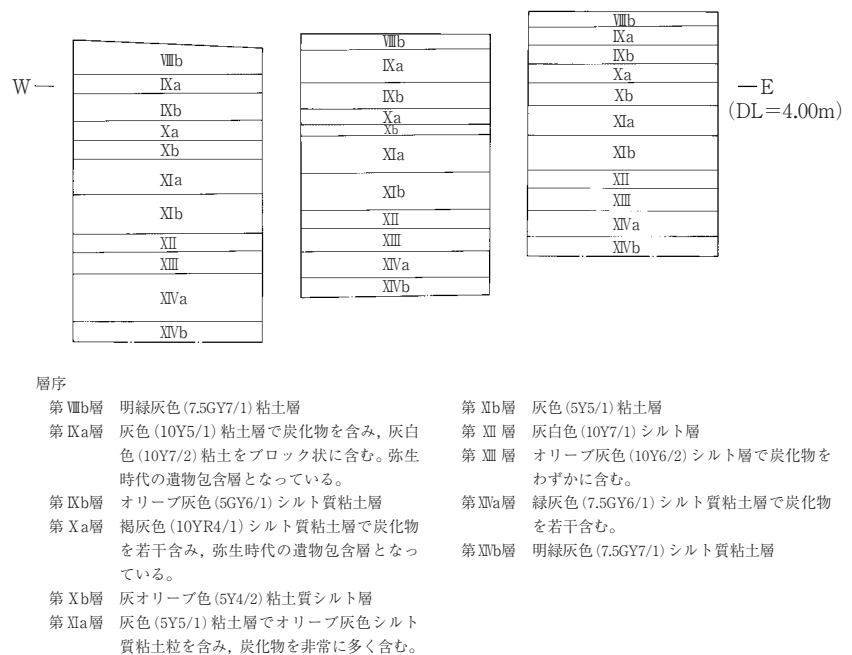


Fig.12 Ⅱ区下層確認トレンチ柱状図(S=1/40)

にも差異がみられ、幾度か人為が加わったものと考えられるが、出土遺物には、顕著な差異が認められなかったことから短期間に堆積したものと考えられる。

第Ⅵ層も第Ⅴ層同様古代の遺物包含層であるが、第Ⅴ層の影響を受けているものとみられ、堆積が薄く、面として確認することはできなかった。

第Ⅶ層は自然堆積層とみられるが、下層には古墳時代の遺物がわずかに含まれていた。

第Ⅷ層が本調査の中心となる古墳時代中期の遺物包含層であり、古墳時代前期の遺物も含まれている。標高4.20～4.60mの間に堆積し、厚さ20～30cmを測る。東側の標高が西側より高く20～30cmの比高差がみられるものの、ほぼ全域に互って遺構・遺物が認められ、当該期は比較的長期間安定した環境にあったものとみられる。

第Ⅸa層から第Ⅺa層はⅡ区で認められた弥生時代の遺物包含層である。シルトと炭化物を含む層が交互に堆積しており、それぞれに弥生時代中期末から後期前葉の遺物を少量含んでいた。第Ⅺa層では遺物を伴わない炭化物の集中を確認した。また、Ⅰ区においても第Ⅺa層で炭化物の集中を確認しており、その堆積状態からⅡ区と同時期のものとする。

第Ⅻ層以下は色調、粒度の異なるシルト層が堆積しており、Ⅰ・Ⅱ区とも無遺物層となっている。(山本)

(3) 堆積層出土遺物

本調査区では、古墳時代の遺物の出土量が多く、中でも比較的出土量の多い土師器、手づくね土器、土製・石製模造品については、分類を行った上で記述する。

i 土師器 (壺・甕・鉢・高杯)

壺

壺は口縁部形態で4類に分類できる。

A類 二重口縁のもの

B類 口縁が内湾しながら立ち上がるもの

C類 直口壺

D類 短頸壺

甕

甕は口頸部の形態により4類に分類できる。

A類 口頸部がくの字状に屈曲するもの

B類 口頸部が外反もしくは直線気味に立ち上がるもので口縁部の形状でさらに2類に細分できる。

B-1類 そのまま外反するもの

B-2類 外傾するもの

C類 口頸部が緩やかに外反するもの

D類 口縁が短く外反するもの

鉢

鉢は形態により3類に分類できる。

A類 鉢状を呈するもの

B類 碗状を呈し、器高指数が36～71を示すもので底部の形態でさらに3類に細分できる。

B-1類 丸底のもの

B-2類 平底のもの

B-3類 脚台付きのもの

C類 皿状を呈し、器高指数が21～34のもの

高杯

高杯は杯部・脚部のみの個体が多いためそれぞれに分類し、全体が判る個体についてはその組み合わせにより表すこととする。

杯部の形態で3類に分類できる。

A類 杯部に明瞭な稜を持つもの

B類 杯部にわずかな稜を持つもの

C類 稜がなく碗状を呈するもの

脚部の形態で3類に分類できる。

1類 裾部が水平なもの

2類 屈曲して裾部が明瞭なもの

3類 なだらかに開き明瞭な裾部を持たないもの

ii 手づくね土器

器形を模倣したとみられるものと指頭圧痕や指ナデ調整痕がそのまま残り、粗雑な作りのものの2種類に分類できる。

A類 器形を模倣したもので形態によりさらに3類に細分できる。

A-1類 壺形

A-2類 甕形

A-3類 鉢形

B類 指頭圧痕や指ナデ調整痕がそのまま残る粗雑な作りのものである。

iii 土製・石製模造品

土製勾玉

勾玉は紐孔位置によって2類に分類できる。

A類 側面から穿孔されるもの

B類 背部から腹部方向に穿孔されるもの

土製模造鏡

鏡は鈕の形状により2類に分類できる。

A類 両側から摘み上げたもので孔の有無でさらに2類に細分できる。

A-1類 有孔のもの

A-2類 無孔のもの

B類 柱状をなすものである。

石製有孔円板

有孔円板は形態で3類に分類できる。

A類 円形を呈するもので孔の部位によりさらに2類に細分できる。

A-1類 中央に近接するもの

A-2類 両側縁に偏するもの

B類 楕円形を呈するもの

C類 隅丸方形を呈するもの

石製勾玉

勾玉は形状により2類に分類できる。

A類 薄く平板なもの

B類 立体的なもの

(田坂・山本)

① I区

第V層出土遺物

土師器 (Fig.13-1・2)

1は平底の杯である。ほぼ1/2が残存し、口径13.6cm、器高3.7cm、底径8.8cmを測る。底部外面はヘラ切りとなっている。

2は甕の口縁部で口径23.6cmを測る。胴部外面はタテ方向にハケ調整を施す。口縁部内面には煤が一面に付着する。色調は、外面が明赤褐色、内面がにぶい黄褐色を呈する。胎土には雲母を多く含む。

須恵器 (Fig.13-3~5)

3は杯身で、一部が残存し、口径9.3cm、器高3.8cmを測る。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。内面に煤が点状に付着し、色調は内外面とも灰色を呈する。4は杯で、口縁部を欠く。底径9.4cmを測り、外底面には断面方形状の高台が付く。焼成不良で、色調は灰白色を呈する。

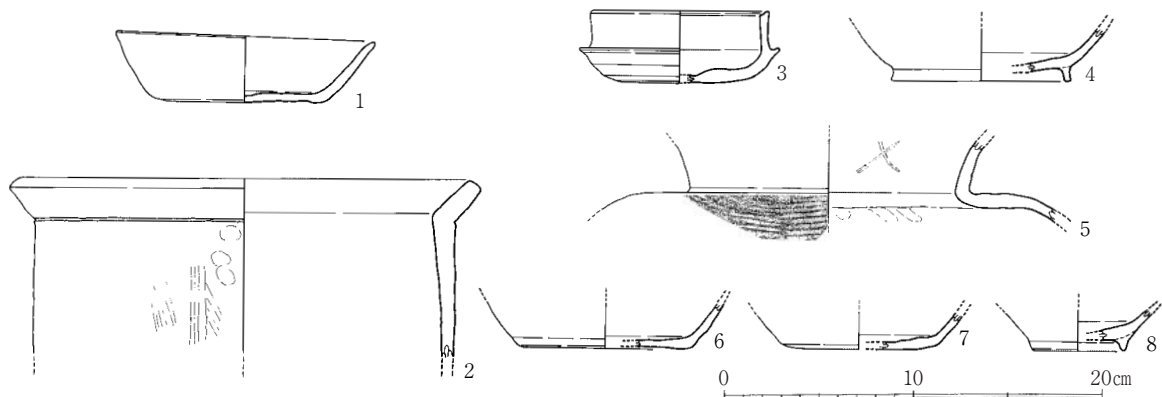


Fig.13 I区第V層出土遺物実測図(土師器・須恵器・土師質土器)

5は甕で、頸部の約2/5が残存する。内面に回転ナデ調整、外面には平行のタタキ目が残る。口縁部内面には×状のヘラ記号を施す。胎土は精良で、色調は内外面とも灰色を呈する。

土師質土器 (Fig.13-6~8)

6は杯の底部で、約1/4が残存し、底径9.2cmを測る。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。胎土は精良で、色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。7も杯で約2/3が残存し、底径7.8cmを測る。器面には回転ナデ調整を施す。色調は、内面が灰白色、外面が黄橙色を呈する。

8は椀で、約5/6が残存し、底径4.8cmを測る。外底面には高さ1.0cmの高台が付く。調整は、器面が摩耗のため不明である。胎土は精良で、色調は内外面とも淡橙色を呈する。

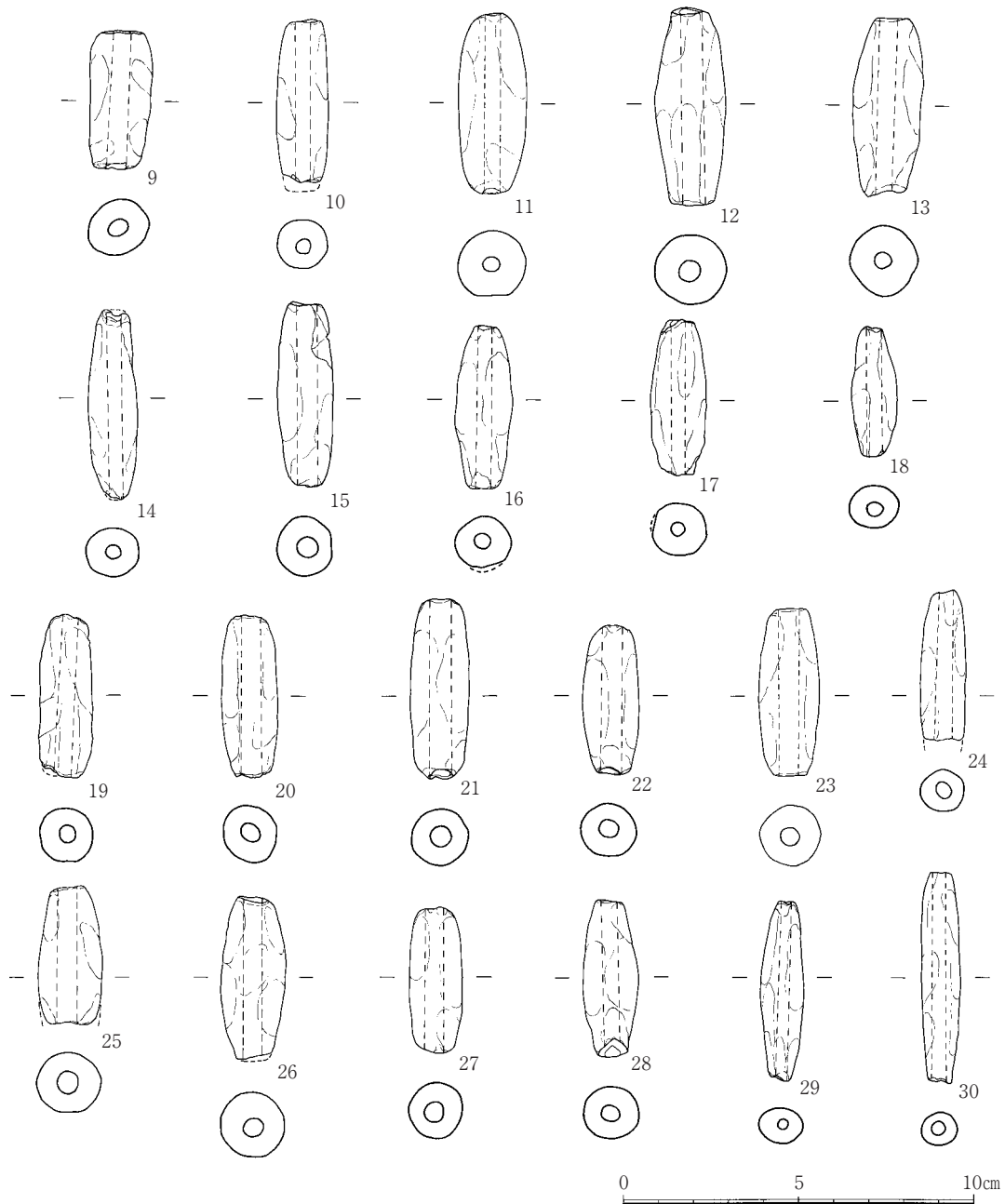


Fig.14 I区第V層出土遺物実測図(土製品)

土製品 (Fig.14-9~30)

9~30は全て管状土錘で、全長3.4~5.1cm、重量2.1~18.0gを測る。形状は紡錘形から円筒形、その中間的なものなどがみられ、胎土は概ね精良で、色調はにぶい黄橙色ないし灰白色を呈する。

石製品 (Fig.15-31・32)

31は叩石である。一部欠損するがほぼ完存する。全長10.3cm、全幅7.8cm、全厚7.6cm、重量731.0gを測る。2面を使用し、共に一部被熱する。石材は砂岩である。

32は砥石で、一部が欠損する。残存長6.0cm、全幅5.6cm、全厚5.3cm、重量163.0gを測る。両側面を使用し、被熱により赤く変色する。石材は砂岩である。

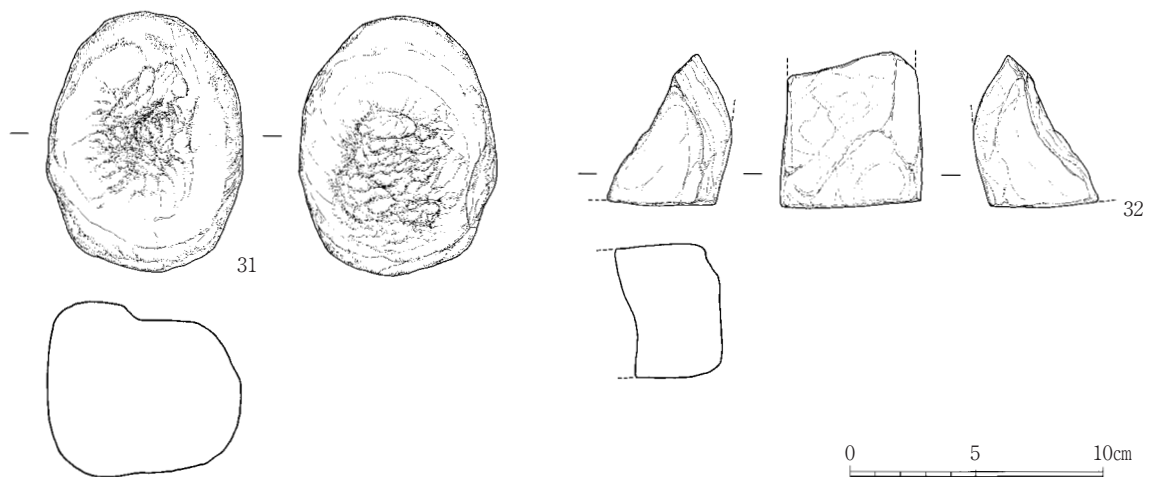


Fig.15 I区第V層出土遺物実測図(石製品)

第VI層出土遺物

土製品 (Fig.16-33)

33は管状土錘で、紡錘形をなす。全長4.4cm、全幅1.6cm、全厚1.5cm、孔径0.6cmを測る。

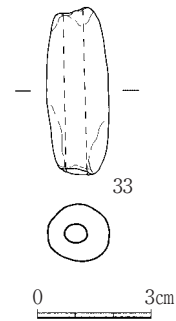


Fig.16 I区第VI層出土遺物実測図(土製品)

第VIIIa層出土遺物

土師器 (Fig.17-20-34~89)

34・35は壺の口縁部で、C類の直口壺である。34は約1/3が残存し、口径11.8cmを測る。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は、外面が灰黄褐色ないし橙色、内面がにぶい黄橙色ないし橙色を呈する。35は口径9.2cmを測り、口縁上部でやや外傾する。内外面ともヨコナデ調整を施し、屈曲部に強いヨコナデを施す。胎土には少量の赤色風化砂粒が混じる。色調は、外面が灰黄色、内面がにぶい黄

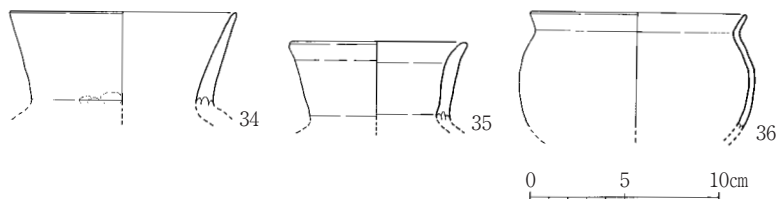


Fig.17 I区第VIIIa層出土遺物実測図(土師器)

橙色を呈する。

36はD類の短頸壺で、底部を欠く。口径11.2cm、胴径12.4cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、体部にはナデ調整を施す。色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。

37～70は甕である。37～66は口頸部が残るもので、口頸部の形態により4類に分かれる。37～48は口頸部がくの字状に屈曲するA類である。37は約1/5が残存し、胴部が張らず最大径が口縁部にあるもので口径17.3cm、胴径16.9cmを測る。外面は指押えと指ナデ調整による器面の凹凸が目立つ。内面はナデ調整の後にヘラナデ調整を施す。口縁部外面の一部と胴部内面に煤が付着し、特に口縁部内面には多量に付着する。胎土は精良で、色調は、外面がにぶい褐色ないし黒褐色、内面が灰黄褐色を呈する。38は約1/3が残存し、口径17.3cmを測る。内面は黒く変色する。胎土は赤色風化砂粒を含む。色調は、外面がにぶい橙色、内面が褐灰色を呈する。39は約1/6が残存し、口径16.8cmを測る。器面は内外面ともヨコナデ調整とヘラナデ調整を施し、口縁部外面の一部に煤が付着する。器壁は厚く、口縁端部は丸く仕上がる。色調は内外面ともにぶい黄褐色を呈する。40は約1/6が残存し、口径17.2cmを測る。口縁部には強いヨコナデ調整を施す。口縁部内面には帯状に煤が付着する。色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。41は約1/5が残存し、口径18.8cmを測る。内外面ともヨコナデ調整とヘラナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は、外面がにぶい橙色、内面が橙色ないしにぶい橙色を呈する。42は約1/5が残存し、口径14.6cmを測る。口縁部内外面にヨコナデ調整を施す。口縁部外面に煤が付着し、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。43は約1/6が残存し、口径14.0cmを測る。口縁部は内外面ともヨコナデ調整、外面接合部には指押え後に指ナデ調整を加える。口縁部外面の一部に少量の煤が付着する。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。44は約1/4が残存し、口径13.7cmを測る。内面はヨコナデ調整とヘラナデ調整を施し、外面はヘラナデ調整痕が多数認められる。胎土は精良で、色調は内外面とも橙色を呈する。45は約1/5が残存し、口径15.2cmを測る。口頸部にはヨコナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は、外面が明赤褐色、内面がにぶい黄橙色を呈する。46は約1/6が残存し、口径12.0cmを測る。口縁部は直線的に外上方に延びる。接合部は指押え後にナデ調整を施す。色調は、外面が橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。47は約1/3が残存し、口径11.3cm、胴径13.6cmを測る小型のものである。口縁部の一部にヨコナデ調整を施すが、内面には粘土紐接合痕が明瞭に残る。胴部にはわずかに煤が付着する。色調は、外面がにぶい黄褐色、内面が橙色ないしにぶい黄橙色を呈する。48は約1/5が残存し、口径14.0cmを測る。口縁部外面の一部に煤が付着する。胎土は精良で、色調は、外面が灰黄褐色、内面がにぶい褐色を呈する。49～53はA類の中で途中で外傾するものである。49は口径19.4cmを測り、外面がナデ調整、内面が胴部にナデ調整、口縁部にヨコナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。50は約1/3が残存し、口径13.9cmを測る。比較的器壁が薄く、口縁部は大きく外傾する。丁寧なナデ調整により器面は平滑で、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。51は約2/5が残存し、口径15.8cmを測る。内外面ともナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。52は約1/5が残存し、口径16.9cmを測る。内外面ともヨコナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は、外面がにぶい橙色、内面が灰黄褐色を呈する。53は約1/4が残存し、口径16.8cmを測る。頸部から口縁部外面には強いヨコナデ調整を施す。胎土には小礫や砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色

を呈する。

54～63は口頸部が外反もしくは直立気味に立ち上がるB類で、54～57は口縁部がそのまま外反するB-1類である。54は口縁部の約1/4、胴部の約1/2が残存し、I区出土の甕では唯一全体が復元できたもので、口径16.4cm、胴径20.9cm、器高25.7cmを測る。外面にはナデ調整とヘラナデ調整を施し、内面には粘土紐接合部に指ナデ調整を加える。底部は平底風をなし、ヘラナデ調整痕が認められる。口縁部には煤が厚く付着し、内底面を中心に煤と焦げ目が付着する。色調は、外面がにぶい橙色、

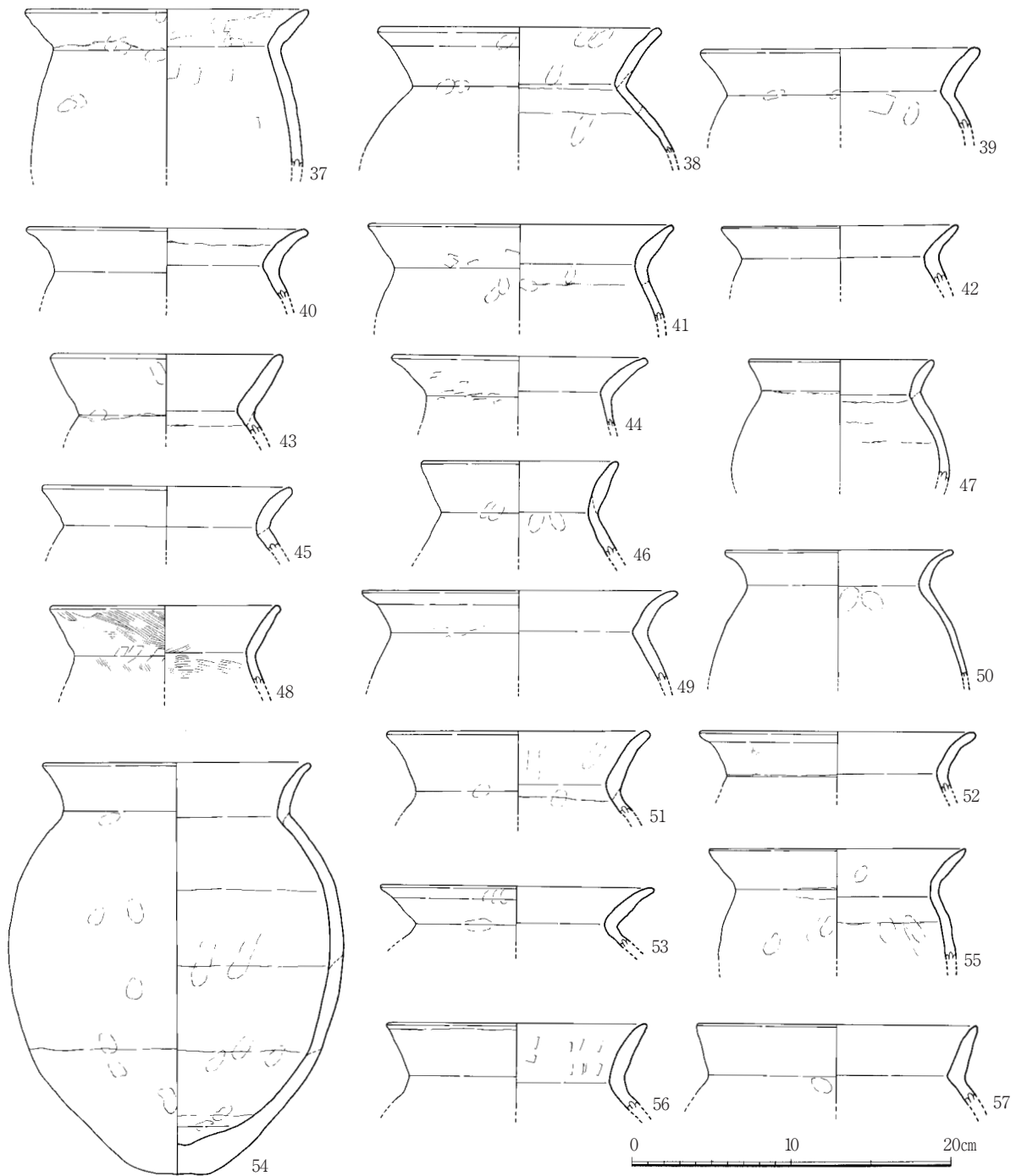


Fig.18 I区第Ⅷa層出土遺物実測図(土師器2)

内面がにぶい黄橙色を呈する。55は約1/4が残存し、口径16.0cmを測る。内外面ともナデ調整を施す。内面には接合痕が残る。色調は内外面ともににぶい黄褐色を呈する。56は約1/6が残存し、口径15.9cmを測る。外面にはナデ調整、内面にはナデ調整の後にヘラナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は、外面がにぶい黄褐色、内面がにぶい褐色を呈する。57は約1/6が残存し、口径17.3cmを測る。外面にはナデ調整、内面にはナデ調整の後にヘラナデ調整を施す。口縁部外面には煤が付着する。

58～63は口縁が外傾するB-2類である。58は約2/5が残存し、口径17.2cmを測る。口縁部がヨコナデ調整、胴部外面にはナデ調整と一部に指ナデ調整を施すが、接合部の指押えによる凹凸が目立つ。口縁部から胴部外面には煤が付着する。胎土には砂粒を多く含む。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。59は約1/5が残存し、口径21.5cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整を施すが、粘土紐接合の際の凹凸が残る。胎土は精良で、色調は、外面が灰黄褐色、内面がにぶい黄橙色を呈する。60は約1/5が残存し、口径18.6cmを測る。胴部の張りは小さく、外面は口縁部にヨコナデ調整、胴部

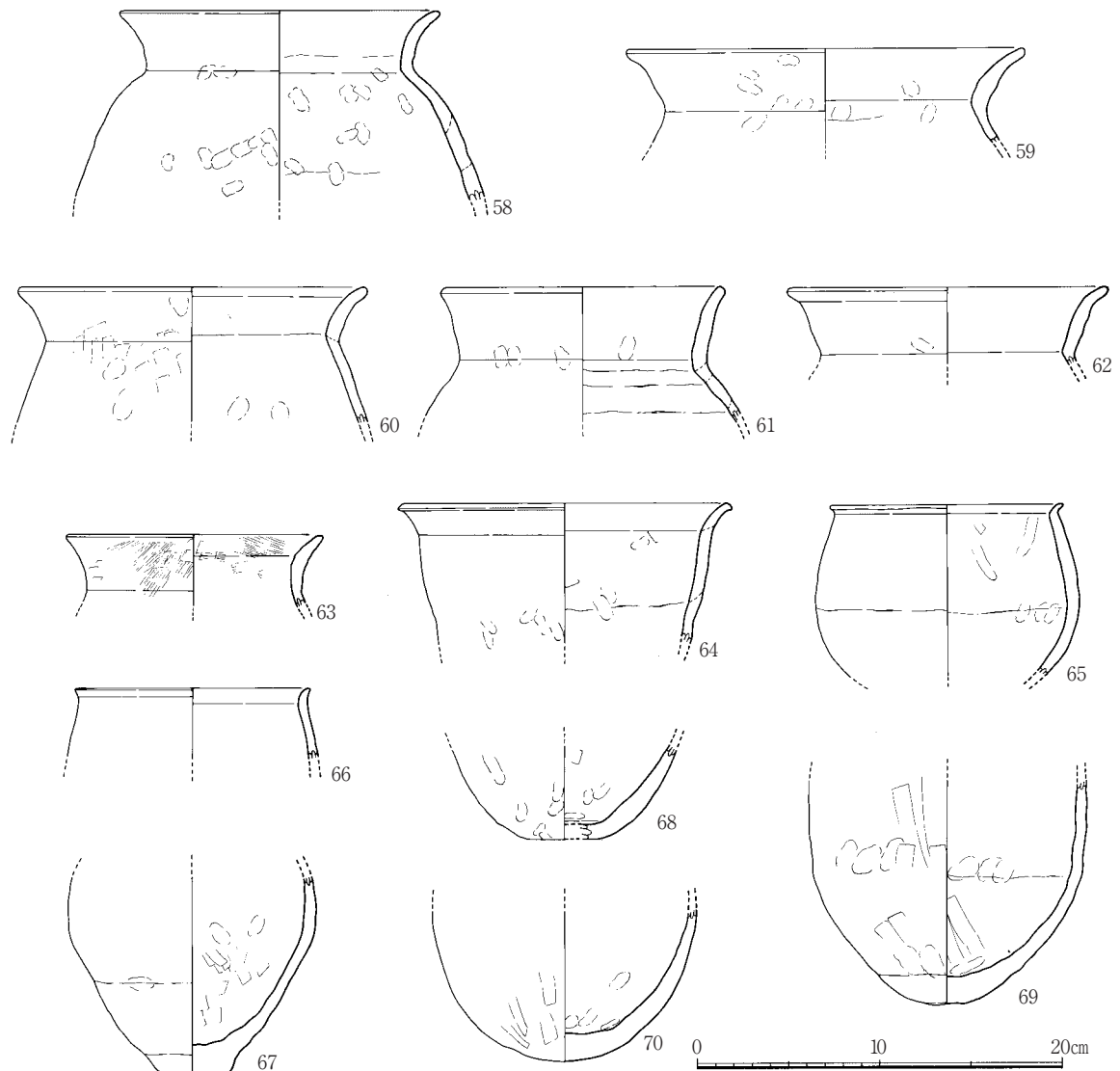


Fig.19 I区第Ⅷa層出土遺物実測図(土師器3)

にナデ調整とヘラナデ調整，頸部にヘラナデ調整を施す。内面にはナデ調整を施す。胎土は精良で，色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。61は口径15.0cmを測り，口縁部は胴部から比較的緩やかに上がり，端部を丸く仕上げる。口縁部にはヨコナデ調整，胴部にはナデ調整を施す。胎土には少量の赤色風化砂粒を含み，色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。62は約1/5が残存し，口径17.1cmを測る。口縁上端は大きく外傾する。口縁部にはヨコナデ調整を施し，外面には煤が付着する。色調は内外面ともにぶい褐色を呈する。63は約1/3が残存し，口径13.8cmを測る。頸部の屈曲は緩やかで，口縁部外面にはタテ方向，内面にはヨコ方向のハケ目が残る。胎土は精良で，色調は，外面が灰黄褐色，内面がにぶい黄橙色を呈する。

64は口頸部が緩やかに外反するC類である。約1/5が残存し，口径17.6cm，胴径15.6cmを測る。頸部はほとんど屈曲せずに立ち上がり，最大径を口縁部に持つ。内外面ともヘラナデ調整後ナデ調整を施す。外面には煤が付着し，色調は，外面がにぶい褐色，内面がにぶい黄橙色を呈する。

65・66は口縁部が短く外反するD類である。65は約1/2が残存し，口径12.7cm，胴径14.4cmを測る小型のものである。器壁が薄く，口縁端部を外方に摘み出す。内外面ともナデ調整を施し，外面は口縁部付近まで一面に煤が付着し，内面は一部に薄く付着する。色調は，外面がにぶい黄褐色，内面が灰黄褐色を呈する。66は約1/6が残存し，口径12.8cmを測る。65同様に口縁部が非常に短く，器壁が薄い。内外面ともナデ調整を施し，色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。

67～70は底部から胴部が残存するもので口縁部を欠く。67・68は平底，69・70は丸底を呈する。67はやや高台状に突き出た底部を有するもので，胴径13.5cm，底径3.7cmを測る。胴部の器壁は薄く，小型のものである。内面にはヘラナデ調整の後にナデ調整を加える。底部を除く器面には煤が付着する。色調は，外面が灰黄色，内面がにぶい黄褐色を呈する。68は底径4.0cmを測り，外面にはナデ調整，内面にはヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。色調は内外面とも橙色を呈する。69はやや平底状をなす底部で，胴部の張りは小さく胴径15.2cmを測る。内外面ともヘラナデ調整痕が多数残り，内面には粘土紐接合痕が残る。胎土には赤色風化砂粒を含み，色調は，外面が橙色ないしにぶい黄橙色，内面が橙色を呈する。70は球体をなすもので，外面にはヘラナデ調整，内面には指押えの後に指ナデ調整を施す。胎土には小礫を含み，色調は，外面がにぶい橙色，内面が灰白色を呈する。

71～77は鉢で，71・72は鉢状をなすA類で，高台状の底部を持つものである。71は底部の約1/4が残存し，底径6.1cmを測る。体部はやや直線的に外上方に延びる。高台をなす部分には指押えの痕が連続して残り，内面には放射状にヘラナデ調整を施す。外面一面に煤が付着する。胎土には赤色風化砂粒を含み，色調は，外面が褐灰色，内面が橙色を呈する。72は底径3.3cmを測る小型の鉢である。内外面ともナデ調整を施し，高台部分には指押えと細かいハケ目が残る。底部には煤が付着し，色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

73～76は椀状のB類で，73～75は丸底のB-1類に分類できる。73はほぼ完形で口径12.4cm，器高5.3cmを測る。器高指数42と浅めのもので，口縁部はやや内傾する。調整は丁寧で，外面がナデ調整，内面が指ナデ調整を施す。色調は，外面がにぶい橙色，内面が橙色を呈する。74は底部が欠損し，口径11.8cmを測る。器壁は比較的薄く，口縁部はやや内傾する。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。75も底部が欠損し，口径15.2cmを測る。口縁部は体部から内湾気味に上がり，外上方を向く。

器壁は比較的薄く、胎土は精良で、赤色風化砂粒を含む。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。76は平底の底部が残存し、底径5.6cmを測る。底部はヘラ削りの後にナデ調整、内底面は指ナデ調整を施す。器面一面に煤が付着し、色調は、外面が灰色、内面が暗灰色を呈する。

77は皿状のC類で、口縁部の約1/6が残存し、口径12.6cmを測る。内外面とも丁寧なナデ調整を施し、器面は平滑である。胎土は精良で赤色風化砂粒を含む。色調は、外面が灰黄褐色、内面がにぶい橙色を呈する。

78～89は高杯で、78・79は杯部にわずかな稜が残るB類である。78は口縁部の約2/3を欠損するが、脚部は完存し、全体の形状が分かるもので、B-1類である。口径15.0cm、器高10.6cm、底径9.6cmを測る。裾部にはヨコナデ調整、脚部内面下半部にヘラ削り調整を施す。79は杯部が残存するもので、口縁部が外反し、口径16.8cmを測る。口縁部にヨコナデ調整、他は内外面ともナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい褐色、内面が橙色を呈する。

80～89は脚部のみが残るもので、80・81は裾部が水平な1類である。80は裾部を一部欠損し、底径10.3cmを測る。外面にはナデ調整、脚部内面はヘラ削り調整を施す。胎土は精良で赤色風化砂粒を含む。色調は、外面がにぶい橙色、内面が橙色を呈する。81は底径11.0cmを測る。外面は丁寧な

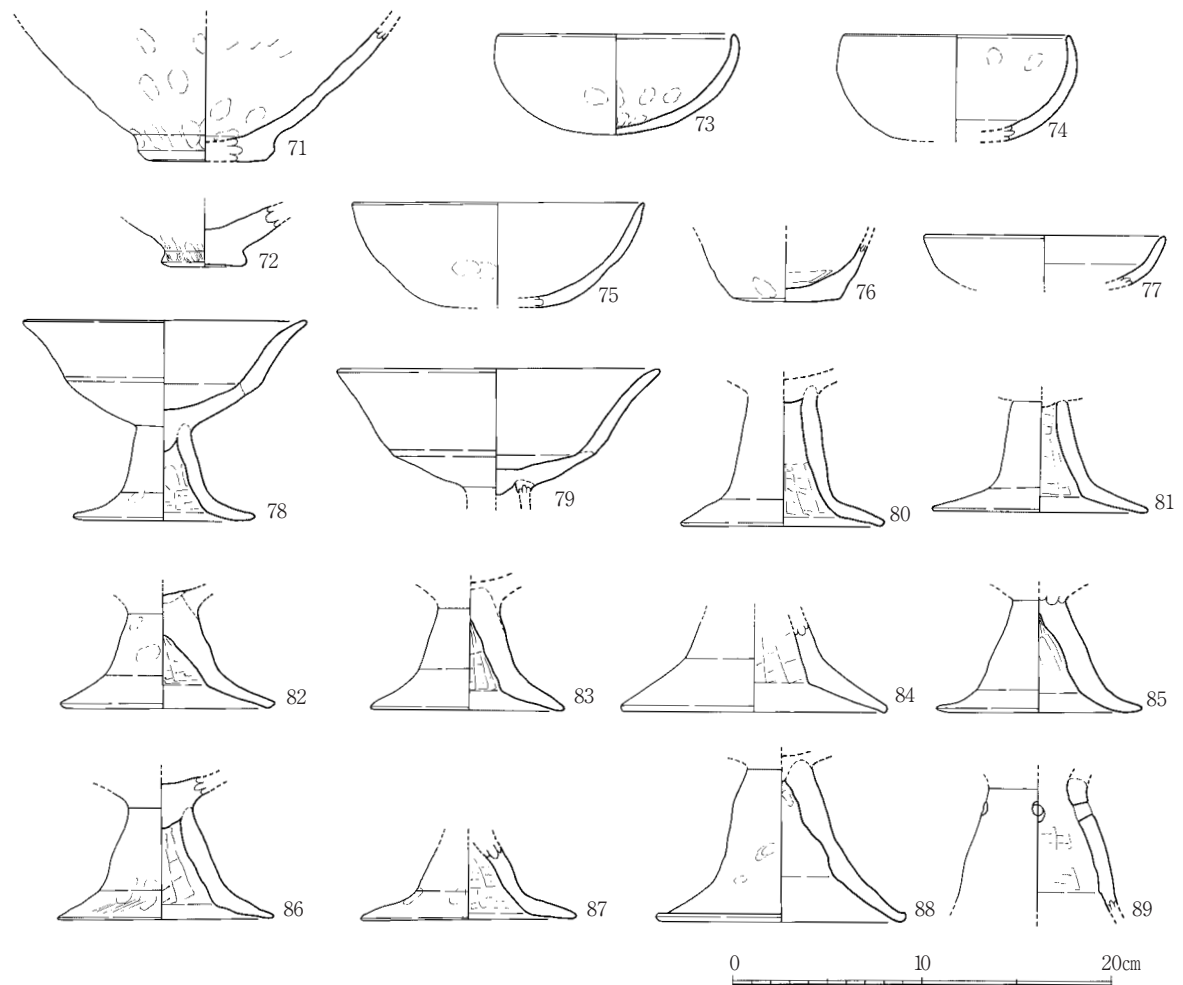


Fig.20 I区第Ⅷa層出土遺物実測図(土師器4)

ナデ調整により平滑で、脚部内面はヘラ削り調整を施す。胎土は精良で赤色風化砂粒を含む。色調は、外面がにぶい黄橙色、内面がにぶい橙色を呈する。

82~89は脚部が途中で屈曲し明瞭な裾部を作り出す2類である。82は脚部が完存し、中実のもので、底径10.6cmを測る。外面にナデ調整、脚部内面はヘラ削り調整を施す。胎土には小礫を含み、色調は、外面が明赤褐色、内面がにぶい黄褐色を呈する。83は裾部を一部欠損し、底径10.2cmを測る。外面にはナデ調整、脚部内面にはヘラ削り調整を施し、上部にしぼり目が残る。胎土には小礫を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。84は裾部が残存するもので、底径13.8cmを測る。外面には丁寧なナデ調整、脚部内面はヘラ削り調整の後にナデ調整を施す。胎土は精良で、赤色風化砂粒を含み、色調は、外面がにぶい黄橙色、内面がにぶい橙色を呈する。85は底径9.2cmを測り、脚部は中実でしぼり目が残る。外面には丁寧なナデ調整、脚部内面は指ナデ調整を施す。胎土には小礫を含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。86は底径11.2cmを測る。外面にはナデ調整、脚部内面にはヘラ削り調整を施し、上部にはしぼり目が残る。胎土は精良で、色調は、外面がにぶい橙色、内面が明灰褐色を呈する。87は底径11.4cmを測る。裾部は内外面ともヨコナデ調整、脚部内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい褐色を呈する。88は脚部に歪みが見られるもので、底径12.8cmを測る。裾部に煤が薄く付着する。胎土は精良で、色調は、外面が灰黄色、内面が灰白色を呈する。89は裾部を欠損し、脚部約1/4が残存する。脚部には丸い透し孔を持ち、4方向に透しを持っていたものとみられる。外面にはナデ調整、内面にはヘラ削り調整を施し、焼成は不良である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

手づくね土器 (Fig.21-90~95)

90・91は鉢を模倣したA-3類である。90は高台状の底部を持ち、口径8.4cm、器高5.9cmを測る。内面は指ナデ調整の後に放射状のヘラナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は、外面が橙色ないし褐灰色、内面が橙色を呈する。91は胴部の約1/6が残存し、口径7.8cm、器高7.6cm、底径3.9cmを測る。底部は深く、高台状をなす。体部は内湾し、口縁部はそのまま内傾する。口縁部にはヨコナデ調整、内面は指押え後ナデ調整を施す。体部外面の一部に煤が付着し、胎土には1~4mmの砂粒を多く含む。色調は、内面が灰褐色、外面が明褐灰色を呈する。

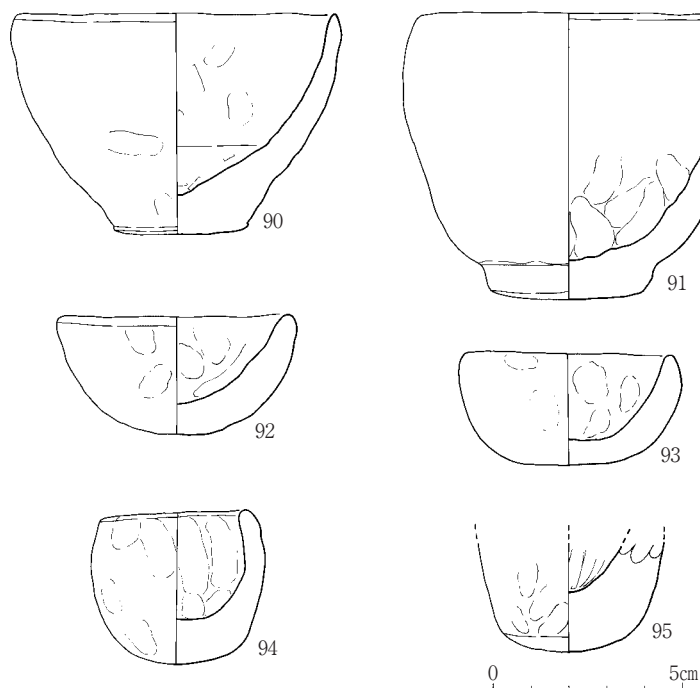


Fig.21 I区第Ⅷa層出土遺物実測図(手づくね土器)

92~95はB類である。92は椀状

をなし、口径6.0cm、器高3.2cmを測る。器面には指ナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色ないし褐灰色、内面がにぶい橙色を呈する。93は椀状をなす小型のもので、約1/2が残存し、口径5.3cm、器高3.1cmを測る。外面にはナデ調整、内面には指ナデ調整を施す。色調は、外面が灰黄色、内面が浅黄橙色を呈する。94はほぼ完形で、口径3.8cm、器高4.1cmを測る。器面には指ナデ調整痕や指頭圧痕が残る。色調は、外面が灰黄色、内面が灰色を呈する。95は口縁部が欠損するもので、底部はやや平底風をなす。外面には指ナデ調整、内面はヘラナデ調整を施す。内底面半分に多量の煤が付着する。胎土は精良で、色調は内外面ともにぶい黄褐色を呈する。

須恵器 (Fig.22-96~101)

96は杯蓋で約2/5が残存し、口径10.4cm、器高3.4cmを測る。天井部と口縁部境の稜を持たず、口縁端部は段状をなす。天井部のほぼ全面に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。天井部内面中央はタタキ目が残る。色調は内外面とも灰色を呈する。

97~100は杯身で、すべて底部を欠く。97は約1/2が残存し、口径11.0cm、受部径12.8cmを測る。立ち上がりは直立気味で端部を丸く仕上げる。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。色調は、外面が灰色ないし茶灰色、内面が暗茶灰色を呈する。98は約1/4が残存し、口径10.8cm、受部径13.2cm、立ち上がり高1.8cmを測る。立ち上がりは内傾し、端部は内傾する凹面をなす。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色を呈する。99は約1/3が残存し、口径12.0cm、受部径13.6cmを測る。立ち上がりはわずか0.3cmと短く内傾し、端部を丸く仕上げる。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整、他は摩耗のため不明である。色調は、外面が黄灰色、内面がにぶい橙色を呈する。100は特殊な器形で、一見無蓋高杯ともみられるが、小型で、立ち上がりを持つものとみられ、杯身と判断した。立ち上がりは欠損し、受部径11.5cmを測る。体部外面には1条の断面三角形の凸帯と7本単位の櫛描波状文を施す。受部は水平をなす。底部外面には回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも青灰色を呈する。

101は無蓋高杯で、体部の一部が残存する。2条の凸帯の下に14本単位の櫛描波状文を施し、底部外面には回転ヘラ削り調整を施す。色調は内外面とも灰色を呈する。

土製模造品 (Fig.23-102~107)

102・103は土製勾玉で、紐孔が側面から穿孔されたA類である。102はほぼ完存し、全長4.5cm、全幅1.2cm、全厚1.3cm、孔径0.3cmを測る。円孔付近に亀裂が走り、表面の約1/2に黒斑が認められる。表面には丁寧なナデ調整を施し、全体に細身に仕上がる。胎土は精良で、色調は、外面がにぶい灰黄色、内面がにぶい橙色を呈する。103もほぼ完存し、全長4.9cm、全幅1.5cm、全厚1.6cm、孔径0.2cmを測る。表面の約2/3に黒斑が認められる。胎土は精良で、色調は内外面とも灰黄色を呈する。

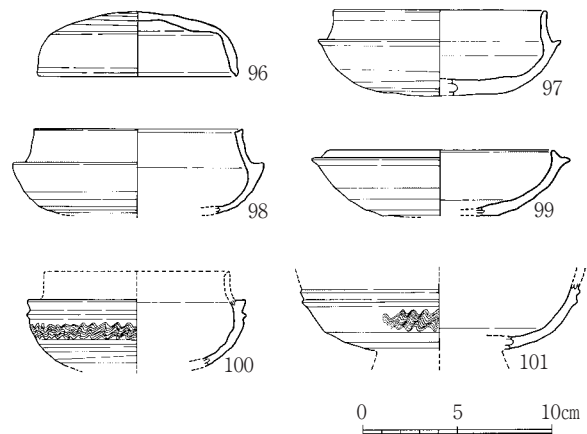


Fig.22 I区第Ⅷa層出土遺物実測図(須恵器)

104～107は土製模造鏡で、鈕を両側から摘み上げたA-1類である。104は縁辺部がわずかに欠損する他はほぼ完形で、全長5.2cm、全幅5.4cm、全厚1.8cmを測る。鈕は根元を残して欠損するが形状から鈕自体は薄く低いものとみられる。鏡面はほぼ円形で丁寧なナデ調整を施し、中央部が凸状に膨らみ、一部に煤が付着する。色調はにぶい褐色を呈する。105は約1/2が残存し、鈕は根元が残る。中央の紐孔を穿つ際の擦痕から有孔であったと判断される。周縁と鏡面にナデ調整を施すが、仕上がりはやや雑である。胎土は精良で、色調は茶褐色を呈する。106は縁辺部の一部を欠損する他は残存し、全厚2.6cmを測る。土製模造鏡の中では101に次いで大型である。鏡面はほぼ平坦で、約4/5に黒斑が認められる。胎土は精良で、色調は暗灰黄色を呈する。107は縁辺部の一部を欠損する他は残存し、全長4.8cm、全厚1.9cmを測る。鈕は低く、薄い。鏡面は中央部が凸状をなす。色調は茶褐色を呈する。

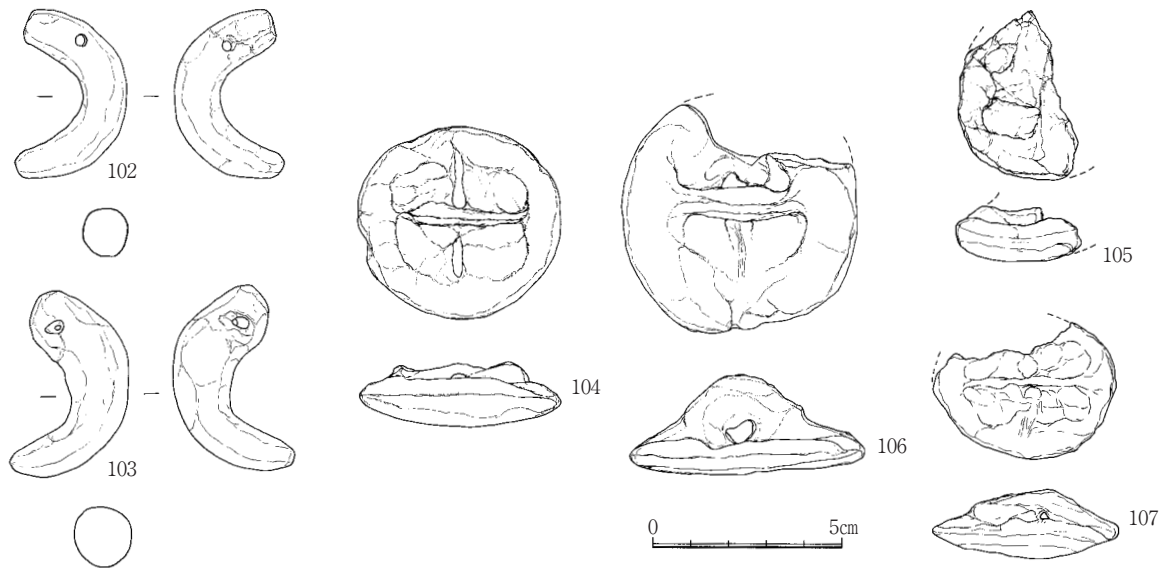


Fig.23 I区第Ⅷa層出土遺物実測図(土製模造品)

石製模造品 (Fig.24-108~115)

すべて滑石製である。108は隅丸方形をなす有孔円板で、双孔位置が両側縁に偏するC-2類である。周縁部の一部の剥離を除きほぼ完形で全長3.2cm、全幅2.5cm、全厚0.4cmを測る。表面には擦痕が残る。風化のためか器面に光沢がなく、両面に黄褐色の鉄分が付着する。色調は淡緑青色を呈する。

109は滑石製の剣形品とみられるものの明確な形状をなさず、未成品の可能性もある。全長3.1cm、全幅1.6cm、全厚0.7cmを測る。側面、両面とも一部欠損ないし剥離がみられる。

110・111は滑石製の管玉である。110は完形で全長2.2cm、全幅0.5cm、孔径0.13cmを測る。

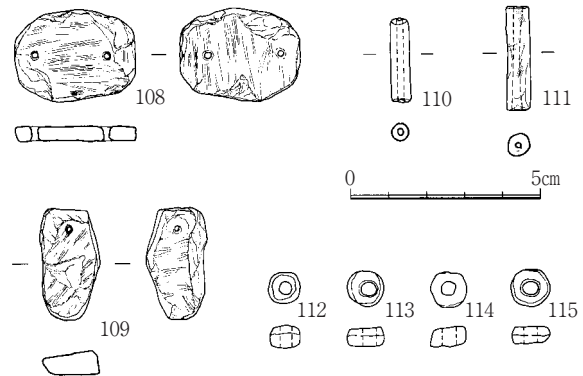


Fig.24 I区第Ⅷa層出土遺物実測図(石製模造品)
(112～115は原寸)

端面も含めて器面がよく研磨され、光沢を持つ。色調は黒青色を呈する。111は完形で全長2.7cm、全幅0.6cm、孔径0.25cmを測り、すべて110より一回り大きい。両端面とも切削時の擦痕が残る。器面は研磨されるが光沢に乏しい。円孔は両端から穿孔したものとみられる。色調は黒青色を呈する。

112～115は滑石製の白玉で、直径0.41～0.50cm、全厚0.22～0.29cm、孔径0.16～0.20cmを測る。

石製品 (Fig.25-116～119)

116～119は叩石である。116は完形で、細長く扁平な形状をなし、下部に弱い敲打痕が認められる。全長14.2cm、全幅5.7cm、全厚3.5cm、重量383.0gを測り、石材は砂岩である。117は完形で全長14.2cm、全幅5.7cm、全厚3.5cm、重量383.0gを測り、両面に敲打痕が認められる。石材は砂岩である。118は細長く扁平な形状を呈し、上部を欠損する。両面に敲打痕が認められる。石材は砂岩である。

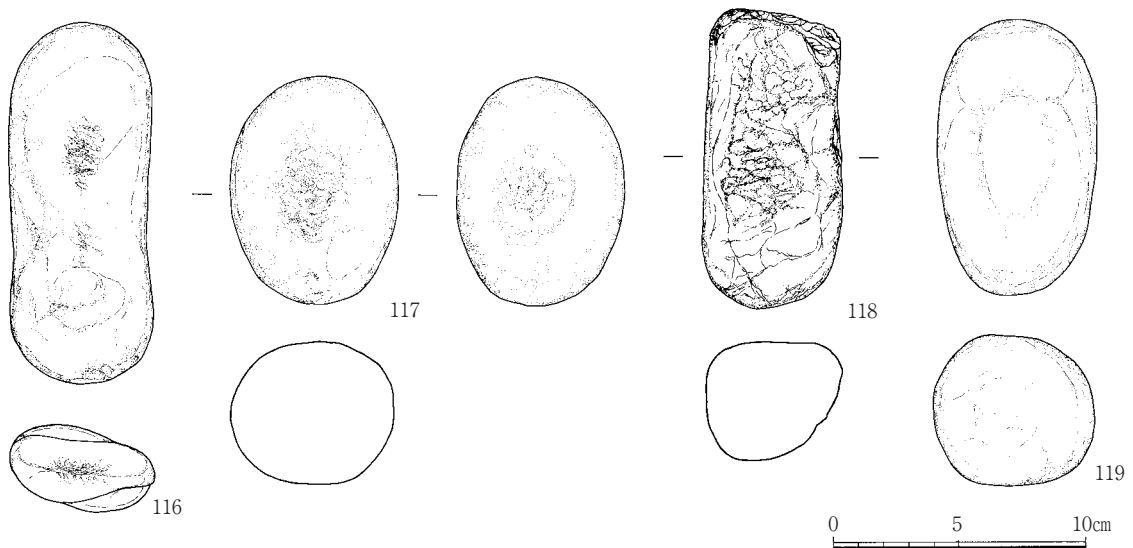


Fig.25 I区第Ⅷa層出土遺物実測図(石製品)

119は完形で卵形をなし、全長10.8cm、全幅6.4cm、全厚6.0cm、重量621.0gを測る。長軸先端部の一方に径約1cmの敲打痕が認められる。表面には煤と酸化鉄が付着する。石材は砂岩である。

鉄製品 (Fig.26-120・121)

120・121は鉄鏃である。120は方頭鏃で残存長10.7cmを測り、関は両角関とみられる。刃部は方頭で平作り、断面は方形をなし、基部にいくほど厚みを増す。関部中央に木質が一部残存する。121は三角形鏃とみられるもので、残存長2.8cmを測り、鏃身は扁平な平造りである。

(田坂)

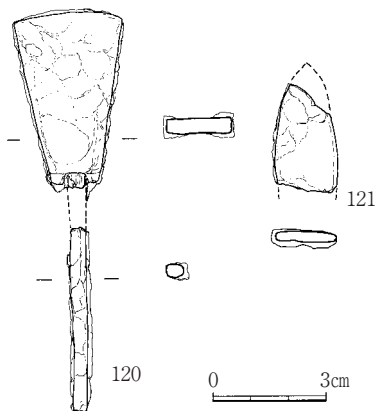


Fig.26 I区第Ⅷa層出土遺物実測図(鉄製品)

② II区

第Ⅴ層出土遺物

土師器 (Fig.27-122～127)

122は赤色塗彩された皿で、一部が残存し、口径24.0cm、器高

4.0cm, 底径14.6cmを測る。高台はハの字状に開き比較的長く, 端部は内傾する平面をなす。器面は摩耗するが内面に赤色塗彩された痕跡が残る。胎土は精良で, 色調は, 内面がにぶい橙色, 外面が橙色ないし明赤褐色を呈する。123は底部の約1/2が残存し, 底径8.2cmを測る。器面は摩耗するため調整は不明である。胎土には2mm以下の砂粒を含み, 焼成はやや不良で軟質である。色調は, 内面がにぶい黄橙色, 外面が淡赤橙色から灰白色を呈する。

124は甕で, 約1/6が残存し, 口径17.8cmを測る。口縁部内面はヨコ方向のハケ調整, 外面はヨコナデ調整, 胴部外面は斜め方向のハケ調整を施す。胎土には3mm以下の砂粒を多く含み, 焼成はやや不良で軟質である。色調は, 内面がにぶい黄橙色, 外面がにぶい橙色で一部被熱のため赤橙色を呈する。125は口頸部の破片で, 口径19.2cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ調整を施し, 頸部は特に強いヨコナデ調整により凹む。胴部外面はヨコ方向のハケ調整である。胎土には4mm以下の砂粒を多量に含み, 色調は, 内面が橙色, 外面が灰黄色を呈する。126は胴上部から口縁部の破片で, 口径24.4cmを測る。器面は摩耗し器壁の荒れが目立つが口縁部にはヨコナデ調整, 胴部内面には不定方向, 外面は斜め方向のハケ目が残る。胎土には雲母が混じる3mm以下の砂粒を多く含み, 色調は内外面ともににぶい黄褐色を呈する。127は口頸部の破片で, 口径25.7cmを測る。口縁部内面はヨコナデ調整後にハケ調整, 外面はハケ調整後にヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整を施す。胎土には3mm以下の砂粒を多く含み, 硬質である。色調は, 内面が橙色, 外面が褐灰色を呈する。

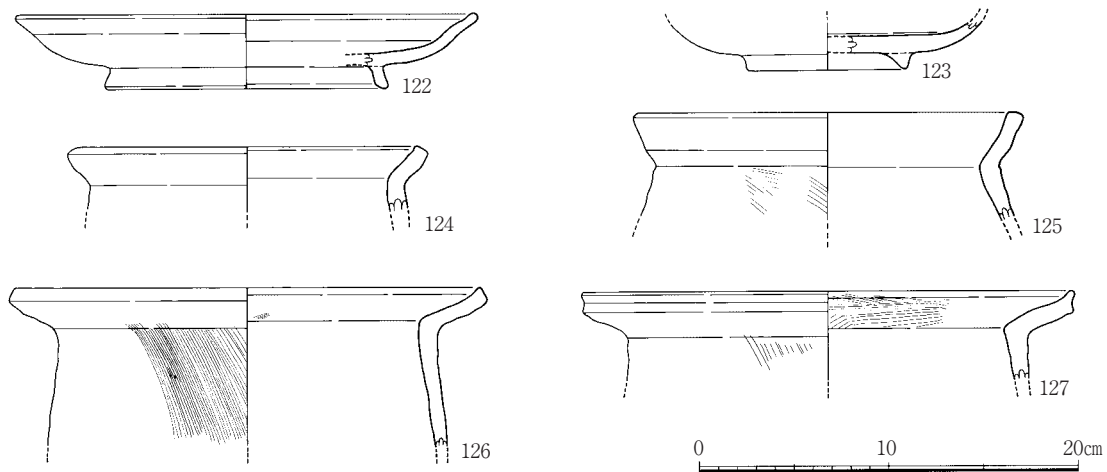


Fig.27 II区第V層出土遺物実測図(土師器)

須恵器 (Fig.28-128~146)

128は皿で, 口径13.6cm, 器高1.9cm, 底径10.2cmを測る。底部内外面はナデ調整, 体部は回転ナデ調整である。外底面に回転ヘラ切り痕が残る。胎土は精良で, 色調は内外面とも灰色を呈する。129は細片で, 口径14.6cm, 器高2.0cm, 底径10.6cmを測る。体部は回転ナデ調整, 内底面にはナデ調整を加える。外底面は回転ヘラ切りの後にナデ調整を施す。胎土は精良で, 色調は内外面とも灰色を呈する。130は口縁部の一部が残存し, 口径23.7cmを測る。内外面とも回転ナデ調整を施す。胎土は精良で, 色調は内外面ともに灰色と浅黄色の縞状を呈する。

131~136は杯蓋で, 全体形が復元できる個体はないが, 概ね天井部が平坦で, 口縁部は外下方に

開き、端部を下方に摘み出す。すべて天井部には回転ナデ調整の後にナデ調整が加えられ、回転ヘラ削り調整が観察される個体はなかった。それ以外は回転ナデ調整のみである。131と132は器壁の厚い天井部を持つ。131は細片であるが、口径10.6cmを測る。胎土には7mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも暗青灰色を呈する。132も細片であるが、口径13.2cmを測る。天井部には丁寧なナデ調整が施される。胎土には2mm以下の砂粒を少量含み、焼成はやや不良で軟質である。色調は、内面が灰白色、外面が灰色を呈する。133も細片であるが、口径12.4cmを測る。胎土は精良で、焼成はやや不良で軟質である。色調は口縁端部が濃灰色を呈する以外灰白色を呈する。134も細片であるが、口径13.2cmを測り、天井部のナデ調整は雑である。胎土には若干の砂粒を含み、色調は内外面とも灰色を呈する。135は約1/2が残存し、口径13.2cmを測る。胎土には若干砂粒を含み、色調は内外面とも灰色を呈する。136は天井部約1/6が残存し、ボタン状のつまみを持つ。器面は摩耗が著しく調整は不明である。色調は、内面が灰白色、外面が灰黄色を呈する。

137～139は杯で、すべて平底を呈する。3点とも胎土に若干の砂粒を含むが精良である。137は一部が残存し、口径12.8cm、器高3.2cm、底径7.8cmを測る。体部は内外面とも回転ナデ調整で、内底面はナデ調整を加える。底部の切り離し痕は丁寧にナデ消される。内外面に火襷がみられる。焼成はやや不良で、色調は内外面とも灰白色を呈する。138は約1/6が残存し、口径13.4cm、器高3.2cm、底径8.3cmを測る。器面には回転ナデ調整痕が残る。139は約1/6が残存し、口径14.5cm、器高4.0cm、底径8.4cmを測る。体部は回転ナデ調整を施し、底部のヘラ切り痕はナデ消されている。

140～144は高台の付く杯で、全体を復元できる個体は少ないが、高台はほぼ外底面端部に付き、体部から口縁部は外上方に直線的に立ち上がる。140は口径12.4cm、器高4.0cm、底径8.0cmを測る。器面は回転ナデ調整を施す。胎土は精良で、焼成はやや不良である。色調は内外面とも灰白色を呈する。141は底部約1/6が残存し、底径9.0cmを測る。体部は回転ヘラ削り調整で、内底面にはナデ調整を加える。色調は内外面とも灰白色を呈する。142は底部の一部が残存し、底径9.5cmを測る。内

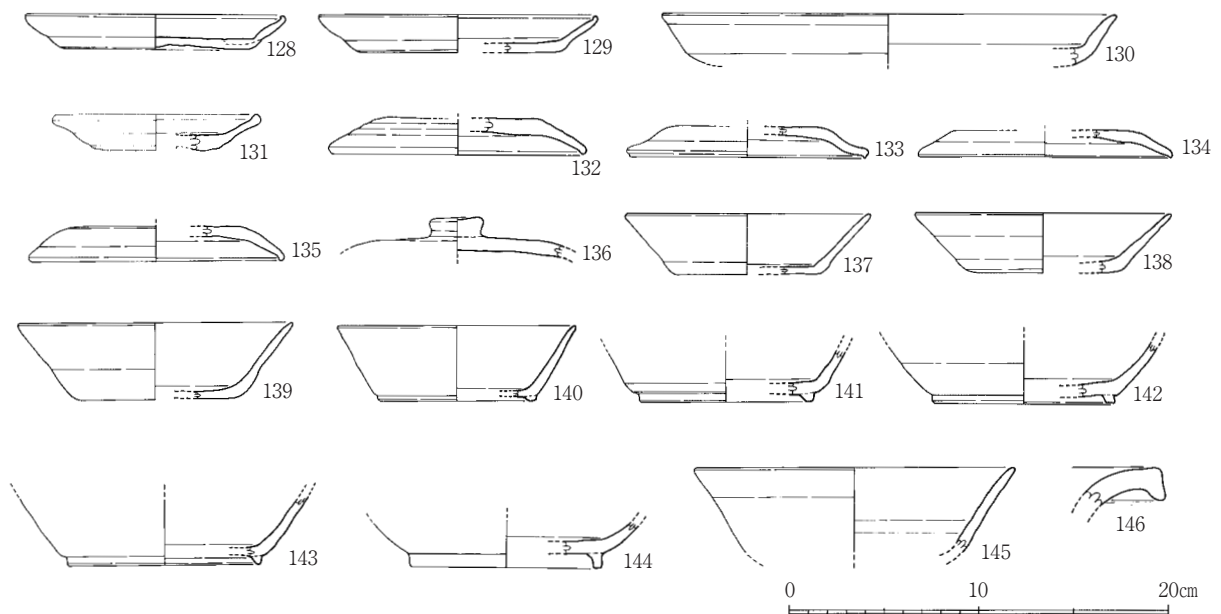


Fig.28 Ⅱ区第Ⅴ層出土遺物実測図(須恵器)

外面とも回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色を呈する。143は口縁部を欠き、底径10.0cmを測る。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は、内面が紫灰色、外面が青灰色を呈する。以上3点は胎土精良で、焼成は良好である。144は底部の細片で、底径10.2cmを測る。内底面はナデ調整、他は回転ナデ調整を施す。胎土には2mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも灰色を呈する。145は口縁部の細片で、口径16.8cmを測る。胎土は精良で、焼成はやや不良である。色調は、内面が灰白色、外面が灰色を呈する。

146は甕の細片である。口縁部はヨコナデ調整、外面下半に回転カキ目調整を施す。胎土には4mm以下の砂粒を若干含み、色調は灰色を呈する。

土師質土器 (Fig.29-147~149)

全体が復元できる個体はないが、3点とも粘土紐巻き上げロクロ成形で、底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。胎土は精良で、内外面とも浅黄色を呈する。147は底部の約1/2が残存し、底径6.5cmを測る。器面は摩耗する。148は底部約1/3が残存し、底径7.4cmを測る。外底面は回転ヘラ切り後ナデ調整を施す。149は約1/3が残存し、底径7.6cmを測る。体部外面は回転ナデ調整を施すが、内面は摩耗するため調整は不明である。

製塩土器 (Fig.29-150~153)

図示できた底部はないが、倒卵形を呈し、口径10.0cm前後になるものとみられる。150は一部が残存し、口径11.6cmを測る。器面は摩耗が著しく調整は不明である。胎土には5mm以下の砂粒を多量に含み、色調は内外面とも灰白色を呈する。焼成は不良で軟質である。151は口縁部の細片で、外面に指頭圧痕が残る。胎土には6mm以下の砂粒を多量に含み、色調は、内面が橙色、外面が浅黄橙色を呈する。152も口縁部の細片で、摩耗するため調整は不明であるが外面に黒斑がみられる。胎土には7mm以下の砂粒を多量に含み、焼成は不良で軟質である。色調は内外面とも灰白色を呈する。153も口縁部の細片で、内面にはタテ方向のナデ調整を施す。胎土には2mm以下の砂粒を多量に含み、焼成は良好である。色調は内外面灰色を呈する。

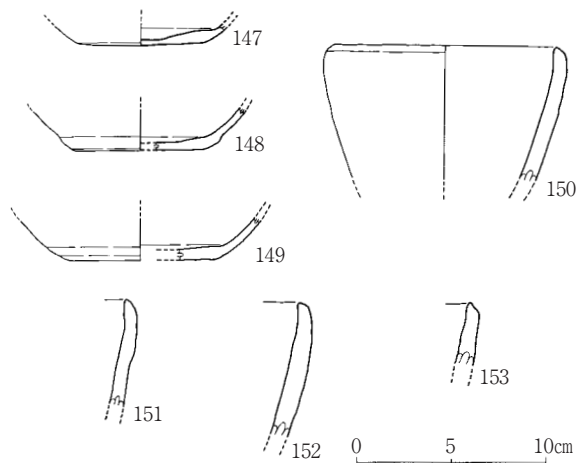


Fig.29 II区第V層出土遺物実測図(土師質土器・製塩土器)

土製品 (Fig.30-154~179)

すべて管状土錘である。全長3.2~6.3cm、重量3.2~32.5gを測る。形態的には円筒形と紡錘形があり、前者の方が多い。また、すべて摩耗が著しく、表面の剥落が目立つ個体も多い。胎土は精良で、焼成は不良なものが目立つ。色調はにぶい黄橙色ないし灰白色を呈する。

鉄製品 (Fig.30-180~182)

180は圭頭鎌の鎌部とみられる。茎部は欠損する。鎌身残存長4.9cm、鎌身幅1.8cm、厚さ0.4cmを測

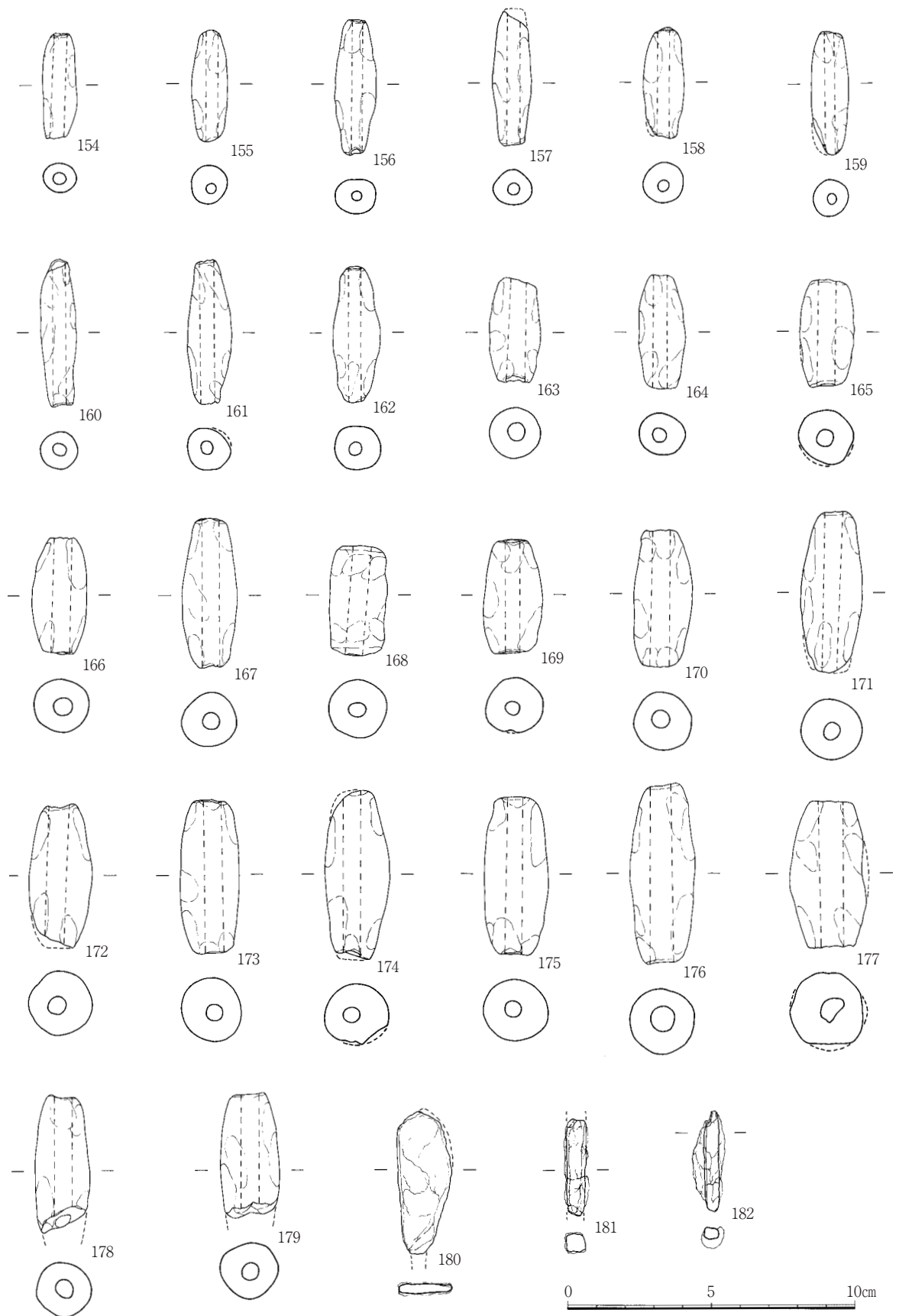


Fig.30 II区第V層出土遺物実測図(土製品・鉄製品)

り、平造りである。181と182は鉄鏝の茎部とみられるもので、銹化が目立つ。181は残存長3.3cm、全幅0.7cm、全厚0.7cm、182は残存長3.4cm、全幅0.6cm、全厚0.4cmを測る。

第VI層出土遺物

土師器 (Fig.31-183~186)

183は一部が残存し、口径15.6cm、器高2.3cm、底径12.4cmを測る。内外面とも断続的なヘラ磨きが施される。胎土は精良で、チャートが多く含まれ、石英・長石・赤色風化礫も少量含まれる。色調は内外面とも赤褐色を呈する。

184は高台の付く杯である。底部の一部が残存し、底径10.6cmを測る。器面は摩耗が著しい。胎土は精良で、色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。

185は甕で、口頸部の一部が残存し、口径14.0cmを測る。口縁部は指押えの後にヨコナデ調整、頸部外面はタテ方向のハケ調整の後にヨコナデ調整、胴部は斜め方向のハケ調整を施す。胎土には2mm以下の石英・赤色風化礫・チャートを含み、焼成は良好で硬質であるが、被熱により暗赤褐色を呈し、器壁が荒れる。186は口頸部の一部が残存し、口径21.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、胴部外面はハケ調整を施す。胎土には5mm以下の砂粒を多量に含み、色調は、内面がにぶい黄褐色、外面がにぶい赤褐色を呈する。

須恵器 (Fig.31-187~192)

187・188は杯蓋で、187は天井部の約2/3が残存し、ボタン状のつまみが付く。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。色調は、内面が灰色ないし青灰色、外面が灰色を呈する。188は天井部約1/4が残存し、水平な天井部には擬宝珠形のつまみが付く。胎土は精良で、焼成はやや不良である。色調は内外面とも灰白色を呈する。

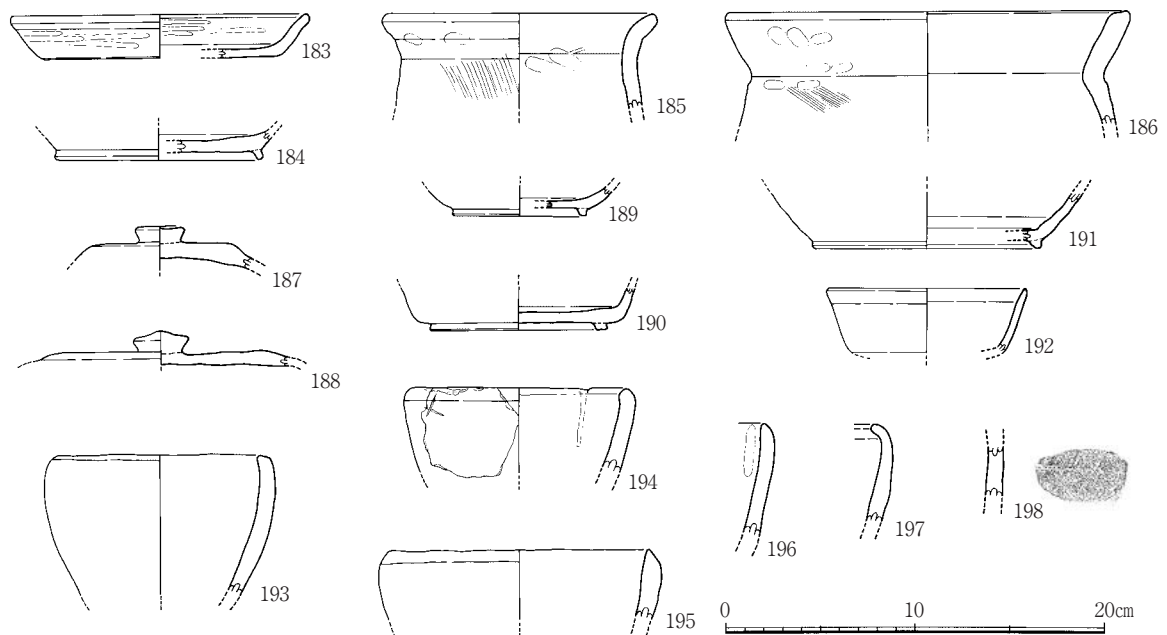


Fig.31 II区第VI層出土遺物実測図(土師器・須恵器・製塩土器)

189～192は杯で、189～191には高台が付く。189は底部の一部が残存し、底径6.9cmを測る。器面は回転ナデ調整で、底部外面には回転ヘラ切りの後にナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は、内面が灰白色、外面が灰色を呈する。190は底部約1/3が残存し、底径9.2cmを測る。高台はやや内側に付く。器面は回転ナデ調整で、底部外面には回転ヘラ切りの後にナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は内外面とも灰白色を呈する。191は底部の一部が残存し、底径11.8cmを測る。器面は回転ナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は、内面が黄灰色、外面が灰色を呈する。192は口縁部の一部が残存し、口径10.3cmを測る。器面には回転ナデ調整を施す。胎土には細砂粒を若干含み、色調は内外面とも灰白色を呈する。

製塩土器 (Fig.31-193～198)

193は約1/3が残存し、口径10.6cmを測る。胎土には5mm以下の砂粒を多量に含み、色調は、被熱のため内面がにぶい橙色、外面がにぶい赤橙色を呈する。194は口縁部約1/8が残存し、口径11.2cmを測る。内面に布目、外面には十字のヘラ記号が残る。胎土には9mm以下の砂粒を多く含み、色調は、内面が浅黄橙色、外面が橙色を呈する。195は口縁部の一部が残存し、口径13.6cmを測る。内面に布目が残る。胎土には2～9mmの砂粒を多く含み、色調は、内面がにぶい橙色、外面がにぶい黄橙色を呈する。196は口縁部の細片で、内面に布目が残る。胎土には10mm以下の砂粒を多量に含み、色調は、内面が橙色、外面が灰黄色を呈する。197も口縁部の細片で、口縁部は小さく内傾する。胎土に3mm以下の砂粒を多量に含み、色調は、内面がにぶい橙色、外面が浅黄橙色を呈する。198は胴部細片で、内面には布目が残る。胎土には2mm以下の砂粒を若干含み、色調は内外面とも灰色を呈する。

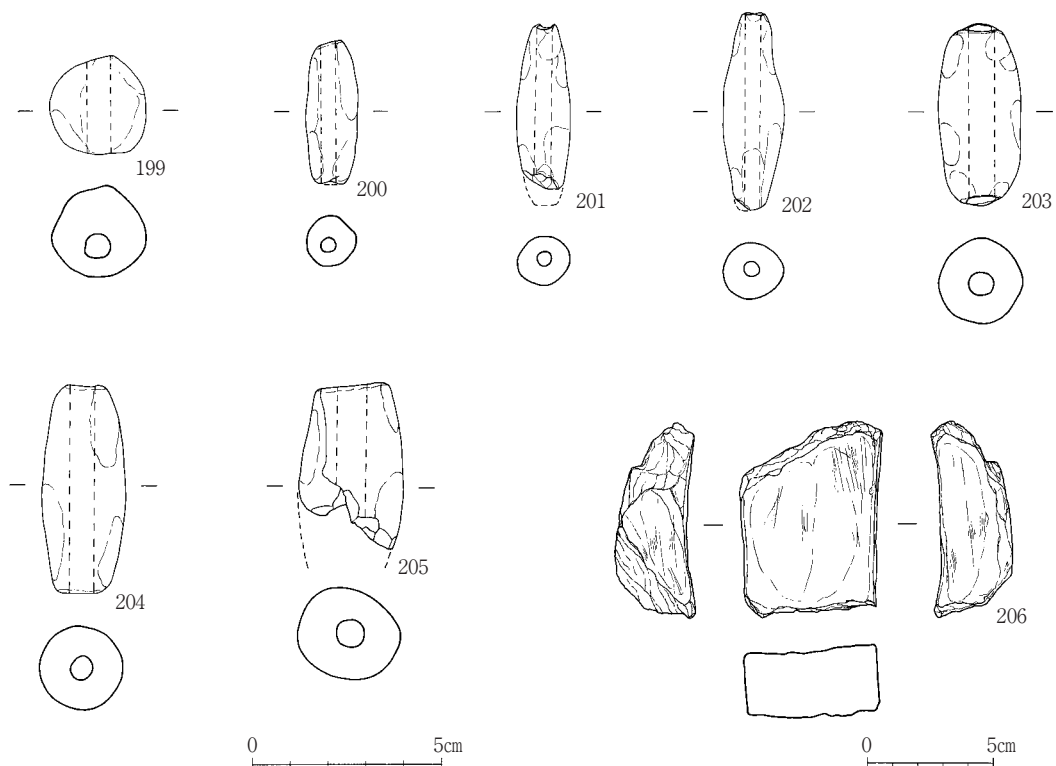


Fig.32 Ⅱ区第Ⅵ層出土遺物実測図(土製品・石製品)

土製品 (Fig.32-199~205)

すべて管状土錘で、全長3.8~5.5cm、重量6.0~24.6gを測る。形態・胎土・色調は第V層出土の土錘とほぼ同じである。199は、表面が二次加工されており、転用された可能性も考えられる。

石製品 (Fig.32-206)

206は砥石で、全長7.7cm、全幅5.6cm、全厚2.0cmを測り、重量は139.5gである。両端は欠損するが、4面に使用痕が残る。

第Ⅷa層出土遺物

土師器 (Fig.33-207~219)

207は壺で、C類に当たる。口頸部約1/4が残存し、口径9.4cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整を施す。胎土には4mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

208~211は甕で、208はA-2類である。口径19.6cmを測り、最大径は胴部中位にあるとみられる。口頸部はヨコナデ調整、胴部はナデ調整を施す。209はD類で、口径18.4cmを測り、胴径と口径がほぼ同じである。口頸部は内外面とも丁寧なヨコナデ調整が施され、胴部内外面は指押えの後にナデ調整を施す。外面には煤が付着する。胎土には6mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。210と211は底部の破片である。210は内外面ともヘラナデ調整を施す。胎土には2mmまでの砂粒を若干含み、色調は内外面とも橙色を呈する。211は胴部内面にヘラナデ調整、外面にナデ調整

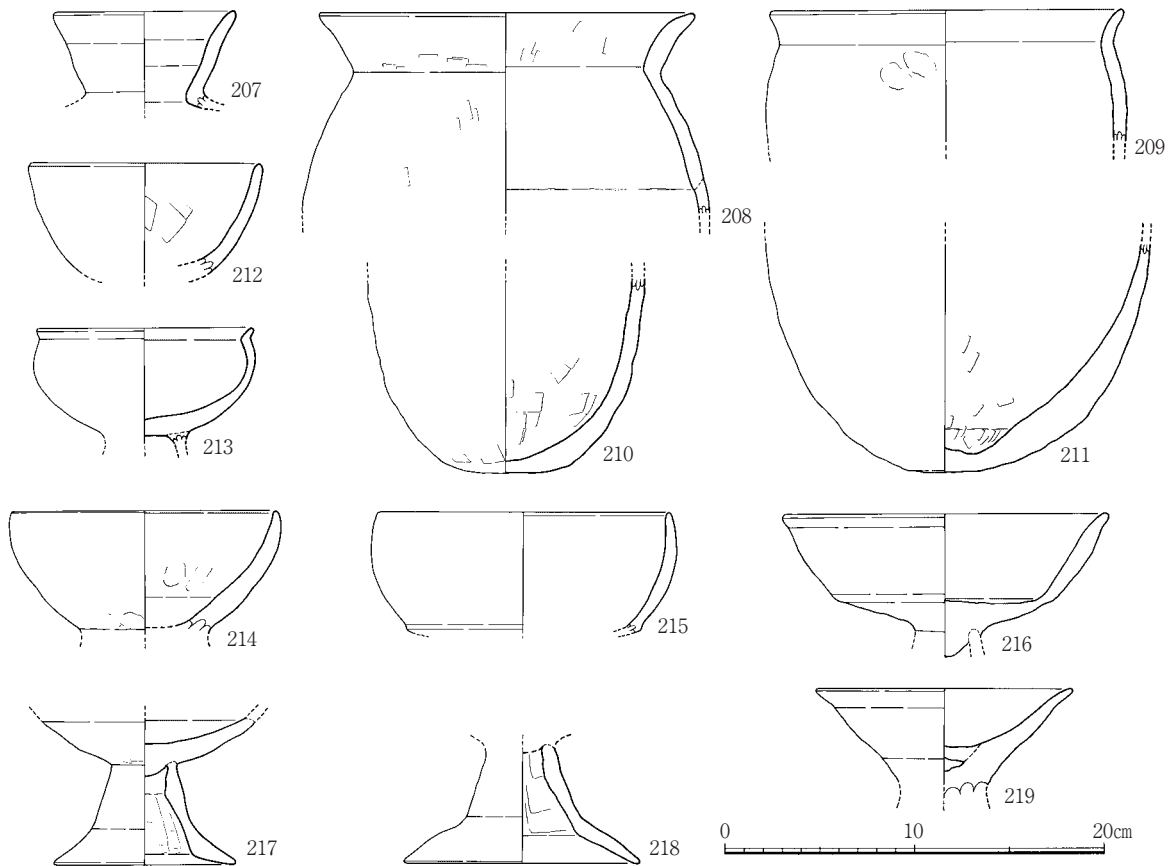


Fig.33 Ⅱ区第Ⅷa層出土遺物実測図(土師器)

を施す。胎土には赤色風化礫・角閃石が混じる2mm以下の砂粒を含み、色調は、内面がにぶい赤褐色、外面が橙色を呈する。

212～214は鉢で、212はB-1類である。口径12.0cmを測り、口縁部にはヨコナデ調整、他はヘラナデ調整とナデ調整を施す。胎土には3mm以下の砂粒を含み、色調は、内面が黄灰色、外面がにぶい褐色を呈する。213と214はB-3類である。213は口径11.2cmを測り、口縁部は短く外傾する。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。体部外面には黒斑が見られる。胎土には3mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。214は口径14.0cmを測る。口縁部外面はヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。胎土には細砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。

215～218は高杯で、215と216はA類に当たる。215は口径15.3cmを測り、口縁部は内湾する。口縁部はヨコナデ調整を施す。胎土には4mm以下の砂粒を多量に含み、色調は内外面ともにおい橙色を呈する。216は杯部約2/3が残存し、口径16.8cmを測る。器面はヨコナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。胎土には5mm以下の砂粒を多く含み、色調は、内面が橙色、外面がにぶい橙色を呈する。

217と218は脚部で、2類に当たる。2点とも中空で、内面はヘラ削り調整、裾部はヨコナデ調整を施す。217は杯底部と脚部の約2/3が残存し、底径9.4cmを測る。内底面にはナデ調整、脚部内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には6mm以下の赤色風化礫を含む砂粒を含み、色調は、内面がにぶい橙色、外面が灰黄褐色を呈する。218は約2/3が残存し、底径12.3cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を若干含み、色調は、内面がにぶい橙色、外面がにぶい黄橙色を呈する。

219は脚台部を欠損するが小型器台とみられるもので、口径13.4cmを測る。器面はヨコナデ調整を施す。胎土には6mm以下の赤色風化礫が混じる砂粒を含み、色調は内外面ともにおい橙色を呈する。

手づくね土器 (Fig.34-220～224)

220はA-2類で、口径4.1cmを測る。口縁部は貼付口縁状となり、器面には指ナデ調整を施す。色調は内外面とも明赤褐色を呈する。

221～224はB類である。体部は、221と222が内傾し、223が直立し、224が外傾する。221は口径3.1cm、器高3.5cmを測る。色調は内外面とも灰黄色を呈する。222は口径4.2cm、器高4.7cmを測る。外底面には煤が付着する。色調は内外面とも橙色を呈する。223は口径4.7cm、器高4.3cmを測り、外底面には黒斑がみられる。器面には指頭圧痕が残る。色調は、内面がにぶい褐色、外面が灰黄褐色を呈する。224は口径5.7cm、器高3.5cmを測り、底部は尖底と

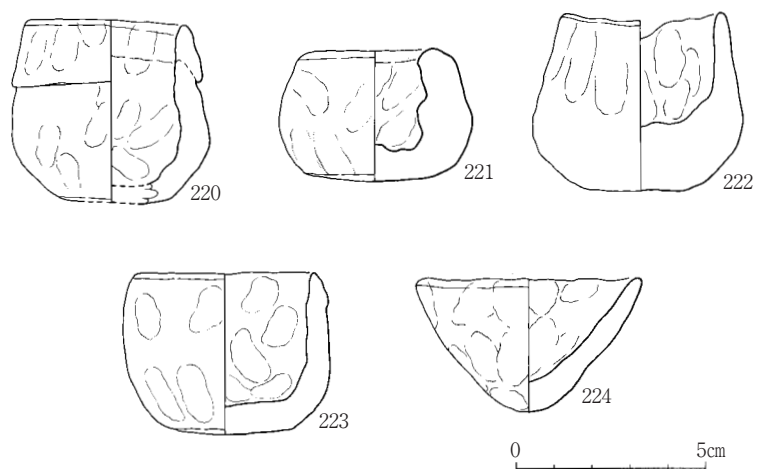


Fig.34 II区第Ⅷa層出土遺物実測図(手づくね土器)

なる。色調は内外面ともにおい橙色を呈する。胎土は、222が雲母を含んだ細砂粒、223が2mm内外の砂粒、221と224がわずかな砂粒を含む。

須恵器 (Fig.35-225~234)

225は杯蓋で、約1/4が残存し、口径11.6cmを測る。天井部外面は回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。胎土は精良で極く少量の細砂粒を含む。色調は、内面が褐灰色、外面が灰色を呈する。

226・227は杯身である。226は約1/5が残存し、口径10.4cmを測る。外底面には回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は内外面とも灰色を呈する。227は一部が残存し、口径10.8cmを測る。外底面には回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。胎土には2~3mmの砂粒を若干含み、色調は内外面とも青灰色を呈する。

228は無蓋高杯で、口径16.6cmを測る。外面には2条の凸帯と櫛描波状文が施される。胎土には微細砂を少量含み、色調は内外面とも青灰色である。

229は甕で、口径16.4cmを測る。口縁端部下端には1条の凸帯を巡らす。口縁部外面には回転カキ目調整、他は回転ナデ調整を施す。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は内外面とも灰色を呈する。230は口縁部の破片で、口径16.6cmを測る。外面には2条の凸帯と2条の櫛描波状文が施される。胎土は精良で細砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は内外面とも灰色を呈する。231は口頸部の破片で、口径17.4cmを測る。口縁端部下端には1条の凸帯を巡らす。器面は回転ナデ調整で、外面下半には回転カキ目調整を加える。胎土は精良で少量の砂粒を含み、焼成はやや不良である。色調は、内外面とも灰白色を呈する。232は口縁部の破片で、口径20.8cmを測る。器面は回転ナデ調整で、口縁端部には自然釉が掛かる。胎土は精良で細砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は、

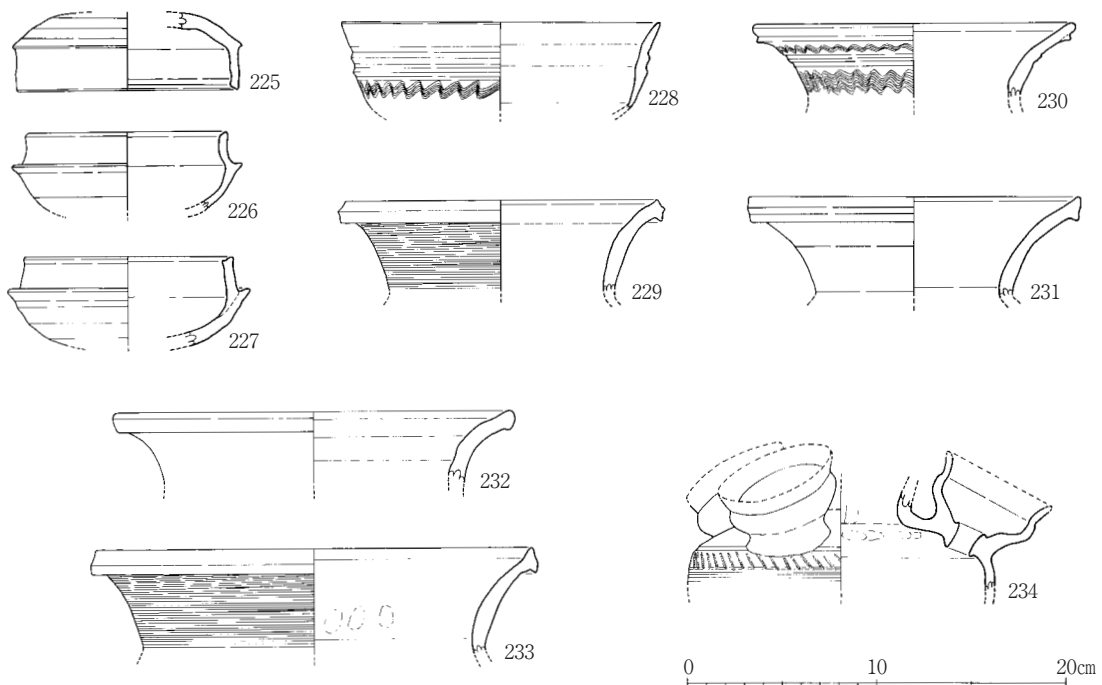


Fig.35 II区第Ⅷa層出土遺物実測図(須恵器)

内面が灰色、外面が黒灰色を呈する。233は口縁部の破片で、口径23.0cmを測る。器面は回転ナデ調整で、外面には回転カキ目調整を施す。胎土には約0.5mmの少量の砂粒と角閃石とみられる微細砂を含む。焼成はやや不良である。

234は子持ち壺で、肩部約1/4、子壺約1/3が残存し、肩部径は16.2cmを測る。肩部に1条の沈線を巡らし、回転カキ目調整を施した上に、1条の沈線とその直下にハケ状工具による刺突紋を施す。また、外面には自然釉がかかる。

第IX層出土遺物

弥生土器 (Fig.36-235~242)

235~241は甕で、235は口径11.4cmを測る。口縁部外面に約1.6cmの粘土帯を貼付し、ヨコナデ調整を施す。口縁部および肩部内外面はヨコナデ調整、頸部内面はヨコ方向のハケ調整を施す。胎土には5mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも淡赤褐色ないし褐灰色を呈する。236は口頸部の破片で、口径14.2cmを測る。口縁端部に刻み目を施す。胎土には5mm以下の砂粒を含み、色調は、内面が灰色、外面が灰褐色を呈する。237と238は口縁部の細片で、237の外面には約1.4cmの粘土帯を貼付し、ヘラ状工具による刻み目、頸部には櫛描沈線文を施す。胎土には2.5mm以下の砂粒を含み、焼成はやや不良である。色調は、内面が黄灰色、外面が灰褐色を呈する。238の口縁部にはハケ調整の後にヨコナデ調整を施す。胎土は精良で石英、角閃石の微細砂を含み、焼成は良好である。色調は内外面とも橙色を呈する。239も口縁部の細片で、外面に約1.0cmの粘土帯を貼付し、端部にハケ状工具による列点文を施す。

胎土には2mm内外の砂粒を多く含む。240・241は底部の破片である。2点とも焼成はやや不良で、色調は、内面が暗灰色、外面が灰色を呈する。240は底径5.0cmを測り、外底面にはナデ調整を施す。胎土には4mm以下の砂粒を多量に

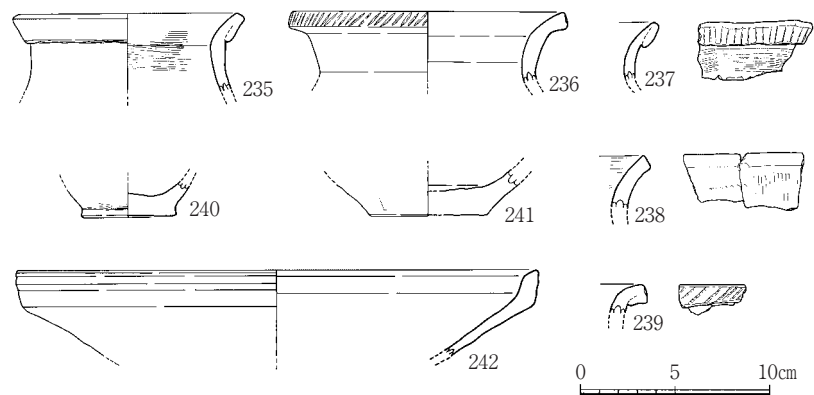


Fig.36 II区第IX層出土遺物実測図(弥生土器)

含む。241は器面にナデ調整を施し、胎土には5mm以下の砂粒を多く含む。

242は高杯で、杯部約1/4が残存し、口径27.2cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、体部外面はヘラナデ調整を施す。また、口縁部外面には黒斑が見られる。胎土には3mm以下の砂粒を多く含む、色調は、内面がにぶい黄褐色、外面がにぶい褐色を呈する。

第X層出土遺物

弥生土器 (Fig.37-243~257)

すべて甕で、243は約3/5が残存し、口径19.0cmを測る。口縁部外面には幅約2.4cmの粘土帯を貼付

する。口縁部はヨコナデ調整，他はナデ調整で，口縁部外面には指押えの痕が残る。また，外面には部分的に煤が付着する。胎土には角閃石・雲母が混じる2mm以下の砂粒を若干含み，色調は，内面が橙色，外面が褐灰色を呈する。244は口縁部の破片で，口径14.8cmを測る。内面はヨコ方向，外面はタテ方向のハケ調整を施した後にヨコナデ調整を加える。また，口縁部内面に黒斑がみられる。胎土には石英，角閃石，雲母の微細砂と赤色風化礫の小礫を含み，色調は，内面が明褐色，外面が褐灰色を呈する。245も口縁部の破片で，口径16.0cmを測る。調整は244とほぼ同じである。胎土には石英，角閃石，雲母の微細砂を含み，色調は内外面とも橙色を呈する。246は口縁部の破片で，口径17.0cmを測る。口縁端部に刻み目を施す。器面はヨコナデ調整で，頸部外面にはヨコ方向のハケ目が残る。胎土には赤色風化礫が混じる2mm以下の砂粒を含み，色調は内外面とも橙色を呈する。247も口縁部の破片で，口径17.8cmを測る。器面はヨコナデ調整を施す。胎土には7mm以下の砂粒を含み，色調は内外面とも褐灰色ないし淡桃色を呈する。248は口縁部の細片で，口縁端部外端に刻み目を施す。器面にはナデ調整を施す。胎土は精良で，色調は内外面とも橙色を呈する。249も口縁部の細片で，外面には幅約1.2cmの粘土帯を貼付し，端部に刻み目を施す。胎土には5mm以下の砂粒を多量に含み，色調は内外面とも褐灰色を呈する。250も口縁部の細片で，外面には幅約1.8cmの粘土帯を貼付する。胎土には5mm以下の円・角粒を多量に含み，色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。251は底部と胴部が残存するもので，底径5.5cmを測る。外底面はナデ調整，胴部は内外面ともヘラナデ調整を施す。胴部外面，外底面および内面下半には煤が付着する。胎土には赤色風化礫，石英，

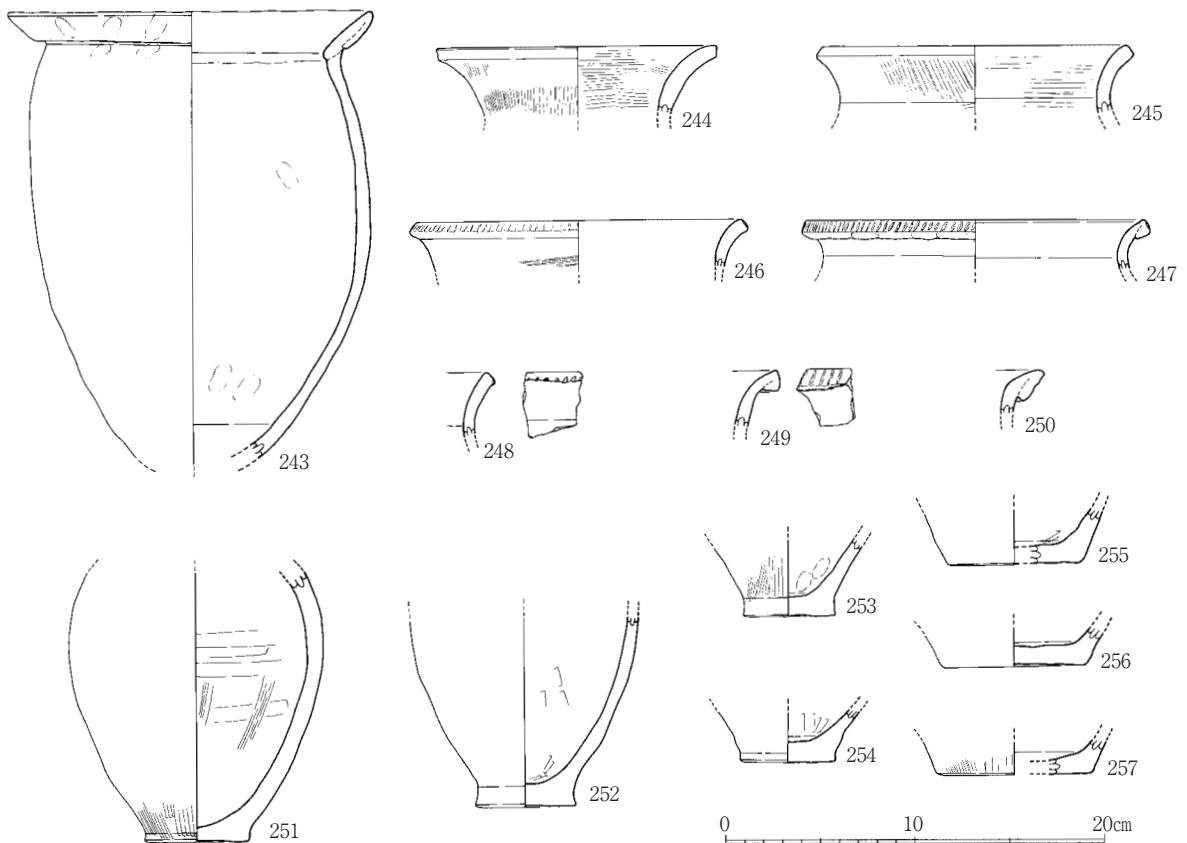


Fig.37 II区第X層出土遺物実測図(弥生土器)

角閃石、雲母が混じる5mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。252も底部と胴部が残存するもので、底径5.2cmを測る。外底面はナデ調整、胴部内面はヘラナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫、石英、角閃石、雲母が混じる6mm以下の細粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。253は底部約1/2が残存し、底径4.8cmを測る。外底面にはナデ調整を施す。胎土には石英、角閃石の微細砂を含み、色調は、内面が黒色、外面が橙色を呈する。254も底部約1/2が残存し、底径5.0cmを測る。器面にはナデ調整を施す。胎土には石英、雲母の微細砂を含み、色調は、内面が黄灰色、外面が灰黄褐色を呈する。255は底部約1/3が残存し、底径7.0cmを測る。器面は摩耗が著しく、調整は不明である。胎土には5mm以下の砂粒を多く含み、色調は、内面が灰色、外面が褐灰色を呈する。256は底部約1/2が残存し、底径7.4cmを測る。器面は摩耗が著しく、調整は不明である。胎土には5mm以下の砂粒を多量に含み、色調は、内面が褐灰色、外面が赤橙色を呈する。257は底部約1/4が残存し、底径8.2cmを測る。器面は摩耗が著しく、調整は不明である。胎土には2mm内外の砂粒を多く含み、色調は、内面が灰色、外面が褐灰色を呈する。

第XI層出土遺物

弥生土器 (Fig.38-258~262)

すべて甕であり、258は全体が復元でき、口径14.0cm、器高12.2cm、底径4.8cmを測る。口頸部はヨコナデ調整、胴上部内面はヘラナデ調整、外面はハケ調整とナデ調整を行った上で、2条の櫛描波状文を施す。胎土には赤色風化礫、石英、角閃石、雲母が混じる2~4mmの砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。259は口縁部の破片で、口径15.6cmを測る。内外面ともヨコナデ調整、口縁部内面と頸部外面には櫛描波状文を施す。口縁部には円孔が見られる。胎土には赤色風化礫、石英、角閃石、雲母が混じる5mm以下の砂粒を少量含み、色調は内外面とも橙色を呈する。260は口縁部の細片で、外面に幅約1.6cmの粘土帯を貼付し、ヨコナデ調整を施す。胎土には5mm内外の砂粒を多量に含み、色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい黄褐色を呈する。261は口頸部を欠くもので、底径5.0cm、胴径14.8cmを測る。器面にはナデ調整を施す。胎土には約5mmの砂粒を多く含み、色調は、内面が灰色、外面が褐灰色を呈する。262も口縁部を欠くもので、底径4.7cm、胴径18.4cmを測る。器面にはナデ調整を施す。胴部外面中央と内面下半には煤が付着する。胎土には8mm以下の赤色風化礫、石英、角閃石、雲母の微細砂を含み、色調は、内面が橙色、外面が橙色ないし

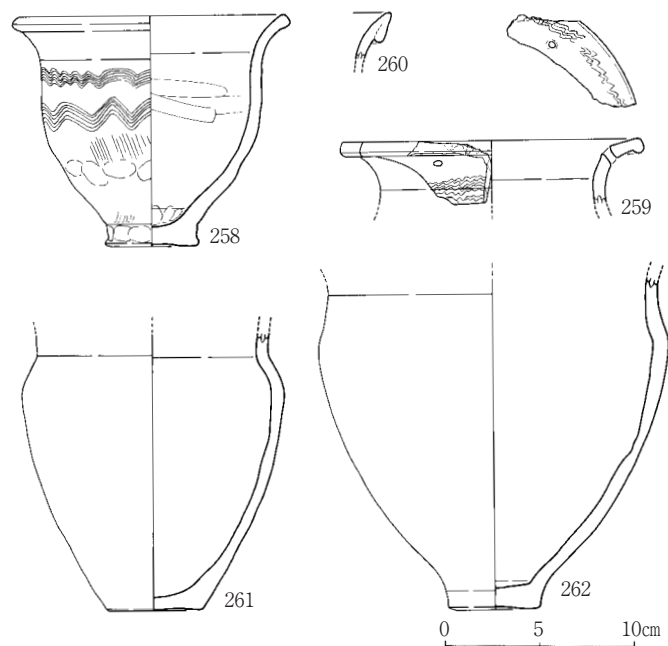


Fig.38 II区第XI層出土遺物実測図(弥生土器)

にぶい橙色を呈する。

(山本)

第三章 遺構と遺物

1. I 区

(1) 古墳時代

本調査区では、古墳時代の遺物包含層である第Ⅷa層中(標高4.05~4.75m)で、祭祀関連遺構を6基検出した。

遺構検出面の標高は東西方向では東が高く、その比高差は0.41m、南北方向では北の方が高く、その比高差は19cmを測る。破片も含めた出土量はSF-1・5・3・4・2・6の順に多く、実測点数もほぼ出土量に比例する。出土遺物は遺存状態が悪く、多くが破砕された状況を呈し、全体を復元できるものは少ない。これは、昨年度調査したⅢ-2区でも同様のことがいえる。

①祭祀関連遺構

SF-1 (付図1)

調査区の東端に位置し、標高4.28~4.74mで検出された遺物集中で、東西約8m、南北約9mの範囲から遺物がまとまって出土した。出土量とその範囲をみると今回の中では最大規模である。中でも遺物が集中するのは標高4.30~4.60mの範囲で、白玉約1,600個や多数の祭祀遺物が出土するなど器種構成からも他の遺構とは様相を異にする。この遺構は、遺物の標高、構成、集中度などからみて主体となる部分と東南隅の小ブロックの二つに分かれる。主体となる部分は検出高4.28~4.75m、東南隅の小ブロックは4.32~4.60mにあり、さらに東南の方向の調査区外に続く可能性がある。遺物の出土状態で見ると、北側は遺物の密度が低いにも関わらず、祭祀遺物が多数分布し、その範囲

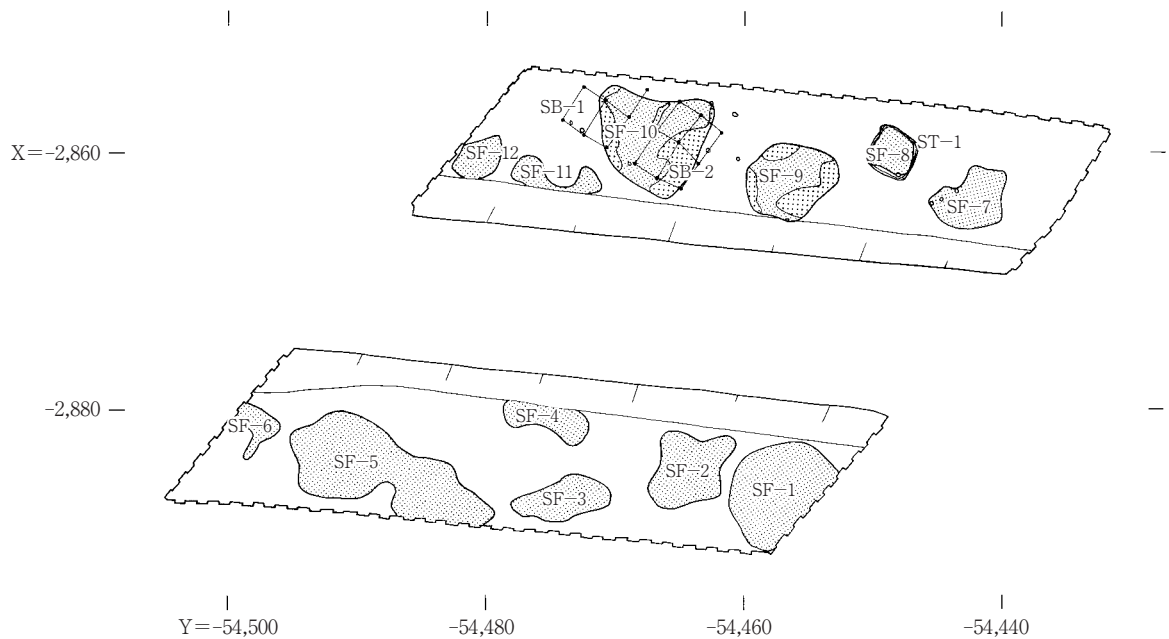


Fig.39 古墳時代遺構配置図(S=1/600)

が白玉の出土分布と概ね重なる。遺物構成は土師器、須恵器、手づくね土器、土製・石製模造品、石製品となっており祭祀関連遺構中最も多様であるが、東南隅の小ブロックからは土製模造品と石製模造品が出土していない。なお、西に隣接するSF-2出土の須恵器と同一個体が西側から検出されており、SF-1とSF-2とは一部重なっていることも考えられる。出土遺物には土師器(高杯・椀・甌・甕・壺)、須恵器(大甕・甕・高杯・器台・杯蓋・杯身)、祭祀遺物(土製勾玉・土製模造鏡・石製勾玉・石製有孔円板・管玉・白玉・石製紡錘車・手づくね土器)、石製品(砥石・凹み石・叩石・擦り石)があり、多種に互っている。なお、復元できなかったが把手付き土師器椀の把手部分1点と布留式土器の破片2点が出土している。そのうち、土師器49点(263~311)、手づくね土器7点(312~318)、須恵器14点(319~332)、土製模造品13点(333~345)、石製模造品127点(346~472)、石製品7点(473~479)の217点が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.40~42-263~311)

263・264は壺である。263は直口壺で、C類に当たる。口縁部約1/5が残存し、口径10.8cmを測る。内面にはヨコナデ調整の痕が残る。胎土には小礫を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。264は口縁部が欠損するが、胴部から頸部はほぼ残存し、胴径10.5cm、頸部径9.6cmを測る。外面にはナデ調整、内面には指ナデ調整を施す。色調は、外面が橙色ないし褐灰色、内面がにぶい橙色ないし褐灰色を呈する。

265~288は甕である。265~270は口頸部がくの字状に屈曲し、口縁がそのまま外反するA-1類である。265は約2/3が残存し、口径14.4cmを測る。外面は口縁部にヨコナデ調整、頸部から胴部にヘラナデ調整とナデ調整、内面はナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は、外面が橙色、内面がにぶい橙色ないし黄灰色を呈する。266は約1/3が残存し、口径16.6cmを測る。口縁端部下と胴部の一部にヨコナデ調整の痕が認められる。胎土には多くの大きい砂粒を含み、色調は内外面とも明褐灰色を呈する。267は約1/5が残存し、口径16.5cmを測る。胴部は張らず、器壁はやや薄い。口縁部にはヨコナデ調整、外面にはヘラナデ調整を施すが、器面は凹凸が目立つ。胎土には赤色風化砂粒を含む。色調は、外面が黄橙色、内面がにぶい橙色を呈する。268は約1/4が残存し、口径15.2cmを測る。口縁部は直線的に外上方に延びる。胴部内面は粘土紐の接合痕が明瞭に残る。胎土には砂粒を多く含む。色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい褐色を呈する。269は肩部から口縁部の一部が残存し、口径20.1cmを測る。器面は摩耗が著しく、調整は不明である。胎土には多数の砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。270も肩部から口縁部の一部が残存し、口径17.2cmを測る。器壁は比較的薄く、外面がナデ調整、内面が口縁部にヨコナデ調整、肩部にヘラナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色、内面が明褐灰色を呈する。

271~276は口頸部がくの字状に屈曲し、口縁部が外傾するA-2類である。271は口頸部の一部が残存し、口径27.6cmを測る大型の甕である。口縁部にはヨコナデ調整を施し、端部は板状工具で平坦に仕上げる。胎土は精良で、色調は、外面が橙色、内面が灰黄褐色を呈する。272は約1/3が残存し、口径15.0cmを測る。内面の一部にヘラナデ調整とナデ調整の痕が残る。胎土には赤色風化砂粒を含む。色調は内外面ともにぶい橙色ないし橙色を呈する。273は約1/6が残存し、口径15.4cmを測る。

る。口縁部にはヨコナデ調整，肩部内面にはヘラナデ調整を施す。口縁部には煤が付着する。胎土は精良で，色調は，外面が黄灰色，内面が灰黄褐色を呈する。274は肩部から口縁部の一部が残存し，口径18.1cmを測る。内外面ともナデ調整を施し，器壁は薄い。胎土は精良で，色調は内外面とも橙色を呈する。275は約1/6が残存し，口径16.8cmを測る。調整は摩耗のため不明で，胎土には小礫と砂粒を多く含み，色調は，外面が橙色，内面がにぶい褐色を呈する。276は肩部から口縁部の一部が残存し，口径20.6cmを測る。口縁部はヨコナデ調整，他は内外面ともナデ調整を施す。胎土は砂粒をやや多く含み，色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

277~281は口頸部が外反もしくは直線気味に立ち上がり，そのまま外反するB-1類である。277は胴部に2条のヘラ描き沈線が残るもので，器壁は薄く，器面は摩耗する。胎土には赤色風化砂粒を含む。色調は，外面が浅黄橙色，内面がにぶい橙色を呈する。278は約1/2が残存し，口径16.0cmを測る。口縁部はヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。胎土は精良で，色調は内外面とも明赤褐色を呈する。279は約1/4が残存し，口径13.0cmを測る小型の甕である。器面は摩耗するが，指押えの痕が残る。胎土は精良で，色調は，外面が橙色，内面がにぶい橙色を呈する。280は肩部から口縁部の一部が残存し，口径16.2cmを測る。胴部は大きく張る。外面はヘラナデ調整の後にナデ調整を

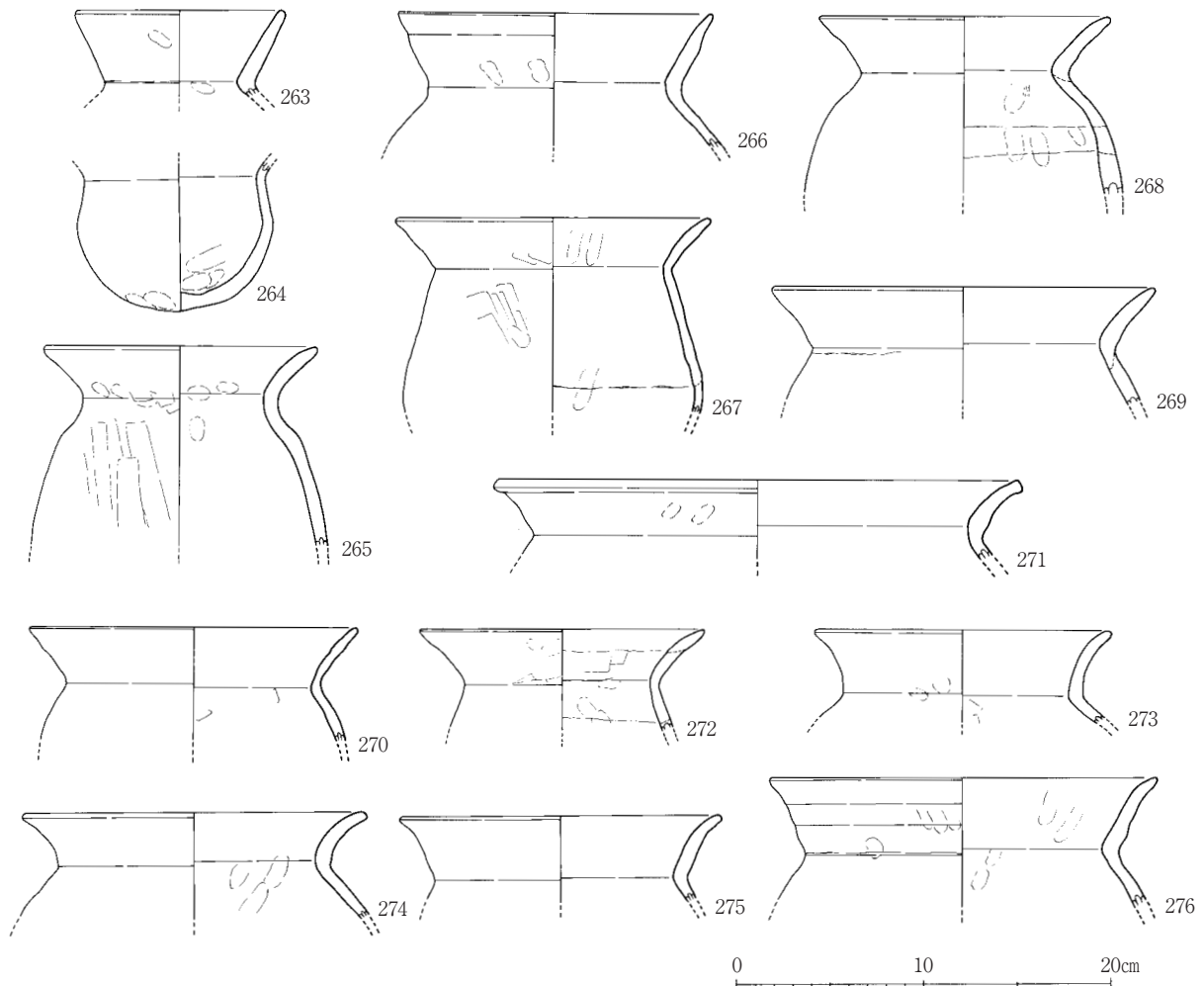


Fig.40 SF-1出土遺物実測図1

施し、内面にはヘラナデ調整の痕が顕著に残る。胎土は精良で、色調は内外面とも赤褐色を呈する。281は約1/4が残存し、口径15.9cmを測る。器面は摩耗するが、肩部内面には指押えの痕が残る。胎土には砂粒を多く含み、色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。

282～286は口頸部が外反もしくは直線気味に立ち上がり、口縁部が外傾するB-2類である。282は約2/5が残存し、口径18.4cmを測る。内外面とも粘土紐接合部には指押え後に指ナデ調整、口縁部外面にはヘラナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。283は約1/4が残存し、口径18.8cmを測る。胴部が張り、内外面ともヘラナデ調整とナデ調整を施すが、指押えによる器面の凹凸が認められる。胎土は精良で、色調は、外面が橙色、内面が橙色ないしにぶい黄褐色を呈する。284は約1/5が残存し、口径15.6cmを測る。胴部は張らず、口頸部は比較的緩やかに上がる。色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。285は約1/4が残存し、口径15.4cmを測る。器面は摩耗するが、内面の一部にハケ目がわずかに認められる。胎土には砂粒と小礫を非常に多く含み、色調は、外面がにぶい橙色、内面が明褐灰色を呈する。286は約1/5が残存し、口径18.6cmを測る。内外面ともナデ調整を施し、口縁端部は強いヨコナデ調整によりやや外傾する。胎土は精良で、色調は、外面が橙色、内面が灰黄褐色を呈する。

287は口頸部が緩やかに外反するC類である。口縁部の一部が残存し、口径16.6cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整を施し、端部は内傾する面をなす。色調は、外面が橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。

288は底部から胴部が残存するもので、胴径14.0cmを測る。胴部は底部から内湾して立ち上がり、内外面ともナデ調整を施す。胎土には赤色風化砂粒を含み、色調は、外面が黄灰色ないし灰白色、内面がにぶい橙色を呈する。

289は底部の残存する甑である。SF-2から同一個体が出土する。底部には15個の円孔が確認でき、孔径5.5～8.5mmを測り、内底面から穿孔する。外面にはヘラナデ調整とナデ調整、内面にはナデ調整を施す。底部外面の片方のみに煤が厚く付着する。色調は、外面がにぶい橙色ないし暗灰色、内面がにぶい橙色ないし灰色を呈する。

290～297は鉢である。290～295は椀状を呈し、底部が丸底のB-1類である。290は口径13.1cm、器高5.3cmを測る小型の鉢である。内外面ともナデ調整、内底面には放射状にヘラナデ調整を施す。胎土には赤色風化砂粒を含み、色調は、外面が橙色ないしにぶい黄橙色、内面が橙色を呈する。291は大半が欠損するが、口径12.2cmを測る。口縁部は底部から内湾して上がる。色調は、外面が褐灰色、内面がにぶい橙色を呈する。292は約1/3が残存し、口径13.1cm、器高6.2cmを測る。口縁部は底部から内湾して上がる。器面はナデ調整を施す。内面の一部に薄く煤が付着する。胎土には小礫を含み、色調は、外面がにぶい黄橙色、内面がにぶい黄橙色ないし黄灰色を呈する。293は約2/3が残存し、口径10.5cm、器高5.4cmを測る。器面は摩耗するが、外底面に指押えの痕が残る。器壁はやや薄く、底部の一部に煤が付着する。胎土には砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。294はほぼ完形で、口径11.8cm、器高6.2cmを測る。底部は深く、口縁部は底部から内湾して上がる。口縁部にはヨコナデ調整、内底面にナデ調整を加える。底部を除く外面約1/2に厚く煤が付着する。胎土には赤色風化砂粒を含み、色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。295は一

部が残存し、口径12.5cmを測る。器面は摩耗するが、平滑である。色調は内外面とも黄灰色ないし橙色を呈する。

296は椀状をなし、底部に脚台が付くB-3類である。底部約1/2が残存し、底径6.2cmを測る。外面は指押えの後にヘラナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

297は皿状をなし、器高指数21~34のC類である。大半が欠損するが、口径13.2cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整、内面は一部ヘラナデ調整の痕が認められる。胎土には赤色風化砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

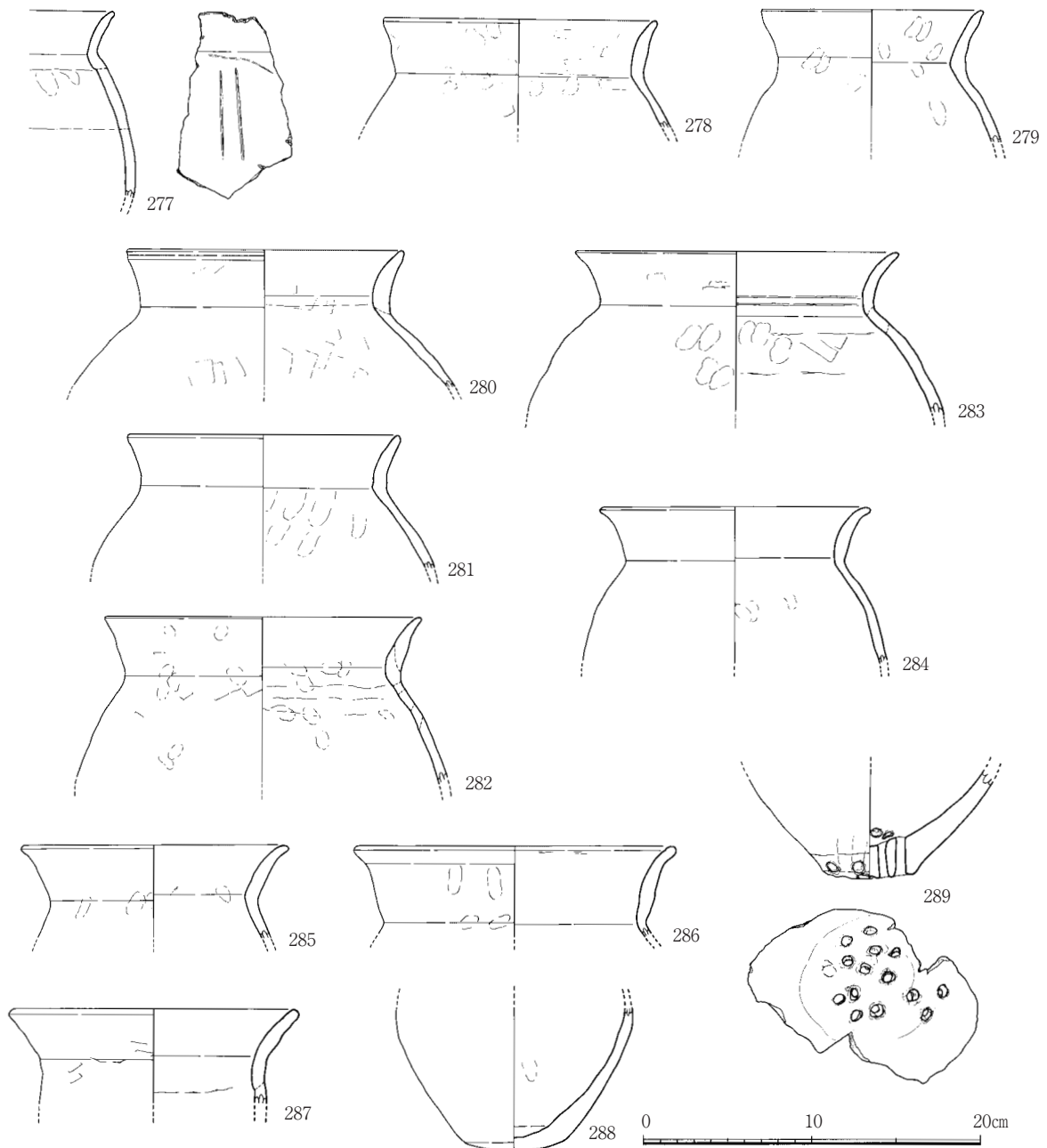


Fig.41 SF-1出土遺物実測図2

298～311は高杯である。298は全体が復元できるもので、杯部は緩やかな稜を持ち、裾部が水平なB-1類である。杯部約3/5、脚柱部約1/2が残存し、口径15.6cm、器高12.3cm、底径11.1cmを測る。脚台部は中位で膨らみを持つ。口縁部にはヨコナデ調整、内面にはナデ調整、裾部にはヨコナデ調整を施す。脚台部内面はヘラ削り調整の後にナデ調整を施す。胎土には赤色風化砂粒を含み、色調は、外面が橙色、内面が暗灰黄色ないし灰色を呈する。

299～305は杯部が残存するもので、杯部の形態で3類に分かれる。299～301は杯部に明瞭な稜を持つA類である。299は約1/4が残存し、口径16.4cmを測る。口縁部はやや外反し、ヨコナデ調整を施す。外面はナデ調整、内面は摩耗のため不明である。胎土には砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。300は約2/3が残存し、口径18.8cmを測る。杯高が比較的高く、接合部の稜線は段状をなし、口縁部はやや外反する。口縁部はヨコナデ調整を施す。内底面に煤が付着する。胎土には砂粒を多く含み、色調は、外面が灰褐色ないしにぶい橙色、内面が灰色ないしにぶい橙色を呈する。301は約1/4が残存し、口径18.2cmを測る。口縁部は直線的に外上方に延び、端部は内傾する平面をなす。器面は丁寧なヨコナデ調整により平滑で、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

302～305は杯部にわずかな稜線を有するB類である。302は約3/4が残存し、口径17.4cmを測る。口縁部は直線的に外上方に延び、端部を丸く仕上げる。器面は摩耗するが平滑である。内底面には煤が付着する。胎土には赤色風化砂粒を含み、色調は、外面がにぶい橙色、内面が灰白色を呈する。303は口径16.3cmを測る。杯部の稜は形骸化し、わずかにその痕跡を留める。口縁部はヨコナデ調整、内底面には指ナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含む。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。304は口径17.0cmを測り、底部が平坦で、浅いものである。器面は摩耗するが平滑である。胎土には砂粒と赤色風化砂粒を含む。色調は内外面とも橙色を呈する。305は約1/5が残存し、口径21.4cmを測る。口縁部は外反し、端部は内傾する平面をなす。口縁部にはヨコナデ調整を施す。色調は内外面とも橙色ないしにぶい黄橙色を呈する。

306～311は脚台部が残存するもので、形態により3類に分かれる。306～310は脚柱部から裾部が屈曲するもので、2類に当たる。306は裾部を一部欠損するが、脚柱部はほぼ残存し、底径11.2cmを測る。脚台部が低く、器面はヘラナデ調整の後にナデ調整を施し、裾部内面にはヨコハケ調整の痕が認められる。脚柱部内面はヘラ削り調整の後にヨコナデ調整を施す。色調は、外面が橙色ないし灰色、内面がにぶい橙色を呈する。307は一部が残存し、底径10.5cmを測る。脚柱部内面にはしぼり目が残る。胎土には赤色風化砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。308は裾部を欠損するもので、器面はナデ調整、脚柱部内面はヘラ削り調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。309は裾部の一部を欠損するもので、底径11.9cmを測る。裾部内面はナデ調整、脚柱部内面はヘラ削り調整を施す。色調は、外面がにぶい黄橙色、内面が浅黄橙色を呈する。310は一部が残存し、底径11.6cmを測る。外面にはヘラナデ調整とナデ調整、裾部内面にはヨコナデ調整、脚柱部内面にはヘラ削り調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。

311は明瞭な裾部を持たないもので、3類に当たる。裾部の一部が残存し、底径12.4cmを測る。器面は丁寧なナデ調整を施し、内面は上方にしぼり目が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を

呈する。

手づくね土器 (Fig.43-312~318)

312・313は器形を模倣したとみられるA類である。312は壺を模倣したA-1類で、口縁部を欠損するものの、約1/2が残存し、胴径7.0cmを測る。内外面ともヘラナデ調整とナデ調整を施し、底部に黒斑が認められる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。313はほぼ完存し、鉢を模倣したA-3類である。口径6.8cm、器高5.4cmを測る。内外面とも指押え後に丁寧な指ナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は、外面がにぶい橙色、内面が明褐色を呈する。

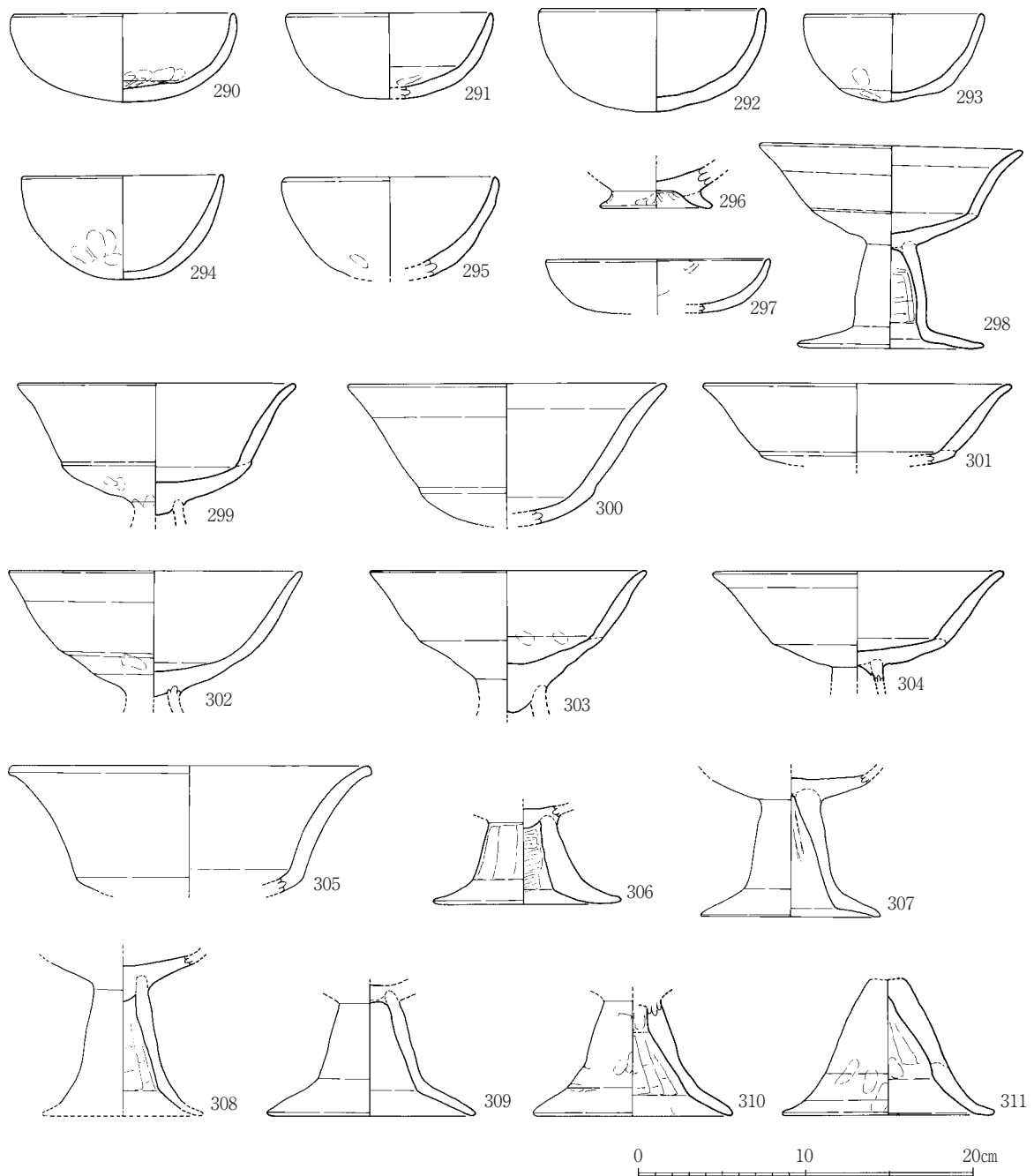


Fig.42 SF-1出土遺物実測図3

314～318は粗雑な作りのB類である。314は口縁部約1/2が残存し、口径5.6cm、器高4.5cm、底径2.6cmを測る。体部から口縁部の器壁が非常に薄い。内外面とも成形の後に指ナデ調整を施す。胎土は精良

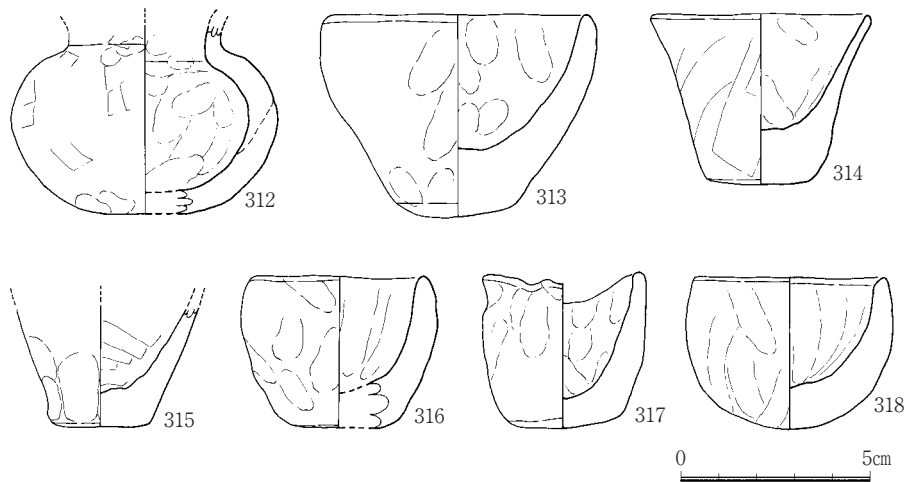


Fig.43 SF-1出土遺物実測図4

で、色調は内外面とも橙色ないし褐灰色を呈する。315は体部以下が残存するもので、底径2.6cmを測る。体部外面はナデ調整、底部はヘラナデ調整、内面は放射状に連続してヘラナデ調整を施す。色調は内外面とも灰黄色を呈する。316は約1/3が残存し、口径4.4cm、器高4.0cm、底径2.5cmを測る。外面には亀裂が残るが、内面は指ナデ調整により平滑である。外面一面に煤が付着する。色調は、外面が黄灰色、内面がにぶい黄橙色を呈する。317はほぼ完存し、口径4.1cm、器高4.1cm、底径2.6cmを測る。口縁端部を連続して摘み上げて成形し、内外面とも指押えの後に指ナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は内外面とも橙色ないし灰黄褐色を呈する。318は口縁部約1/2が欠損するもので、口径5.0cm、器高4.0cmを測る。内外面とも指ナデ調整を施し、内面は放射状に連続して施す。胎土は精良で、色調は、外面がにぶい橙色ないし黒褐色、内面が灰黄褐色を呈する。

須恵器 (Fig.44-319~332)

319～323は杯蓋である。319は完形で、口径13.4cm、器高4.9cmを測る。天井部は丸みを有し、稜は小さな断面三角形をなす。天井部外面約2/3に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。口縁部はやや開き気味に下り、端部は内傾する平面をなす。色調は内外面とも灰色を呈する。320は天井部中央を欠損するが、約2/5が残存し、器高4.6cm、底径12.8cm、稜径12.4cm、口縁部高2.5cmを測る。天井部は丸みを有し、稜は断面三角形をなす。天井部外面約2/3に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。口縁部はやや開き気味に下り、端部は内傾する浅い凹面をなす。色調は、外面が青灰色、内面が暗青灰色を呈する。321は口縁部の一部を欠くもので、口径12.4cm、器高4.4cm、口縁部高2.4cm、稜径12.0cmを測る。天井部はやや平坦で、口縁部はやや開き気味に下り、端部は丸く収まる。天井部約4/5に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。色調は、外面が褐灰色、内面が灰褐色を呈する。322は口縁部約2/3が残存し、口径12.4cm、器高4.9cmを測る。口縁高は器高の1/2以下で、天井部は丸みを有し、稜は段状をなす。口縁部はほぼ真下に下り、端部は浅い凹面をなす。天井部外面約2/3に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。天井部内面中央にタタキ目が残る。色調は内外面とも灰色を呈する。323は口縁部の一部が欠損するもので、口径12.0cm、器高4.2cmを測る。天井部は平坦で、口縁部は開き気味に下り、端部は丸く収まる。天井部外面約4/5に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整で、天井部内面にはナデ調整を加える。色調は

内外面とも灰色を呈する。

324～328は杯身である。324は約1/2が残存し、口径10.8cm、器高4.9cm、底径2.2cm、立ち上がり高1.7cm、受部径12.8cmを測る。立ち上がりは内傾して延び、端部を丸く仕上げる。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも褐灰色を呈する。325はほぼ完存し、口径11.0cm、器高5.2cmを測る。立ち上がりは内傾し、器高の1/2以下で、端部は外傾する凹面をなす。底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。底部内面に粘土紐巻き上げ痕が残る。色調は、外面が灰褐色、内面にぶい赤褐色を呈する。326は約2/3が残存し、口径9.8cm、器高4.6cmを測る。立ち上がりは内傾し、端部は段をなす。受部は斜め上方を向き、底部は丸みを有する。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色を呈する。327は口縁部の一部を欠損するもので、口径は10.0cm、器高5.2cmを測る。立ち上がりは器高の1/2以下で内傾し、端部は丸い。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。色調は、

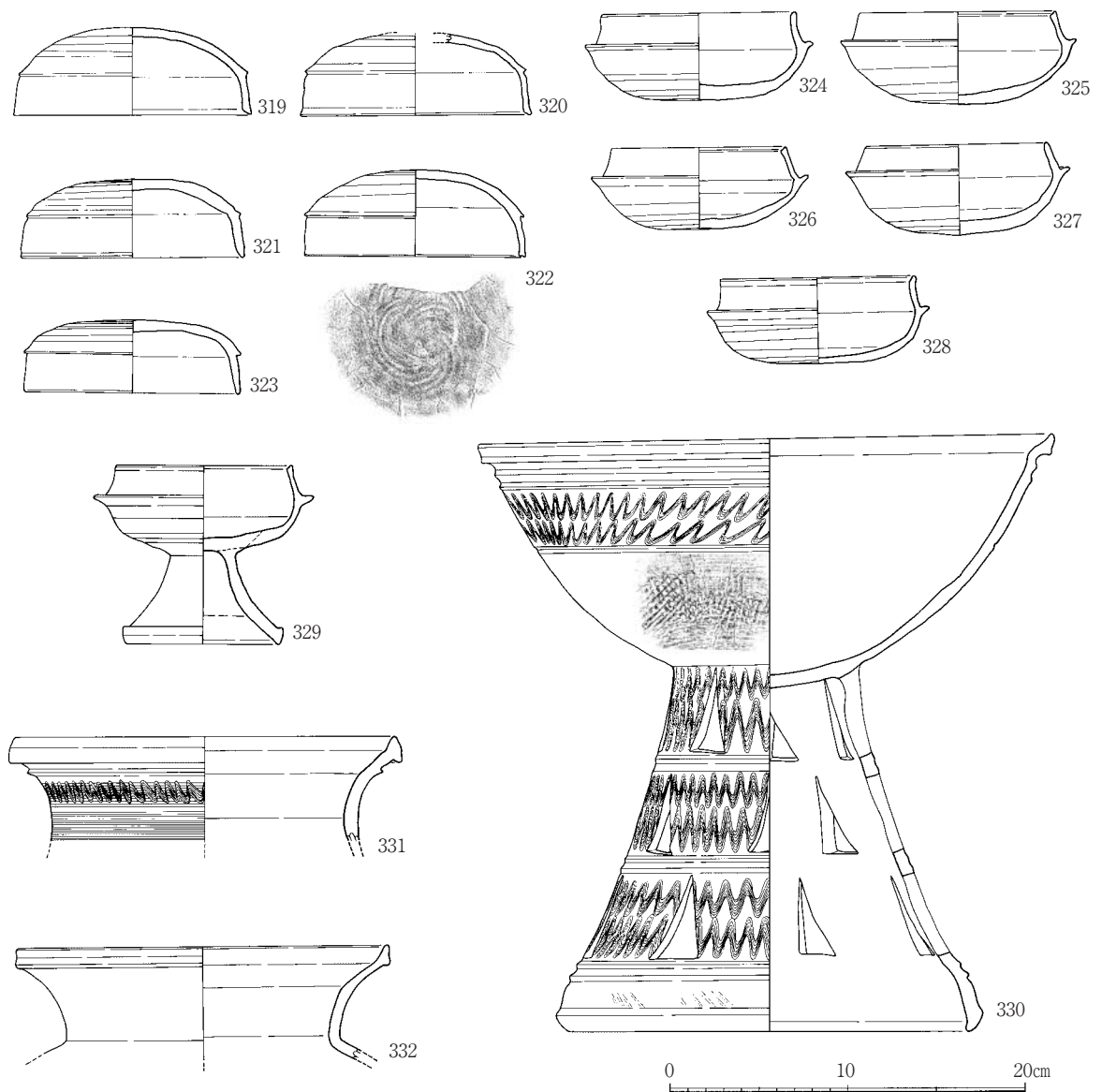


Fig.44 SF-1出土遺物実測図5

外面が暗青灰色，内面が暗茶灰色を呈する。328は約1/2が残存し，口径10.8cm，器高4.9cmを測る。立ち上がりは内傾し，端部は外傾する凹面をなす。底部は比較的深く，外面約4/5に回転ヘラ削り調整，他は回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色を呈する。

329は高杯である。脚台部が完存するもので，口径9.8cm，器高10.1cm，底径8.5cmを測る。立ち上がりは内傾し，端部は外傾する平面をなす。受部は水平に延びる。底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整，他は回転ナデ調整を施す。杯部内面は粘土紐巻き上げの痕が残る。色調は内外面とも灰色を呈する。

330はSF-2出土の器台(489)と合わせて，具同中山遺跡群初の器台である。SF-2からも同一個体を検出している。約1/2が残存し，口径32.1cm，器高34.8cm，底径22.5cmを測る。口縁部外面には2条の凸帯と1条の凹線の間に2条の櫛描波状文，脚柱部は2条単位の凸帯によって三段に分かれ，各段に2条の櫛描波状文と三角形の透し穴6個を施す。器面は回転ナデ調整で，杯部外面にはタタキ目が残る。色調は内外面とも灰色を呈する。

331・332は甕である。331は口縁部の一部が残存し，口径21.4cmを測る。口縁部外面には1条の凸帯を巡らし，その下方に回転カキ目調整の後1条の櫛描波状文を施す。他は回転ナデ調整である。色調は，外面が灰褐色，内面が灰色を呈する。332は口頸部約2/5が残存し，口径20.8cmを測る。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも青灰色を呈する。

土製模造品 (Fig.45・46-333~345)

333~337は土製勾玉で，333~336は円孔が側面から穿孔されたA類である。333は完形で，全長5.7cm，全幅1.9cm，全厚1.8cm，孔径3.5mmを測る。腹部には粘土皺が残る，ナデ調整により頭部を平坦に，尻部を尖り気味に仕上げる。胎土は精良で，色調はにぶい褐色ないし黄灰色を呈する。334も完形で，全長4.9cm，全幅1.6cm，全厚1.6cm，孔径2.5mmを測る。腹部が強く屈曲し，ナデ調整により頭部を平坦に，尻部を丸く仕上げる。胎土は精良で，色調は灰黄褐色ないし暗灰色を呈する。335は尻部先端が欠損するもので，全幅1.3cm，全厚1.3cm，孔径2.5mmを測る小型でやや細身のものである。丁寧なナデ調整により頭部を平坦に仕上げる。胎土は精良で，色調は灰黄褐色ないし褐灰色を呈する。336は頭部を欠損するもので，全幅1.7cm，全厚1.8cmを測る。

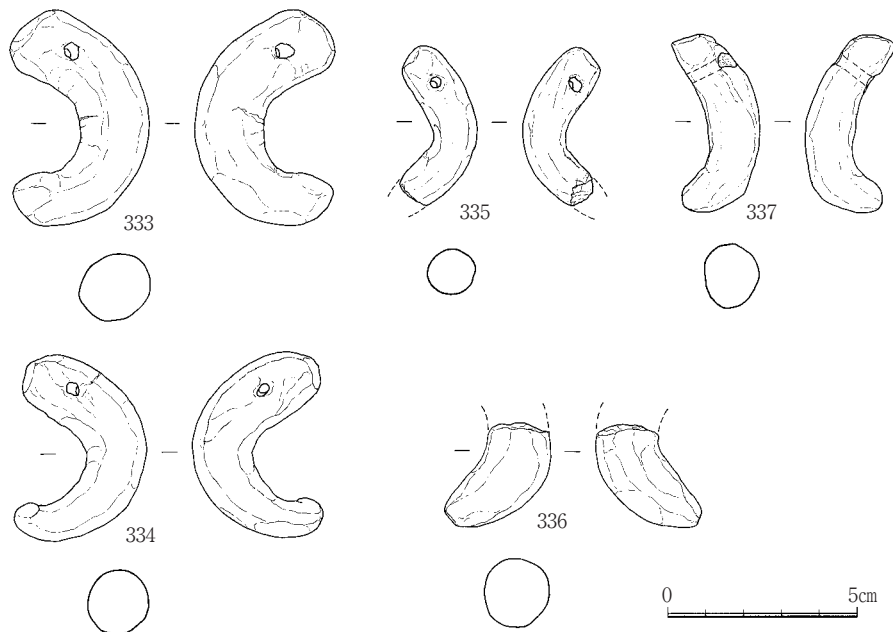


Fig.45 SF-1出土遺物実測図6

表面はナデ調整を施し、尻部先端に黒斑が残る。胎土は精良で、色調は黄灰色を呈する。

337は完形で、円孔が裏面から穿たれるB類である。当調査区では他に類例がない。腹部の屈曲は緩やかで、ナデ調整により頭部を平坦に、尻部を尖り気味に仕上げる。胎土は精良で、色調はにぶい褐色を呈する。

338～345は土製模造鏡である。338～344は鈕を両側から摘み上げたもので、すべて有孔のA-1類である。338は鈕の上部がわずかに欠損するが、ほぼ完形で、全長5.4cm、全幅5.3cm、全厚1.5cmを測る。鏡面には黒斑がみられ、一部に煤が付着する。胎土は精良で、色調は橙色ないし灰黄褐色を呈する。339は完形で、全長6.2cm、全幅5.4cm、全厚2.7cmを測る。鈕は比較的高く摘み上げられ、両面とも丁寧なナデ調整により、表面は平滑である。鏡面は反りが少なく、平坦に仕上がる。胎土は精良で、色調は灰色ないし褐灰色を呈する。340は縁辺部の一部を欠損する以外ほぼ完形で、全長6.3cm、全幅6.3cm、全厚2.0cmを測る。鏡面にはナデ調整を施すが、指押えの痕跡が残る。胎土は精良で、色調は橙色ないし黄灰色である。341は一部を欠損するもので、全長5.9cm、全幅5.6cm、全厚2.5cmを測る。丁寧なナデ調整を施し、縁辺を薄く、鏡面を平坦に仕上げる。胎土は精良で、色調は灰黄褐色ないし灰色を呈する。342は鈕のごく一部が欠損するもので、全長6.0cm、全幅5.5cm、全厚2.7cmを測る。丁寧なナデ調整を施し、鏡面は平滑である。胎土は精良で、色調は灰黄褐色ないし橙色を呈する。343は完形で、全長6.8cm、全幅6.3cm、全厚2.9cmを測る。鏡面の反りはなく、丁寧なナデ調整により平滑である。縁辺に一部黒斑が認められる。胎土は精良で、色調は橙色を呈する。344

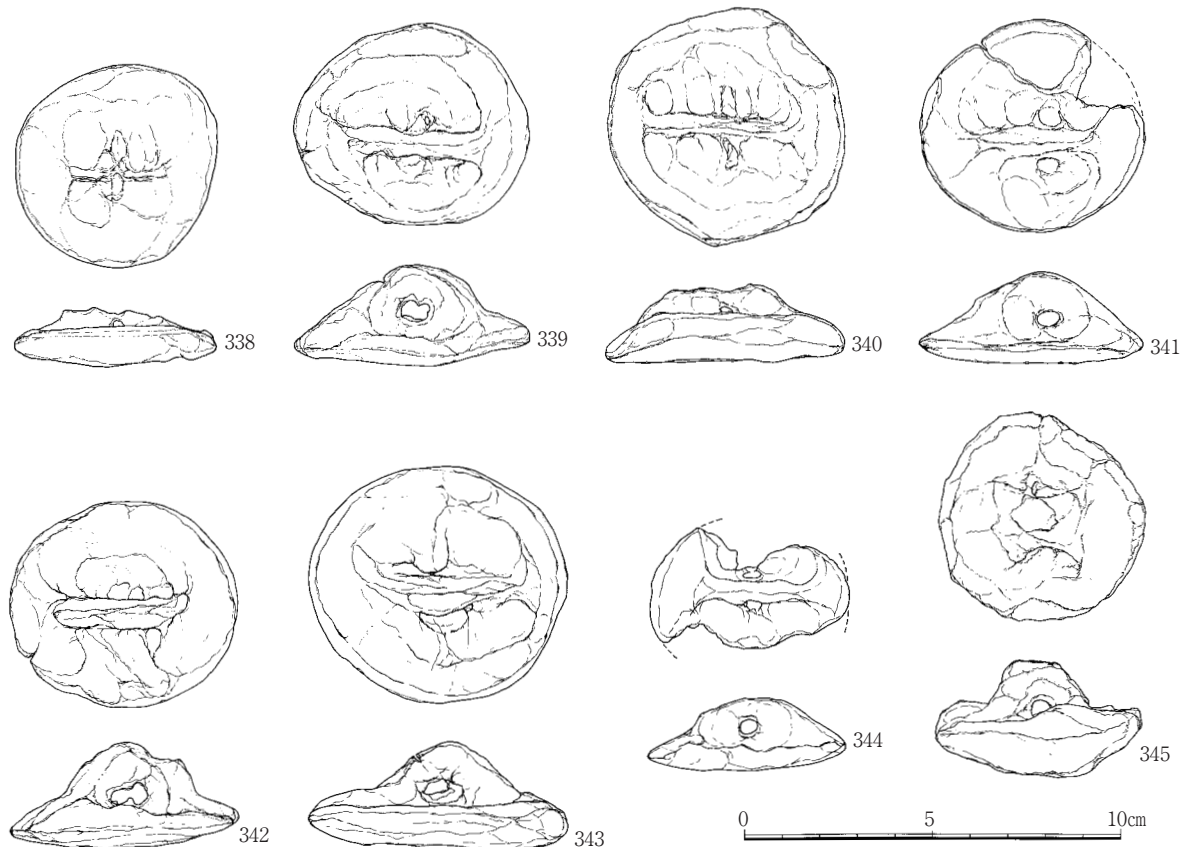


Fig.46 SF-1出土遺物実測図7

は鈕を残して縁辺部2カ所が欠損するもので、全幅5.3cm、全厚1.9cmを測る。鏡面は丁寧なナデ調整を施し、平坦に仕上がる。色調は橙色ないし灰色を呈する。

345は鈕が柱状をなすB-1類で、周縁の一部と鈕上端部を欠損する。全長5.5cm、全幅5.5cm、全厚3.1cmを測る。両面ともに凹凸がみられ、左右の縁を押し上げて鏡面を半球状に成形する。ナデ調整を施すが仕上がりは粗雑感がある。また、鏡面の一部に剥離痕が認められる。胎土は精良で、色調は黒褐色ないし橙色を呈する。

石製模造品 (Fig.47・48-346~472)

すべて滑石製である。

346は勾玉で、ほぼ完形で、全長2.5cm、全幅2.2cm、全厚4mmを測る。両面とも成形段階での切削を施した際の擦痕が顕著に残る。色調は黒青色を呈する。

347は剣形とみられるもので、全長2.3cm、全幅1.6cm、全厚3mmを測る。上部の一辺を除き、下部、側面とも剥離部分が多い。残存部には擦痕が認められる。色調は緑青色を呈する。

348~351は有孔円板で、348は正円形で穿孔位置が中央に近接するA-1類である。残存長2.3cm、残存幅2.3cm、残存厚0.4cmを測る。裏面には片状節理がみられ、周縁部は数カ所欠損する。側縁残存部には細かい擦痕が認められる。色調は緑青色を呈する。349は正円形で穿孔位置が両側縁に偏するA-2類である。片面約1/2が剥離する以外ほぼ残存し、全長2.8cm、全幅2.8cm、全厚0.5cmを測る。擦痕は片面が中軸に対して平行、もう一面が垂直に残る。側面には垂直方向の擦痕が認められる。色調は緑青色を呈する。350は楕円形で穿孔位置が両側縁に偏するB-2類である。一部欠損するがほぼ完存する。両面はよく研磨され、平滑である。色調は淡緑青色を呈する。

351は隅丸方形ではないかとみられるもので、穿孔位置が両側縁に偏するC-2類である。約2/5が残存し、全厚0.4cmを測る。色調は淡緑青色を呈するが、両面とも酸化鉄の付着がみられる。

352は紡錘車で約3/4が残存し、直径5.4cm、全厚1.9cm、孔径0.6cmを測る。上面・底面とも正円形で2:3の比率をなす。上面は擦痕が不明なほどよく研磨され、平滑である。底面は完全な平坦面を

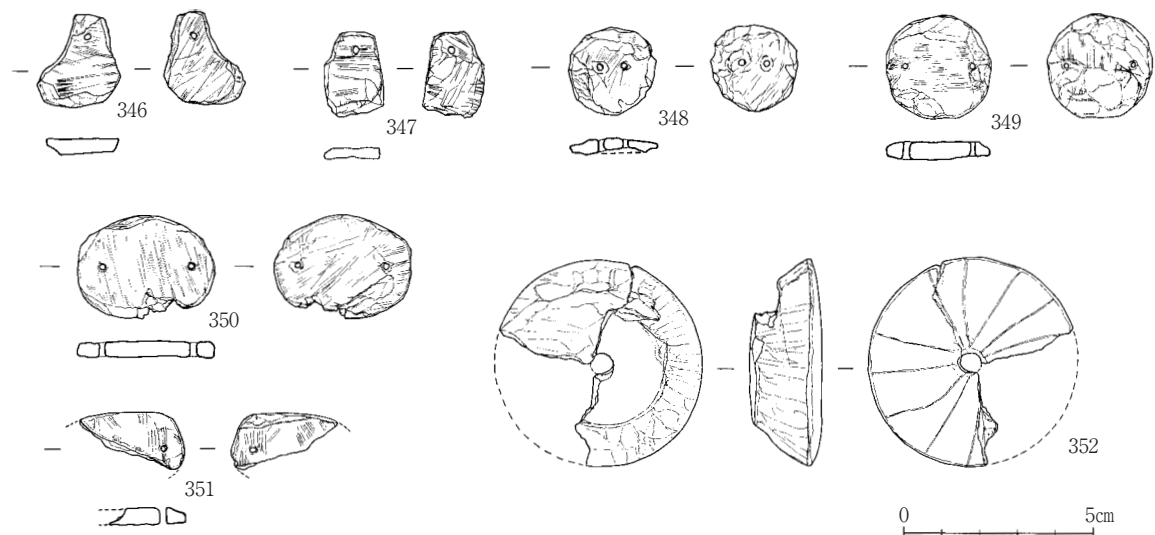


Fig.47 SF-1出土遺物実測図8

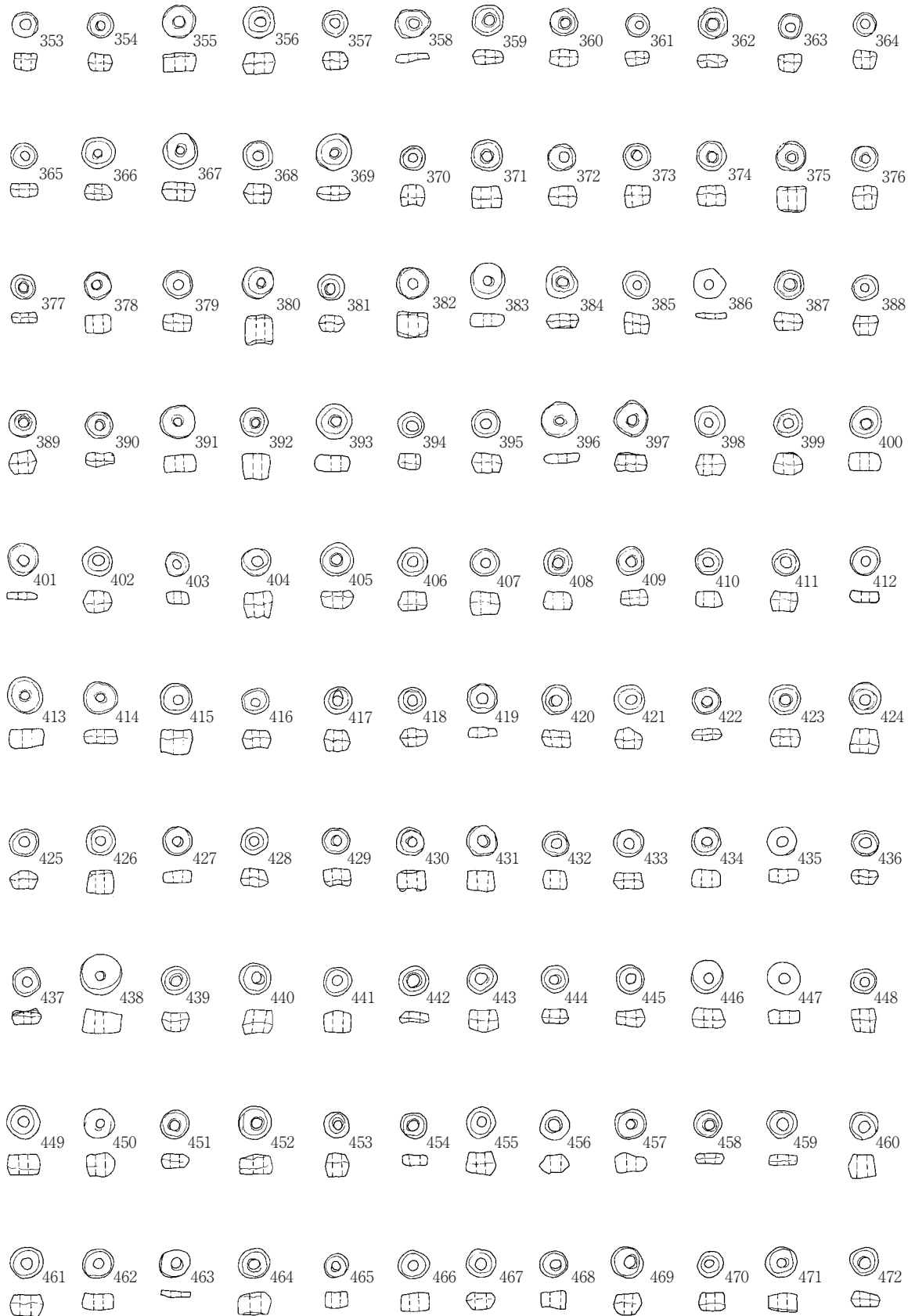


Fig.48 SF-1出土遺物実測図9(353~472は原寸)

Tab.1 白玉計測表1

番号	出土地点	直径	全厚	孔径	番号	出土地点	直径	全厚	孔径
112	第Ⅷa層	0.41	0.29	0.16	389	SF-1	0.50	0.40	0.20
113	〃	0.49	0.25	0.20	390	〃	0.48	0.24	0.15
114	〃	0.49	(0.23)	0.19	391	〃	0.58	0.29	0.15
115	〃	0.50	0.22	0.20	392	〃	0.50	0.45	0.15
353	SF-1	0.41	0.30	0.19	393	〃	0.59	0.27	0.15
354	〃	0.41	0.28	0.18	394	〃	0.41	0.27	0.20
355	〃	0.51	0.29	0.16	395	〃	0.50	0.35	0.19
356	〃	0.52	0.40	0.19	396	〃	0.59	0.15	0.11
357	〃	0.50	0.30	0.20	397	〃	0.55	0.30	0.18
358	〃	0.50	0.12	0.16	398	〃	0.51	0.38	0.19
359	〃	0.55	0.24	0.18	399	〃	0.49	0.34	0.20
360	〃	0.49	0.31	0.20	400	〃	0.53	0.28	0.18
361	〃	0.40	0.24	0.13	401	〃	0.50	0.11	0.15
362	〃	0.50	0.25	0.20	402	〃	0.50	0.34	0.19
363	〃	0.41	0.30	0.19	403	〃	0.40	0.20	0.13
364	〃	0.40	0.30	0.15	404	〃	0.50	0.43	0.20
365	〃	0.48	0.21	0.18	405	〃	0.56	0.27	0.17
366	〃	0.52	0.24	0.12	406	〃	0.50	0.30	0.20
367	〃	0.55	0.30	0.12	407	〃	0.50	0.40	0.20
368	〃	0.50	0.35	0.19	408	〃	0.50	0.30	0.20
369	〃	0.59	0.25	0.15	409	〃	0.48	0.25	0.19
370	〃	0.42	0.36	0.19	410	〃	0.45	0.26	0.20
371	〃	0.53	0.39	0.20	411	〃	0.48	0.31	0.19
372	〃	0.50	0.33	0.17	412	〃	0.50	0.20	0.18
373	〃	0.45	0.38	0.19	413	〃	0.59	0.30	0.18
374	〃	0.50	0.35	0.18	414	〃	0.58	0.21	0.11
375	〃	0.50	0.42	0.15	415	〃	0.51	0.42	0.16
376	〃	0.45	0.39	0.15	416	〃	0.46	0.34	0.19
377	〃	0.40	0.20	0.17	417	〃	0.46	0.35	0.17
378	〃	0.45	0.29	0.15	418	〃	0.45	0.30	0.19
379	〃	0.49	0.30	0.19	419	〃	0.49	0.20	0.19
380	〃	0.50	0.50	0.16	420	〃	0.51	0.31	0.20
381	〃	0.47	0.30	0.20	421	〃	0.51	0.36	0.19
382	〃	0.52	0.40	0.18	422	〃	0.50	0.20	0.18
383	〃	0.58	0.22	0.15	423	〃	0.50	0.30	0.17
384	〃	0.52	0.24	0.19	424	〃	0.52	0.40	0.25
385	〃	0.45	0.40	0.18	425	〃	0.50	0.30	0.19
386	〃	0.50	0.10	0.18	426	〃	0.50	0.40	0.18
387	〃	0.51	0.30	0.20	427	〃	0.50	0.25	0.17
388	〃	0.46	0.32	0.16	428	〃	0.46	0.33	0.16

- 註 1. 番号は遺物番号を示し、本文、挿図、図版の番号と同じである。
 2. 直径、全厚、孔径の単位はcmである。
 3. 計測数値の中で()表示のものは残存長を示す。

Tab.2 白玉計測表2

番号	出土地点	直径	全厚	孔径	番号	出土地点	直径	全厚	孔径
429	SF-1	0.48	0.31	0.18	469	SF-1	0.51	0.39	0.18
430	〃	0.50	0.36	0.16	470	〃	0.43	0.31	0.16
431	〃	0.51	0.31	0.18	471	〃	0.51	0.34	0.18
432	〃	0.46	0.31	0.20	472	〃	0.50	0.29	0.20
433	〃	0.50	0.28	0.17	496	SF-2	0.55	(0.30)	0.21
434	〃	0.50	0.29	0.18	497	〃	0.49	(0.20)	0.20
435	〃	0.50	0.23	0.18	498	〃	0.42	0.11	0.18
436	〃	0.47	0.27	0.20	499	〃	0.48	(0.30)	0.18
437	〃	0.50	0.23	0.18	500	〃	0.45	0.24	0.19
438	〃	0.70	0.40	0.18	501	〃	0.44	0.47	0.17
439	〃	0.50	0.33	0.20	502	〃	0.47	0.24	0.12
440	〃	0.51	0.45	0.24	503	〃	0.45	(0.35)	0.14
441	〃	0.50	0.39	0.20	504	〃	0.42	0.19	0.14
442	〃	0.50	0.20	0.20	505	〃	0.50	(0.20)	0.20
443	〃	0.50	0.38	0.19	506	〃	0.45	0.25	0.15
444	〃	0.45	0.24	0.19	507	〃	0.42	(0.30)	0.19
445	〃	0.48	0.30	0.19	508	〃	0.42	0.12	0.12
446	〃	0.55	0.31	0.19	509	〃	0.47	0.28	0.19
447	〃	0.55	0.25	0.19	548	SF-3	0.41	0.27	0.17
448	〃	0.49	0.41	0.18	549	〃	0.40	0.20	0.12
449	〃	0.53	0.36	0.20	550	〃	0.46	0.18	0.33
450	〃	0.50	0.38	0.18	551	〃	0.49	0.21	0.19
451	〃	0.50	0.21	0.18	552	〃	0.52	0.19	0.30
452	〃	0.52	0.30	0.19	553	〃	0.49	(0.24)	0.15
453	〃	0.45	0.40	0.18	554	〃	0.40	0.24	0.16
454	〃	0.48	0.20	0.20	555	〃	0.46	0.36	0.18
455	〃	0.50	0.38	0.20	556	〃	0.40	0.20	0.18
456	〃	0.50	0.30	0.21	557	〃	0.46	0.30	0.21
457	〃	0.50	0.31	0.15	558	〃	0.48	0.32	0.20
458	〃	0.50	0.20	0.16	559	〃	0.46	0.31	0.19
459	〃	0.50	0.20	0.20	560	〃	0.40	0.26	0.16
460	〃	0.50	0.40	0.19	561	〃	0.49	(0.35)	0.14
461	〃	0.57	0.39	0.18	562	〃	0.40	0.30	0.13
462	〃	0.51	0.30	0.18	563	〃	0.50	(0.31)	0.18
463	〃	0.50	0.12	0.17	583	SF-4	0.40	0.20	0.18
464	〃	0.55	0.40	0.19	584	〃	0.41	0.30	0.20
465	〃	0.41	0.30	0.16	585	〃	0.43	0.14	0.20
466	〃	0.50	0.30	0.16	586	〃	0.50	0.32	0.20
467	〃	0.50	0.30	0.20	587	〃	0.51	0.40	0.21
468	〃	0.46	0.30	0.18					

註 1. 番号は遺物番号を示し、本文、挿図、図版の番号と同じである。
 2. 直径、全厚、孔径の単位はcmである。
 3. 計測数値の中で()表示のものは残存長を示す。

なさず、わずかに凸状に膨らむ。底面には放射状の線刻が10本残る。側面はノミ状工具により上面から2~5mm幅の削痕が認められる。色調は黒青色を呈する。

353~472は白玉である。直径が0.40~0.70cm, 全厚が0.10~0.50cm, 孔径が0.11~0.25cmに収まるものである。

石製品 (Fig.49-473~479)

473は三角形状をなす台石で、完存し、全長17.8cm, 全幅18.3cm, 全厚7.1cmを測る。片面中央部に径約4.5cm, 深さ1cmの敲打痕が残る。

474~477は叩石である。474は完形で、全長11.9cm, 全幅9.3cm, 全厚5.6cm, 重量854.5gを測る。

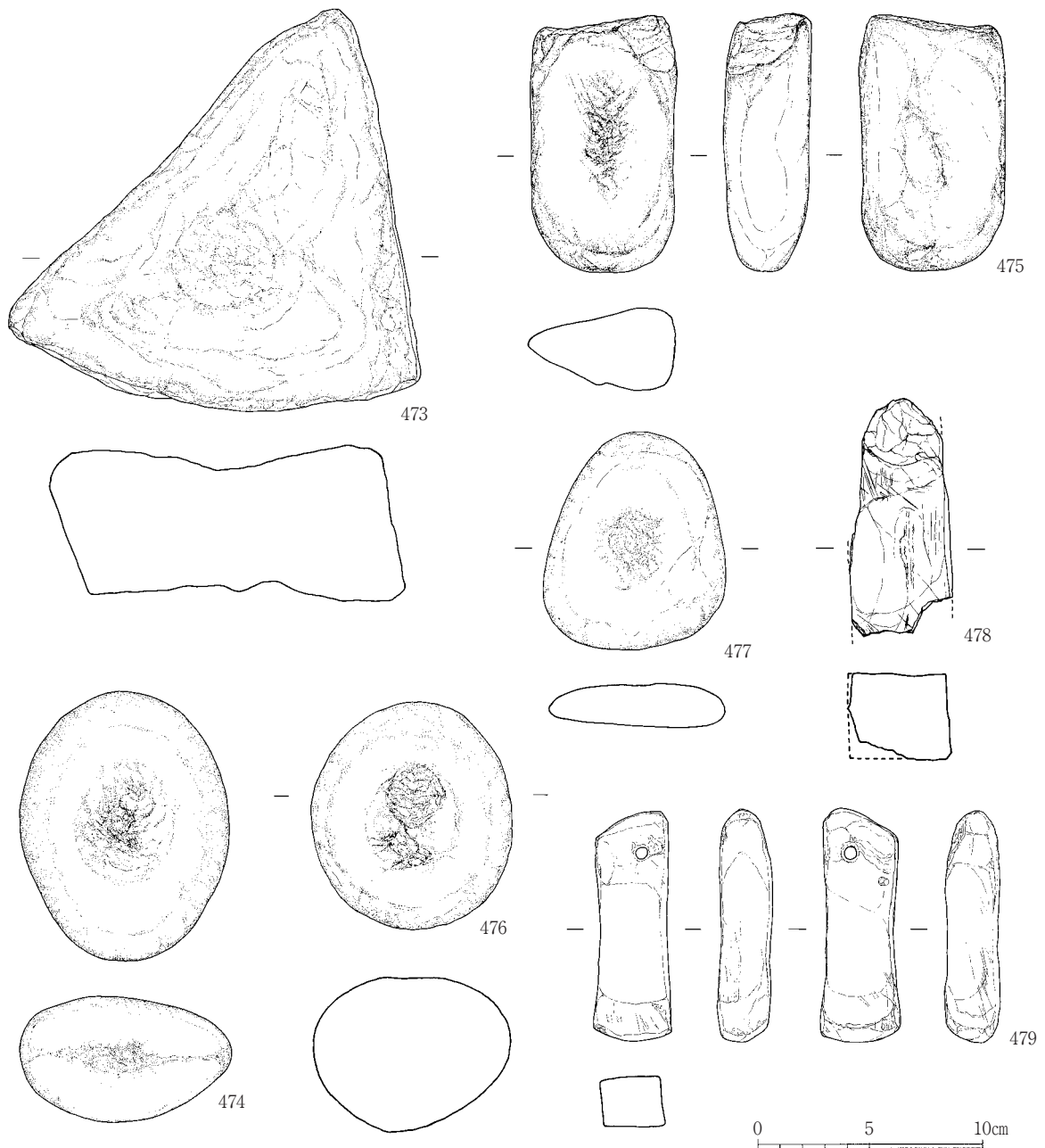


Fig.49 SF-1出土遺物実測図10

表面と側面各1カ所に敲打痕が残る。石材は砂岩である。475は細長く扁平なもので、上半部を欠損する。全幅6.5cm, 全厚3.8cm, 重量409.0gを測る。片面に敲打痕が認められ, 石材は砂岩である。476は完形で, 全長10.5cm, 全幅8.9cm, 全厚6.9cmを測る。表面1カ所に敲打痕が残る。477は完存し, 薄く扁平なもので, 全長9.6cm, 全幅8.1cm, 全厚1.9cmを測る。表面1カ所に敲打痕が残る。石材は砂岩である。

478・479は砥石である。478は両端を欠くが, 4面に使用痕が認められる。煤が付着し, 全面が黒色を呈する。石材はシルト岩である。479は完形で, 全長10.2cm, 全幅3.4cm, 全厚2.3cm, 重量126.1gを測り, 上端に円孔を穿つ。長軸の両端面を除く4面に使用痕が認められる。石材は478よりも密度の高いシルト岩である。

SF-2 (付図2)

調査区東部, SF-1の西側に位置する祭祀関連遺構で, 標高4.20~4.57mで検出され, 東西8m, 南北7mの範囲に遺物がまとまって出土した。遺物は土師器, 須恵器, 祭祀遺物, 石製品で構成される。概して遺物密度は他の祭祀関連遺構に比べ低い, 須恵器の占める割合が9%と他に比べ高くなっており, また, そのほとんどは標高4.31~4.57mと上層部に集中する。ただし, SF-1の須恵器と同一個体も4点含まれる。一方, 土師器では, 高杯が数点認められる以外ほとんどが甕であり, 壺, 鉢と判断される破片は認められなかった。また, 甕では外面だけでなく, 内面にも多量の焦げ目が付着するものが目立つ。祭祀遺物では土製勾玉, 手づくね土器各2点, 白玉14点が出土している。須恵器は杯蓋, 器台, 壺, 甕, 甕で構成され, 大甕が数点, 良好な状態で出土している。これら出土遺物約250点のうち, 図示できたのは土師器5点(480~484), 手づくね土器2点(485・486), 須恵器7点(487~493), 土製模造品2点(494・495), 石製模造品14点(496~509), 石製品3点(510~512)であった。

出土遺物

土師器 (Fig.50-480~484)

480~483は甕で, 480は口縁部がくの字状をなすA-2類で, 481は口縁部が外反し, さらに外傾するB-2類である。480は口縁部約1/5が残存し, 口径19.5cmを測る。内外面ともヘラナデ調整とナデ調整を施し, 口縁部内面には煤が付着する。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。481は約1/5

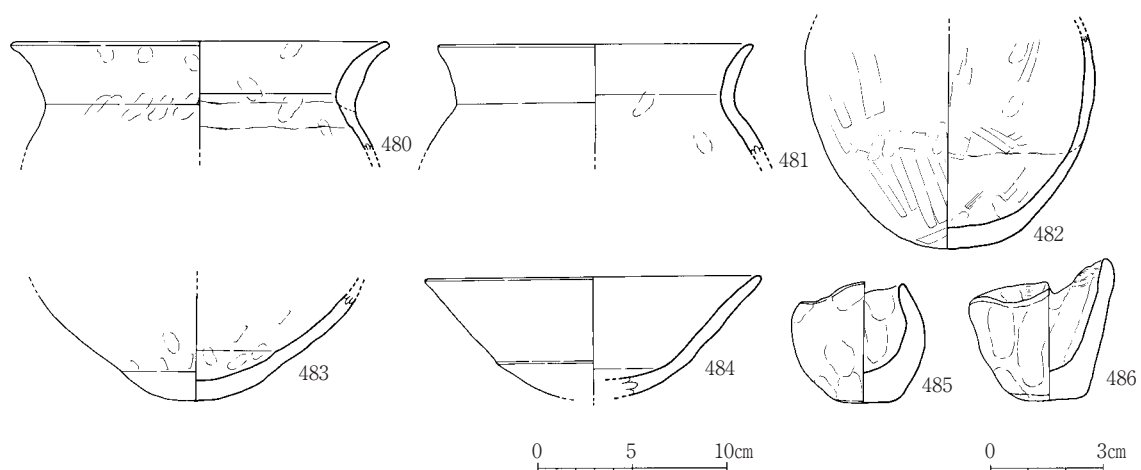


Fig.50 SF-2出土遺物実測図1

が残存し、口径16.3cmを測る。頸部の屈曲は緩やかで、内面にはヨコナデ調整の痕が残る。482は丸底の底部で、ほぼ完存し、胴径15.2cmを測る。内外面とも丁寧なヘラナデ調整が施され、外面はタテ方向、内面はやや放射状に施される。胴部外面中位以下に煤の付着が認められる。胎土は精良で、色調は、外面が灰褐色、内面が褐灰色を呈する。483も丸底の底部で約1/4が残存する。内面には内底面から斜め上方に向ってヘラナデ調整と指ナデ調整を施す。色調は内外面とも橙色である。

484は高杯で、杯部が明瞭な綾を持たないB類である。約1/4が残存し、口径17.4cmを測る。器面は摩耗するが、内面にヨコナデ調整の痕跡が残る。色調は内外面とも黄橙色である。

手づくね土器 (Fig.50-485・486)

485・486は指頭圧痕や指ナデ調整がそのまま残る粗雑な作りのB類である。485は完形で、口径2.7cm、器高3.2cmを測る。口縁端部を摘み上げ、内湾気味に仕上げる。色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい褐色を呈する。486もほぼ完形で、口径3.7cm、器高3.7cmを測る。口縁端部は未調整で歪みが残る。胎土は精良で、色調は内外面ともにぶい褐色を呈する。

須恵器 (Fig.51・52-487~493)

487は杯蓋で、約1/3が残存し、口径12.4cm、残存高約4.0cm、稜径12.3cmを測る。天井部はほぼ平坦で、綾は小さな断面三角形をなす。口縁部はやや開き気味で、端部は内傾する凹面をなす。天井部外面約4/5に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。色調は、外面が青灰色ないし灰オリーブ色、内面が青灰色を呈する。

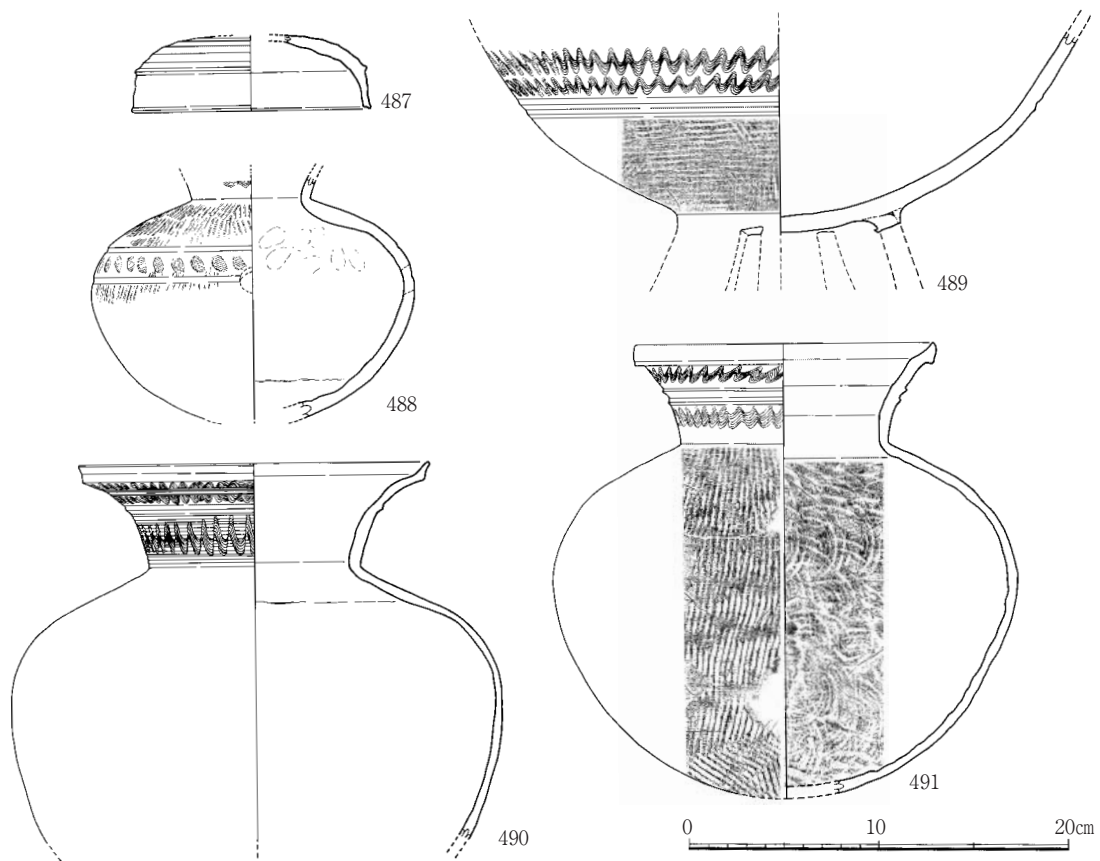


Fig.51 SF-2出土遺物実測図2

488は円孔部分を欠くが、大型甕とみられるもので、胴径17.0cmを測る。SF-1からも破片が出土している。胴部最大径が体部中位よりやや上にある。わずかに残る頸部には櫛描波状文、肩部には2条の凹線で区切られたクシ状工具による列点文が施される。器面は主に回転ナデ調整を施すが、胴部外面にはタタキ目が残る。色調は、外面が暗青灰色、内面が暗茶灰色を呈する。

489は器台の杯底部である。杯上半部と脚台部は欠損するが、接着面が残存し、5カ所に透しを施していたとみられる。

杯部外面には2条の櫛描波状文と2条の小さな凸帯が巡る。杯部外面には平行のタタキ目、内面には同心円文のタタキ目が残る。脚柱内の底部にはタタキ目が明瞭に残る。また、器面には自然釉の付着が一部に認められる。色調は内外面とも灰色を呈する。

490・491は甕である。490は口縁部から胴部の約1/3が残存し、口径18.4cm、胴径25.9cmを測る。SF-1から破片が出土する。口縁外面には1条の断面三角形の凸帯を挟んで上下に櫛描波状文が施される。下の波状文は回転カキ目調整の後に施文されるが、上の波状文は施文後に回転カキ目調整を施す。胴部

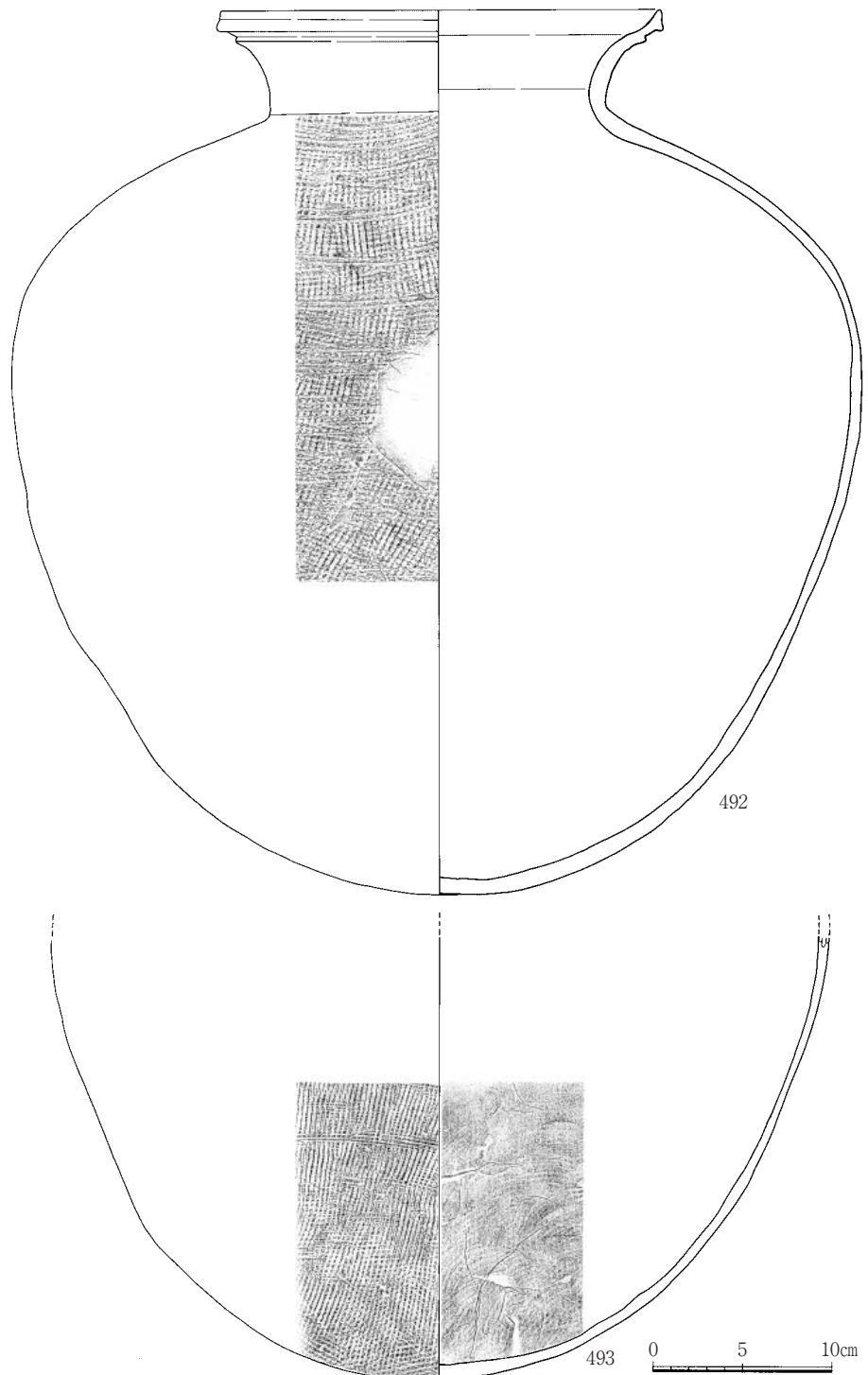


Fig.52 SF-2出土遺物実測図3

外面には平行のタタキの後に肩部から上にナデ調整, 内面にはナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色を呈する。491は約1/2が残存し, 口径15.6cm, 胴径24.5cm, 残存高23.4cmを測る。SF-1から破片が出土する。口縁部外面には2条の凸帯を挟んで各1条の櫛描波状文が施される。器面は回転ナデ調整で, 内面には同心円文のタタ

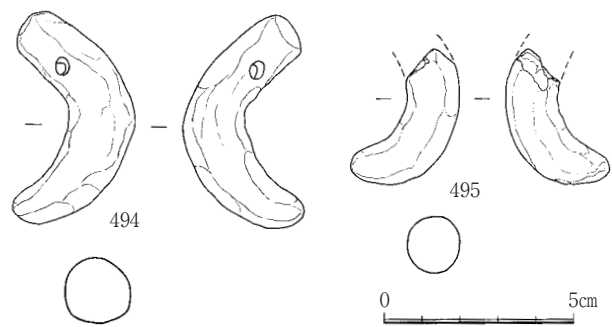


Fig.53 SF-2出土遺物実測図4

キ目が残る。色調は内外面とも灰色を呈する。492・493は大型の甕で, 492は約1/2が残存し, 口径24.4cm, 胴径48.0cm, 器高49.4cmを測る。SF-1から破片が出土する。口縁部外面には回転ナデ調整を施し, 上部に2条の凸帯が巡る。胴部外面には平行のタタキ目, 底部外面には格子目のタタキ目, 胴部内面には同心円文のタタキ目が残る。色調は内外面とも灰色を呈する。493は底部が残存し, 残存高24.6cmを測る。外面には平行のタタキ目, 内面には同心円文のタタキ目が残る。色調は一部被熱を受けて黄白色を呈する以外内外面とも褐灰色を呈する。

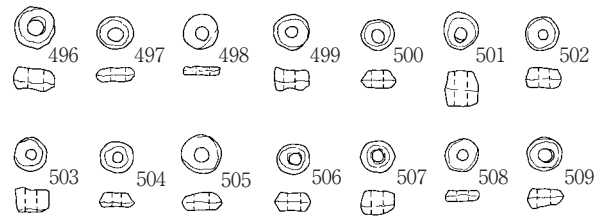


Fig.54 SF-2出土遺物実測図5 (496~509は原寸)

土製模造品 (Fig.53-494・495)

494・495は勾玉である。494は円孔が側面より穿たれるA類で, 全長5.6cm, 全幅1.7cm, 全厚2.1cm, 孔径4mmを測る。色調は灰黄褐色を呈する。495は頭部を欠損するもので, 残存長3.6cmを測る。表面はナデ調整で, 平滑となり, 一部に黒斑が認められる。色調は暗灰黄色である。

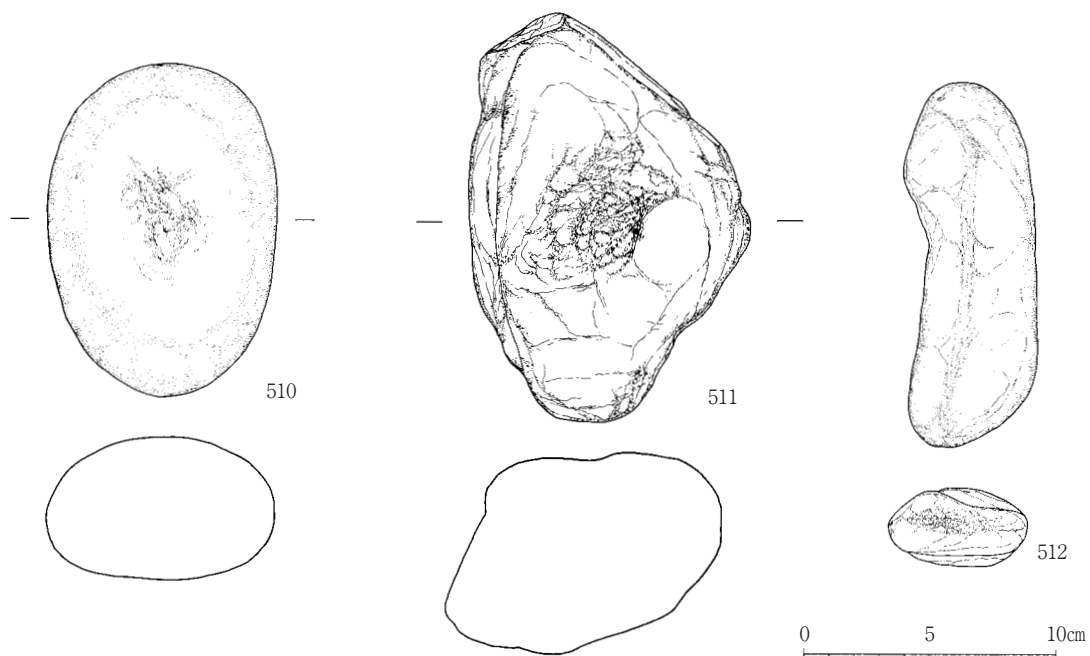


Fig.55 SF-2出土遺物実測図6

石製模造品 (Fig.54-496~509)

496~509は白玉である。直径が0.42~0.55cm, 全厚が0.11~0.47cm, 孔径が0.12~0.21cmに収まるものである。

石製品 (Fig.55-510~512)

510は叩石で, 全長13.1cm, 全幅9.1cm, 重量981.7gを測る。使用面は1面のみで, 中央部に敲打痕が認められる。石材は砂岩である。

511は凹み石で, 不整三角形状を呈し, 全長16.1cm, 全幅11.2cm, 全厚8.4cmを測る。使用面は1面で, 中央部が凹む。512は磨石で, 細長い扁平な形状をなし, 長軸の下端部に敲打痕が認められる。使用面の一部に煤が付着し, 表面の下半部が黒く変色する。石材は砂岩である。

SF-3 (Fig.56, 付図3)

調査区の中央部南端で検出した東西方向に長い祭祀関連遺構で, 東西約8m, 南北約4mの範囲から遺物がまわって出土した。遺物は中央部に集中し, 東と西にそれぞれ小さな集中がみられた。中央部の土器群下層からは浅いレンズ状の落ち込みが確認された。規模は長径1.3m, 短径1.2m, 深さ15~18cmを測り, 埋土は炭化物を含む暗灰色粘土で, 炭化物の量で2層に分かれ, 1層に多量に炭化物を含む。遺物は土師器(鉢・甕・高杯)のみであった。中央部の土器集中とほぼ重なっており, これに伴う遺構と考えられる。西側の小集中は中央部の集中から約2m離れており, 土師器(甕・鉢・高杯・壺)と鉄製品1点が出土している。甕と高杯の比率が高く, 甕の底部は丸底である。中央部の集中からは土師器(壺・甕・鉢・高杯)のほかに須恵器片2点が出土する。土師器甕の中には, 少量であるが, タタキ目が残るもの, 器壁が薄くタテ方向の細かいハケ目を施したもの, 平底のものなどが混じる。また, 赤色塗彩された高杯の杯部細片や脚台付鉢各1点が認められた。東側の小集中は遺物量が少ないが, 土師器の高杯と甕で構成され, 少量の骨片も検出された。遺物総点数は細片を含め1,200点を越えるが, 鉄製品1点と須恵器片2点が出土した以外はすべて土師器であり, 手づくね土器1点と白玉16点を除いて, 祭祀遺物は認められない。これらのうち土師器34点(513~546), 手づくね土器1点(547), 石製模造品16点(548~563), レンズ状の落ち込みからは土師器2点(527・540)を図示することができた。なお, 中央部の土器集中とSF-4の間に同一個体が存在する。

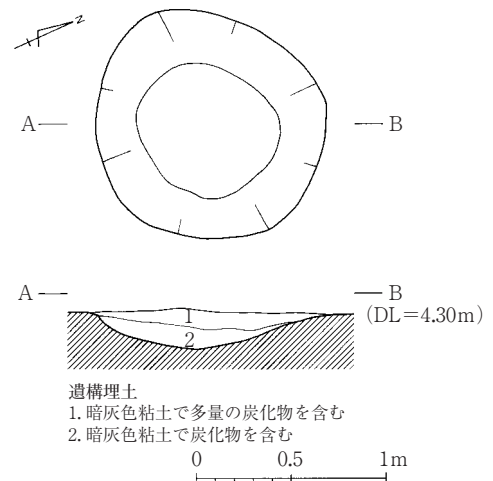


Fig.56 SF-3

出土遺物

土師器 (Fig.57・58-513~546)

513・514は壺で, 513は口縁部が内湾しながら立ち上がるB類で, 口縁部約1/3が残存し, 口径13.5cmを測る。外面にはナデ調整, 内面にはヨコナデ調整を施す。胎土には赤色風化砂粒を含み, 色調は, 外面がにぶい橙色, 内面がにぶい黄橙色を呈する。514は直口壺でC類に当たる。口縁部がほぼ残存し, 口径約8.6cmを測る。外面にはヨコナデ調整を施し, 内面はヘラナデ調整痕がわずかに

認められる。内面約1/4に煤が付着する。胎土には少量の赤色風化砂粒が混じる。色調は、外面がにぶい黄橙色、内面が灰黄褐色ないし灰色を呈する。

515～522は甕で、口縁部が残存する。515～517は口頸部がくの字状に屈曲するA類で、口縁部上半部の形状でさらに2類に分かれる。515は口縁部がそのまま外反するA-1類である。口縁部約1/5が残存し、口径17.0cmを測る。口縁部は外面がナデ調整、内面がヨコナデ調整、胴部は内面がヨコナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。516・517は口縁部上半部でやや外傾するA-2類である。516は約1/2が残存し、口径15.6cmを測る。内外面とも口縁部がヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。口縁外面の一部に薄く煤が付着する。色調は、外面がにぶい黄橙色、内面が黄灰色を呈する。517は約1/5が残存し、口径17.6cmを測る。頸部は強く屈曲し肩部が張る。内面にはナデ調整が認められる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。518～528は口頸部が外反するB類で、口縁上半部の形状でさらに2類に分かれる。518・519はB-1類で、518は約1/5が残存し、口径16.0cmを測る。胎土には1～3mmの砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。519は約1/3が残存し、口径13.7cmを測る。内外面ともナデ調整を施し、短い口縁部には煤が付着する。胎土には1～3mmの砂粒を含み、色調は、外面がにぶい橙色、内面が灰褐色を呈する。520・521はB-2類である。520は約1/4が残存し、口径15.3cm、胴径18.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、胴部はナデ調整を施す。色調は、外面が橙色、内面が橙色ないし灰黄褐色を呈する。521は約1/5が残存し、口径14.6cm、胴径15.9cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、胴部は斜め及びヨコ方向のナデ調整を施す。胴部の一部に煤が付着し、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。522は口頸部が緩やかに外反するC類で、胴部から口縁部の一部が残存し、口径19.8cm、胴径18.2cmを測り、最大径を口縁部に持つ。胴部下半に煤が付着する。色調は内外面とも灰色を呈する。

523～533は鉢である。そのうち、523～531は椀状を呈し、器高指数36～71のB類で、さらに底部の形態で丸底のものと同脚台付きのものに分かれる。523～529は丸底のB-1類である。523～525はB-1類の中でも口縁部が内傾せずそのまま外上方に開くもので、523は約1/4が残存し、口径14.4cmを測る。色調は、外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。524はほぼ完形で、口径12.1cm、器高4.8cmを測る。内外面ともナデ調整、内面はさらに放射状にヘラナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい褐色を呈する。525は約1/4が残存し、口径12.5cmを測る。器面にはナデ調整を施し、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。526は口縁部が直立気味に収まるもので、口径15.8cm、器高6.0cmを測り、器高指数38と浅めのものである。器面にはナデ調整を施すが、内底面には指頭圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。527は口縁部が内湾するもので、口径13.3cmを測る。内面はヨコ方向ないし斜め方向のナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい褐色を呈する。528も口縁部が内湾するもので、ほぼ完存し、口径11.6cm、器高6.0cmを測る。胎土には赤色風化砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。529は口縁端部がわずかに外傾するもので、口径13.3cmを測る。口縁部がヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。胎土には赤色風化砂粒を含む。色調は、外面がにぶい橙色、内面が橙色を呈する。530・531は脚台付きのB-3類である。530は全体の形状が分かるもので、口縁部約3/4が残存し、口径16.0cm、器高9.8cm、底径8.4cmを測る。内面はヘラナデ調整後、ナデ調整を施す。口縁部外面の一部分と内面の約1/4に薄く煤が付着する。胎土には粗砂

粒を含み、色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい赤褐色を呈する。531は脚台部約1/2が残存し、底径9.7cmを測る。胎土には砂粒を多く含み、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。532・533は皿状を呈するもので、器高指数21~30のC類である。532は約1/2が残存し、口径14.1cmを測る。器面にはナデ調整を施し、内面にはヘラナデ調整の痕が残る。胎土には赤色風化砂粒を多く含み、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。533は底部中央を欠損するもので、口径13.9cmを測る。口縁部内面にはヨコナデ調整の痕が認められ、内底面には煤が付着する。色調は内外面ともににぶい橙色ないし灰黄色を呈する。

534~546は高杯である。534は全体の形状がほぼ分かるもので、底径9.2cmを測る。脚台部は明瞭

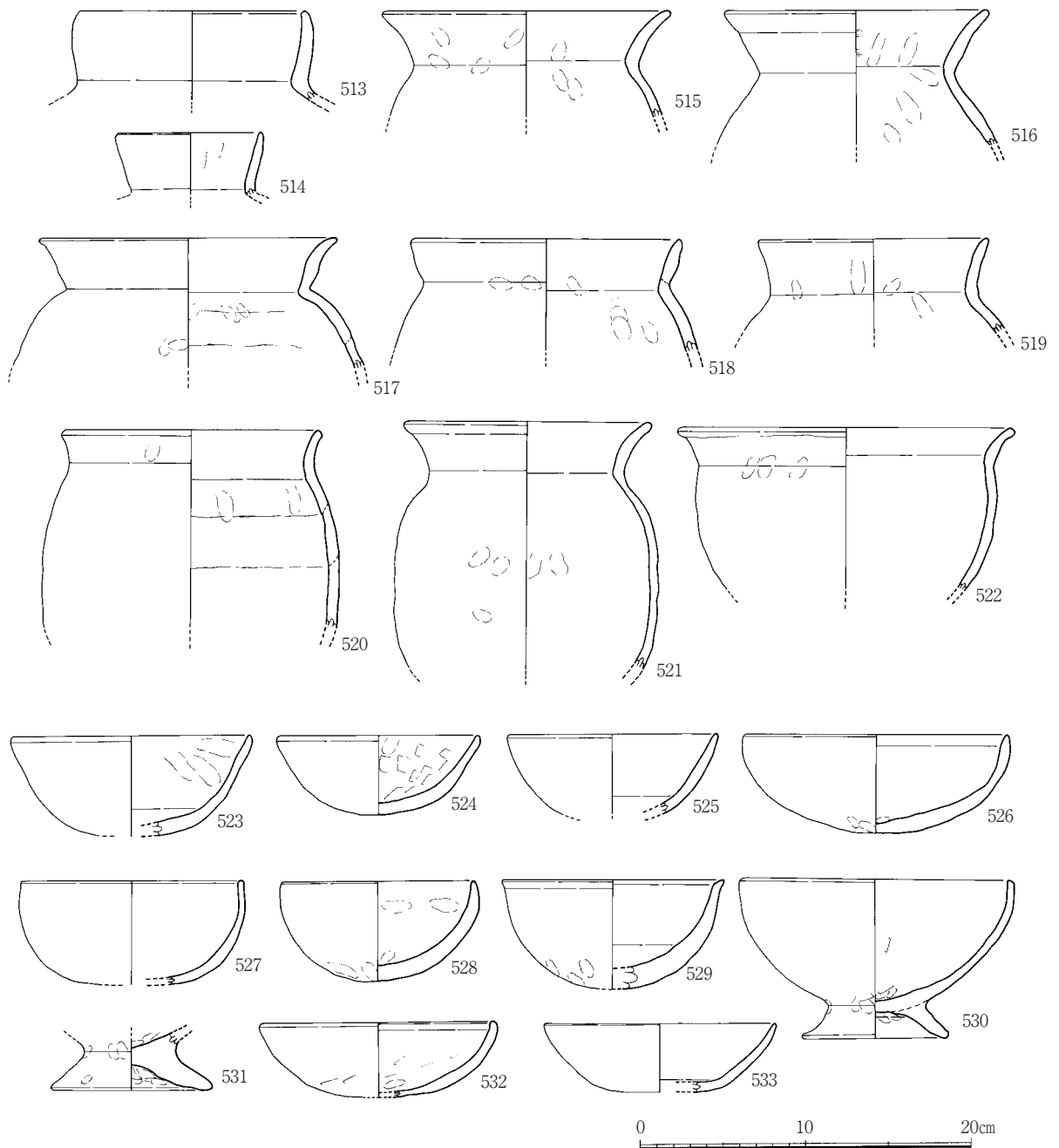


Fig.57 SF-3出土遺物実測図1

な裾部を持たないC-3類である。器面は丁寧なナデ調整を施し、色調は内外面とも橙色を呈する。535～539は杯部が残るもので、3類に分かれる。535は杯部に明瞭な稜を持つA類である。口縁部はほぼ完存し、口径16.9cmを測る。竹管状工具による円形の刺突が3ヵ所に認められるが、大きさ、位置とも不定である。胎土には赤色風化砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。536～538は杯部にわずかな稜を持つB類である。536は口縁部がほぼ完存し、口径16.6cmを測る。口縁部が直線状に延び、端部は丸く収まる。内外面ともナデ調整を施すが、内面にはヘラナデ調整も認められる。胎土には礫を含み、色調は内外面ともにぶい褐色を呈する。537は約1/3が残存し、口径16.8cmを測る。器面は摩耗が著しい。胎土は精良で、色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい橙色ないし灰色を呈する。538は杯部がほぼ完存し、口縁端部が外反するもので、口径16.6cmを測る。口縁部にヨコナデ調整が認められるが、調整は粗雑で器表面の凹凸が認められる。器面には部分的に薄く煤が付着する。色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい褐色を呈する。539は稜がなく碗状を呈するC類で、口径14.8cmを測る。胎土には赤色風化砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。540～546は脚柱部が残存するもので、うち540～542は裾部が水平な1類である。540は脚柱部がほぼ完存し、底径9.0cmを測る。底径は小さく中実で、脚台高も低い。裾部に多数の指押えの痕が残り、器面の凹凸が激しい。胎土には赤色風化砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。541は裾部約3/4が残存し、底径10.6cmを測る。器面はナデ調整により平滑で、脚柱部内面は

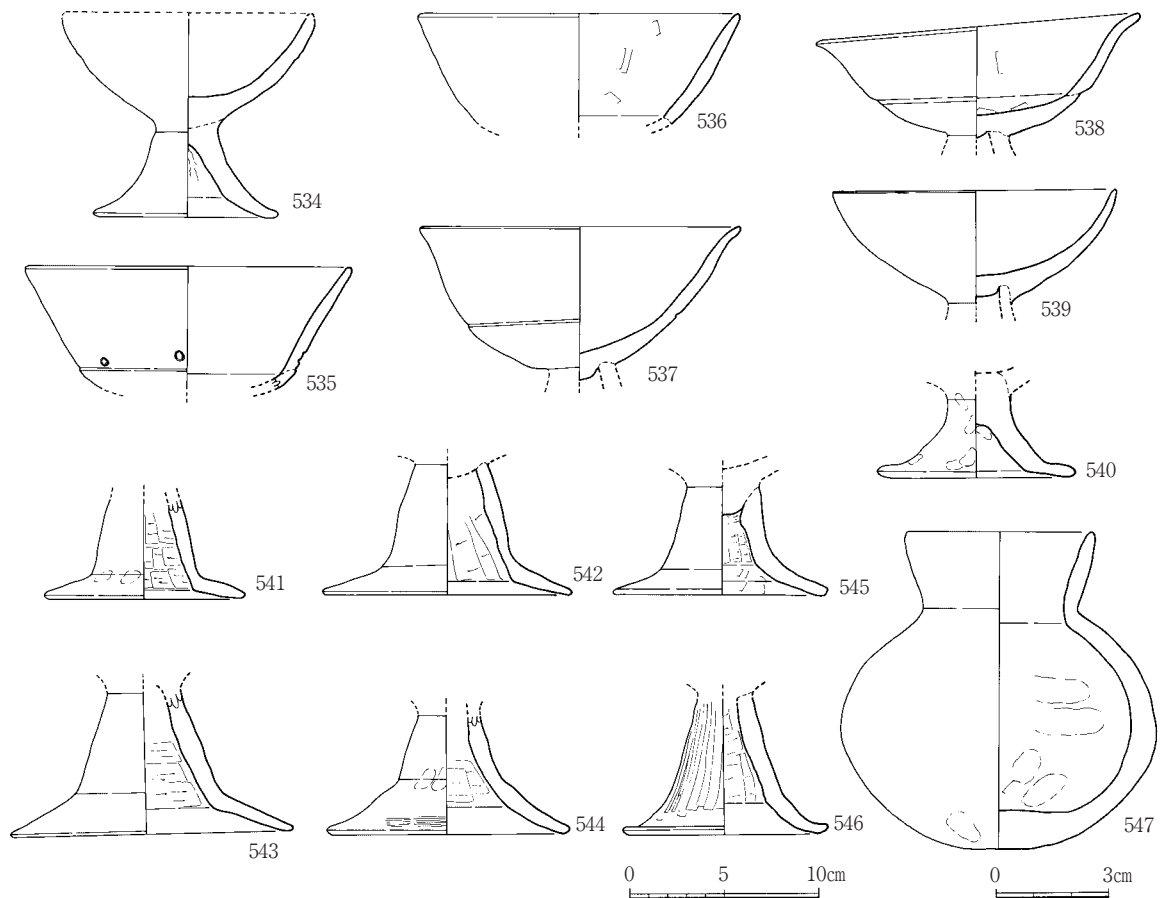


Fig.58 SF-3出土遺物実測図2

ヘラ削り調整の後にナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。542は裾部約1/4が残存し、底径12.8cmを測る。器面はナデ調整、脚柱部内面はヘラ削り調整を施す。色調は内外面とも灰褐色を呈する。543～545は脚柱部の屈曲する2類である。543は一部が残存し、底径14.4cmを測る。器面はナデ調整、脚柱部内面はヘラ削り調整を施す。胎土には赤色風化砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。544は裾部約1/2が残存し、底径12.8cmを測る。脚台部の屈曲位置が高く、脚台高に比較して底径が広い。器面はヨコナデ調整、脚柱部内面はヘラ削り調整を施す。色調は、外面が橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。545は裾部約1/5が残存し、底径11.1cmを測る。脚台高が低い。器面はナデ調整とヘラナデ調整、脚柱部内面はヘラ削り調整を施す。裾部内面に煤が多量に付着し、外面の一部にもおよぶ。胎土は精良で、色調は、外面が橙色ないし黄灰色、内面が明赤褐色ないし褐灰色を呈する。546は3類で約1/2が残存し、底径10.0cmを測る。器面はナデ調整とヘラナデ調整、脚柱部内面はヘラ削り調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

手づくね土器 (Fig.58-547)

547は壺形を模したA-1類である。口縁部約1/4が残存し、口径4.8cm、胴径8.3cmを測る。内外面とも丁寧なナデ調整を施す。外底面を除き、底部から胴部下半に少量の煤が付着する。胎土は精良である。色調は、外面がにぶい黄橙色、内面が灰白色を呈する。

石製模造品 (Fig.59-548-563)

548～563は滑石製の白玉である。直径が0.40～0.52cm、全厚が0.18～0.36cm、孔径が0.12～0.33cmに収まるものである。

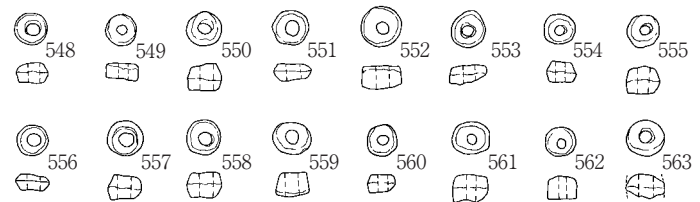


Fig.59 SF-3出土遺物実測図3 (548-563は原寸)

SF-4 (付図4)

調査区中心部SF-3の北隣り、北壁沿いに位置する祭祀関連遺構で、標高4.23～4.45mで検出され、東西約6m、南北約4mの範囲に遺物がまどまって出土した。遺構のほぼ中央部には径0.36m、厚さ4cmの焼土があり、その東側では遺物の密度が高くなっており、さらに北東方向に広がる可能性も考えられる。遺物総点数は850点余りで、そのほとんどは土師器が占めており、須恵器は全体の1%にも満たなかった。土師器は壺、甕、鉢、高杯で構成され、高杯の割合が高い。これ以外には土製模造鏡、石製模造品、石製品等がみられる。このうち図示できたのは土師器16点(564-579)、須恵器2点(580・581)、土製模造品1点(582)、石製模造品5点(583-587)、石製品2点(588・589)であった。

出土遺物

土師器 (Fig.60-564-579)

564は直口壺で、C類に当たる。胴部約1/5が残存し、胴径13.2cmを測る。頸部が細く、胴部は扁球形をなす。内面にはヘラナデ調整の痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

565～570は甕で、565～567は口頸部がくの字状に屈曲するA類である。565は約1/5が残存し、口径16.6cm、胴径17.6cmを測る。口縁部が短く、器壁が薄い。口縁部にはヨコナデ調整、胴部外面にはナデ調整を施す。胴部内面には粘土紐接合痕が残る。また、胴部外面約1/2には煤が付着する。色調

は、外面がにぶい橙色ないし灰色、内面がにぶい橙色を呈する。566は口縁部約1/2が残存し、口径17.6cm、胴径20.2cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整とヘラナデ調整を施す。内外面とも広い範囲に煤が付着する。色調は、外面が灰黄褐色、内面がにぶい橙色を呈する。567は約1/6が残存し、口径15.6cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整とナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色、内面が灰黄色を呈する。568～570は、口頸部が外反もしくは直線気味に立ち上がるB類である。さらにそのまま外反するものと口縁上半部で外傾するものに分かれる。568は外反する口縁がそのまま直線的に外上方に延びるB-1類で、約1/6が残存し、口径17.2cmを測る。口縁部にヨコナデ調整を施し、頸部に指押えの痕が残る。色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。569・570は上半部で外傾するB-2類である。569は約1/6が残存し、口径14.7cmを測る。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。570は約1/4が残存し、口径14.4cmを測る。端部をやや平坦に仕上げ、口縁部にはヨコナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

571・572は鉢で、丸底の椀状を呈するB-1類である。571は約1/3が残存する。口径15.7cm、器高6.9cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、外面の一部にはナデ調整とヘラナデ調整の痕が認め

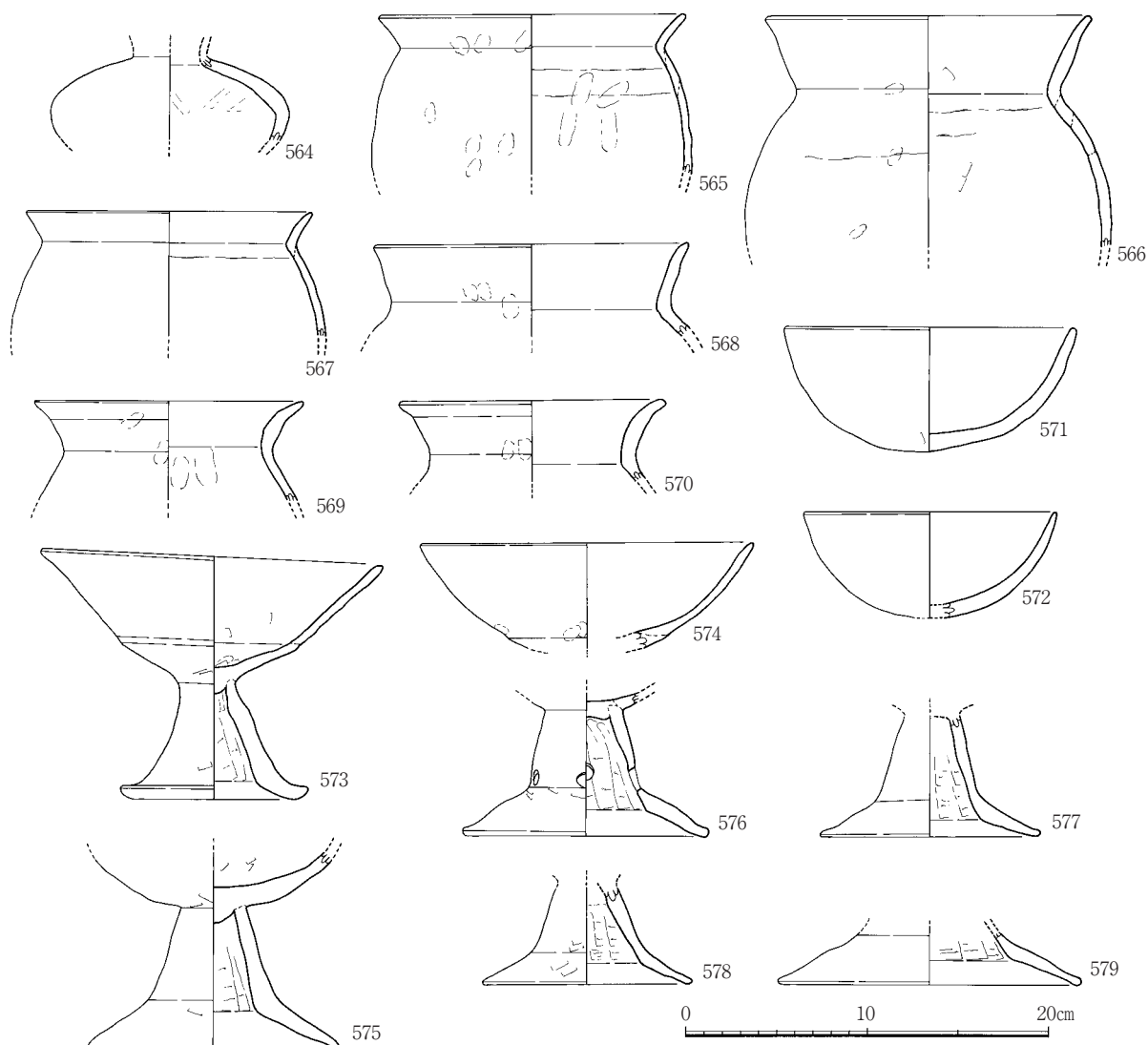


Fig.60 SF-4出土遺物実測図1

られる。胎土には礫を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。572は約1/5が残存し、口径13.8cmを測る。内面の一部にはヘラナデ調整の痕が残る。胎土には砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

573～579は高杯である。全体の形状が分かるものは573のみで、574は杯部、575～579は脚柱部が残存する。573は、脚柱部が明瞭な裾部を持たないB-3類であり、口径18.5cm、器高13.9cm、底径8.6cmを測る。杯部には稜を有し、口縁部は直線的に外上方に延びる。内外面とも丁寧なナデ調整とヘラナデ調整を施し、色調は、外面がにぶい黄橙色、内面が橙色ないし灰黄褐色を呈する。574は杯部に緩やかな稜を持つB類で、約1/3が残存し、口径18.2cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整が認められるが、他は摩耗するため不明である。胎土には1～4mmの砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。575～579は脚柱部が残存するもので、脚柱部が屈曲し、明瞭な裾部をなす2類である。575は約1/2残存し、底径13.6cmを測る。杯内底面はナデ調整とヘラナデ調整、脚柱部外面はナデ調整、柱部内面はヘラ削り調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい橙色ないし褐灰色を呈する。576は丸い透し孔を有するもので、四方に穿たれていたものとみられる。裾部約1/2が欠損するもので、底径13.6cmを測り、径2.4cmの透しは脚柱部下部に施される。屈曲部外面にはヘラナデ調整、裾部にはヨコナデ調整、脚柱部内面にはヘラ削り調整を施す。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。577は裾部約1/3が欠損するもので、底径11.8cmを測る。外面にはナデ調整、裾部にはヨコナデ調整、脚柱部内面にはヘラ削り調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。578は脚柱部約1/2が残存し、底径11.4cmを測る。外面はナデ調整とヘラナデ調整、脚柱部内面はヘラ削り調整を施す。色調は、外面がにぶい黄橙色、内面がにぶい褐色を呈する。579は約1/3が残存し、底径約16.3cmを測る。底径から推測すると大型の高杯とみられる。外面はナデ調整、脚柱部内面にはヘラ削り調整を施す。色調は内外面ともにぶい橙色を呈するが、裾部の一部が被熱のため赤く変色する。

須恵器 (Fig.61-580・581)

580は杯身で、約1/4が残存し、口径11.6cm、受部径13.4cm、器高4.4cm、立ち上がり高1.8cmを測る。立ち上がりは内傾し、端部は内傾する平面をなす。底部外面は約4/5に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。色調は、内面が暗青灰色、外面が灰色を呈する。

581は甗で、胴径11.9cmを測る。頸部には1条と胴部には凹線と小さな凸帯に区画されて1条の櫛描波状文が巡る。円孔は胴部最大径よりやや上に穿孔される。色調は内外面とも灰色を呈する。

土製模造品 (Fig.61-582)

582は土製模造鏡で、両側から摘み上げ

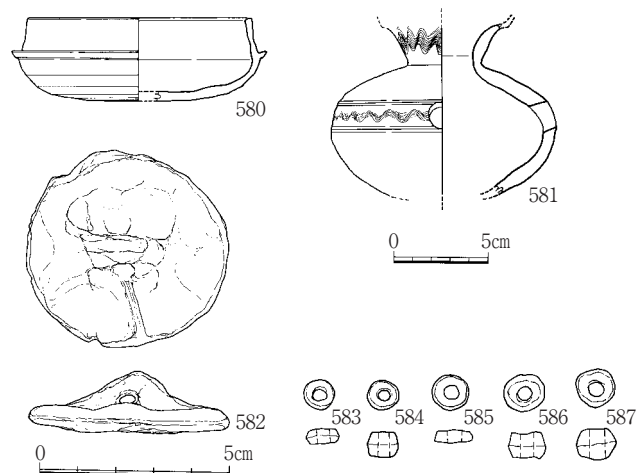


Fig.61 SF-4出土遺物実測図2 (583～587は原寸)

て鈕を作り、紐孔を持つA-1類である。ほぼ完存し、全長5.3cm、全幅5.3cm、全厚1.6cmを測る。鏡面にはナデ調整を施し、薄く平坦に仕上げ、背面約1/2に煤が付着する。色調は灰色ないし褐灰色を呈する。

石製模造品 (Fig.61-583~587)

583~587は滑石製の白玉である。直径が0.40~0.51cm、全厚が0.14~0.40cm、孔径が0.18~0.21cmに収まるものである。

石製品 (Fig.62-588・589)

588は砥石で、一部が残存し、残存長5.6cm、残存幅5.0cm、残存厚7mm、重量31.3gを測る。使用面は1面のみで、材質は砂岩である。

589は下方が欠損する叩石で、残存長9.8cm、全幅8.3cm、全厚4.9cm、重量533.0gを測る。表裏2面に敲打痕が認められる。石材は細粒砂岩である。

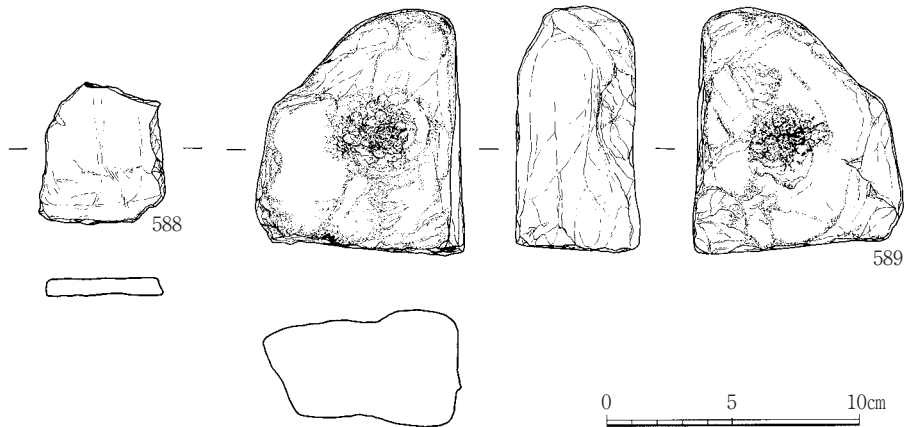


Fig.62 SF-4出土遺物実測図3

SF-5 (付図5)

調査区西寄りに位置する祭祀関連遺構で、標高4.11~4.46mで検出され、東西13m、南北7mの範囲から遺物がまとまって出土した。遺物は大きく南東(標高4.11~4.45m)と北西(4.16~4.46m)の2つのブロックに分かれ、南東ブロックの検出面が若干低い。また、遺物密度は東南ブロックの方が高いものの、器種構成に大きな差異は認められなかった。出土遺物は約1,000点を数え、土師器、須恵器、土製模造品、石製品がみられ、土器の中では器高の低い鉢やタタキ目を持つもの、ハケ調整を施すものなどが数点ずつ認められ、煤の付着する石や炭化物もあった。これらのうち土師器79点(590~668)、須恵器5点(675~679)、手づくね土器6点(669~674)、石製品1点(675)が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.63~67-590~668)

590は直口壺で、胴部が残存し、胴径14.2cmを測る。外面はヘラ削り調整の後にヨコナデ調整、内面はナデ調整と内底面は放射状にヘラナデ調整を施す。胎土には少量の赤色風化砂粒を含み、色調は、外面がにぶい橙色ないしにぶい黄橙色、内面が灰黄色を呈する。

591~615は甕である。591~613は口頸部の形態が分かるもので、4類に分かれ、さらに口縁部の形態で2類に細分される。591~594は、口頸部がくの字状をなすA-1類である。591は約1/4が残存し、口径30.1cm、胴径29.1cmを測る比較的大型の甕である。口縁部は直線的に外上方に延び、器面は摩耗するが、一部に板状工具によるナデ調整の痕が認められる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。592は約1/5が残存し、口径19.8cmを測る。口縁部から底部外面には煤が付着し、底部になる

に従って量を増す。胎土には1~6mm大の砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。593は約1/9が残存し、口径16.0cmを測る。色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。594は約1/5が残存し、口径25.7cmを測る。外面はナデ調整、内面はヨコナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。595~598は口頸部がくの字状に屈曲し、口縁部が外傾するA-2類である。595は約1/2が残存し、口径18.4cm、胴径20.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、胴部はヘラナデ調整とナデ調整を施す。口縁部内面と外面の一部に煤が薄く付着する。色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい褐色を呈する。596は約1/4が残存し、口径18.8cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は、外面が橙色、内面がにぶい黄橙色ないし橙色を呈する。597は約1/5が残存し、口径17.6cm、胴径19.6cmを測る。口縁端部は平面をなし、胴部は球形に張る。口縁部にはヨコナデ調整を施す。胴部外面と内面の一部に煤が付着する。胎土は精良で、色調は、外面が灰褐色、内面がにぶい褐色を呈する。598は約1/4が残存し、口径16.0cmを測る。器面は摩耗するが、器壁は薄く、胎土には砂粒を多く含む。色調は内外面ともにぶい褐色を呈する。

599~603は口縁部が外反もしくは直線的に立ち上がるB-1類である。599は約1/5が残存し、口径14.6cmを測る小型の甕である。口縁部は直線的に外上方へ延び、口縁部はヨコナデ調整、胴部内面にはナデ調整を施す。内面には粘土紐接合痕が残る。胎土には細砂粒を多く含み、色調は、外面がにぶい黄橙色、内面が灰黄褐色を呈する。600は約1/5が残存し、口径13.4cmを測る。口縁部の器壁は厚く、端部を丸く仕上げる。口縁部外面はヨコナデ調整を施し、胴部内面には粘土紐接合痕が残る。胎土には1~5mm大の砂粒を多く含み、色調は、外面がにぶい黄橙色、内面が灰黄色を呈する。601は約1/6が残存し、口径18.0cmを測る。器面は摩耗し調整は不明である。胎土には砂粒を多く含み、色調は、外面がにぶい黄橙色、内面が橙色を呈する。602は約1/4が残存し、口径15.3cmを測る。器壁が薄く、内面は摩耗する。口縁部にはヨコナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は、外面が橙色、内面が灰白色を呈する。603は約1/5が残存し、口径14.4cmを測る小型のものである。器面は摩耗するが、口縁部内面に煤が付着する。色調は、外面がにぶい黄橙色、内面がにぶい黄褐色を呈する。604~610は口頸部が外反もしくは直線的に立ち上がり、さらに口縁部が外傾するB-2類である。604は約1/3が残存し、口径14.0cm、胴径18.4cmを測る。器面はヘラナデ調整、胴部内面にはヘラ削り調整を施す。色調は、外面が黄灰色ないし橙色、内面が灰黄褐色を呈する。605は約1/5が残存し、口径14.4cm、胴径25.5cmを測る。肩部が張り、口縁部は直立して上方に延び、端部はやや外傾する。口縁部はヨコナデ調整を施す。肩部内面を中心に粘土紐接合痕が明瞭に残る。胎土には砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。606は口縁部の破片で、口径17.0cmを測る。器壁が薄く、口縁端部を細く仕上げる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。607は約1/5が残存し、口径14.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整を施し、端部を丸く仕上げる。口縁部外面の一部に煤が付着する。色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。608は約1/5が残存し、口径15.5cmを測る。口頸部の屈曲は比較的緩やかである。口縁部はヨコナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。609は約1/5が残存し、口径12.3cmを測る小型のものである。器壁は比較的薄く、口縁部は強く外反する。色調は、外面が橙色、内面が灰黄褐色を呈する。610は約1/5が残存し、口径14.8cmを測る。胴部の張りは少なく、口頸部の屈曲は緩やかである。口縁端部

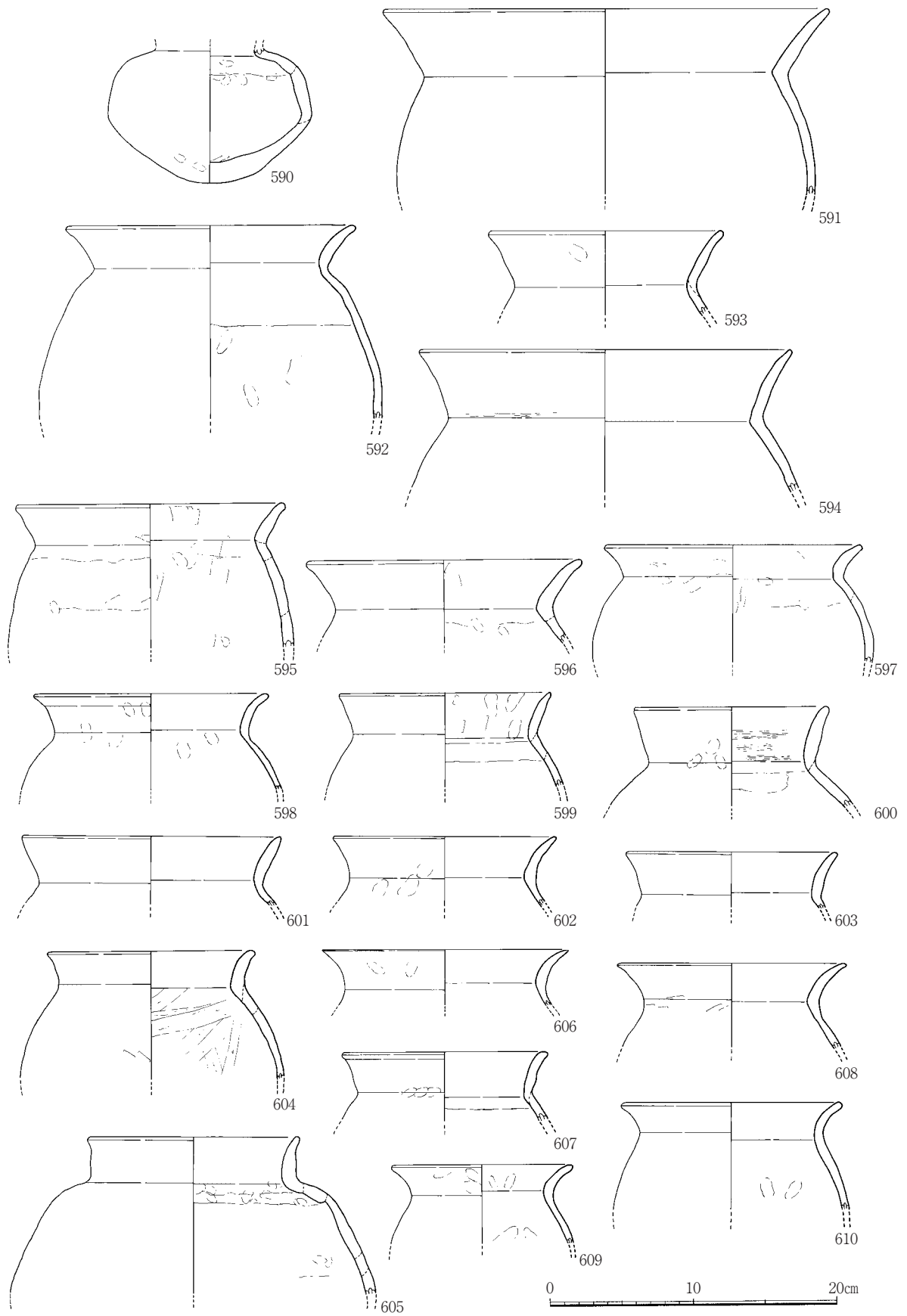


Fig.63 SF-5出土遺物実測図1

は平面をなす。胎土には小礫を含み、色調は、外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。

611～613は口頸部が緩やかに外反し、最大径を口縁部に持つもので、C類に当たる。611は約1/2が残存し、口径26.0cmを測る比較的大型のものである。器面にはナデ調整を施す。内外面とも数カ所に煤が付着するが、外面の煤は帯状に付着する。胎土は精良で、色調は、外面がにぶい黄橙色ないしにぶい橙色、内面がにぶい黄橙色ないしにぶい褐色を呈する。612は胴部から口縁部の一部が残存するもので、口径17.2cmを測る。口縁部の器壁が胴部よりも厚く、内外面ともナデ調整を施し、口縁部内面にはヘラナデ調整の痕が残る。胴部外面には煤が付着し、色調は、外面がにぶい褐色、内面がにぶい橙色を呈する。613は肩部から口縁部の一部が残存し、口径20.6cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整を施す。胴部外面には煤が付着する。胎土には赤色風化砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。

614・615は底部が残存するものである。614は小型のもので、器面は摩耗するが、内面にはヘラナデ調整の痕が残る。色調は、外面が

灰黄褐色ないしにぶい橙色、内面が黄灰色ないしにぶい橙色を呈する。615は平底風の底部で、器面にはナデ調整を施す。内底面には煤が付着する。胎土には少量の赤色風化砂粒を含み、色調は内外面ともいぶい黄橙色ないし灰黄褐色を呈する。

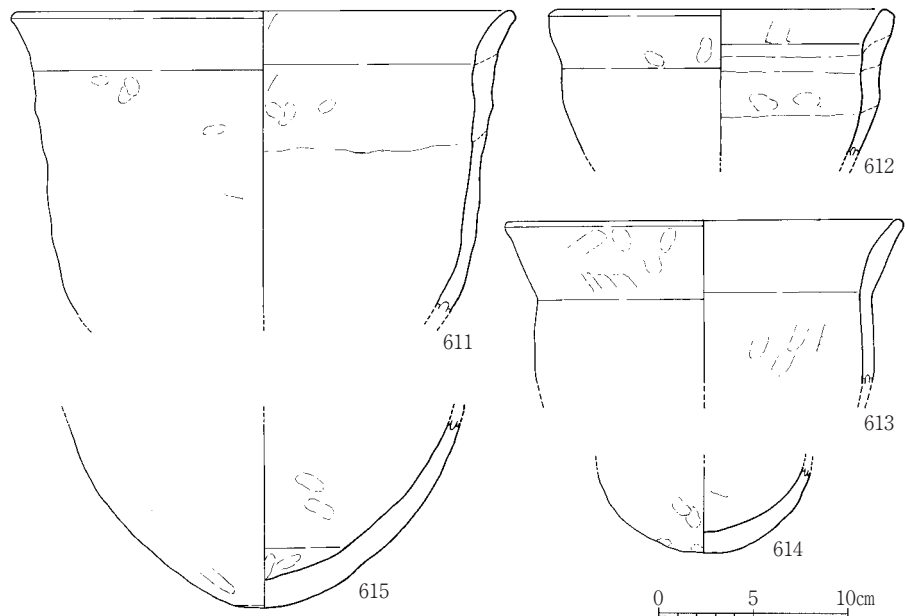


Fig.64 SF-5出土遺物実測図2

616は甑で、底部の一部が残存し、底部中央に直径1cmの円孔を穿つ。SF-1出土の甑(289)と異なり、1孔のみである。外面はナデ調整、内面にはハケ調整を施す。色調は、外面がにぶい黄橙色、内面がにぶい橙色を呈する。甑はI区で2点(289・616)、II区で1孔のものが1点出土する。

617～633は鉢で、形態により3類に分かれる。617・618はA類に当たる。617は口縁部の一部を欠損するのみで、口径14.0cm、器高7.4cm、底径4.5cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、器壁は薄く、口縁端部は細く仕上がる。内外面ともナデ調整を施し、底部中央では放射状にヘラナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。618は底部が高台状をなすもので、底径4.8cmを測る。内外面ともナデ調整を施し、内底面はヘラナデ調整で、煤が付着する。色調は、外面が橙色、内面が灰黄色を呈する。619～632は椀形を呈し、底部が丸底のB-1類である。619は約1/4が残存し、口径9.6cmを測る。器高指数68と底部が深いものである。口縁部は底部から内湾気

味に立ち上がり、そのまま外上方に延び、端部を細く仕上げる。外面がナデ調整、内面は底部から口縁部へ放射状に指ナデ調整を施す。胎土には砂粒と小礫を多く含み、色調は、外面が灰黄褐色、内面がにぶい橙色を呈する。620は約1/4が残存し、口径10.9cmを測る。底部が厚くやや平底状を呈し、口縁端部を丸く仕上げる。内外面ともナデ調整を施し、色調は、外面が灰白色、内面が灰黄色を呈する。621は約1/4が残存し、口径13.8cmを測る。底部はやや尖底状をなし、外面はナデ調整、内面はヘラナデ調整とナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色、内面が橙色を呈する。622は口縁部の一部を欠損するもので、口径16.4cm、器高8.6cmを測る。口縁部は底部から内湾して立ち上がり、そのまま上方に延び、端部を丸く仕上げる。口縁部にはヨコナデ調整を施し、他はナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。623は口縁部約1/3が欠損するもので、口径12.4cm、底径3.8cmを測る。口縁部は内湾気味に上がり、端部を細く仕上げる。口縁部にはヨコナデ調整を施し、底部には粘土紐の単位が残る。また、外底面に黒斑が認められる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。624は口縁部の一部を欠損するもので、口径12.8cm、器高5.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、内面はヘラナデ調整を施し、外底面にはヘラナデ調整の痕が残る。胎土は精良で、赤色風化砂粒を含み、色調は、外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。625は口縁部と体部の一部が残存し、口径14.6cmを測る。口縁部は内湾気味に上がり、端部は丸い。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。胎土には赤色風化砂粒を含み、色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。626は約1/3が残存し、口径11.2cm、器高5.7cmを測る。体部は底部から内湾して立ち上がり、口縁部は内傾する。胎土には粗砂粒を多く含み、焼成はやや軟質である。色調は内外面とも橙色を呈する。627は口縁部約1/3を欠損するもので、口径13.2cm、器高7.0cmを測る。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がり、端部は小さく内傾する。外面はナデ調整、内面はナデ調整とヘラナデ調整を施す。また、外底面には黒斑が認められる。胎土には赤色風化砂粒を含み、色調は、外面がにぶい黄橙色ないし暗灰色、内面がにぶい橙色ないし黄橙色を呈する。628は口縁部約1/2を欠損するもので、口径12.4cm、器高7.4cmを測る底部が深いものである。底部はやや平底気味で、口縁部は内湾する。器面は摩耗するが、内面の一部には指ナデ調整の痕が認められる。色調は内外面とも灰色ないし橙色を呈する。629は約1/4が残存し、口径12.6cm、器高5.0cmを測る。器高指数39と底部の浅いもので、口縁部は内湾し、端部は外傾する平面をなす。口縁部はヨコナデ調整、内底面にヘラナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。630は口縁部と体部の一部が残るもので、口径9.3cmを測る。器高指数53と底部のやや深いものである。器面は摩耗するが、内面の一部にナデ調整の痕が認められる。胎土には細砂粒を多く含み、色調は、外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。631は約1/3が残存し、口径12.0cmを測る。器高指数38と底部の浅いものである。内外面ともナデ調整を施し、色調は、外面がにぶい黄橙色ないし暗灰色、内面がにぶい黄橙色ないし橙色を呈する。632は約1/3が残存し、口径15.9cm、器高5.9cmを測る。器高指数36と底部の浅いものである。口縁部は内湾気味に上がり、端部を細く仕上げる。口縁部はヨコナデ調整、内底面は指ナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。633は皿状をなすもので、C類に分類される。口縁部の一部を欠損するが、口径13.2cm、器高4.5cmを測る。口縁部はヨコナデ調整を施し、内底面にはヘラナデ調整の痕が認められる。胎土には多くの粗砂粒

と小礫を含み、色調は、外面がにぶい橙色ないし灰色、内面がにぶい橙色を呈する。

634～668は高杯で、634～637は全体の形状が分かるものである。634は裾部が水平なA-1類である。裾部が一部欠損する他はほぼ完存し、口径17.0cm、器高14.3cm、底径10.4cmを測る。口縁部は外反する。口縁部はヘラナデ調整の後にヨコナデ調整を施し、端部は強いヨコナデ調整により外反する。脚柱部は中央部が膨らみ、屈曲部はヘラナデ調整、他はナデ調整を施す。裾部の一部に煤が付着する。胎土は赤色風化砂粒が多く、色調は外面が橙色、内面がにぶい黄橙色、褐灰色ないしにぶい橙色を呈する。

635～637はA-2類である。635は口縁部と裾部の一部が欠損し、他は残存するもので、口径17.8cm、器高11.9cm、底径10.4cmを測る。杯高が浅く、口縁部は外反する。摩耗のため、調整は不明であるが、脚柱部との接合部にはヘラナデ調整と指ナデ調整の痕が認められる。脚柱内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には粗砂粒を多く含み、色調は、外面がにぶい褐色、内面がにぶい橙色を呈する。636は杯部約1/2が欠損する他はほぼ残存し、口径17.2cm、器高13.9cm、底径10.8cmを測る。口縁部は直線的に外上方に延び、口縁端部は外傾する。脚柱部は中央部が膨らむ。外面は口縁部がナデ調整、底部と裾部がヨコナデ調整、内面は脚柱部がヘラ削り調整を施す。口縁部内面には1ヵ所竹管状の痕が残り、裾部には少量の煤が付着する。胎土には赤色風化砂粒を多く含み、色調は外面がにぶい橙色、内面がにぶい橙色ないしにぶい黄橙色を呈する。637は口縁部と裾部の一部が欠損するもので、口径16.6cm、器高13.5cm、底径10.8cmを測る。口縁部は直線的に外上方に延び、口縁端部を細く仕上げる。口縁部と裾部はヨコナデ調整、内底面と脚柱部はナデ調整、脚柱内面はヘラ削り調整の後にナデ調整を施す。色調は内外面とも橙色を呈する。

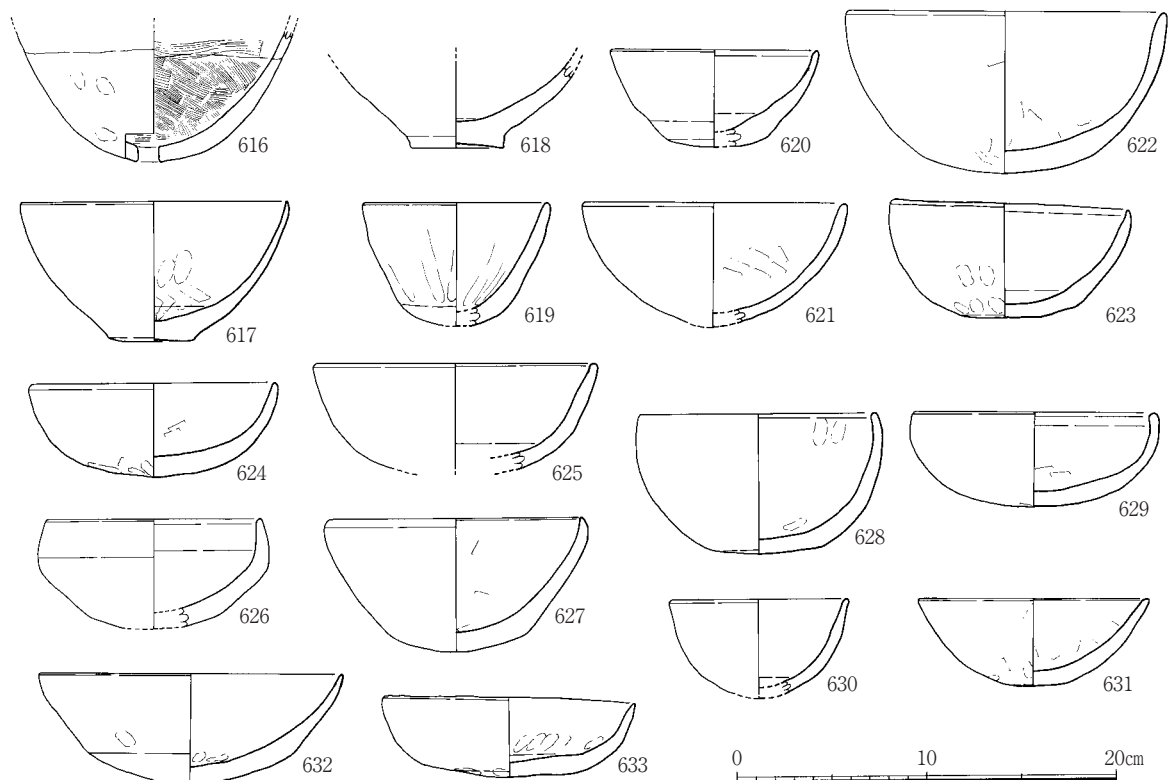


Fig.65 SF-5出土遺物実測図3

638～645は杯部の形態の分かるもので、2類に分かれる。638～642は杯部に明瞭な稜線を持つA類である。638は杯部はほぼ完存し、口径17.4cmを測る。口縁部は直線的に外上方に延び、口縁端部は外傾する。胎土には赤色風化砂粒を含み、色調は、外面がにぶい橙色、内面が橙色を呈する。639は杯部はほぼ完存し、口径15.4cmを測る。口縁部は直線的に外上方に延びる。器面にはナデ調整、内底面にはヘラナデ調整の痕が認められる。胎土には砂粒を多く含み、色調は内外面とも橙色を呈する。640は口縁部上半が欠損するものである。内面にはナデ調整の痕が認められる。胎土は赤色風化砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。641は杯部がほぼ完存するもので、口縁部は外上方に延び、口縁端部はやや外傾する。器面は摩耗するが、口縁部にはヨコナデ調整の痕が認められる。胎土には赤色風化砂粒を含み、色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい橙色を呈する。642は杯部が深いもので、口径14.8cmを測る。杯部は内外面ともナデ調整、脚柱部内面にはヘラ削り調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。

643～645は杯部にわずかな稜を持つB類である。643は口縁部の一部を欠損するもので、口径17.2cmを測る。口縁部は外反し、端部は細い。胎土には赤色風化砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい

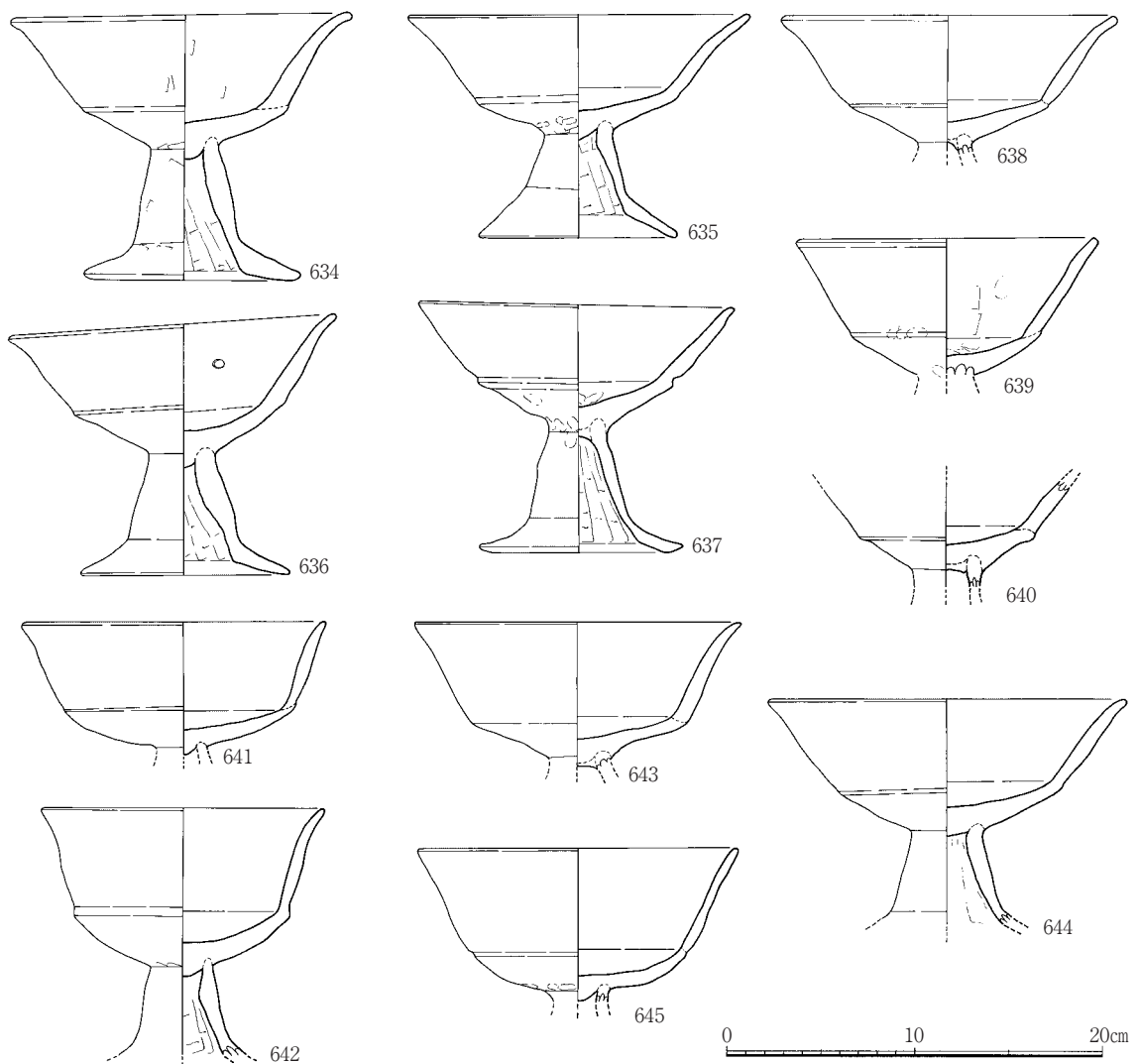


Fig.66 SF-5出土遺物実測図4

橙色を呈する。644は裾部を欠くもので、口径18.8cmを測る。口縁部は直線的に外上方に延び、端部を丸く仕上げる。器面にはナデ調整を施す。また、裾部から柱部外面下半にかけて煤が付着する。色調は、外面が橙色、内面が浅黄橙色を呈する。645は杯部約1/4が残存するもので、口径16.8cmを測る。器面はナデ調整を施し、胎土には少量の赤色風化砂粒を含む。色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。

646～668は脚柱部が残存するもので3類に分かれる。646～651は裾部が水平な1類である。646は約1/4が残存し、底径10.6cmを測る。脚柱部の器壁は厚く、脚高は低い。脚柱部内面にはヘラ削り調整を施す。また、脚柱部外面約1/3に煤が付着する。胎土には少量の赤色風化砂粒を含み、色調は、外面がにぶい黄橙色、内面がにぶい橙色を呈する。647は裾部の一部が欠損するもので、底径10.6cmを測る。器面はナデ調整、裾部はヨコナデ調整、柱部内面はヘラ削り調整を施す。色調は内外面とも橙色を呈する。648は脚柱部がほぼ完存するもので、底径12.8cmを測る。裾部はヨコナデ調整で、やや内湾する。他はナデ調整、脚柱部内面にはヘラ削り調整の後にナデ調整を施す。胎土には小礫を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。649は口縁部と裾部を欠くものである。脚柱部内面にはヘラ削り調整を施し、上部にしぼり目が残る。胎土には少量の赤色風化砂粒を含む。色調は内外面ともなぶい橙色を呈する。650は裾部の先端が欠損するもので、脚柱部内面にはヘラ削り調整を施し、上部にはしぼり目が認められる。胎土には砂粒を多く含み、色調は、外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。651は口縁部が接合部から欠損するもので、他はほぼ完存し、底径10.7cmを測る。器面はナデ調整、脚柱部内面はヘラ削り調整を施す。色調は内外面ともなぶい橙色を呈する。

652～667は裾部が脚柱部から屈曲するもので、2類に当たる。652は口縁部が欠損するもので、底径10.0cmを測る。SF-4から同一個体が出土する。杯底部は内湾気味に立ち上がる。器面はハケ調整の後にナデ調整を施し、一部にハケ目が残る。脚柱部内面はヘラ削り調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は、外面が灰黄褐色、内面が灰褐色を呈する。653は口縁部を欠くもので、底径12.0cmを測る。器面はナデ調整、脚柱部内面はヘラ削り調整の後にナデ調整を施す。色調は内外面ともなぶい褐色を呈する。654は口縁部と裾部約1/2を欠くもので、底径11.7cmを測る。器面は丁寧なナデ調整により平滑で、脚柱部内面はヘラ削り調整の後にナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は内外面とも橙色ないし灰黄褐色を呈する。655は口縁部と裾部の大半を欠損するものである。器面はナデ調整、杯部との接合部は指ナデ調整、杯部内底面はヘラナデ調整を施す。脚柱部内面はヘラ削り調整の後にナデ調整を施し、上部にはしぼり目が残る。色調は、外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。656は杯底部と脚柱部が残存するもので底径10.0cmを測る。外面はナデ調整、脚柱部内面はヘラ削り調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色ないし灰黄褐色、内面が明赤褐色を呈する。657は杯部と裾部が欠損するものである。脚柱部内面はヘラ削り調整を施し、上部にはしぼり目が残る。胎土には砂粒と赤色風化砂粒を含む。色調は、外面が橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。658は脚柱部の一部が残存するもので、底径12.0cmを測る。器面はナデ調整、脚柱部内面はヘラ削り調整の後にナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は、外面が橙色、内面がにぶい褐色を呈する。659は脚柱部約1/2が残存するもので、底径11.2cmを測る。脚柱部内面はヘラ削り調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい黄橙色、内面が灰黄色を呈する。660は脚柱部の一

部が残存するもので、底径11.3cmを測る。裾部にはヨコナデ調整，脚柱部内面はヘラ削り調整を施す。胎土には粗砂粒を多く含み，色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。661は約1/4が残存し，底径11.0cmを測る。器面はヘラナデ調整の後にナデ調整，脚柱部内面はヘラ削り調整を施す。胎土は精良で，色調は，外面が橙色，内面が灰黄色を呈する。662は約1/4が残存し，底径10.9cmを測る。裾部はヨコナデ調整，脚柱部内面がヘラ削り調整を施す。胎土には砂粒を多く含み，色調は内外面とも黄灰色を呈する。663は口縁部と裾部の一部を欠損するもので，底径11.3cmを測る。脚柱部内面はヘラ削り調整を施し，上部にはしぼり目が残る。胎土には赤色風化砂粒を多く含み，色調は内外面

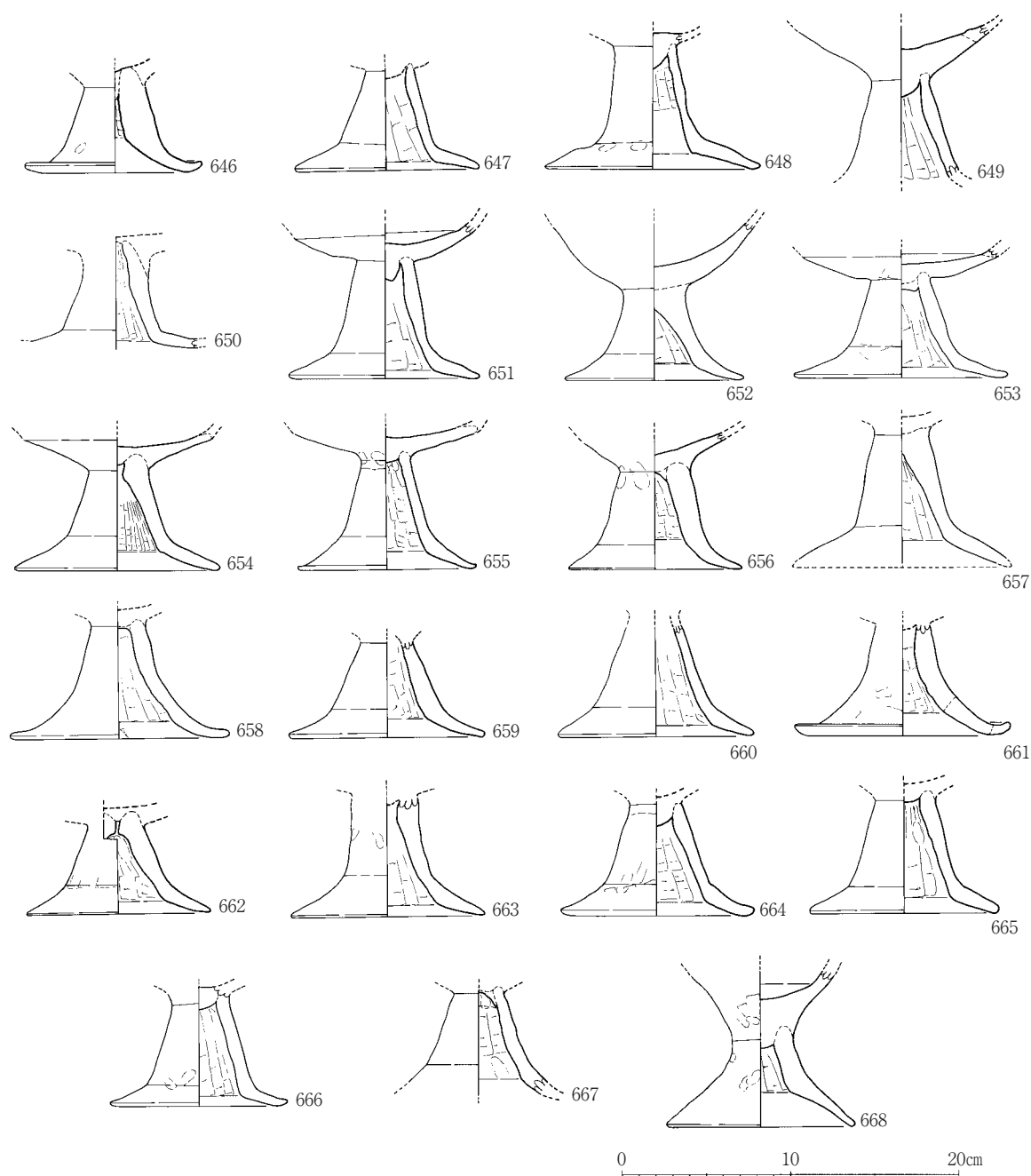


Fig.67 SF-5出土遺物実測図5

ともにぶい橙色を呈する。664は脚柱部約1/2が残存するもので、底径11.5cmを測る。器面は摩耗するが、脚柱部内面にはヘラ削り調整の痕が残る。色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい褐色を呈する。665は脚柱部がほぼ完存するもので、底径10.8cmを測る。外面はタテ方向の丁寧なナデ調整、裾部はヨコナデ調整、脚柱部内面はヘラ削り調整の後にナデ調整を施し、上部にはしぼり目が残る。胎土には赤色風化砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。666は脚柱部がほぼ完存するもので、底径9.4cmを測る。脚柱部内面はヘラ削り調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄褐色を呈する。667は脚柱部が残存するもので、外面にはヨコナデ調整、内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

668は脚柱部がなだらかに開き、明瞭な裾部を持たない3類で、杯底部と脚柱部が残存し、底径10.8cmを測る。脚柱部外面にはナデ調整、内面にはヘラ削り調整を施す。胎土は赤色風化砂粒を多く含み、色調は、外面がにぶい橙色、内面が褐灰色ないしにぶい橙色を呈する。

手づくね土器 (Fig.68-669-674)

669-674は手づくね土器である。669は壺形を模倣したA-1類で、口径5.2cm、器高6.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、外面はナデ調整とヘラナデ調整、内面は指押えの後に指ナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は、外面がにぶい赤褐色、内面が明赤褐色を呈する。

670-673は粗雑な作りのB類である。670はほぼ完形で、口径5.0cm、器高3.1cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。内外面とも比較的丁寧にナデ調整を施す。胎土には小礫を含み、色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい褐色を呈する。671は約1/2が残存し、口径5.0cm、器高4.0cmを測る。内外面とも指ナデ調整を施す。色調は、外面がにぶい橙色、内面が橙色を呈する。672は約1/2が残存し、口径4.9cm、器高4.8cm、底径1.3cmを測る。体部はほぼ上方に延び、口縁端部を連続して摘み上げ外傾さす。内外面ともナデ調整を施すが、大半は未調整で指押えの痕が残る。色調は、外面がオリーブ黒色、内面が暗灰黄色を呈する。673はほぼ完存し、口径4.8cm、器高4.1cmを測る。内外面とも指ナ

デ調整を施し、口縁端部を摘み、先端部を細く仕上げる。色調は、外面が暗灰色、内面が灰黄色を呈する。674は口縁部の一部を欠くもので、口径5.3cm、器高3.9cm、底径2.8cmを測る。内外面とも指ナデ調整を施す。体部下半に2カ所に黒斑が認められ、色調は、外面がにぶい橙色、内面が灰黄色を呈する。

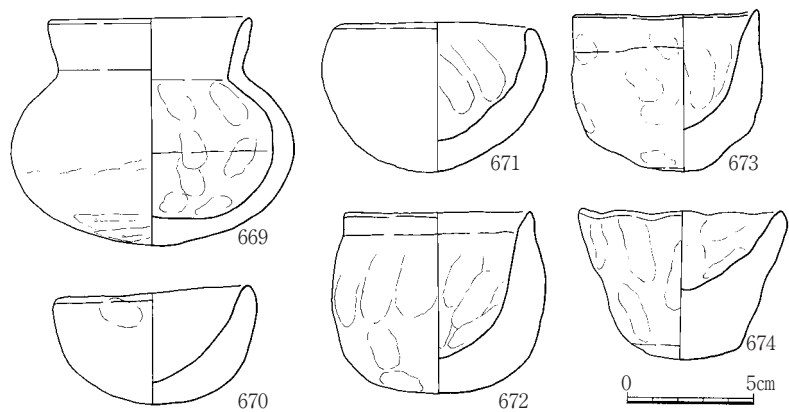


Fig.68 SF-5出土遺物実測図6

須恵器 (Fig.69-675-679)

675・676は杯蓋である。675は約1/2が残存し、口径12.5cmを測る。天井部は丸く、稜は断面三

角形をなし、口縁部はやや開き気味に下り、端部は内傾して凹面をなす。天井部約3/4に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色を呈する。676は約1/4が残存し、口径11.2cm、器高4.5cmを測る。天井部は丸く、稜は凹線を巡らして表現する。口縁部は内湾気味に下り、端部は段状をなす。天井部約2/3に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施し、天井部内面中央にタタキ目が認められる。色調は内外面とも灰色を呈する。

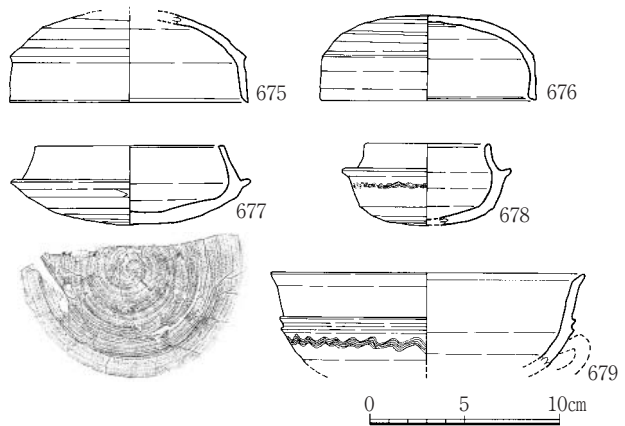


Fig.69 SF-5出土遺物実測図7

677・678は杯身である。677は約2/3が残存し、口径9.9cm、受部径12.7cm、器高4.2cmを測る。口径が小さく、立ち上がりは内傾し、端部を平らに仕上げる。底部は浅く、丸い。底部外面約3/4が回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。底部外面にヘラ記号が残る。色調は内外面とも灰色を呈する。678は約1/4が残存し、口径6.5cm、受部径8.9cm、器高4.2cmを測る。立ち上がりは内傾し、端部は外傾する平面をなす。体部外面には1条の5本単位の櫛描波状文を巡らす。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色を呈する。

679は無蓋高杯で、把手の痕跡が残る。口縁部の一部が残存し、口径15.9cmを測る。口縁部外面には2条の断面三角形の凸帯と6本単位の櫛描波状文が巡る。波状文の下端に環状把手の痕跡が1ヵ所残る。器面は回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色を呈する。

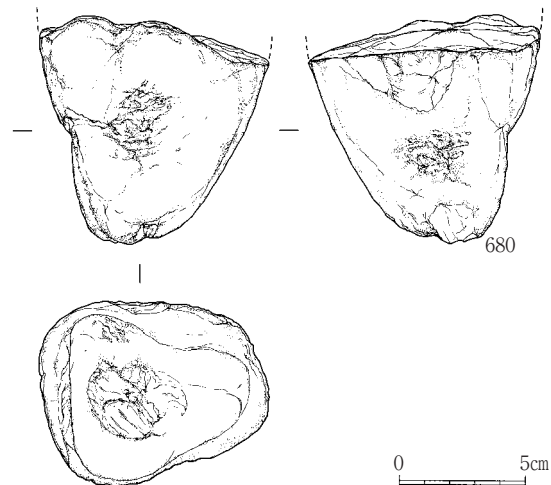


Fig.70 SF-5出土遺物実測図8

石製品 (Fig.70-680)

680は叩石で約1/2が残存する。残存する部分で全長9.0cm、全幅9.0cm、全厚7.3cm、重量625.0gを測る。2面に敲打痕が残る。石材は砂岩である。

SF-6 (Fig.71)

調査区西端、SF-5の西隣りに位置する祭祀関連遺構で、標高4.20~4.30mで検出され、東西3m、南北4mの範囲に遺物が比較的まとまって出土した。他の遺構と比較すると遺物の密度・数量とも低い。土師器鉢(687)・直口壺(681)、手づくね土器(688)が直線状に並んだ状態で出土し、かつ約2m東にはそれらの遺物と平行する形で他の遺物が出土している。なお、分布状態からみると西側に拡がりが続くものとみられる。また、Ⅲ-2区で検出した建物跡とは隣接するものとみられる。遺物はすべて土師器で、約60点が出土し、壺、甕、鉢、高杯、手づくね土器で構成され、細片のほと

んどは甕と考えられる。これら遺物のうち、図示できたのは土師器8点(681~687)と手づくね土器1点(688)であった。

出土遺物

土師器 (Fig.72-681~687)

681は直口壺で、C類に当たる。口縁部を欠損し、胴径9.6cm、残存高6.4cmを測る。胴部は球形をなし、外面に径約2cmの黒斑が残る。内面には指ナデ調整を施す。胎土には多量の砂粒と赤色風化砂粒を含み、色調は、外面が浅い黄橙色、内面が灰白色を呈する。

682~686は甕である。682~684は口縁部が残存するもので、682・683がA-2類、684がB-2類である。682は約1/4が残存し、口径17.0cmを測る。胎土は1~4mmの砂粒を多く含み、色調は内外面

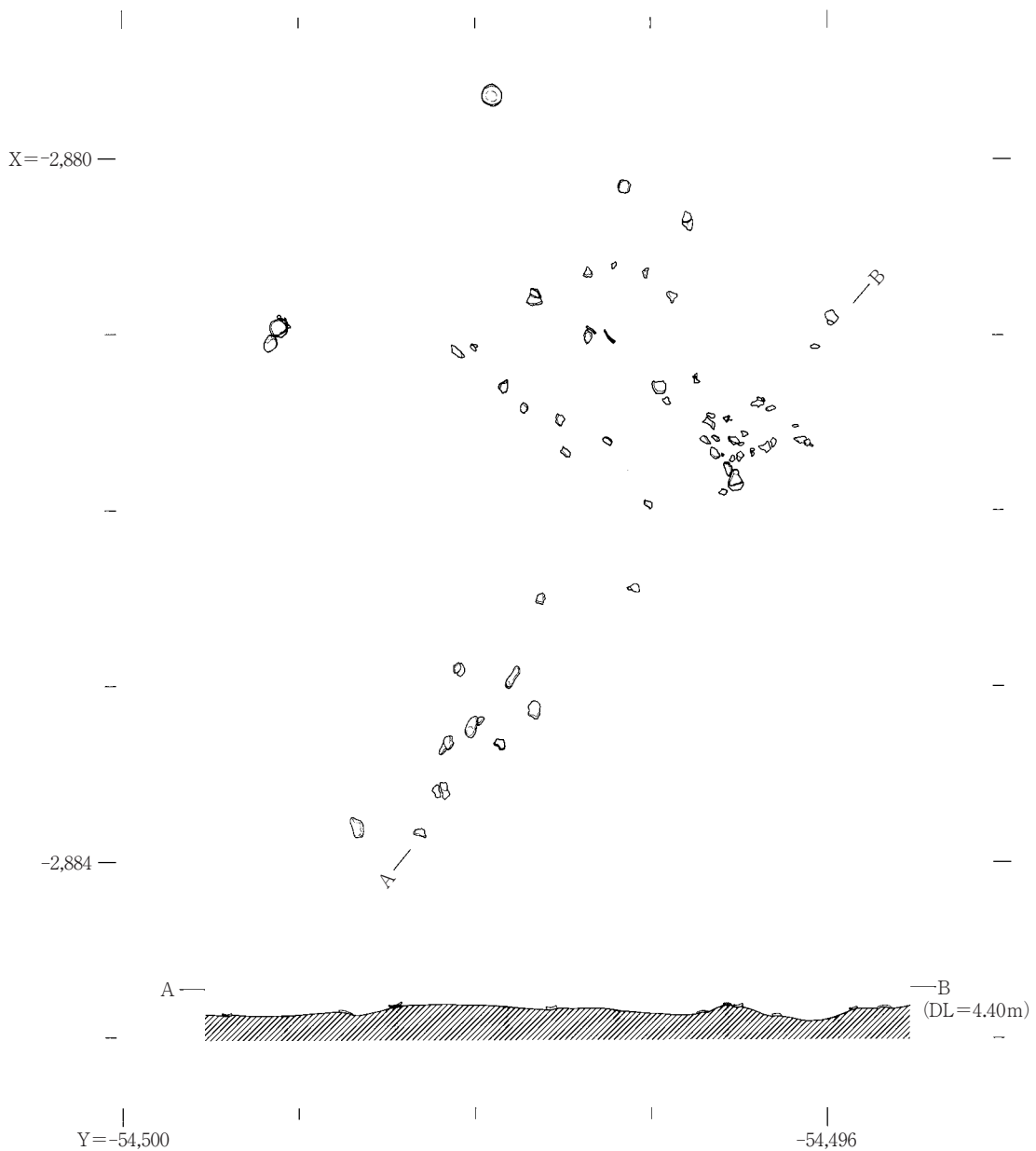


Fig.71 SF-6

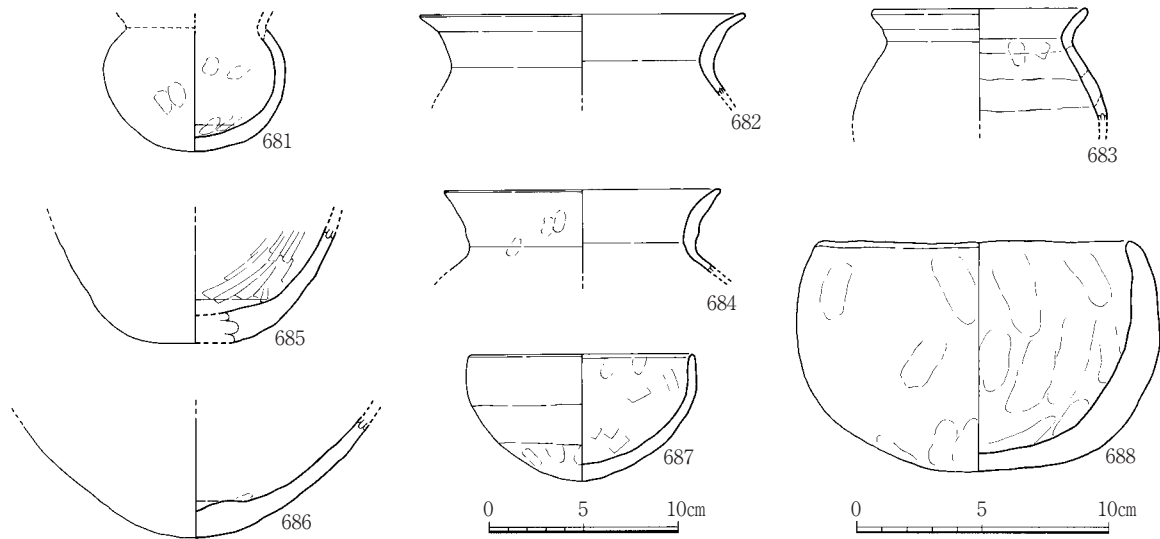


Fig.72 SF-6出土遺物実測図

とも橙色を呈する。683は約1/5が残存し、口径11.2cmを測る。口縁部内面の一部には煤が付着する。胴部内面には粘土紐接合痕が残る。684は約1/4が残存し、口径14.5cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。685・686は底部が残存するもので685は平底状を呈し、約1/2が残存する。内底面の中心部から上方にヘラナデ調整、外面にはナデ調整を施す。内底面には煤が付着する。色調は、外面がにぶい橙色、内面が灰黄褐色を呈する。686は丸底を呈する甕である。内面はナデ調整と一部ヘラナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

687は椀状を呈する鉢で、B-1類に当たる。ほぼ完存し、口径11.7cm、器高6.7cmを測る。底部は尖底気味で、口縁部は内湾する。内面は放射状にヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。外面はナデ調

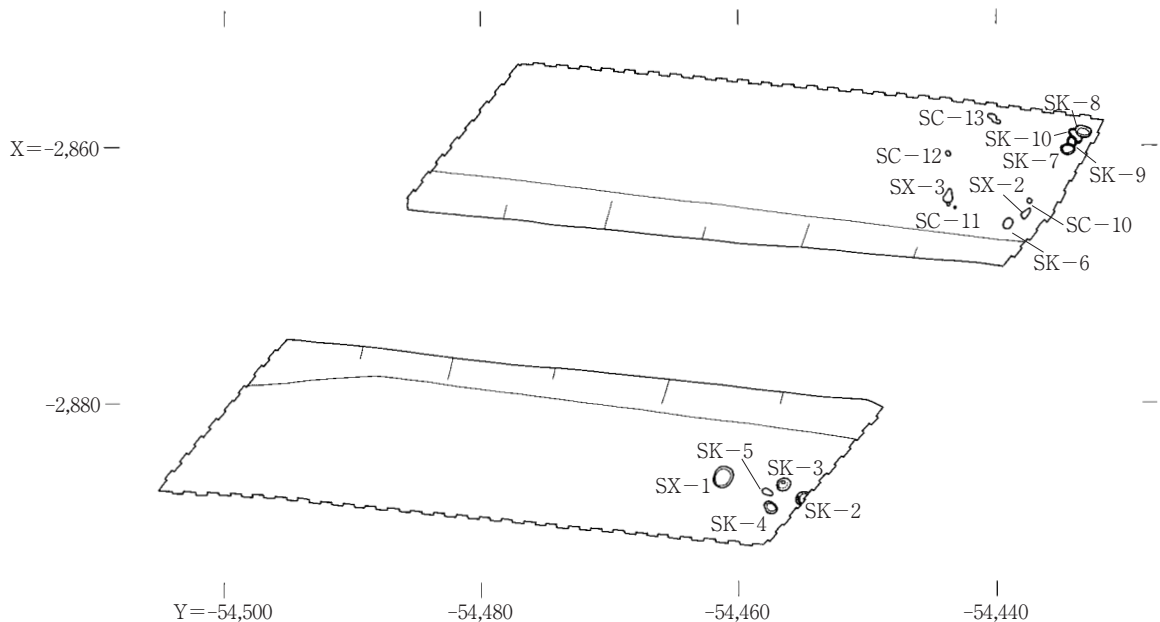


Fig.73 古代遺構配置図(S=1/600)

整で、底部以外に薄く煤が付着する。色調はにぶい橙色ないし褐灰色を呈する。

手づくね土器 (Fig.72-688)

688は鉢状を呈するもので、A-3類に当たる。約1/2が残存し、口径8.2cm、器高6.0cmを測る。口縁部が内湾する比較的大型のもので、器面には指ナデ調整を施す。また、底部には煤が付着する。胎土は精良で、色調は内外面とも灰黄色を呈する。

(2) 古代

本調査区では、Ⅲ-2区の調査の結果から古墳時代に加えて、古代の遺構・遺物が存在する可能性も考えられていた。調査の結果、調査区東端の地表下1.5mで、東西約12m、南北約7mの範囲から古代の遺構・遺物を検出することができた。

検出された遺構は、土坑4基(SK-2~5)、性格不明遺構1基(SX-1)であった。そのうちSK-5は、SK-3・4の間に位置し、炭化物・焼土・灰が集中し、一定の盛り上がった形をなす炭化物集中遺構でもあるが、浅いながら一定の掘り方を持つ。SK-2~4は近接して検出され、いずれも似た形と規模をなすが、出土遺物はそれぞれ異なる特徴を持つ。これら遺構からは通常の土器の他に官衙関連遺跡からの出土例が多い製塩土器や多量の土錘が出土しており、その性格が注目される。

① 土坑

SK-2 (Fig.74)

調査区東端、排水溝掘削時に検出した方形とみられる土坑で、東半分は調査区外に続く。長径1.00m、短径0.65m、深さ22cmを測り、底面からピットを検出した。断面形状は逆台形状をなし、埋土は4層に分層される。1層は灰褐色シルト、2層は炭化物を多く含む暗灰褐色粘土、3層は明黄褐色シルトのブロックを含む暗灰褐色粘土、4層は灰色粘土であった。遺物は土師器片40点、須恵器片2点、土錘3点がみられ、土師器片のうち7点が皿、杯等の黄白色を呈す供膳具であり、底部の判明するものはすべて平底である。その他に在地産とみられる長胴甕片6点、内面に布目が残る製塩土器細片2点(39.1g)がある。また、ピットからは土錘3点と土師器片19点が出土している。これらのうち、土師器1点(689)と土錘4点(690~693)を図

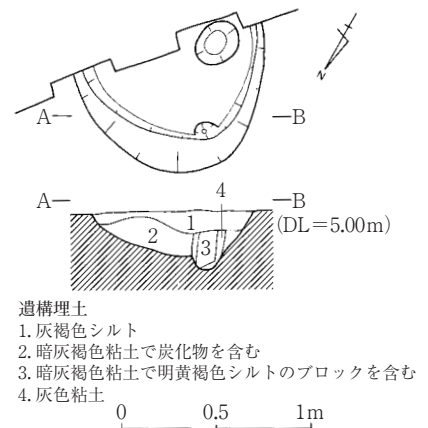


Fig.74 SK-2

と土錘4点(690~693)を図

示することができた。

出土遺物

土師器 (Fig.75-689)

689は長胴甕で、口縁部の一部が残存する。口縁部は外傾し、端部は上方にわずかに肥厚する。口

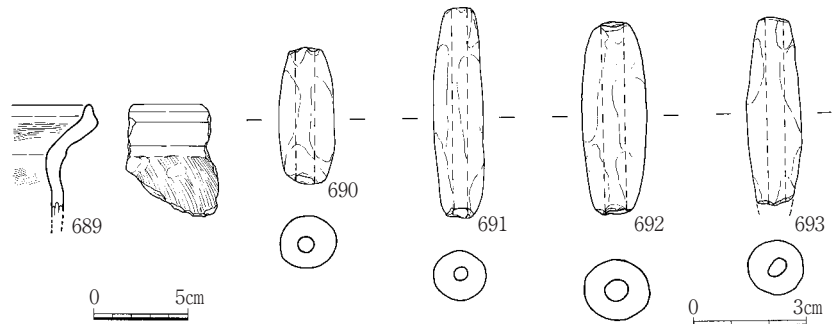


Fig.75 SK-2出土遺物実測図

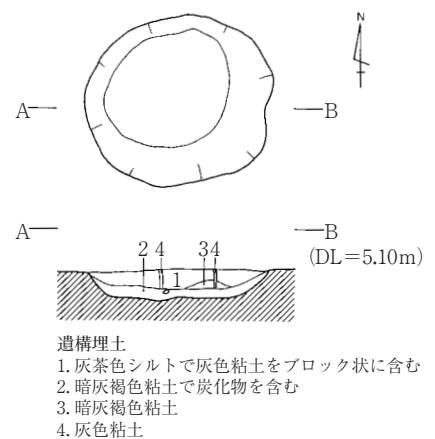
縁部はヨコナデ調整、内面にはヨコ方向、胴部外面にはタテ方向のハケ目が残る。また、口縁部や内面の一部には煤が付着する。色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。

土製品 (Fig.75-690~693)

690~693は管状土錘で、4点とも紡錘形をなす。胎土はすべて精良で、砂粒をほとんど含まない。690は、全長3.6cmと出土土錘の中では短く、重量も5.6gと最も軽い。色調も他の3点とは異なり、赤みの強い橙色を呈する。691は最大幅1.7cm、重量10.9gとやや大型で、紐孔も0.6cmと太い。692と693はピットからの出土である。691と693は大きさ・形状・色調ともほぼ同じである。

SK-3 (Fig.76)

調査区東端、SK-2の西側で検出した不整円形の土坑で、長径1.04m、短径0.95m、深さ22cmを測る。埋土は大きく2層に分かれ、1層が灰色粘土のブロックを含む灰茶色シルト、2層が炭化物を含む暗灰褐色粘土で、間層に暗灰褐色粘土と柱状に灰色粘土の堆積が認められた。遺物には、土師器・土師質土器片68点、須恵器片5点、土錘33点、製塩土器片2点(17.8g)、2次焼成を受けた河原石1点がみられた。SK-2同様、遺物のほとんどが土師器・土師質土器片であるが、供膳具と土錘が多い。色調は黄白色ないし赤褐色を呈し、黄白色のものが多数を占める。また、出土した甕口縁部の一部がSX-1からも出土している。須恵器のうち4点は供膳具で、残りの1点は甕である。土錘の出土量が多く、漁網に付いた状態であった可能性も考えられるが、出土状態からその痕跡を確認することはできなかった。これらのうち、土師器1点(694)、土師質土器1点(695)、土錘11点(696~706)を図示することができた。



遺構埋土
 1. 灰茶色シルトで灰色粘土をブロック状に含む
 2. 暗灰褐色粘土で炭化物を含む
 3. 暗灰褐色粘土
 4. 灰色粘土

Fig.76 SK-3

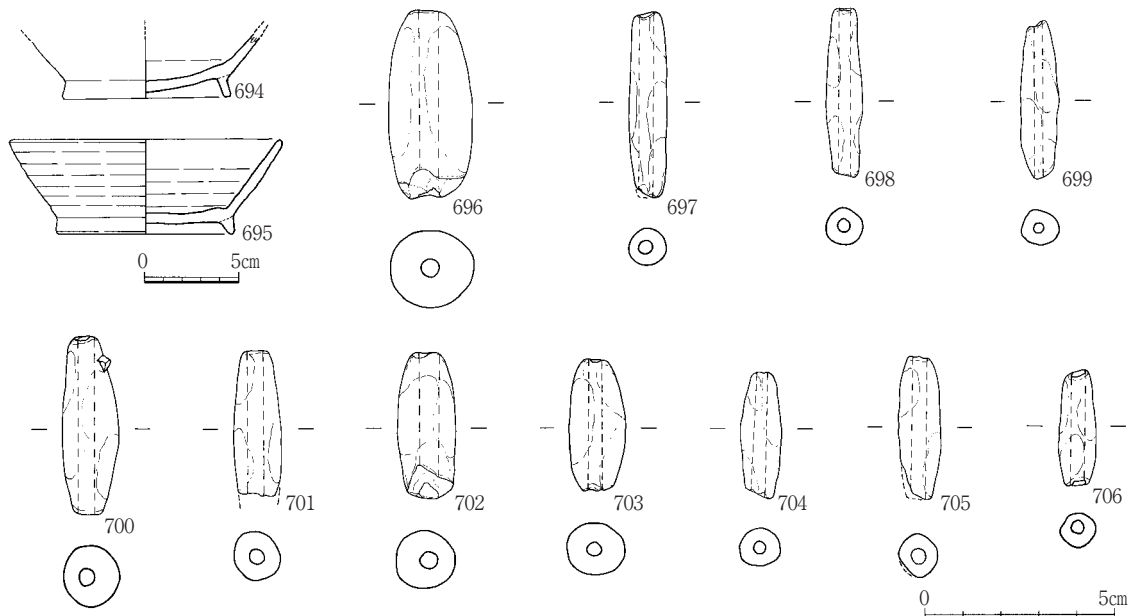


Fig.77 SK-3出土遺物実測図

出土遺物

土師器 (Fig.77-694)

694は椀で、底部約1/2が残存する。底径8.8cmを測り、外底面端部には高さ1.0cmの高台が付く。器面は摩耗が著しい。胎土は精良で、色調は内外面とも赤みの強い橙色を呈する。

土師質土器 (Fig.77-695)

695は椀で、約1/3が残存し、口径14.0cm、器高5.0cm、底径9.1cmを測る。粘土紐巻き上げロクロ成形で、外底面には回転ヘラ切り痕、体部にはロクロ目が残る。色調は、外面が灰白色ないし橙色、内面が浅黄橙色を呈する。

土製品 (Fig.77-696~706)

696~706は管状土錘である。全長3.1~5.6cm、重量2.1~20.2gを測り、ほとんどが紡錘形をなす。

SK-4 (Fig.78)

調査区東端、SK-3の南西で検出した不整楕円形の土坑で、長径1.03m、短径0.85m、深さ約10cmを測る。埋土は単一層で、多量の製塩土器を含む暗灰褐色シルト質粘土であった。遺物には土師器・土師質土器片36点、須恵器片6点、土錘4点、製塩土器片(2,503.9g)、軽石1点がみられた。それらの遺物の中では、上層からまとめて出土した製塩土器が注目される。これらのうち、土師器1点(707)、須恵器1点(708)、土師質土器1点(709)、製塩土器5点(710~714)、土錘4点(715~718)を図示することができた。

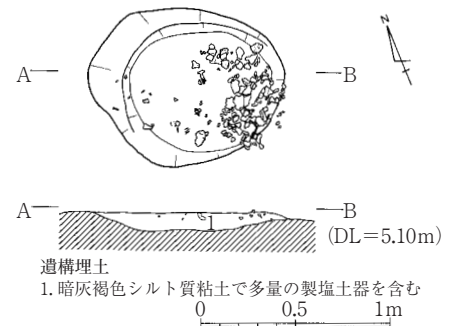


Fig.78 SK-4

出土遺物

土師器 (Fig.79-707)

707は杯で、約1/4が残存し、口径11.6cm、器高2.4cm、底径6.8cmを測る。口縁部は外上方に延び、端部を細く仕上げる。器面は摩耗が著しく、調整は不明である。胎土は精良で、色調は内外面とも比較的赤みの強い橙色を呈する。

須恵器 (Fig.79-708)

708は杯蓋で、一部が残存し、口径15.4cmを測る。器面は回転ナデ調整を施す。焼成は不良で、色調は、外面は灰黄橙色、内面がにぶい黄褐色を呈する。

土師質土器 (Fig.79-709)

709は皿で、口縁部の一部が残存し、口径13.6cmを測る。口縁部は外上方に延び、端部を丸く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施す。胎土には黒色の細粒を比較的多く含み、色調は内外面とも灰白色を呈する。

製塩土器 (Fig.79-710~714)

5点のうち、3点は口縁部(いずれも約2/5が残存)、2点は底部である。口径は23.4~23.9cm、器壁は厚く最大で1.4cmを測る。いずれも胎土には細砂粒を少量含み、色調は内外面ともに橙色を呈する。粘土紐を円筒形の型に積み上げて成形したとみられ、内面には布目痕が残り、口縁部は胴部から外傾

し、口縁外端部を約1.5cmの幅で斜めに切り落す。外面には粘土紐接合の際の指押えの痕がヨコ方向に連続して残る。また、一部に被熱による変色とみられる痕跡が残るものの、煤の痕跡はいずれの土器にも認められなかった。710は口径23.5cmを測り、内面には布目痕が明瞭に残る。711は口径23.9cmを測る。712は口径23.4cmを測り、布目痕は摩耗と剥離により、不明瞭な部分が多い。713は丸底の底部で、内面には布目痕が残る。底部外面には被熱により変色した部分がみられる。714は平底状をなす底部で、器壁は最大で1.4cmを測る。底部外面には被熱とみられる痕跡が残る。

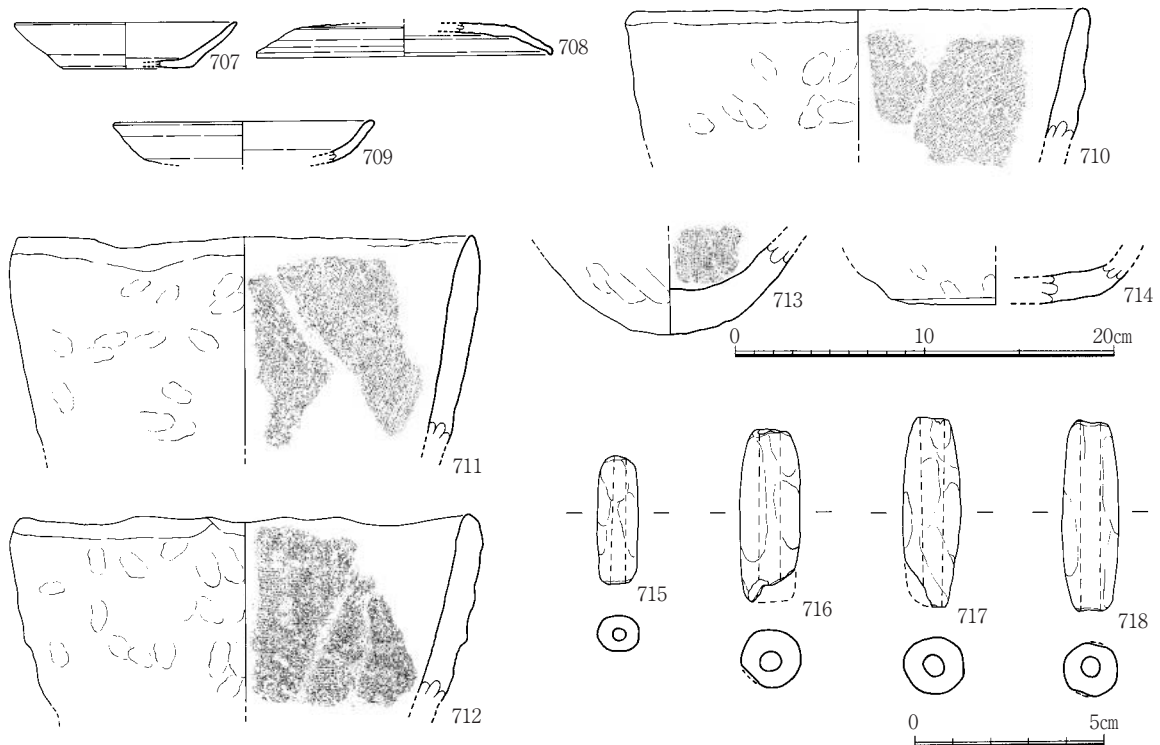


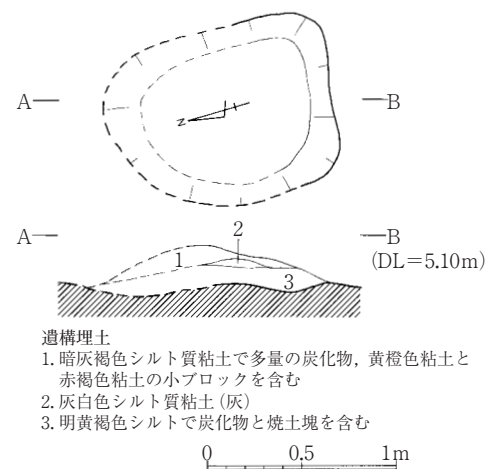
Fig.79 SK-4出土遺物実測図

土製品 (Fig.79-715~718)

715~718は管状土錘で、円筒形と紡錘形をなすものがみられる。全長3.4~5.1cm、重量3.4~8.8gを測る。

SK-5 (Fig.80)

調査区東端、SK-3とSK-4の間で検出した不整円形の土坑で、北半分は地盤のボーリング調査の際に壊されており、推定長径約1.20m、短径0.86m、厚さ25cmを測る。検出面には多量の炭化物がみられた。埋土は3層に分層され、1層が多量の炭化物、黄橙色粘土と赤褐色粘土の小ブロックを含む暗灰褐色シルト質粘土、2層が灰層で灰白色シルト質粘土、3層が炭化物と焼土塊を含む明黄褐色シルトとなっていた。遺物には土師器・土師質土器片80点、須恵器片7点があり、土錘の出土は見られなかった。土師器片の大



- 遺構埋土
 1. 暗灰褐色シルト質粘土で多量の炭化物、黄橙色粘土と赤褐色粘土の小ブロックを含む
 2. 灰白色シルト質粘土 (灰)
 3. 明黄褐色シルトで炭化物と焼土塊を含む

Fig.80 SK-5

半は甕片で、須恵器片の多くは甕片であった。これらのうち、土師器2点(719・720)が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.82-719・720)

2点とも甕で、719は約3/4が残存し、口径25.0cm測る。胴部はほぼ直立し、口縁部は外傾し、端部を上方に若干肥厚する。胴部外面にはタテ方向、口頸部内面にはヨコ方向のハケ調整を施し、外面を中心に口縁部にはヨコナデ調整、胴部内面にはナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい橙色ないし灰褐色を呈する。720は約1/5が残存し、口径17.8cm、胴径18.0cmを測る。胴部は内湾して上がり、口縁部は外傾し、端部を上方に若干肥厚する。口縁部にはヨコナデ調整、胴部外面にタテ方向のハケ調整、内面にはナデ調整を施す。色調は内外面とも灰白色ないし褐灰色を呈する。

② 性格不明遺構

SX-1 (Fig.81)

調査区東部、SK-2~4の西側で検出した隅丸方形の浅い遺構で、長辺1.62m、短辺1.52m、深さ18cmを測る。断面は舟底状をなし、埋土は灰色粘土をブロック状に含む暗灰褐色シルト質粘土の単一層である。遺物には土師器・土師質土器片64点、須恵器片7点、土錘9点、製塩土器片数点(50.9g)がみられ、SK-2から出土した甕と同一個体が出土する。これらのうち土師器3点(721~723)と土錘1点(724)を図示することができた。

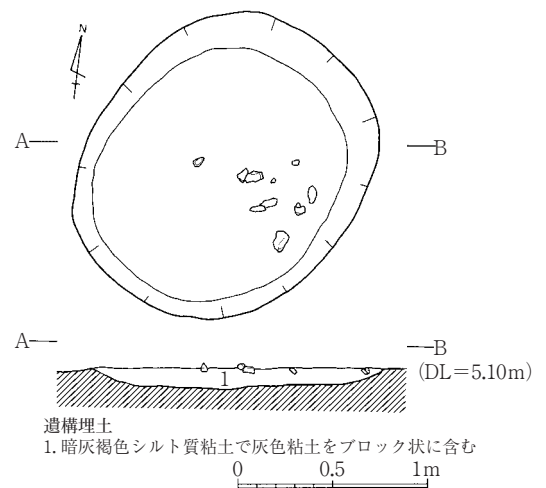


Fig.81 SX-1

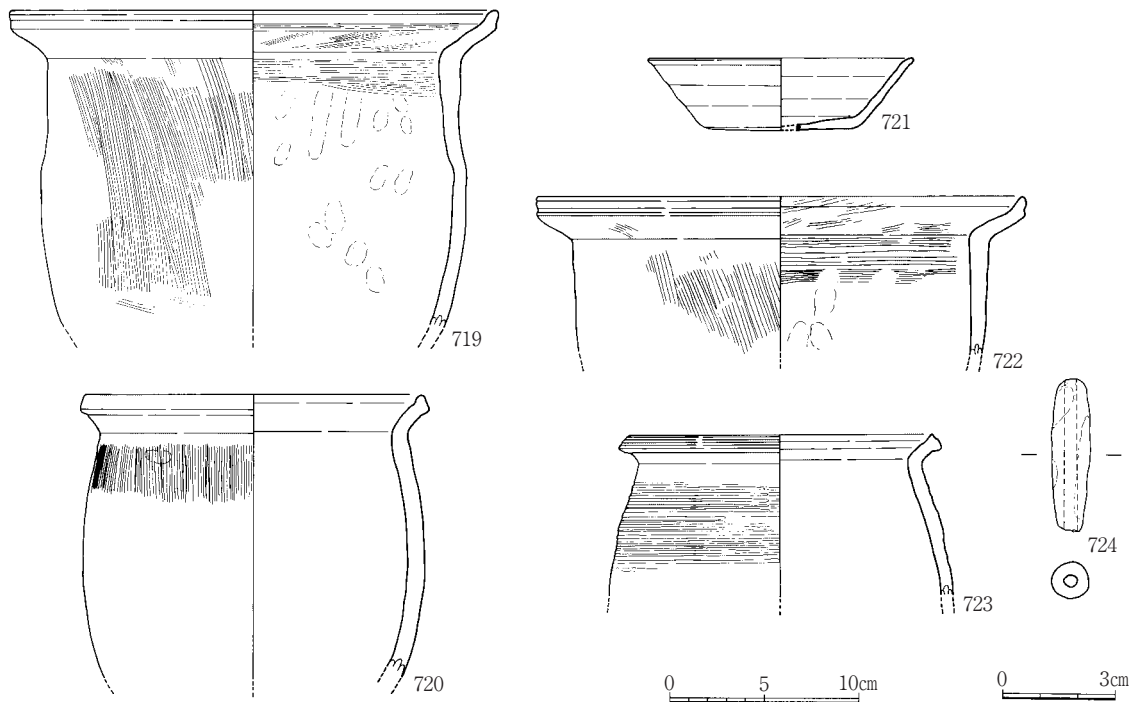


Fig.82 SK-5, SX-1出土遺物実測図

出土遺物

土師器 (Fig.82-721~723)

721は杯で、約1/4が残存し、口径13.8cm、底径7.5cm、器高3.8cmを測る。底部内面にはナデ調整の痕が残る。色調は、外面が淡黄橙色、内面が灰白色を呈す。722は約1/5が残存し、口径25.5cmを測る。口縁部内面には斜め方向、頸部内面にはヨコ方向、胴部外面にはタテ方向のハケ調整を施し、口頸部にはヨコナデ調整を加える。色調は、外面が灰黄褐色ないしにぶい赤褐色、内面が灰黄褐色を呈す。723は口縁部が短い甕で、約1/5が残存し、口径16.0cmを測る。最大径は胴部にあり、胴部外面にはヨコ方向の粗いハケ調整を施す。また、頸部から上胴部外面には煤が付着する。SK-3から同一個体が出土する。

土製品 (Fig.82-724)

724は管状土錘で、円筒形をなし、長さ4.1cm、重量3.1gを測る。

(田坂)

2. II 区

(1) 弥生時代

明確な弥生時代の遺構と遺物が確認されたのはII区の東側である。平成10年度に行われた試掘調査でII区にかかるトレンチから弥生時代の遺物が確認されていたため、各調査区にトレンチを設定した。I区においては炭化物や焼土の集中を数カ所確認したが遺物が伴わず、時期および性格についても把握することはできなかった。II区では土坑1基(SK-1)と炭化物・焼土集中を9カ所(SC-1~9)確認した。炭化物・焼土集中(Fig.3, Tab.1)は調査区東側に点在し、堆積の厚さは特記するもの以外すべて5cm以下と浅く、明確な掘方を持たず遺物は出土していない。I区で確認された炭化物や焼土の集中も同様のものと考えられ、周辺一帯に広がっているものとみられる。

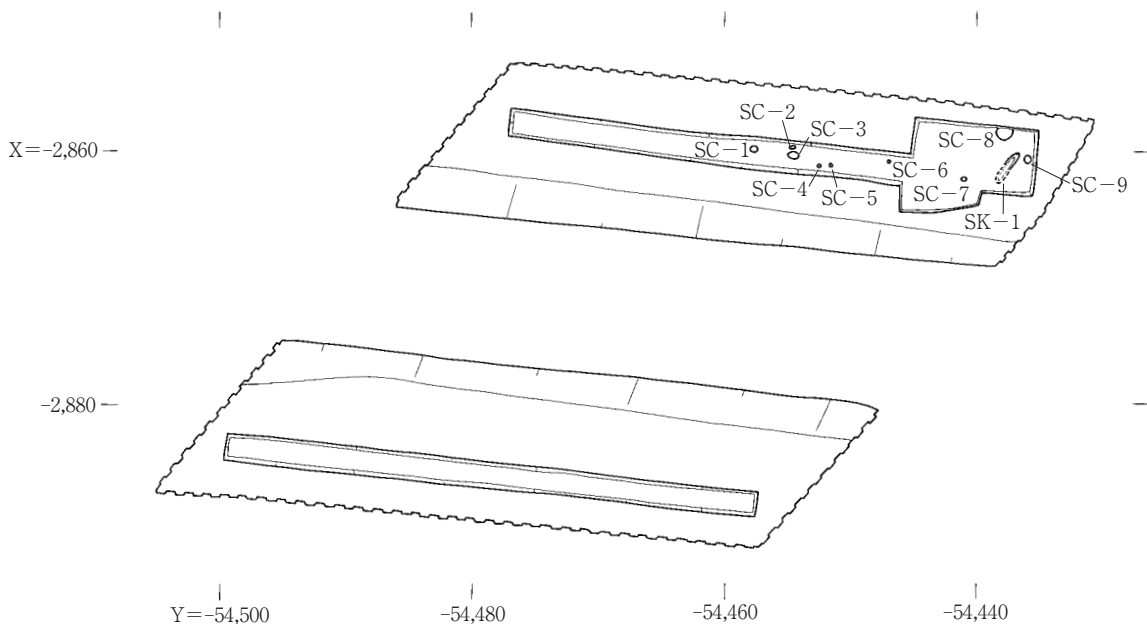


Fig.83 弥生時代遺構配置図 (S=1/600)

① 土坑

SK-1 (Fig.84)

調査区東部，第XIa層中で炭化物，灰，焼土，骨片と共に土器の集中が確認され，第XII層上面で検出した舟形土坑で，長辺1.36m，短辺0.30mを測る。上層(1・2層)に炭化物と灰黄色シルトとなった灰，焼土が堆積し，遺物は1層から3層までに集中しており，4層は遺物を含まない均質な暗灰褐色粘土である。また，灰中からは骨片とみられるものが検出された。遺物は47点出土し，弥生土器壺・甕(すべて貼付口縁)，円礫(9.5×8.0×5.7cm)がみられ，このうち8点(725～732)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.85-725～732)

725は二重口縁壺で，口縁部の一部が残存し，口径15.4cmを測る。内面頸部と口縁部の境に円形浮文，口縁部外面に格子状にハケ状工具による刺突文，頸部外面にはヨコ方向の櫛描直線文を施す。胎土には3mm以下の砂粒を含み，色調は，内面がにぶい黄橙色，外面がにぶい黄

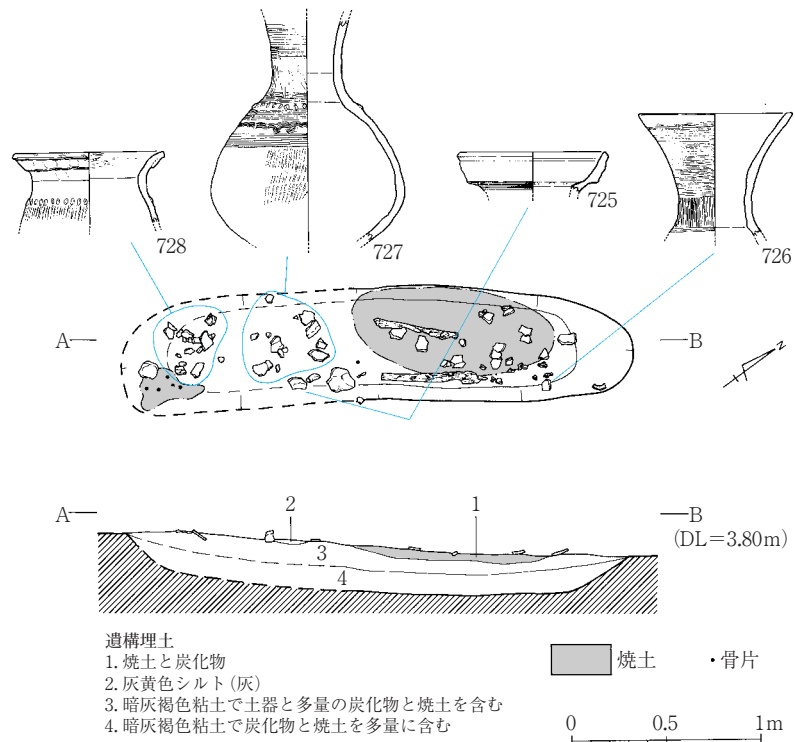


Fig.84 SK-1

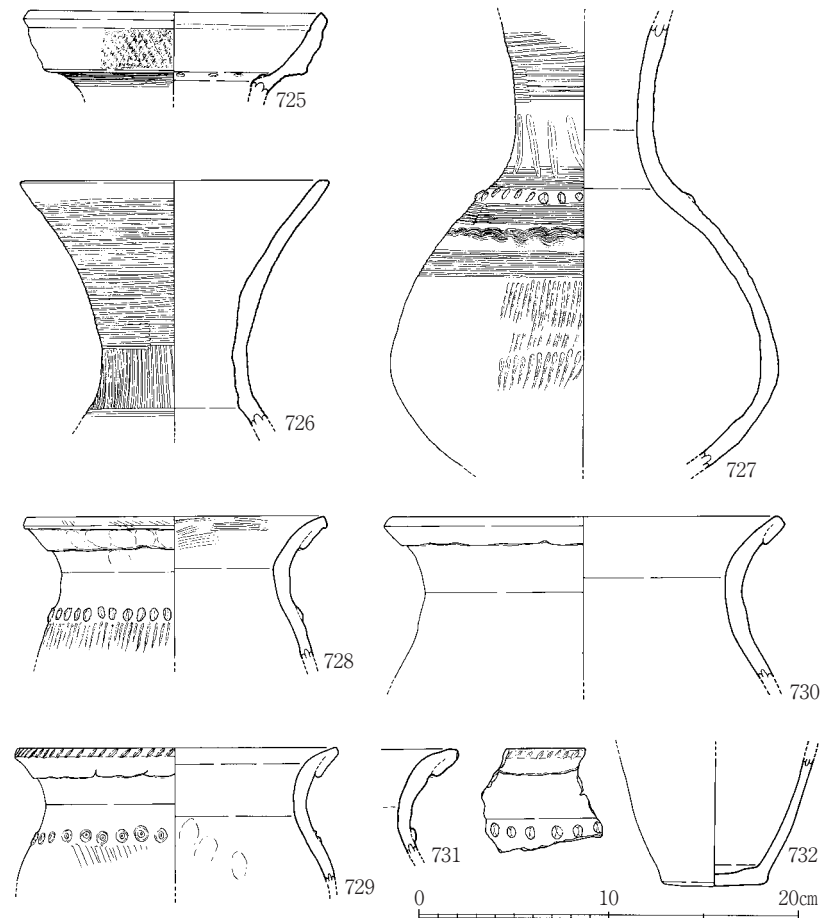


Fig.85 SK-1出土遺物実測図

褐色を呈する。726・727は長頸壺で、726は約1/3が残存し、口径16.0cmを測る。口縁部はほぼ直立する頸部から緩やかに外傾し、端部は水平な面をなす。頸部に6本単位の櫛描直線文をタテ方向に施した後、口縁部外面にヨコ方向に同様の櫛描直線文を施す。胎土には7mm以下の砂粒を多量に含み、色調は内外面とも灰白色を呈する。727は頸部から胴部の約2/3が残存し、残存高23.4cm、胴部最大径20.4cmを測る。外面は上からタテ方向の櫛描直線文、右下がりの棒状工具による刺突文、ヨコ方向の櫛描直線文、円形ないし楕円形をなす浮文、ヨコ方向の櫛描直線文、櫛描波状文、ヨコ方向の櫛描直線文、ハケ状工具による3段の列点文を施す。胎土には6mm以下の砂粒を多量に含み、焼成はやや不良で、色調は内外面とも灰色を呈する。

728～732は甕である。728は口縁部約1/4が残存し、口径15.6cmを測る。口縁部外面に幅約2.0cmの粘土帯を貼付し、外面に指頭圧痕を残す。上胴部には棒状浮文を付し、その下に列点文を施す。胴部内面および頸部外面にはヨコナデ調整を施す。729は口縁部約1/3が残存し、口径16.7cmを測る。口縁部外面に幅約1.8cmの粘土帯を貼付し、ヨコナデ調整を施す。上胴部には中央に刺突を施した円形浮文を付し、その下にタテ方向のハケ調整を施す。730は口縁部約1/3が残存し、口径20.2cmを測る。口縁部外面には幅約1.6cmの粘土帯を貼付し、ヨコナデ調整を加える。731は甕の口縁部破片で、外面には幅約1.8cmの粘土帯を貼付し、ヨコナデ調整を加える。口縁端部には刻み目を施し、上胴部に円形浮文を付す。732は底部と下胴部の約1/2が残存し、底径5.2cmを測る。内外面ともナデ調整を施す。胎土には5mm以下の砂粒を多く含み、色調は、外面が褐灰色、内面がにぶい褐色を呈する。

Tab.3 炭化物集中遺構計測表

遺構名	長軸	短軸	深さ	平面形	検出標高	備考
SC-1	0.62	—	—	円形	3.52～3.53	
SC-2	1.00	0.91	12.00	不整楕円形	3.61～3.63	
SC-3	0.24	—	—	円形	3.42～3.45	
SC-4	0.24	—	—	円形	3.50～3.51	
SC-5	0.24	—	—	円形	3.66～3.68	
SC-6	0.35	0.30	—	楕円形	3.58～3.60	
SC-7	0.13	0.42	6.00	楕円形	3.36～3.37	焼土、焼土塊、炭化物が集中。
SC-8	(1.25)	0.73	5.00	円形	3.84～3.87	焼土が多量に集中する。調査区外に続く。
SC-9	1.00	0.90	13.00	不整円形	3.69～3.71	焼土が多量に集中する。

註 1. 長軸、短軸、検出標高の単位はm、深さの単位はcmである。

2. 計測数値の中で()表示のものは残存長を示す。

(2) 古墳時代

調査区全域に分布しており、掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡1軒、祭祀関連遺構6基を検出した。竪穴住居跡は昭和61年度から実施している具同中山遺跡群の調査で初めて確認されたもので、掘立柱建物跡についても全体が判明したものは今回が最初である。

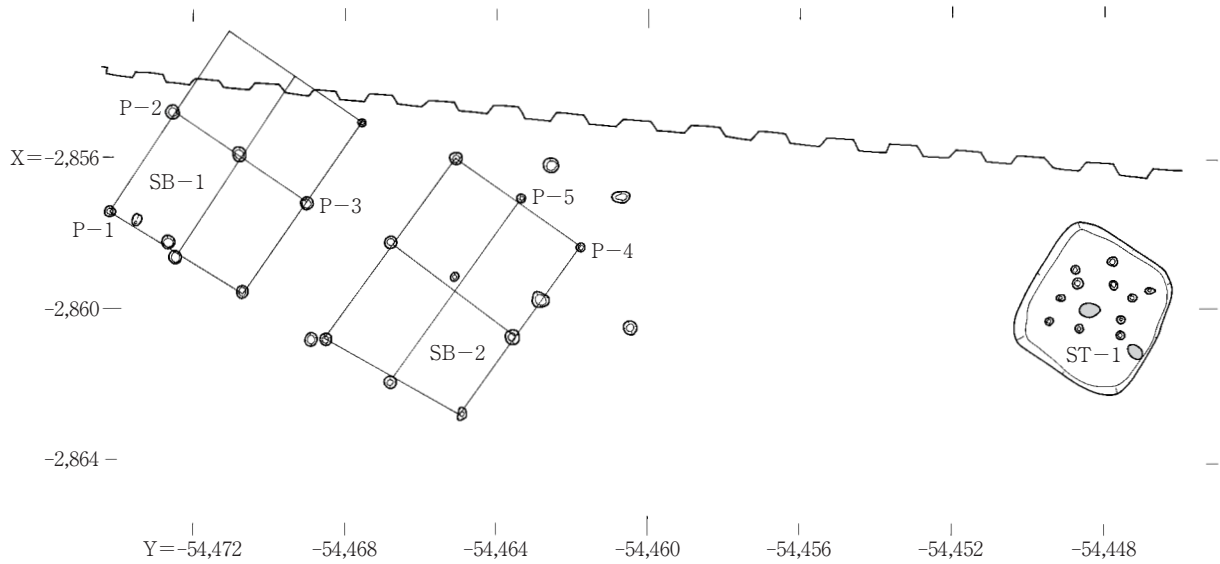


Fig.86 SB-1・2, ST-1遺構平面図(S=1/200)

① 掘立柱建物跡

古墳時代の遺物包含層である第Ⅷa層を掘削した後、第Ⅷb層上面でSB-1の南東隅柱の柱穴と南妻柱西から1間目の柱穴を検出した。2個の柱穴は検出面においてやや紫色を帯びた暗灰褐色を呈しており、第Ⅷb層での検出が可能であったが、他の柱穴はこの面での検出が難しく、さらに下層で検出または柱根による確認となった。柱根は最大で径26.5cmを測るものであった。また、柱穴の掘方は半裁し精査したが、柱根の周囲を暗オリーブ灰色粘土となる埋土が取り巻く他、柱根下にわずかな砂が確認できるものもあった。

なお、2棟の建物は隣接

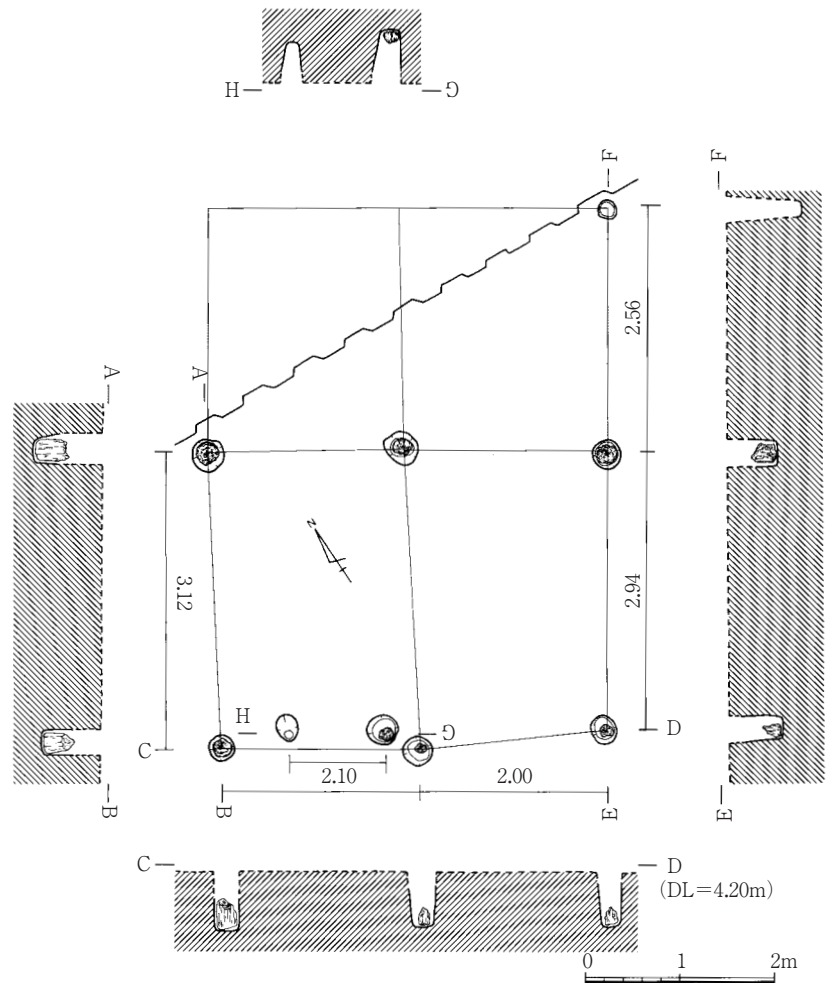


Fig.87 SB-1

しており、1棟の建物であった可能性も残るが、梁間の柱間寸法がそれぞれ約2.00mであるのに対し、建物間は2.50mと広がっていることから2棟の建物が併列していたものと判断した。

SB-1 (Fig.87)

調査区西部、SB-2の西側で検出した梁間2間(4.10m)、桁行2間(5.50m)の南北棟総柱建物(N-35°-E)とみられるもので、北妻柱西側の柱穴2個は調査区外で未確認である。建物の面積は約23.2㎡で、柱間寸法は梁間2.00~2.10m、桁行2.56~3.12mと区々である。柱穴はほぼ円形を呈し、径0.20~0.38mを測り、確認した7個の柱穴のうち6個に柱根が遺存していた。遺物は中央妻柱西から1間目の柱穴と中央妻柱東の柱穴から土師器細片が出土するが、復元できるものはなかった。また、SB-1の南妻柱西側から2個の柱穴が検出され、東側の柱穴には柱根が遺存していた。西側の柱穴は径0.23~0.29m、東側の柱穴は径0.30mを測り、西側の柱穴からは土師器細片が出土している。この2個の柱穴はその位置関係から入り口等建物に付随するものとみられる。

出土遺物

柱根 (Fig.88-733~735)

いずれも樹種はマキ属で、底面に加工痕が残り、平らに仕上げる。733は長径25.7cm、短径24.0cm、

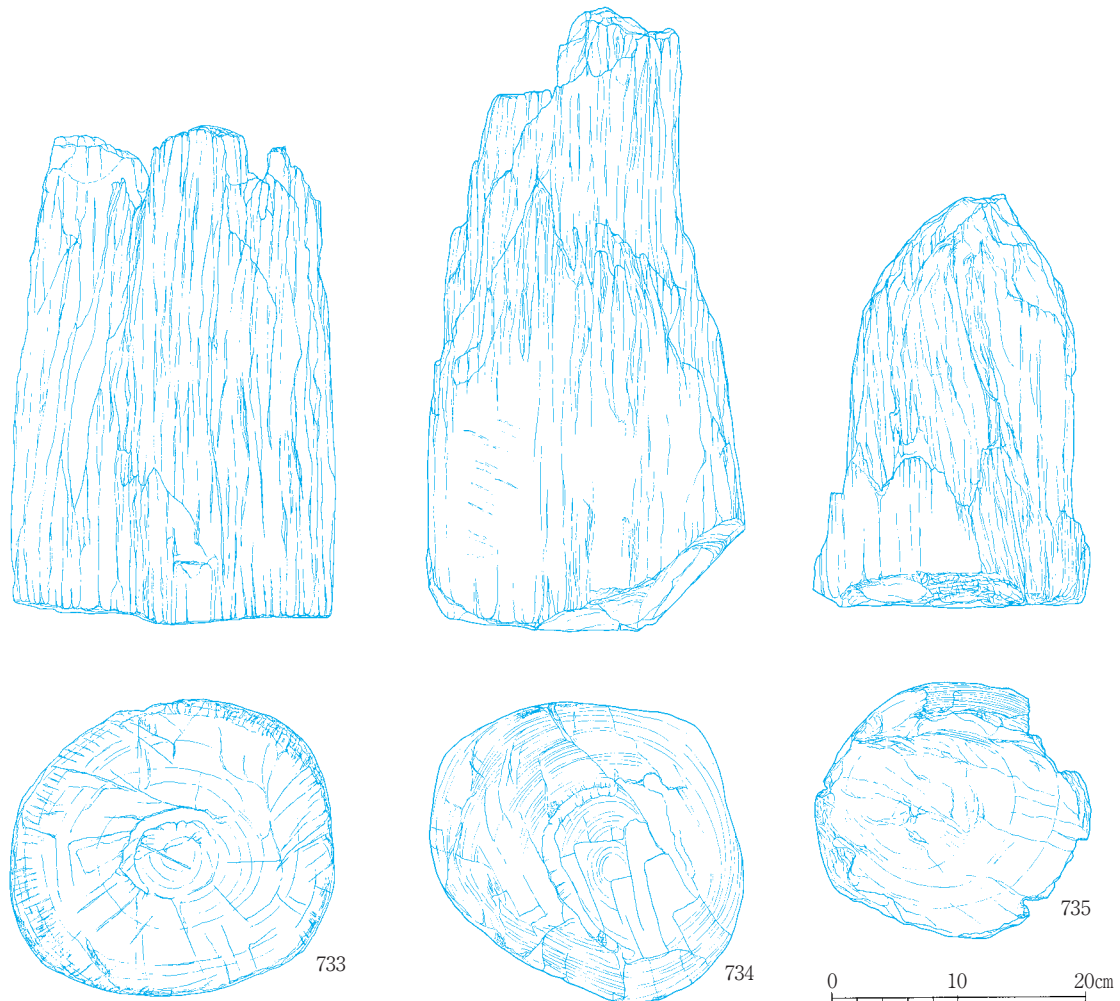


Fig.88 SB-1出土遺物実測図

残存長40.2cmを測り、周囲には一部表皮が残る。734は長径27.0cm, 短径23.2cm, 残存長50.0cmを測る。735は長径22.0cm, 短径20.4cm, 残存長33.2cmを測る。なお, 733はP-1, 734はP-2, 735はP-3から検出した。

SB-2 (Fig.89)

調査区西部, SB-1から約2.5m離れた東側で検出した梁間2間(4.12~4.14m), 桁行2間(5.48~5.98m)の南北棟総柱建物(N-35°-E)である。面積は約22.6㎡で, 柱間寸法は梁間が2.04~2.10m, 桁行が2.42~3.12mと区々である。柱穴はほぼ円形を呈し, 径0.20~0.37mを測り, 確認した9個の柱穴のうち6個に柱根が遺存していた。遺物は皆無であった。

また, SB-2に隣接して柱穴4個を検出した。規模は南西隅柱に隣接する柱穴が径0.29~0.30m, 北側妻柱東端柱の北1.72mに位置する柱穴が径0.21~0.42m, 北側妻柱中央の北1.16mに位置する柱穴が径0.34m, 東側柱北1間目の柱の間に位置する柱穴が径0.34~0.38mを測り, その位置関係から何らかの付随施設の柱穴ではないかとみられる。いずれも遺物は出土していない。

出土遺物

柱根 (Fig.90-736・737)

いずれも樹種はマキ属で, 底面に加工痕があり, 平らに仕上げる。736は長径19.8cm, 短径19.3cm, 残存長10.5cmを測る。737は長径17.8cm, 短径15.5cm,

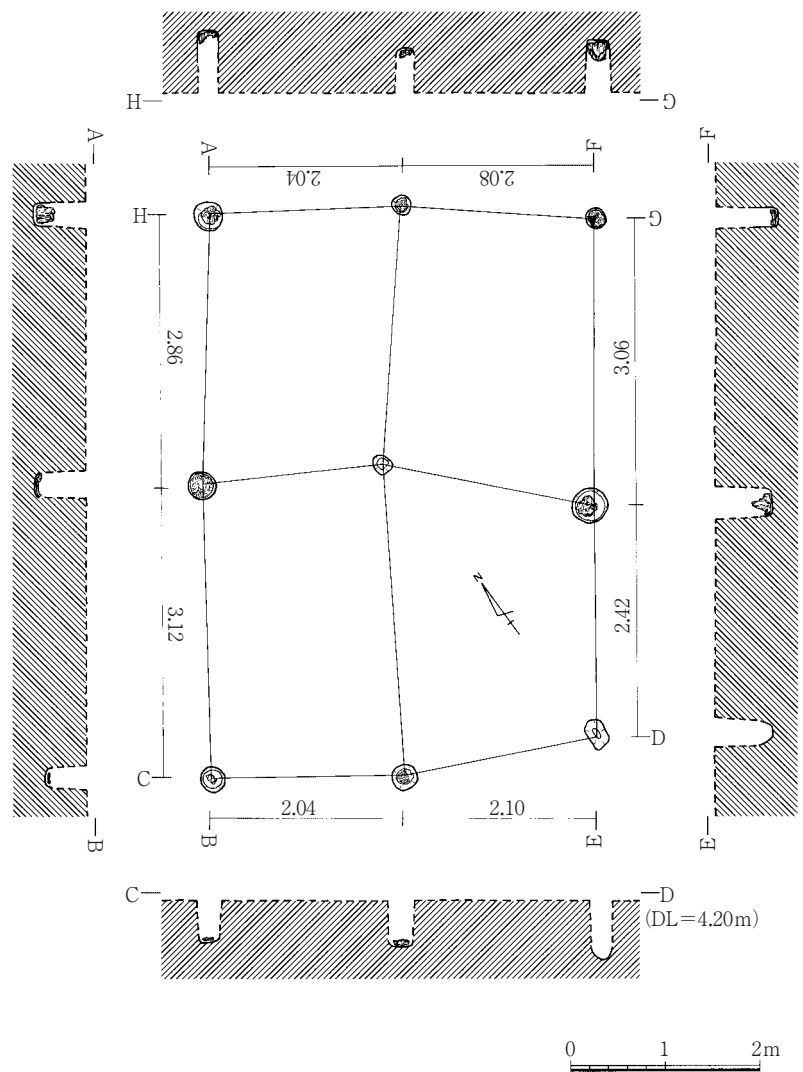


Fig.89 SB-2

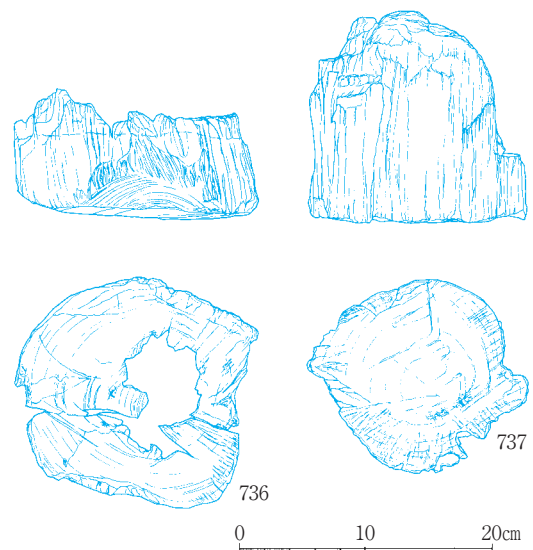


Fig.90 SB-2出土遺物実測図

残存長17.0cmを測る。なお、736はP-4、737はP-5から検出した。

② 竪穴住居跡

ST-1 (Fig.91・92)

調査区東部で検出した竪穴住居跡である。平面形は隅丸方形で、長辺3.80m、短辺3.60m、検出面からの深さ0.45m、面積13.7m²を測る。長軸方向はN-35°-Eで2棟の建物と同じ方向を示す。また、上面ではSF-8が検出されている。床面の標高は3.90~4.00mを測り、中央がやや低くなっており、22個の柱穴を検出した。P-1とP-4には柱根が遺存した。両柱根とも炭化しておらず、樹種はアワブキ属である。P-1~8は径18~28cm、床面からの深さは0.26~0.49mを測り、かつその位置関係から主柱穴ではないかとみられるもので、柱間距離は0.44~1.00mを測る。P-9~12・15・16は径16~30cm、床面からの深さは11~43cmを測り、補助的な柱穴なし建て替に伴うものと考えられる。床面中央と東南壁際には炭化物と焼土の集中がみられた。中央の集中は長径64.0cm、短径28.0cm、厚さ10.0cmを測り、周囲にやや斜行する掘方を持つ小柱穴4個を検出した。東南壁際のもは長径66.0cm、短径42.0cm、厚さ9.0cmを測る。また、東壁際北寄りの床面から甕(741)と高杯(745)が出土している。甕は口を壁に向けて倒れ、高杯は立った状態で出土した。埋土は3層に分層され、1層が炭化物や焼土を小ブロック状に含む暗灰色シルト質粘土、2層が焼土、炭化物を多く含む暗灰褐色シルト質粘土、3層が若干の炭化物、焼土を含むオリーブ灰色シルト質粘土であった。遺物は68点あり、主に2層から出土し、土師器壺・甕・鉢・高杯、手づくね土器、須恵器把手付き椀がみられる。これらのうち土師器16点(738~753)、手づくね土器3点(754~756)、須恵器1点(757)が図示で

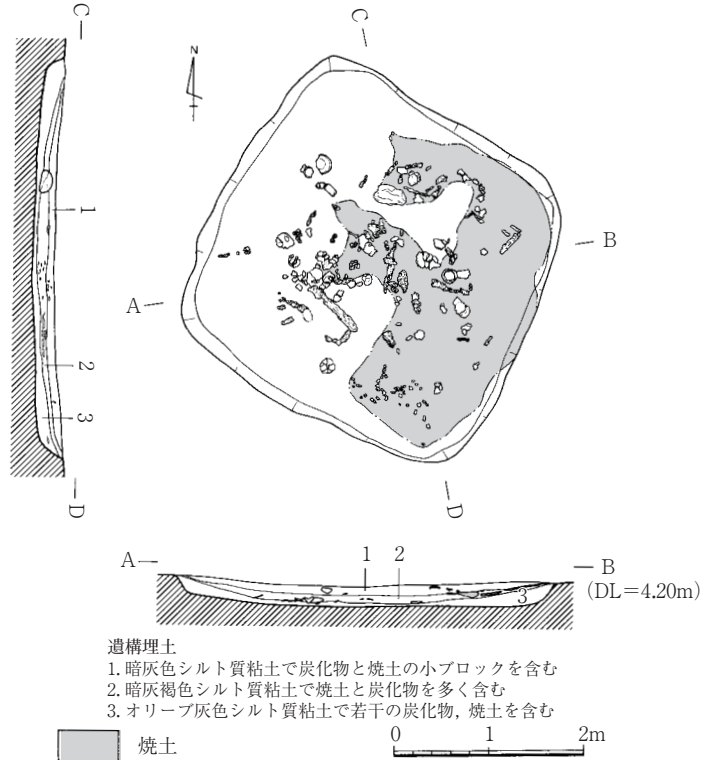


Fig.91 ST-1 2層遺物出土状態

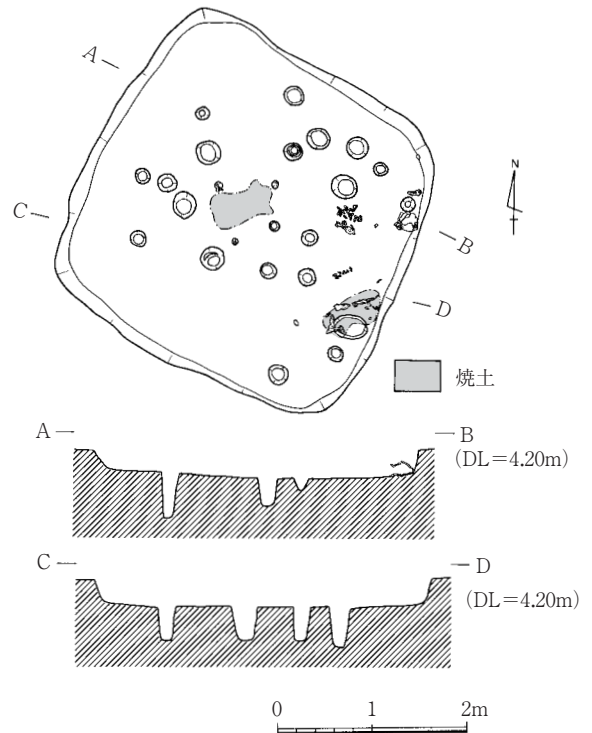


Fig.92 ST-1

きた。また、須恵器把手付き椀の西には平たい河原石(35.0×20.0×13.0cm)が置かれていたが使用痕および被熱痕跡は観察されなかった。なお、遺物・炭化物・焼土の堆積状態から上面で検出したSF-8を含め、ST-1の廃絶後少なくとも2回の祭祀行為が行われたとみられる。ただし、SF-8との接合関係はみられなかった。

出土遺物

土師器 (Fig.93・94-738~753)

738~740は壺である。738はB類で、約1/3が残存し、口径12.2cmを測る。口頸部はヨコナデ調整、胴部内面は指押えの後にナデ調整を施す。胴部外面はナデ調整を施す。胴部外面下半には内外面とも煤が付着する。胎土には赤色風化礫が混じる8mm以下の砂粒を多量に含み、色調は、内面が橙色、外面がにぶい橙色を呈する。739と740はC類である。739はほぼ完存し、口径9.0cm、器高14.6cmを測る。口縁部内面にはハケ調整、口縁部外面にはヨコナデ調整を施す。胎土には6mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。740は約2/3が残存し、口径11.1cm、器高12.7cmを測る。胴部内面下半は指押えの後にナデ調整を施し、上半は粘土紐接合痕が明瞭に残る。口頸部内面と内底面にはナデ調整を施す。また、外底面には黒斑が残る。胎土は粗く、5mm以下の砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、色調は、内面が浅黄色、外面が灰白色を呈する。

741~743は甕で、741と742はA-2類、743はB-1類である。741はST-1の東壁、床面から出土したもので、約4/5が残存し、口径14.5cm、器高20.1cmを測る。口頸部はヨコナデ調整、上胴部内面は指押えの後にナデ調整、胴上部外面はナデ調整を施す。胴部外面下半は摩耗するがわずかにタタキ目を残す。また、外面には部分的に煤が付着する。742は口縁部約1/3が残存し、口径18.4cmを測る。口頸部内面はヨコナデ調整、外面はナデ調整を施し、ST-1出土の他の甕と比べて薄手である。胎土は粗く3mm以下の砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。743はほぼ完形で、口径13.7cm、器高27.9cmを測る。胴部内面および口頸部外面にはヨコナデ調整、内底面には放射状のナデ調整、胴部外面はタタキ成形後上半はハケ状工具によるヨコ方向のナデ調整、下半はタテ方向のヘラナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫が混じる5mm以下の砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、色調は、内面が灰白色、外面が橙色を呈する。

744~747は鉢である。744と745はB-2類で、746と747はB-3類である。744は完存し、口径13.4cm、器高8.3cm、底径6.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、底部はナデ調整、内面はヘラナデ調整を施す。胎土は粗く、10mm以下の砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、色調は、内面がにぶい橙色、外面が浅黄橙色を呈する。745はほぼ完形で、口径15.4cm、器高10.0cm、底径7.2cmを測る。内底面は指ナデ調整、体部内面と外底面にはナデ調整を施すが、器面には指頭圧痕が残る。胎土は粗く、10mm以下の砂粒を多量に含み、色調は、内面が灰白色、外面が橙色を呈する。

746は台付鉢で、杯部はほぼ完形で、口径12.4cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、内底面はナデ調整を施し、底部外面にはヘラ磨きを施す。また、外面に煤が付着する。胎土には7mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。747も台付鉢で、約2/3が残存し、口径11.6cm、器高7.7cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整で、脚台部との境には指頭圧痕が残る。胎土には2~5mmの砂粒を含み、焼成はやや不良で、色調は、内面が灰色、外面が浅黄橙色を呈する。

748～753は高杯である。748はA-2類で、約4/5が残存し、口径16.0cm、器高12.7cmを測る。杯底部内面および脚柱部外面はナデ調整、杯体部内面、杯部外面および裾部にはヨコナデ調整を施す。また、脚柱部内面はヘラ削り調整の痕が残る。胎土には赤色風化礫が混じる5mm以下の砂粒を多く含み、色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい橙色を呈する。749・750はA類の杯部である。749は741の甕と同一地点で出土した。杯部は完形で、口径16.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整である。胎土には3mm以下の砂粒を含み、色調は、内面が褐灰色、外面が橙色を呈する。750は杯部約1/3が残存し、口径17.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、底部はナデ調整を施す。胎土には5mm以下の砂粒を多量に含み、色調は内外面とも橙色を呈する。

751と752はB類の杯部である。751は杯部の一部が残存し、口径17.9cmを測る。口縁部はヨコナデ

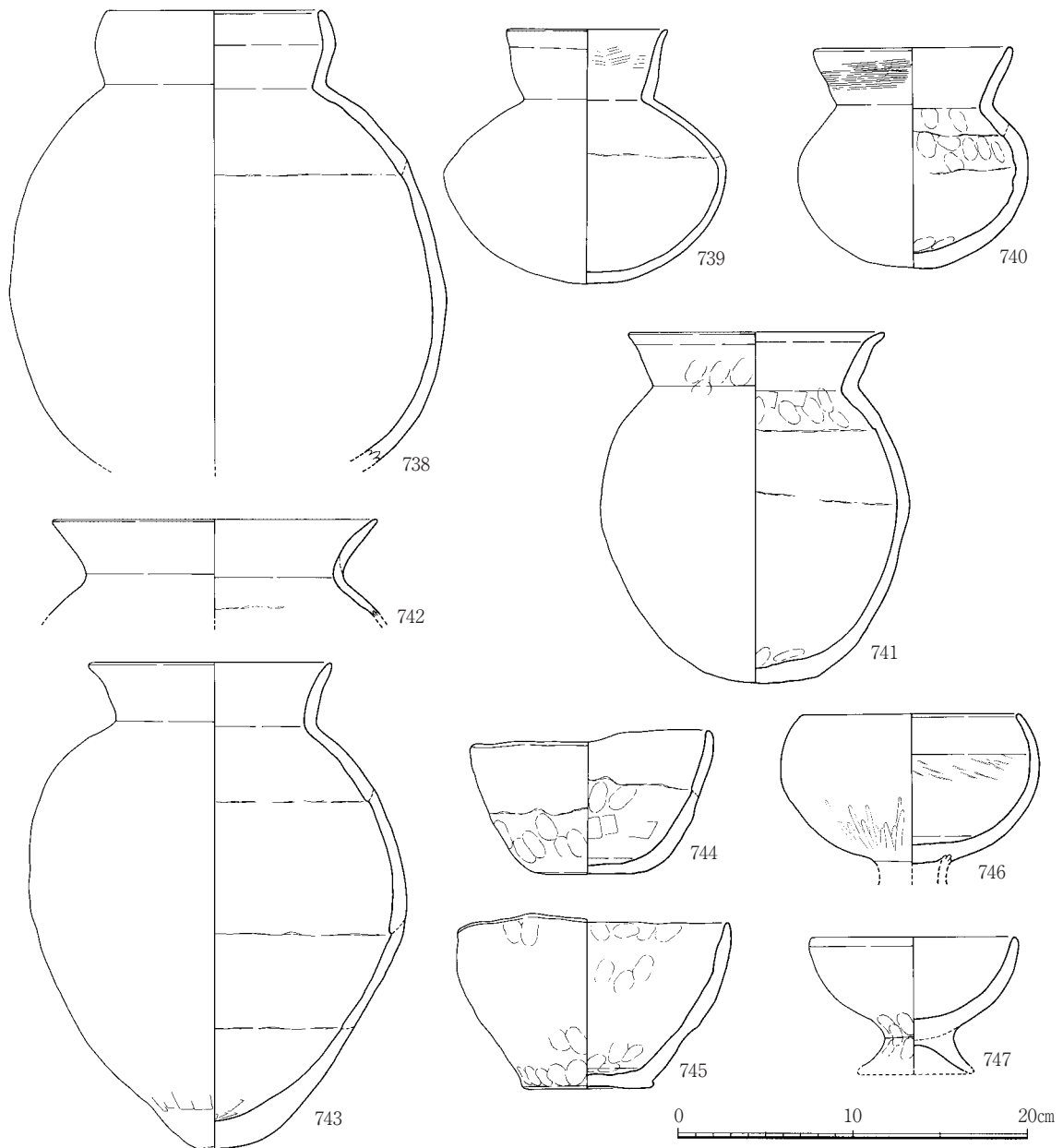


Fig.93 ST-1出土遺物実測図1

調整，底部外面にヘラナデ調整を施す。胎土は粗く，8mm以下の砂粒を多量に含み，焼成はやや不良で，色調は，内面がにぶい橙色，外面が褐灰色を呈する。752は杯部約2/3が残存し，口径19.6cmを測る。口縁部はヨコナデ調整，内底面には放射状のヘラナデ調整を施す。胎土には4mm以下の砂粒を多く含み，色調は内外面とも橙色を呈する。

753は2類の脚柱部である。約2/3が残存し，底径10.8cmを測る。脚柱部外面にはナデ調整，内面にはヘラ削り調整，裾部にはヨコナデ調整を施す。胎土には7mm以下の砂粒を多く含み，色調は内外面とも灰褐色を呈する。

手づくね土器 (Fig.94-754~756)

754・755はA-2類，756はB類である。754はほぼ完形で，口径4.1cm，器高4.8cmを測る。口縁部にヨコナデ調整を施す。胎土には細砂粒を含み，色調は内外面とも橙色を呈する。755は完存し，口径4.6cm，器高4.0cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整，その他は指ナデ調整で，部分的に指頭圧痕が残る。また，外面に黒斑が認められる。胎土には細砂粒を含み，色調は，内面がにぶい橙色，外面が橙色を呈する。756は完存し，口径6.2cm，器高4.1cmを測る。内面には指ナデ調整痕，外面には指頭圧痕が残る。外底面には黒斑が認められる。胎土には細砂粒を含み，色調は，内面が灰黄褐色，外面が橙色を呈する。

須恵器 (Fig.94-757)

757は把手付き椀で，約2/3が残存し，口径8.8cm，器高9.9cm，底径5.2cmを測る。底部は平らで，体部は外上方へ上がり，口縁部は内傾し，端部を丸く仕上げる。外面には3条の明瞭な凸帯が巡り，環状の把手が付き，把手上端には蕨手の一部が残存する。器面は回転ナデ調整で，外底面には静止ヘラ削り調整を施す。胎土は精良で，色調は内外面とも暗青灰色を呈する。

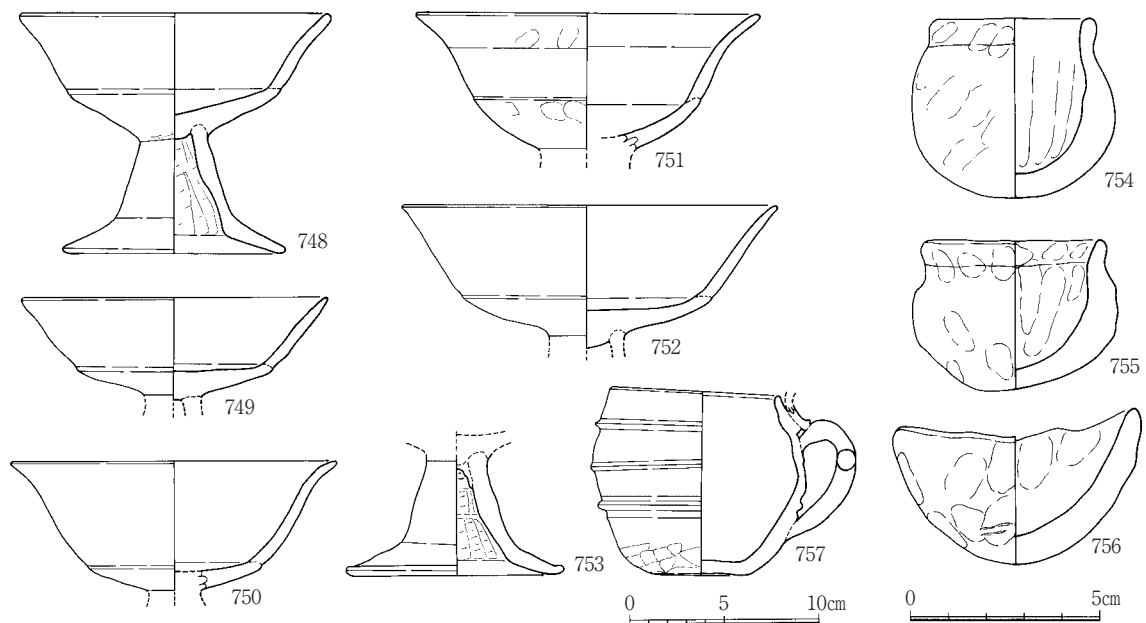


Fig.94 ST-1出土遺物実測図2

③ 祭祀関連遺構

SF-7 (付図6)

調査区東端、ST-1の東隣りに位置する祭祀関連遺構で、標高4.35～4.69mから検出され、東西7m、南北6mの範囲に遺物がまとまって出土した。遺物の集中密度は高く、出土点数はⅡ区で最も多く、特に標高約4.50mに集中する。また、南西側には土器が集中し、東側には白玉、石製勾玉・剣形品、径2.0～3.0cmの小円礫の集中と焼土がみられた。一方、須恵器は杯身(847)と須恵器片が4.43～4.44mで出土する他は4.60mとやや高い標高から出土しており、特に周縁部については繰り返し祭祀行為が行われた可能性がある。遺物点数は1,172点で、土師器壺・甕・鉢・高杯、手づくね土器、須恵器杯蓋・杯身、祭祀遺物、叩石で構成され、土師器では甕が8割、祭祀遺物はⅡ区出土の大半を占める。また、手づくね土器は口縁部を上にした状態で出土しており、828と837には小石が納まっていた。これら出土遺物のうち土師器37点(758～794)、手づくね土器49点(795～843)、須恵器5点(844～848)、土製模造品19点(849～867)、石製模造品43点(868～910)、石製品1点(911)が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.95・96-758～794)

758・759は壺である。758はD類で、約4/5が残存し、口径11.0cm、器高10.8cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。胴部外面に黒斑が残る。胎土には石英・角閃石が混じる4mm以下の砂粒を多く含み、色調は、内面がにぶい褐色、外面がにぶい黄橙色を呈する。759はD類とみられる底部である。内面にはヘラナデ調整、外面にはハケ調整の後にナデ調整を施す。胎土は精良で、石英・角閃石が混じる1mm以下の砂粒を含む。色調は、内面が灰黄褐色、外面が橙色を呈する。

760～775は甕である。760はA-1類で、口径10.2cm、器高13.6cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、胴部内外面にはヘラナデ調整を施す。口縁部から上胴部外面に黒斑が残る。胎土には5mm以下の砂粒を含み、色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が明赤褐色を呈する。761はB-1類で、約1/2が残存し、口径13.6cm、器高17.2cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、胴部内面にはナデ調整、外面にはタタキの後にナデ調整を加える。口縁部および胴部に黒斑が残る。胎土は精良で、赤色風化礫の混じる2mm以下の砂粒をわずかに含み、色調は内外面とも橙色を呈する。762～766はB-2類である。762は口径と胴径がほぼ同じである以外最大径を中胴部に有する。口径14.8cmを測り、口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整である。胎土には細砂粒を含み、色調は、内面が褐色、外面がにぶい赤褐色を呈する。763は口径14.0cmを測り、口縁部にははヨコナデ調整、他は指押えの後にナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫・雲母が混じる6mm以下の砂粒を含み、色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が橙色を呈する。764は口縁部から胴部の約1/3が残存し、口径17.2cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、他はヘラナデ調整を施す。胎土には石英・角閃石が混じる細砂粒を含み、焼成は良く、色調は、内面がにぶい橙色、外面が明赤褐色を呈する。765は口縁部から胴部の一部が残り、口径18.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。胎土には6mm以下の砂粒を含み、色調は、内面がにぶい橙色、外面が黄橙色を呈する。766は口縁部から胴部の一部が残り、口径18.7cmを測る。口縁部および内面にはヨコナデ調整、胴部外面はナデ調整を施す。胎土には8mm以下の砂粒を多量

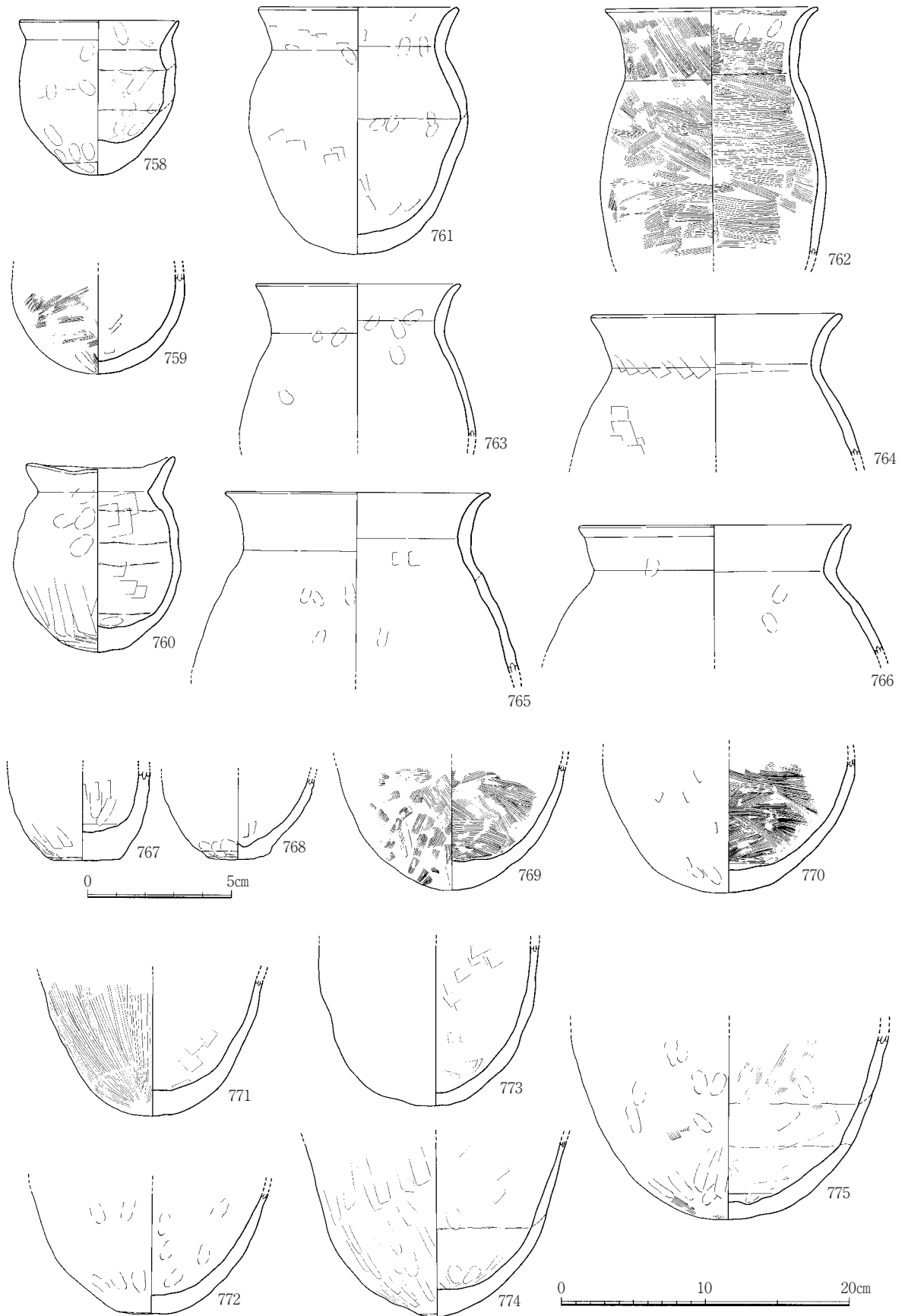


Fig.95 SF-7出土遺物実測図1

に含み、色調は、内面が浅黄色、外面がにぶい橙色を呈する。

767・768は平底、769～775は丸底の甕底部である。767は底部が完存し、底径5.0cmを測る。内面はナデ調整、内底面は指頭圧痕が残る。外面にはヘラナデ調整、外底面にはナデ調整を施す。外面には黒斑が残る。胎土には3mm以下の砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい褐色を呈する。768は底部が完存し、底径4.0cmを測る。器面にはナデ調整を施し、内底面には指頭圧痕が残る。内底面に黒斑が残る。胎土には5mm以下の砂粒を若干含み、焼成は内外面とも橙色を呈する。769は内外面全面に細かいハケ調整を施すものである。胎土には7mm以下の砂粒を若干含み、焼成は非常に良好で、色調は内外面ともにぶい赤褐色を呈する。770は769同様内面には細かなハケ調整が施される。外面はヘラナデ調整を施す。また、内面には黒斑が残る。胎土には雲母・角閃石が混じる5mm以下の砂粒を含み、焼成は良く、色調は、内面がにぶい赤褐色、外面が明赤褐色を呈する。771は内面にヘラナデ調整、外面にはタテ方向のハケ調整を施す。胎土には6mm以下の砂粒を含み、焼成は良好で、色調は、内面が灰黄色、外面が明赤褐色を呈する。772は内外面とも指押えの後にナデ調整を施す。胎土には雲母・角閃石が混じる5mm以下の砂粒を多く含み、色調は、内面がにぶい橙色、外面が灰黄色を呈する。773は内外面ともヘラナデ調整を施し、胎土には雲母の混じる約3mmの砂粒を少量含む。色調は内外面とも橙色を呈する。774は内面にナデ調整、内底面に放射線状にヘラナデ調整、外面はタテ方向のヘラナデ調整を施す。胎土は精良で、約3mmの砂粒を若干含み、色調は内外面とも褐色を呈する。775は胴部外面にヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。胎土には角閃石の混じる5mm以下の砂粒を含み、色調は、内面が橙色、外面がにぶい黄橙色を呈する。

776～789は鉢である。776～784はB-1類で、口径約10.0cmを測り、底部が深めのもの、口径約11.0cmを測り、底部がやや浅めのもの、口径13.0cm以上のものがある。また、口縁部が内傾するもの、直立または外上方に開くもの、頸部から外傾するものがある。776は完形で、口径10.2cm、器高6.8cmを測る。短い口縁部を作り出すもので、口縁部にはヨコナデ調整、体部内面にはヨコ方向のハケ調整、内底面はナデ調整、外底面にはヘラナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は内外面とも橙色を呈する。777は約4/5が残り、口径10.9cm、器高7.7cmを測る。体部はヨコナデ調整、底部にはナデ調整を施す。胎土には角閃石の混じる1mm以下の砂粒を少量含み、色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい橙色を呈する。778は約3/4が残り、口径13.0cm、器高8.8cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、体部内面にはヘラナデ調整、体部外面にはナデ調整を施す。胎土には角閃石の混じる2mm以下の砂粒を含み、色調は、内面がにぶい橙色、外面が橙色を呈する。779はほぼ完形で、口径10.1cm、器高6.8cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、底部にはナデ調整を施す。胎土には1mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。780はほぼ完形で、口径11.1cm、器高6.0cmを測る。体部にはヨコナデ調整、内底面にはナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫の混じる6mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面とも橙色を呈する。781もほぼ完形で、口径11.2cm、器高5.7cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫・角閃石・石英の混じる4mm以下の砂粒を多く含み、色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が橙色を呈する。782は約1/3が残存するもので、口径12.2cm、器高5.3cmを測る。器面は摩耗して調整は不明である。胎土には赤色風化礫・石英・角閃石の混じる8mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい橙色である。783は約1/2が残存し、

口径11.5cm, 器高6.1cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整, 内面にはハケ調整の後にナデ調整を加える。胎土には赤色風化礫・雲母の混じる3mm以下の砂粒を含み, 色調は, 内面が橙色, 外面が灰黄褐色を呈する。784は約1/3が残存し, 口径13.8cm, 器高6.4cmを測る。口縁部外面はヨコナデ調整, 他はナデ調整を施す。外底面には黒斑が残る。胎土には細砂粒を含み, 色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。785と786はB-2類で, 785は口径11.0cm, 器高5.3cm, 底径4.4cmを測る。口縁部外面はヨコナデ調整, 内底面は放射状のヘラナデ調整, 他はナデ調整を施す。胎土には4mm以下の砂粒を含み, 色調は, 内面が黄灰色, 外面がにぶい赤褐色を呈する。786は約4/5が残存し, 口径11.8cm, 器高7.7cm, 底径3.7cmを測る。口縁部外面および体部内面にはヨコナデ調整, 内底面には放射状のヘラナデ調整, 他はナデ調整を施す。また, 体部には粘土紐巻き上げ痕が認められる。787と788はB-3類で, 787は体部が直線的に立ち上がり, 788は椀状を呈する。787は約3/5が残存し, 口径12.3cm, 器高9.8cm, 底径7.8cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整, 脚部内面にはヘラナデ調整を施す。他はナデ調整である。胎土は精良で, 雲母・角閃石を含み, 色調は内外面ともにぶい黄褐色を呈する。788は約1/2が残存し, 口径12.9cm, 器高9.8cm, 底径8.6cmを測る。鉢部にはハケ調整, 脚柱部にはヘラナデ調整を施す。胎土には雲母片の混じる1mm以下の砂粒を若干含み, 色調は内面が橙色, 外面が明赤褐色を呈する。789はC類で, 約1/3が残存し, 口径13.4cmを測る。内面は指押えの後にヨコナ

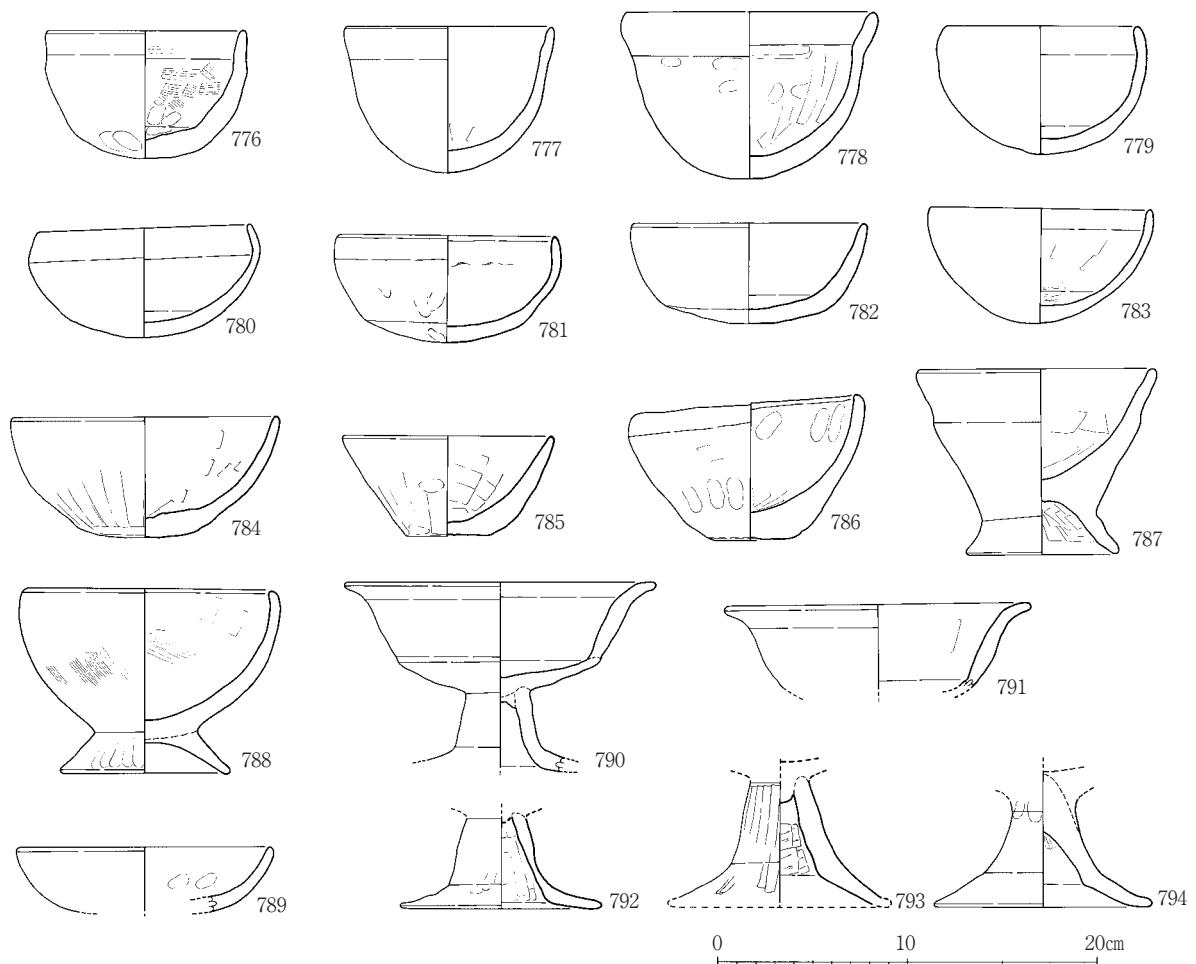


Fig.96 SF-7出土遺物実測図2

デ調整, 外面は摩耗するがナデ調整を施したとみられる。胎土には3mm以下の砂粒を含み, 色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

790~794は高杯である。790はA-1類で, 約1/2が残存し, 口径16.0cmを測る。杯部内面および外面はヨコナデ調整, 内底面および脚柱部内面はナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫の混じる3mm以下の砂粒を少量含み, 色調は内外面とも橙色を呈する。791はB類で, 口縁部約1/4が残存し, 口径15.5cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫の混じる4mm以下の砂粒を少量含み, 色調は内外面とも橙色である。792は1類, 793・794は2類の脚柱部である。792は脚柱部がほぼ完存し, 外面にはヨコナデ調整, 脚柱部内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には赤色風化礫・石英・角閃石の混じる砂粒を多く含み, 色調は内外面とも橙色を呈する。793は脚柱部約1/3が残存する。外面はヘラナデ調整後裾部のみヨコナデ調整を施す。脚柱部内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には3mm以下の砂粒を多く含み, 色調は, 内外面ともにぶい橙色を呈する。794は脚柱部が完存し, 裾部はヨコナデ調整を施す。脚柱部内面上位にはしほり目が残る。胎土には2~4mmの砂粒を多量に含み, 色調は内外面とも橙色を呈する。

手づくね土器 (Fig.97・98-795~843)

795~811はA-2類で, 795~803は平底, 804~811は丸底を呈する。795は完存し, 口径5.1cm, 器高6.1cm, 底径3.6cmを測り, 内傾する短い口縁部を作り出す。口縁部にはヨコナデ調整, 体部は指ナデ調整, 外底面はナデ調整を施し, 内底面には指頭圧痕が残る。胎土には5mm以下の砂粒を含み, 焼成はやや不良で, 色調は内外面とも灰黄色を呈する。796も完存し, 口径5.2cm, 器高4.9cm, 底径3.3cmを測る。体部には小さな孔が残る。口縁部にはヨコナデ調整, 体部内面にはタテ方向の指ナデ調整, 他はナデ調整を施す。胎土には3mm以下の砂粒を含み, 色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。797~803は口縁部がくの字状をなすもので, 797はほぼ完存し口径5.7cm, 器高5.6cm, 底径2.4cmを測る。口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整を施すも, 器面には指頭圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。798もほぼ完存し, 口径5.9cm, 器高5.1cm, 底径2.6cmを測る。口縁部は摘み出して作られ, 内外面にヨコナデ調整, 他はナデ調整を施すも器面には指頭圧痕が残る。胎土には細砂粒を含み, 色調は内外面とも灰黄色を呈する。799は約2/3が残存し, 口径6.4cm, 器高4.3cm, 底径3.2cmを測る。外底面はナデ調整, 他は指ナデ調整を施す。胎土は精良で, 色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。800はほぼ完存し, 口径6.6cm, 器高5.5cm, 底径2.2cmを測る。口縁部は摘み出して作られ, 内外面にヨコナデ調整, 他はナデ調整を施すも器面には指頭圧痕が残る。胎土には砂粒を含み, 色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。801は完存し, 口径7.0cm, 器高6.4cm, 底径4.5cmを測る。口縁部は摘み出して作られ, 体部内面には指ナデ調整, 外面および外底面にはナデ調整を施すも器面には指頭圧痕が残る。胎土は粗く3mm以下の砂粒を多く含み, 色調は, 内面が灰黄褐色, 外面が褐色を呈する。802は口縁部の一部を欠損するもので, 口径8.5cm, 器高5.3cm, 底径4.5cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整, 体部内面には指ナデ調整, 外面にはナデ調整を施す。底部には指押えの痕が残る。体部外面には煤が付着する。胎土には細砂粒を含み, 色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。803は口縁部の一部を欠損するもので, 口径9.1cm, 器高8.4cm, 底径4.9cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整, 体部内面にはヘラナデ調整, 外面にはナデ調整を施す。胎土には2mm以下の砂粒

を含み、色調は、内面がにぶい橙色、外面がにぶい黄橙色を呈する。804は約2/3が残存するもので、口径、器高とも4.5cmを測る。口縁部は摘み出して作られ、器面には指頭圧痕と指ナデ調整の痕が残る。胎土には5mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面とも橙色を呈する。805は完存し、口径4.8cm、器高4.6cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、体部にはナデ調整を施すも器面には指頭圧痕が残る。胎土は粗く、5mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面とも灰黄色を呈する。806は約2/3が残存し、口径5.6cm、器高4.7cmを測る。内面は指ナデ調整、外面はナデ調整を施す。胎土には細砂粒を含み、

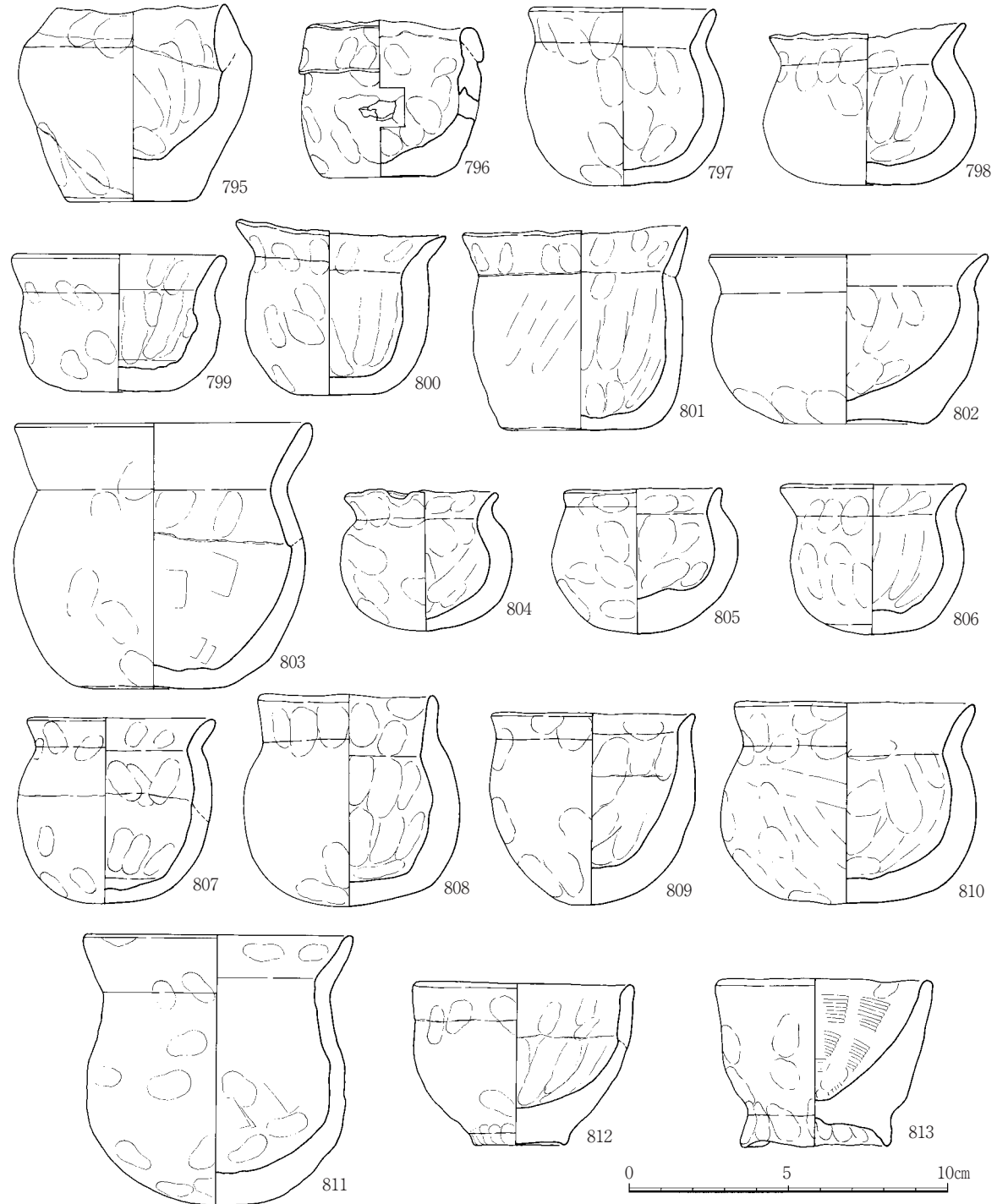


Fig.97 SF-7出土遺物実測図3

色調は内外面とも橙色を呈する。807はほぼ完存し、口径5.9cm、器高5.8cmを測る。器面にはナデ調整を施すも指頭圧痕が残る。胎土には細砂粒を含み、色調は、内面がにぶい黄褐色、外面が灰黄色を呈する。808は約1/3が残存し、口径5.4cm、器高6.7cmを測る。体部内面には指ナデ調整、外面にはナデ調整を施す。胎土には5mm以下の砂粒を多く含み、色調は、内面が灰黄褐色、外面がにぶい橙色を呈する。809はほぼ完存し、口径6.2cm、器高6.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。胎土には細砂粒を含み、色調は、内面が灰黄褐色、外面がにぶい黄橙色を呈する。810はほぼ完存し、口径7.5cm、器高6.3cmを測る。体部には指ナデ調整を施すも指頭圧痕が残る。外底面には煤が付着する。811は約2/3が残存し、口径8.2cm、器高8.5cmを測る。器面にはナデ調整を施す。胎土には3mm以下の砂粒を少量含み、色調は、内面が橙色、外面がにぶい橙色を呈する。

812と813はA-3類である。812は約1/3が残存し、口径6.3cm、器高5.1cm、底径2.8cmを測る。底部は指で摘み出し高台状に成形する。内面には指ナデ調整、外面にはナデ調整を施す。胎土には1~3mmの砂粒を多く含み、色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。813は完存し、口径6.8cm、器高5.3cm、底径4.5cmを測る。底部は指で摘み出して高台に成形する。内面にはハケ調整の後にヨコナデ調整、外面は指押えの後にナデ調整を施す。胎土には細砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

814~843はB類である。814~826は平底、827~843は丸底を呈する。814は完形で、口径4.0cm、器高4.2cm、底径1.9cmを測る。内面は指ナデ調整、外面はナデ調整を施す。胎土には1mm大の砂粒を含み、色調は、内面がにぶい橙色、外面がにぶい黄橙色を呈する。815も完形で、口径4.7cm、器高5.0cm、底径3.2cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、内面は指ナデ調整、以下ナデ調整を施す。胎土は粗く、5mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面とも褐灰色を呈する。816は約2/3が残存し、口径4.8cm、器高4.9cm、底径1.4cmを測る。内面には指ナデ調整、外底面はナデ調整を施す。他の個体に比べ薄手である。胎土には2mm以下の砂粒を含み、色調は、内面がにぶい黄褐色、外面が黄灰色を呈する。817は完形で、口径4.8cm、器高5.3cm、底径3.2cmを測る。内外面とも指ナデ調整、外底面にはナデ調整を施す。胎土は粗く、5mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面とも明赤褐色を呈する。818も完形で、口径5.0cm、器高4.4cm、底径3.1cmを測る。外面にはナデ調整を施す。胎土は粗く、5mm以下の砂粒を多く含み、色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が橙色を呈する。819も完形で、口径5.2cm、器高5.1cm、底径2.3cmを測る。内面は指ナデ調整、外面はナデ調整を施す。胎土には2~5mmの砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。820は約2/3が残存し、口径6.0cm、器高3.9cm、底径1.8cmを測る。内面には指ナデ調整、外面にはナデ調整を施す。胎土は粗く、7mm以下の砂粒を多く含み、色調は、内面がにぶい黄褐色、外面が灰黄色を呈する。821はほぼ完形で、口径6.2cm、器高6.6cmを測る。内外面は指ナデ調整、外底面はナデ調整を施すも器面には指頭圧痕が明瞭に残る。822もほぼ完形で、口径6.5cm、器高6.1cm、底径2.8cmを測る。器面には指押えの後にナデ調整を施す。胎土は粗く、2mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面とも橙色を呈する。823は約1/2が残存し、口径7.4cm、器高4.3cm、底径6.0cmを測る。内外面には粗いハケ調整、外面はその後にナデ調整、外底面はナデ調整を施す。胎土は精良で、雲母・角閃石の混じる微細砂を少量含み、色調は内外面とも灰褐色を呈する。824は約2/3が残存し、口径7.6cm、器高4.8cm、底径4.2cmを測る。器面には指頭圧

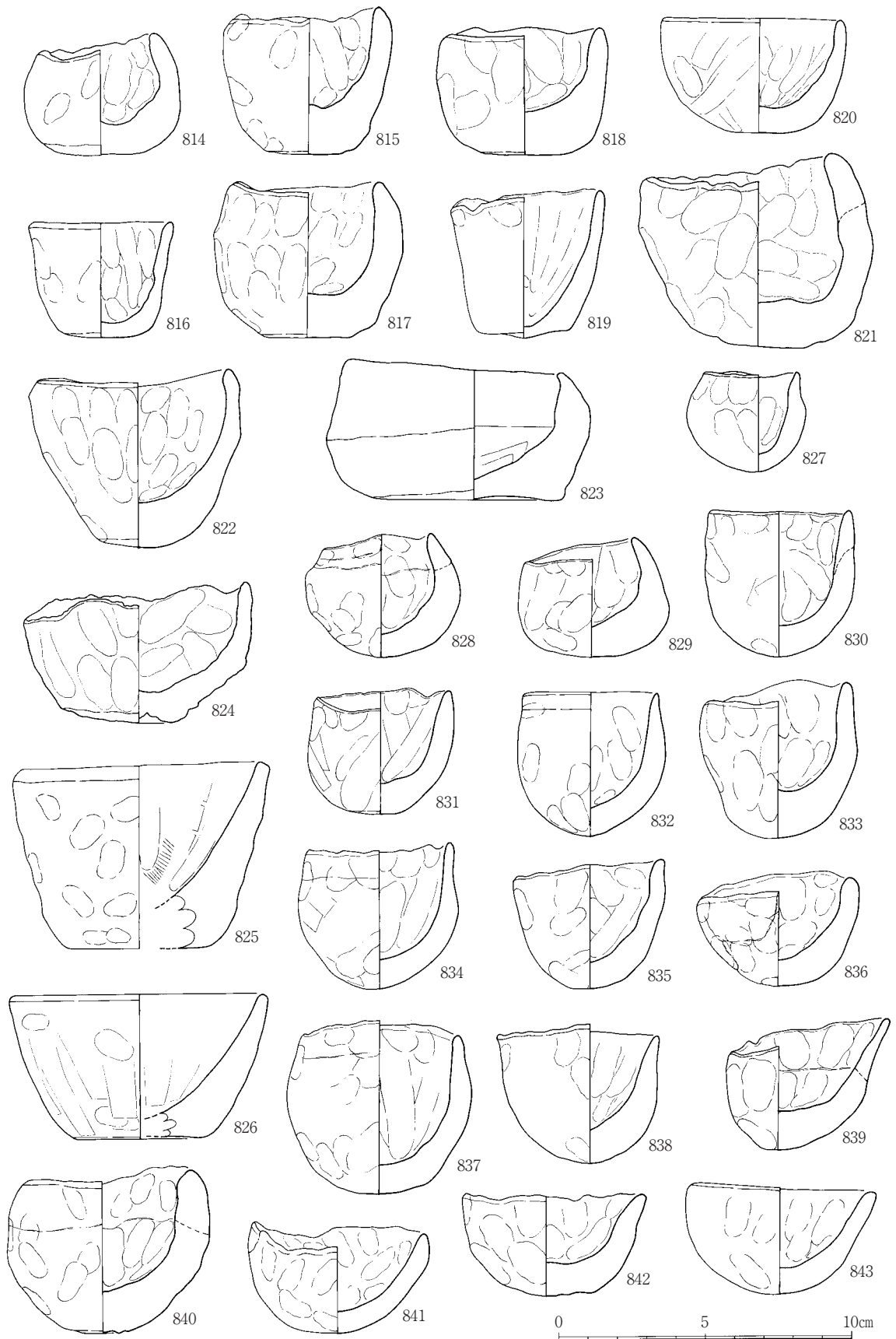


Fig.98 SF-7出土遺物実測図4

痕が残り、焼成時のひび割れがみられる。胎土には2mm以下の砂粒を少量含み、色調は内外面とも灰褐色を呈する。825は約1/2が残存し、口径8.2cm、器高6.4cm、底径4.8cmを測る。内面にはハケ調整の後に指ナデ調整を加え、外面は指ナデ調整のままで、焼成時のひび割れが見られる。胎土には5mm以下の砂粒を含み、色調は、内面が明赤褐色、外面が赤褐色を呈する。826は約2/5が残存し、口径8.4cm、器高4.9cm、底径4.4cmを測る。内面にはヘラナデ調整、外面および外底面にはナデ調整を施す。胎土には2mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。827は完形で、口径3.1cm、器高3.4cmを測る。口縁部は摘み出しによって成形する。器面にはナデ調整を施す。胎土には2mm以下の砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。828も完形で、口径3.6cm、器高4.2cmを測り、扁平な河原石(2.0~3.0cm)3個が収まっていた。口縁部にはヨコナデ調整、他は指ナデ調整とナデ調整を施す。829は約2/3が残存し、口径3.8cm、器高4.1cmを測る。内面には指ナデ調整、外面にはナデ調整を施す。胎土には細砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい褐色を呈する。830は約1/2が残存し、口径4.2cm、器高4.9cmを測る。内面は指押えの後にナデ調整、外面はナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。831は完形で、口径4.5cm、器高4.3cmを測る。内外面とも指ナデ調整の後にナデ調整を加える。胎土には細砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい赤褐色を呈する。832は約1/2が残存し、口径4.5cm、器高4.9cmを測る。内外面とも指ナデ調整の後にナデ調整を加える。胎土は精良で、色調は内外面ともにぶい褐色を呈する。833は完形で、口径4.7cm、器高5.4cmを測る。器面には指ナデ調整を施す。胎土には5mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも明赤褐色を呈する。834も完形で、口径4.8cm、器高4.9cmを測る。内外面とも指ナデ調整後ナデ調整を加える。胎土には細砂粒を含み、色調は、内面がにぶい黄褐色、外面がにぶい褐色を呈する。835はほぼ完存し、口径5.0cm、器高4.4cmを測る。内外面とも指ナデ調整の後にナデ調整を施す。胎土には細砂粒を含み、色調は内外面とも灰褐色を呈する。836は完形で、口径5.2cm、器高3.9cmを測る。内外面とも指押えの後にナデ調整を施す。外面約1/3に煤が付着する。胎土には2mm以下の砂粒を含み、色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が橙色を呈する。837はほぼ完存し、口径5.2cm、器高5.9cmを測り、扁平な河原石(2.5~4.3cm)4個が収まっていた。内面は指ナデ調整、外面はナデ調整を施す。胎土には5mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい赤褐色を呈する。838は約2/3が残存し、口径5.3cm、器高4.7cmを測る。内面は指ナデ調整の後にヨコ方向のヘラナデ調整、外面はナデ調整を施す。胎土には3mm以下の砂粒を含み、色調は、内面がにぶい褐色、外面が明赤褐色を呈する。839はほぼ完存し、口径5.4cm、器高4.5cmを測る。内面には指ナデ調整、他はナデ調整を施す。外底面には黒斑が残る。胎土には2~3mmの砂粒を含み、色調は内外面とも明赤褐色を呈する。840は約3/4が残存し、口径5.6cm、器高5.7cmを測る。内面には指ナデ調整、外面にはナデ調整を施す。胎土は粗く1mm以下の砂粒を多く含み、色調は、内面が暗灰黄色、外面が灰黄色を呈する。841は完形で、口径5.9cm、器高3.8cmを測る。内面は指ナデ調整、外面はナデ調整を施す。胎土には2mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。842はほぼ完存し、口径6.0cm、器高3.5cmを測る。内面には指ナデ調整、外底面にはナデ調整を施す。胎土は粗く2mm以下の砂粒を多く含み、色調は、内面が灰色、外面が暗灰色を呈する。843は約2/3が残存し、口径6.2cm、器高3.8cmを測る。内外面とも指ナデ調整を施す。胎土には2mm以下の砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

須恵器 (Fig.99-844~848)

844は杯蓋で、約3/4が残存し、口径12.2cm、器高4.5cmを測る。天井部は丸く、稜は小さな断面三角形形で、口縁端部は内傾する凹面をなす。天井部外面約4/5には回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整で、天井部内面にナデ調整を加える。胎土には1mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面とも灰色を呈する。

845~848は杯身である。845は底部を欠くもので、口径9.3cmを測る。器面は回転ナデ調整で、杯部外面には自然釉がかかる。胎土は精良、色調は内外面とも灰白色を呈する。846はほぼ完形で、口径10.4cm、器高5.1cmを測る。底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整である。胎土には2mm以下の砂粒を少量含み、色調は内外面とも灰色を呈する。847は完形で、口径10.4cm、器高5.1cmを測る。立ち上がりは内傾し、端部を細く仕上げる。底部外面約2/3は回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整で、受け部には自然釉がかかる。848は約1/3が残存し、口径10.8cm、器高4.7cmを測る。

立ち上がりは内傾し、端部は外傾する浅い凹面をなす。底部外面約2/3は回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整を加える。胎土は精良で、色調は内外面とも灰白色を呈する。

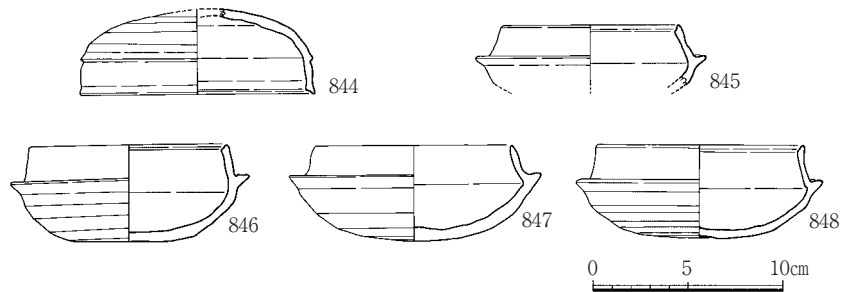


Fig.99 SF-7出土遺物実測図5

土製模造品 (Fig.100・101-849~867)

849~853はA類の勾玉である。849は完存し、全長4.0cm、全幅1.3cm、全厚1.4cm、孔径0.3cmを測る。850も完存し、全長5.0cm、全幅1.5cm、全厚1.6cm、孔径0.3cmを測る。851は残存長4.4cm、全幅1.4cm、全厚1.5cm、孔径0.3cmを測る。

852は残存長3.8cm、全幅1.3cm、全厚1.4cm、孔径0.5cmを測り、853は残存長3.6cm、全幅1.3cm、全厚1.2cm、孔径0.3cmを測る。852と853は側面から穿孔されているが未貫通である。概ねナデ調整により平滑に仕上げられている。全個体とも胎土には若干の砂粒を含み、色調は、849が明褐色、850・851が橙色、852と853がにぶい褐色。

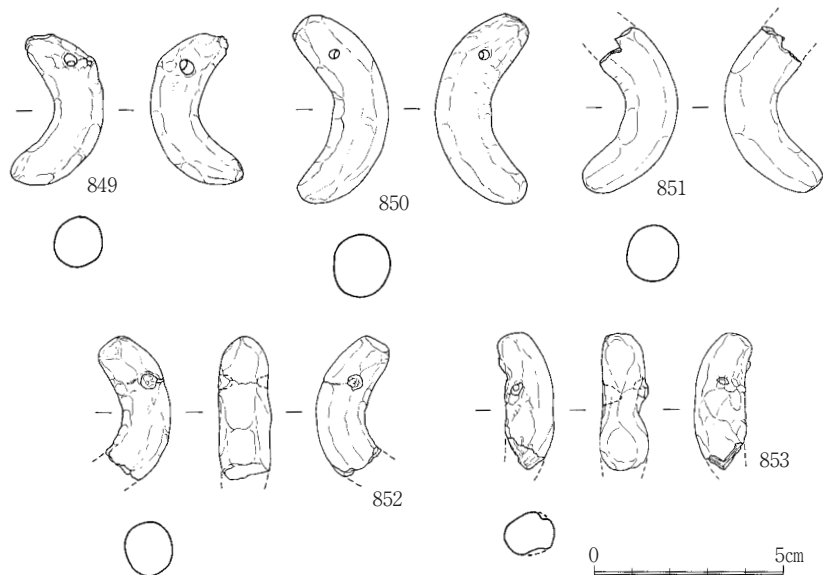


Fig.100 SF-7出土遺物実測図6

色を呈する。

854～865は模造鏡である。854～861はA-1類, 862～864はA-2類, 865はB類である。大きさは854～856が全長約4.0cmを測る小型である以外5.0～6.0cmを測る。854は完形で, 全長3.7cm, 全幅3.9cm, 全厚1.7cm, 孔径0.4cmを測る。両面ともナデ調整が施され, 鏡面の約1/2に煤が付着する。855はほぼ完形で, 全長4.1cm, 全厚1.9cm, 孔径0.4cmを測る。両面ともナデ調整が施され, 鏡面の約1/2に煤が付着する。856は完形で, 全長4.0cm, 全幅4.5cm, 全厚2.0cm, 孔径0.5cmを測る。両面ともナデ調整が施され, 背面には指頭圧痕が残る。857は約3/5が残存し, 全長4.6cm, 全厚2.0cm, 孔径0.4cmを測る。鏡面全面に煤が付着する。858は完形で, 全長4.9cm, 全幅5.0cm, 全厚1.9cm, 孔径0.4cmを測る。両面ともナデ調整を施す。859も完形で, 全長5.4cm, 全幅5.7cm, 全厚2.5cm, 孔径0.3cmを測る。両面ともナデ調整を施す。背面約1/2と鏡面約1/3に黒斑が残る。胎土に5mm以下の砂粒を含む。860も完形で, 全長6.0cm, 全幅6.3cm, 全厚1.8cm, 孔径0.3cmを測る。両面ともナデ調整を施す。色調は両面

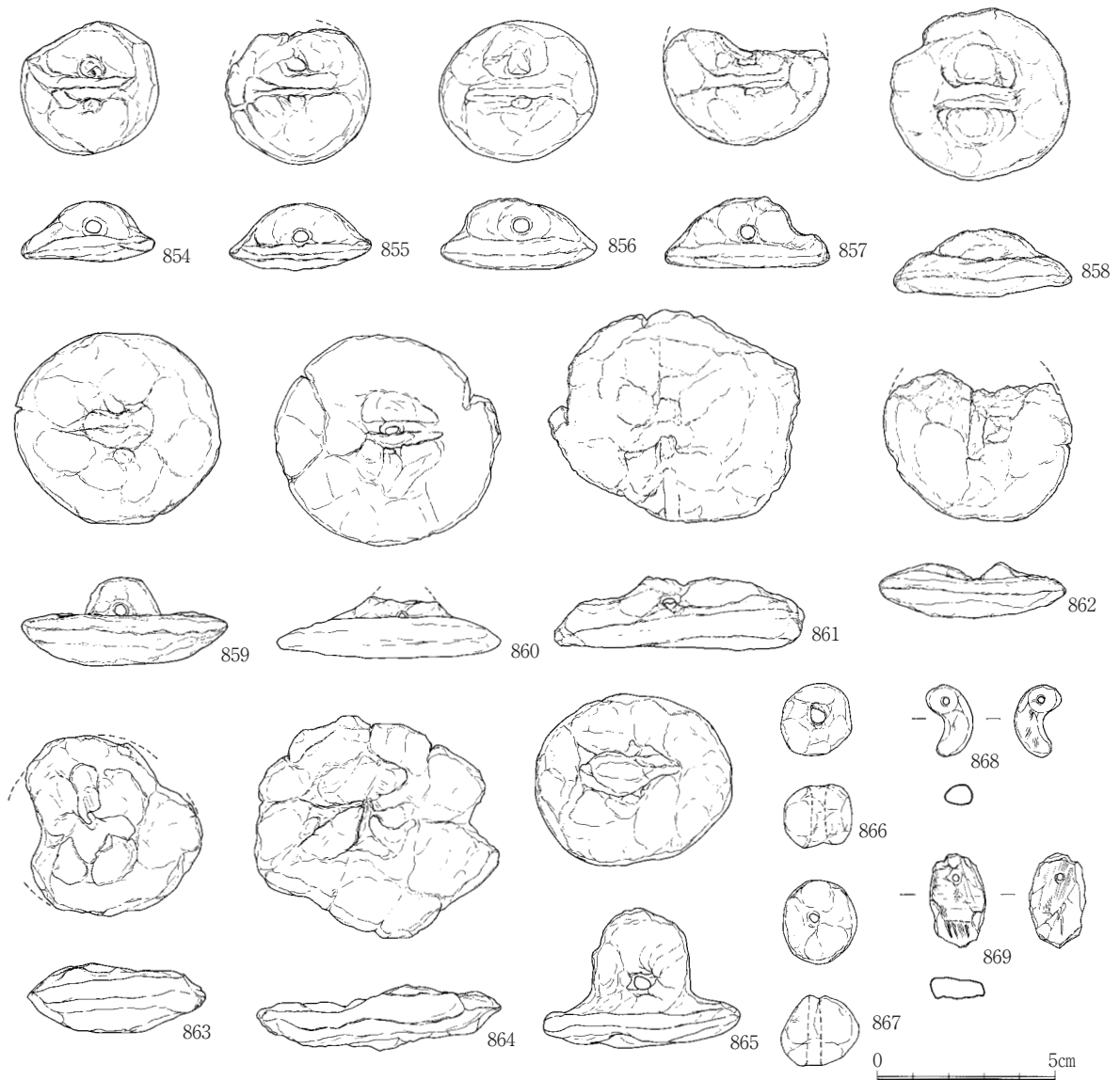


Fig.101 SF-7出土遺物実測図7

とも黒色を呈する。861も完形で、全長6.1cm、全幅7.0cm、全厚2.2cm、孔径0.4cmを測る。背面は指頭圧痕が残り、鏡面はナデ調整が施される。胎土には砂粒を多く含む。862は約3/4が残存し、全長5.3cm、全厚1.5cmを測る。両面ともナデ調整を施す。863は周縁を欠くもので、全長5.2cm、全厚2.0cmを測る。鈕は摘んで成形されたもので、両面とも指頭圧痕が残る。864は完形で、全長6.4cm、全幅6.9cm、全厚1.8cmを測る。鈕は摘んで成形された簡単なもので、中央が凹み、両面とも指頭圧痕が残る。861・863・864は他に比べ粗雑な作りである。865は完形で、全長4.8cm、全幅5.5cm、全厚3.9cm、孔径0.5cmを測る。鈕は扁平な柱状をなす。胎土には砂粒を多く含む。

866・867は土玉で、いずれも完形で、胎土は精良、焼成は良好である。866は全長1.9cm、直径2.2cm、孔径0.5cmを測る。表面はナデ調整が施され、色調は灰褐色を呈する。867は全長2.0cm、直径2.3cm、孔径0.3cmを測る。表面はナデ調整が施され、色調は明褐色を呈する。

石製模造品 (Fig.101・102-868~910)

868は滑石製の勾玉で、全面丁寧な磨きにより平滑である。孔は両面から穿孔される。全長2.0cm、全幅0.8cm、全厚0.5cm、孔径1.7mmを測る。色調は緑色を呈する。

869は滑石製の剣形品とみられるもので、両面とも擦痕が観察されるが、832と比べて全体的に粗雑な作りである。全長2.6cm、全幅1.6cm、全厚0.6cm、孔径1.6mmを測る。色調は緑色を呈する。

870~910は滑石製の白玉である。後述するSF-9出土の白玉と比して径・厚さとも大きいものが多い。色調は緑色を呈するものが大半である。

石製品 (Fig.102-911)

911は叩石で、全長10.6cm、全幅8.9cm、全厚7.1cm、重量870.0gを測る。5面に敲打痕が残る。材質は砂岩である。

SF-8 (付図7)

調査区東部、ST-1の上面に位置する祭祀関連遺構で、標高4.15~4.50mから検出され、ST-1に

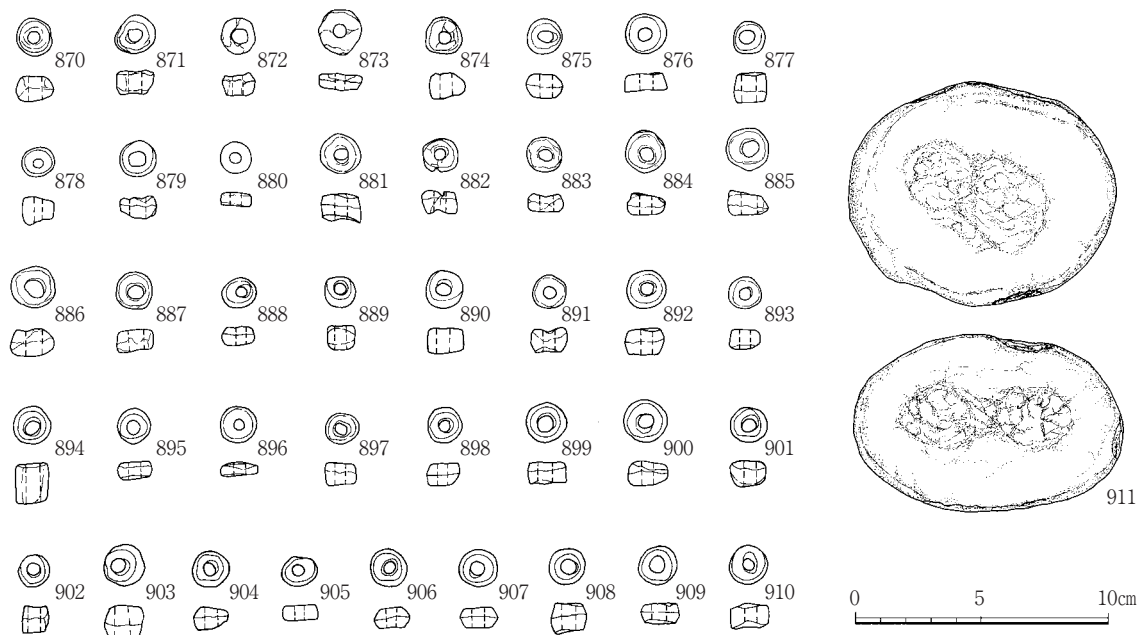


Fig.102 SF-7出土遺物実測図8(870~910は原寸)

重なるように約4m四方に遺物がまとまって出土した。ST-1が完全に埋まらない段階で、祭祀が行われたとみられ、中央部が低い、浅い播鉢状をなす。また、遺物の下面には焼土と炭化物の堆積がみられた。遺物の大半は土師器(壺・甕・鉢・高杯・甑)で、985点出土した。土師器の約6割は甕が占め、布留式土器の出土も認められた。須恵器は縁辺部の標高約4.50mと高い位置に点在し、SF-2出土の器台(489)とSF-7出土の須恵器杯(844)の同一個体が出土している。また、南側では軽石(2.0~3.0cm)が約80点検出された。これら遺物のうち土師器40点(912~951)と石製品1点(952)が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.103~105-912~951)

912~914は壺である。912はA類で、口縁部の一部が残存し、口径18.2cmを測る。器面は摩耗し、調整は不明である。胎土には3mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。913と914はC類である。913は完形で、口径9.2cm、器高14.5cmを測る。口頸部はヨコナデ調整、胴部内面はナデ調整、外底面はタタキの後にナデ調整を施す。胎土には5mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。914は口頸部約1/4が残存し、口径10.5cmを測る。器面はヨコナデ調整を施す。胎土には雲母の混じる2mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。

915~933は甕である。915は布留式土器で、口縁部と胴部の一部が残存し、口径12.9cmを測る。口縁端部は内面を若干肥厚させる。口縁部はハケ調整の後にヨコナデ調整、胴部内面はナデ調整、外面は細いハケ調整を施す。胎土には雲母の混じる微細砂を多量に含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

916~923はA-1類である。916は完存し、口径13.8cm、器高20.3cm、底径4.2cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、胴部外面はタタキの後にナデ調整を施すが、下胴部以下にタタキ目が残る。胴部内面はナデ調整を施す。外面下半には黒斑が残る。胎土には5mm以下の砂粒を多量に含み、色調は、内面がぶい褐色、外面がぶい橙色を呈する。917は約4/5が残存し、口径18.8cm、器高22.0cmを測る。口頸部にはヨコナデ調整、胴部にはナデ調整を施す。胎土には5mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。918は約2/3が残存し、口径16.2cm、器高24.5cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、胴部外面下半にはヘラナデ調整、他はナデ調整を施す。上胴部外面には煤が付着し、下胴部は赤変する。胎土には赤色風化礫・雲母の混じる5mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面とも橙色を呈する。919は約2/3が残存し、口径18.9cm、器高25.7cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、胴部にはナデ調整を施す。外底表面は花卉状の剥離がみられ、部分的に煤が付着する。胎土には赤色風化礫の混じる5mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。920は約2/3が残存し、口径17.4cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、胴部はナデ調整を施す。外面粘土紐接合部には指頭圧痕が残る。中胴部と内面下半に煤が付着する。胎土には赤色風化礫の混じる5mm以下の砂粒を多量に含み、色調は内外面とも橙色を呈する。921は口縁部と胴部の一部が残り、口径18.8cmを測る。胴部にはナデ調整の痕が残る。胎土には7mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄褐色を呈する。922は口縁部と肩部の一部が残り、口径17.4cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、胴部内面にはナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫の混じる3mm以下の砂粒を含み、色調

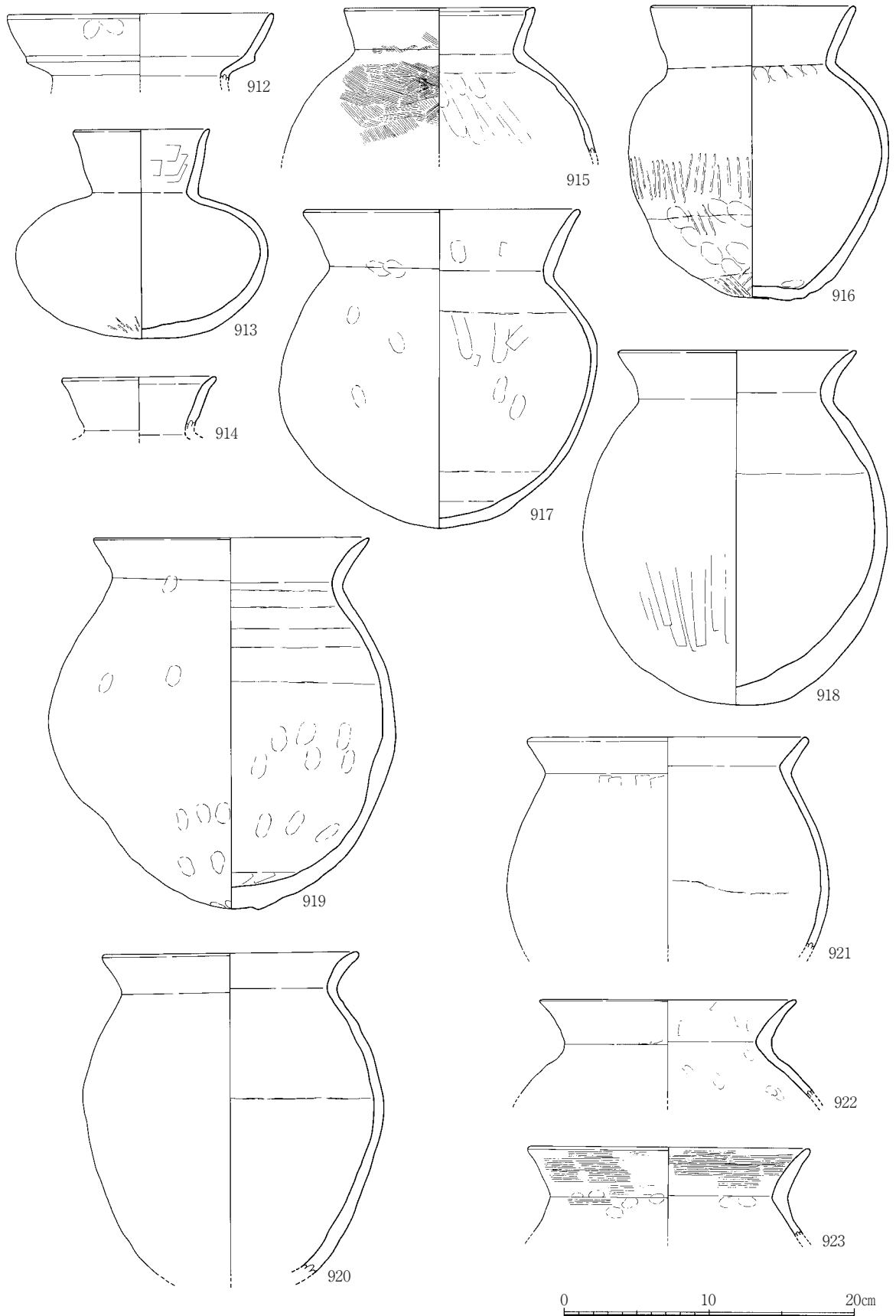


Fig.103 SF-8出土遺物実測図1

は内外面ともにぶい黄橙色である。923は口縁部と肩部の約1/3が残存し、口径19.2cmを測る。口縁部にはヨコ方向のハケ調整、他はナデ調整を施す。胎土には5mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面とも黄灰色を呈する。

924～927はA-2類である。924は約4/5が残存し、口径16.6cm、器高23.2cmを測る。器面は摩耗するが、一部にタタキ目が残る。中胴部外面には煤が付着する。胎土には赤色風化礫の混じる6mm以下の砂粒を多量に含み、焼成はやや不良で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。925は口縁と胴部の約1/2が残存し、口径18.4cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。胴中央部外面には煤が付着する。胎土には赤色風化礫の混じる7mm以下の砂粒を多量に含み、焼成はやや不良で、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。926は口縁部と肩部の一部が残存し、口径21.6cmを測る。口縁部外面にはヨコナデ調整の痕が残る。胎土には7mm以下の砂粒を多量に含み、色調は、内面が橙色、外面がにぶい褐色を呈する。927は口頸部の一部が残存し、口径18.6cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整を施す。胎土には6mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

928と929はB-1類である。928は約2/3が残存し、口径15.5cm、器高24.6cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、胴部にはナデ調整を施すが、外底面にタタキ目が残る。胎土には4mm以下の砂粒を多量に含み、色調は内外面とも明褐灰色を呈する。929は口頸部の約1/2が残存し、口径18.4cmを測る。器面にはヨコナデ調整を施す。胎土には9mm以下の砂粒を多量に含み、色調は、内面が褐灰色、外面が橙色を呈する。930～932はB-2類である。930は約4/5が残存し、口径14.8cm、器高27.1cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、胴部にはナデ調整を施す。胎土には10mm以下の砂粒を多量に含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。931は約1/3が残存し、口径16.0cm、器高27.1cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、下胴部にはタテ方向のヘラナデ調整、他はナデ調整を施す。下胴部外面には部分的に煤が付着する。胎土には5mm以下の砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。932は口縁部と肩部の約1/3が残存し、口径13.6cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整を施す。胎土には角閃石・雲母の混じる2mm以下の砂粒を少量含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。933は丸底を呈す底部の約2/3が残存する。内面にはヘラナデ調整を施し、外底面の一部にはハケ目が残る。胎土には6mm以下の砂粒を多く含み、色調は、内面が黒褐色、外面が橙色を呈する。

934は鉢で、B-1類に分類でき、ほぼ完存し、口径13.4cm、器高6.3cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、内底面には放射線上にヘラナデ調整、他はナデ調整を施す。また、内底面には黒斑が残る。胎土には5mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面とも橙色を呈する。

935～950は高杯である。935と936はB-2類で、935はほぼ完存し、口径18.8cm、器高13.1cm、底径11.5cmを測る。口縁部と裾部にはヨコナデ調整、脚柱部内面にはヘラ削り調整、他はナデ調整を施す。胎土には2～5mmの砂粒を含み、色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。936は口縁部と裾部を欠くもので、脚柱部内面にはヘラ削り調整、他はナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫・角閃石の混じる2mm以下の砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

937はC-1類で、約3/5が残存し、口径16.6cm、器高11.7cmを測る。口縁部と裾部にはヨコナデ調整、脚柱部内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には赤色風化礫が混じる6mm以下の砂粒を含み、色

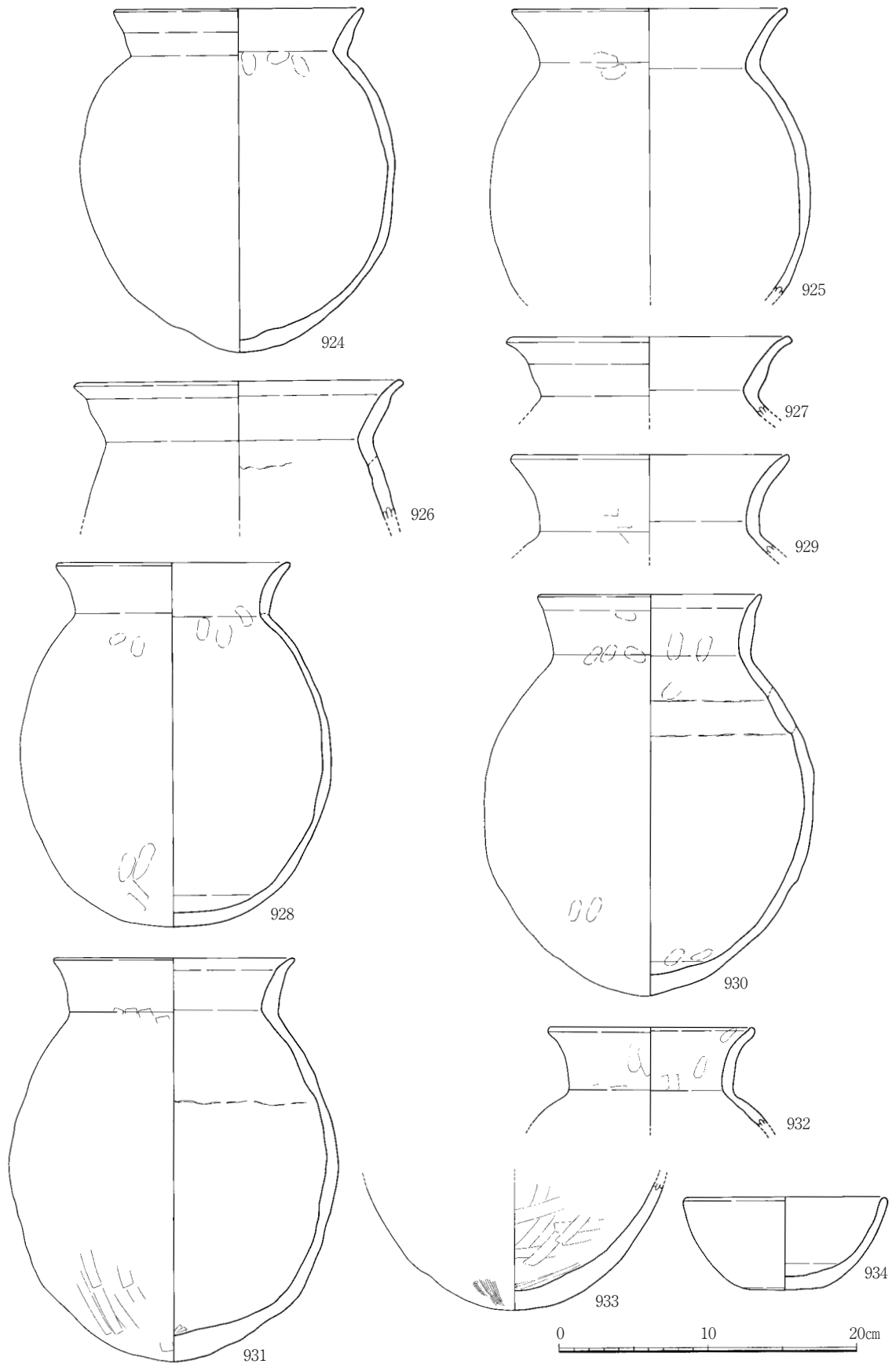


Fig.104 SF-8出土遺物実測図2

調は内面が橙色、外面がにぶい橙色を呈する。

938~942は杯部のみ残存するものですべてA類である。938は約1/4が残存し、口径16.4cmを測る。内底面はナデ調整、他はヨコナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫・角閃石・雲母の混じる2mm以下の砂粒を少量含み、色調は内外面とも橙色を呈する。939は約1/3が残存し、口径17.6cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、内底面はナデ調整を施す。胎土には4mm以下の砂粒を多量に含み、色調は内外面とも橙色を呈する。940は約1/4が残存し、口径17.8cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。器壁が他と比べて薄い。胎土には5mm以下の砂粒を多量に含み、色調は内外面とも橙色を呈する。941は完存し、口径19.8cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。胎土には5mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。942はほぼ完存し、口径20.0cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、内底面はナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫の混じる5mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。

943~945は1類の脚柱部である。943は約1/2が残存し、底径10.1cmを測る。裾部にはヨコナデ調整、脚柱部内面にはヘラ削り調整、他はナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫の混じる4mm以下の砂粒

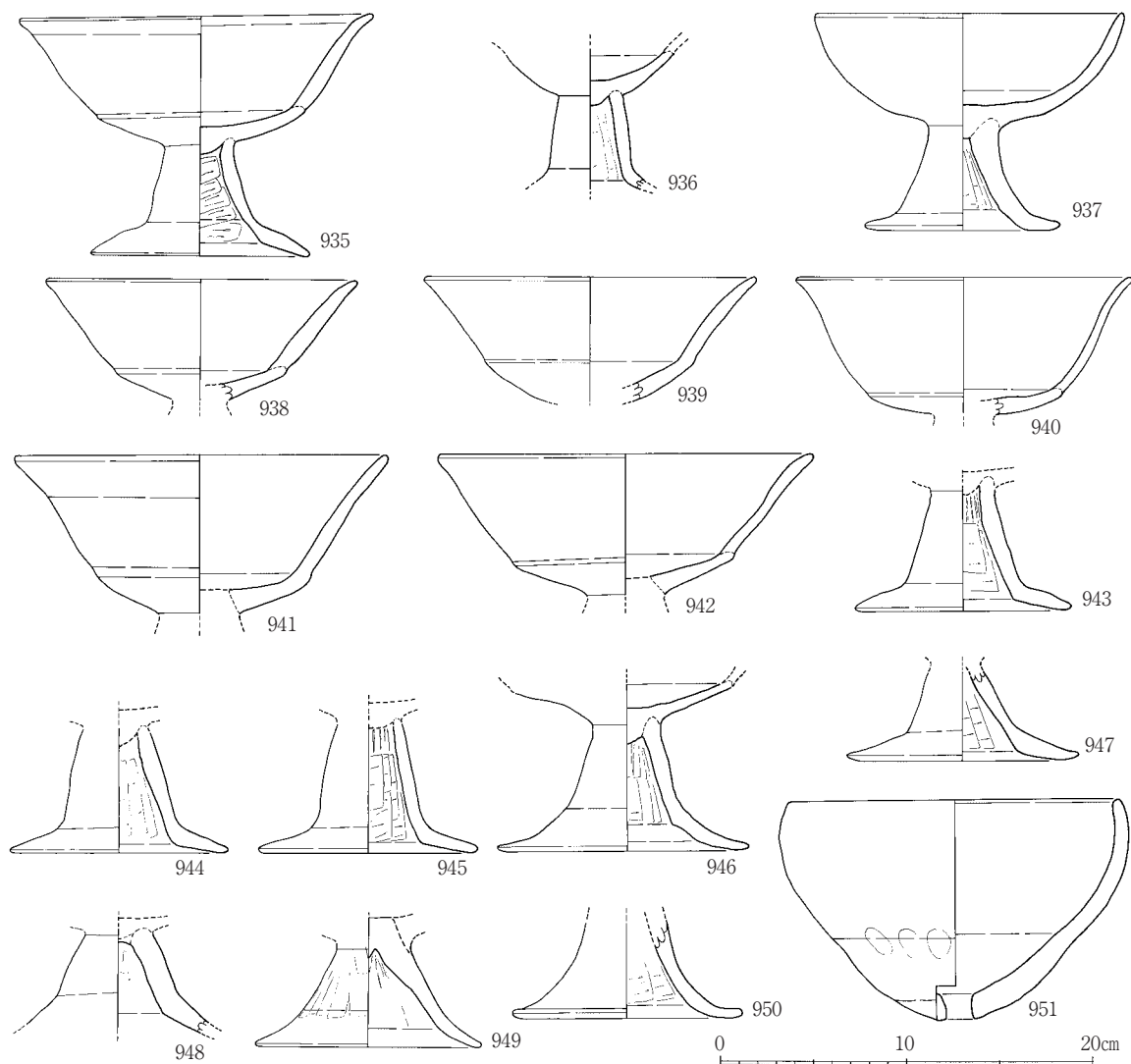


Fig.105 SF-8出土遺物実測図3

を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。944は約2/3が残存し、底径11.0cmを測る。裾部はヨコナデ調整、脚柱部内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には7mm以下の砂粒を含み、色調は、内面が橙色、外面が浅黄橙色を呈する。945は約2/3が残存し、底径11.2cmを測る。裾部にはヨコナデ調整、脚柱部内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には赤色風化礫の混じる4mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。

946～948は2類の脚柱部である。946は杯底部と脚柱部の約4/5が残存し、底径13.5cmを測る。器面は摩耗するが、裾部にはヨコナデ調整の痕、脚柱部内面にはヘラ削り調整の痕が残る。胎土には赤色風化礫の混じる10mm以下の砂粒を含み、色調は、内面がにぶい橙色、外面がにぶい褐色を呈する。947は約3/4が残存し、底径11.0cmを測る。脚柱部内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には赤色風化礫の混じる5mm以下の砂粒を含み、色調は内外面ともなぶい橙色を呈する。948は脚柱部約2/3が残存するもので、脚柱部内面にはヘラ削り調整の痕が残る。胎土は精良で、色調は内外面とも橙色を呈する。

949と950は3類の脚柱部である。949は約1/3が残存し、底径11.8cmを測る。脚柱部外面にはヘラ削り調整、内面にはヘラ削り調整、裾部にはヨコナデ調整を施す。胎土には5mm以下の砂粒を多く含み、色調は、内面が橙色、外面がにぶい橙色を呈する。950は脚柱部約2/3が残存し、内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には4mm以下の砂粒を多く含み、色調は、内面が橙色、外面が褐灰色を呈する。

951は甑とみられるもので、約1/4が残存し、口径17.6cm、器高11.8cm、孔径2.2cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整を施す。胎土には5mm以下の砂粒を多量に含み、色調は内外面ともなぶい橙色を呈する。

石製品 (Fig.106-952)

952は叩石で、全長8.2cm、全幅9.2cm、全厚6.0cm、重量648.0gを測る。両面と側面に敲打痕が残る。折損面には擦痕があり砥石としても使用した可能性が考えられる。材質は砂岩である。

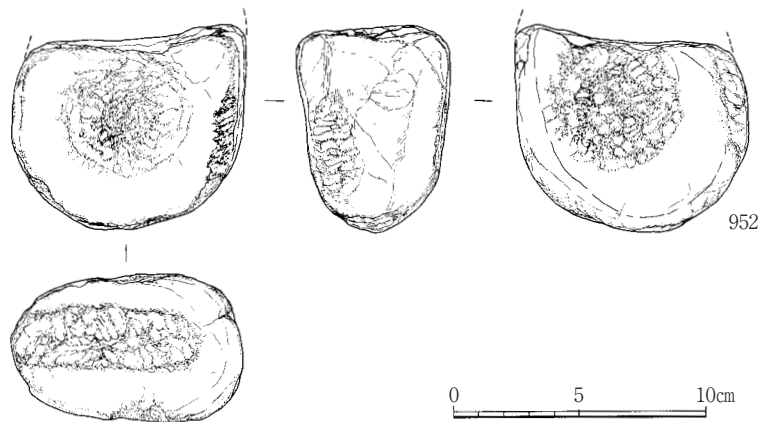


Fig.106 SF-8出土遺物実測図4

SF-9 (付図8)

調査区中央やや東寄りに位置する祭祀関連遺構で、標高4.20～4.50mから検出され、東西7m、南北6mの範囲に遺物が比較的まとまって出土した。ただし、出土状態は他の遺構と比べると散発的で、かつ破片がほとんどで、大きく4つのブロックに分かれており、小単位の祭祀行為が繰り返行われた可能性がある。出土遺物のうち図示できたのは土師器7点(953～959)、手づくね土器1点(960)、須恵器4点(961～964)であり、非実測破片点数は354点のうち17点が須恵器片である。953と954は大きさの異なる2個体の甕が入れ子の状態で出土した。2個体とも胴部以下が残存する。土器

の中の土を持ち帰り水洗して9点の白玉を確認した。

出土遺物

土師器 (Fig.107-953~959)

953・954はA類とみられる甕で、953は約4/5が残存し、残存高12.3cm、胴径23.6cmを測る。胴部内面はナデ調整、内底面は放射状にヘラナデ調整、外面はナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫・角閃石・雲母の混じる微細砂を含み、色調は内外面ともにぶい褐色を呈する。954は約5/6が残存し、残存高16.9cm、胴径17.3cmを測る。下胴部と底部にはヘラナデ調整、他はナデ調整を施す。下胴部外面の大半に煤が付着する。胎土には角閃石の混じる5mm以下の砂粒を含み、色調は内面が明赤褐色、外面が橙色を呈する。

955はB-1類の鉢で、約1/3が残存し、口径15.0cm、器高6.2cmを測る。器面は摩耗するが、ナデ調整が施されていたとみられる。胎土には赤色風化礫・雲母の混じる5mm以下の砂粒を多量に含み、焼成はやや不良で、色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が灰黄褐色を呈する。

956~959は高杯である。956はB類の杯部で約1/4が残存し、口径18.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、内底面はナデ調整を施す。胎土には4mm以下の砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。957は1類の脚柱部で約2/3が残存し、底径12.3cmを測る。内外面ともヨコナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫の混じる細砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。958・959は2類の脚柱部で、958は約2/3が残存し、底径10.0cmを測る。内底面にはナデ調整、裾部はヨコナデ調整、脚柱部内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には赤色風化礫の混じる5mm以下の砂粒を多く含み、

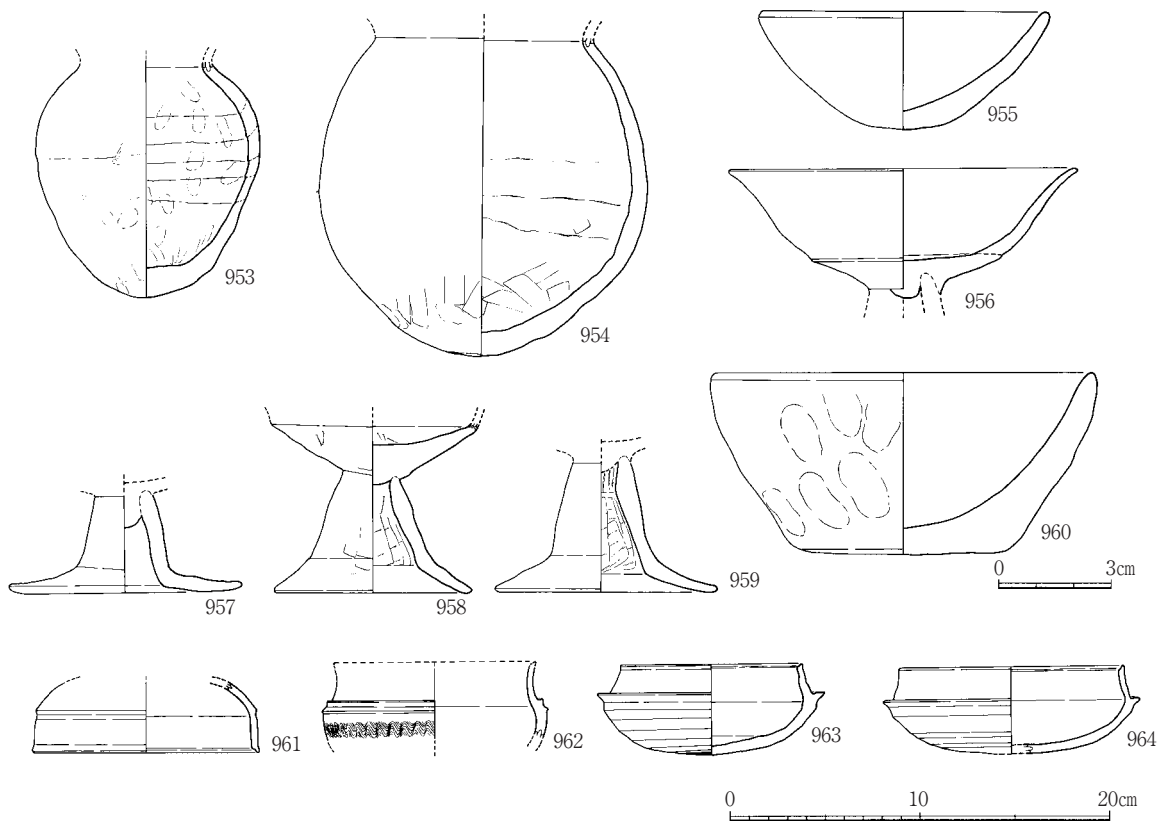


Fig.107 SF-9出土遺物実測図1

色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。959は約4/5が残存し、底径11.4cmを測る。脚柱部内面にはヘラ削り調整、裾部にはヨコナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫の混じる3mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。

手づくね土器 (Fig.107-960)

960はB類で、約1/3が残存し、口径9.8cm、器高4.8cm、底径5.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、体部内面および外底面はナデ調整、体部外面には指ナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫の混じる5mm以下の砂粒を含み、色調は、内面が浅黄橙色、外面が灰白色を呈する。

須恵器 (Fig.107-961~964)

961は杯蓋で約1/4が残存し、口径11.8cmを測る。天井部外面には回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は内外面とも灰色を呈する。

962は細片であるが杯身ではないかと見られるもので、受部径は11.4cmを測る。受部の下に断面小さな三角形の凸帯が巡り、その下に櫛描波状文を施す。器面は回転ナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は、内面が灰白色、外面が灰色を呈する。963・964は杯身で、963は約2/3が残存し、口径9.5cm、器高4.8cmを測る。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整、器面は回転ナデ調整で、底面には粘土紐接合痕が残る。胎土には約2mmの砂粒を含み、色調は内外面とも灰色を呈する。964は約1/4が残存し、口径11.7cm、器高4.6cmを測る。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。胎土は精良で、色調は、内面が灰色、外面が暗灰色を呈する。

石製品 (Fig.108-965~973)

965~973は滑石製の白玉で、すべて厚さ0.3cm以下で、色調は緑色を呈する。

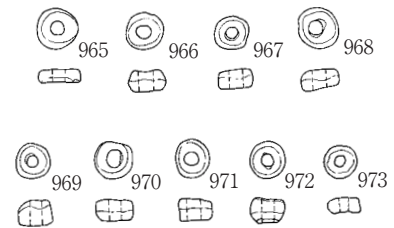


Fig.108 SF-9出土遺物実測図2 (965~973は原寸)

SF-10 (付図9)

調査区西部に位置する祭祀関連遺構で、SB-1・2と重なり、標高4.16~4.36mから検出され、東西9m、南北8mの範囲に遺物が比較的まとまって出土した。しかし、SF-9同様出土状態は散発的で、かつ破片が多く、3つのブロックに分かれており、小規模の祭祀行為が行われたものとみられる。出土遺物点数は239点で、その多くは土師器で、須恵器は1点のみであり、土師器11点(974~984)、手づくね土器2点(985・986)、須恵器1点(987)が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.109-974~984)

974と975はD類の壺で、974はほぼ完形で、口径12.0cm、器高10.1cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、胴部外面はナデ調整、底部外面はヘラナデ調整を施すが、タタキ目が残る。内面には指ナデ調整を施す。胎土には4mm以下の砂粒を多く含み、色調は、内面が明赤褐色、外面が橙色を呈する。975は約4/5が残存し、口径11.0cm、器高10.6cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、他は指ナデ調整およびナデ調整を施す。胎土には角閃石の混じる3mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。

976～979は甕である。976・977はA-1類で、976はほぼ完存し、口径10.0cm、器高14.3cmを測る。器面はヘラナデ調整され、口縁部にはヨコナデ調整、胴部にはナデ調整を加える。底部には成形時の指押えの痕が残る。下胴部以下には黒斑がみられる。胎土には細砂粒を含み、色調は、内面が明赤褐色、外面が橙色を呈する。977は口縁部と上胴部の約3/5が残存し、口径17.3cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、胴部にはハケ調整を施し、内面にはナデ調整を加える。胎土には角閃石の混じる5mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。978はA-2類で、約1/3が残存し、口径14.4cm、器高16.9cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、胴部外面にはヘラナデ調整の後にナデ調整を加え、内底面にはハケ目が残る。中胴部外面には帯状に煤が付着し、内底面は赤変する。胎土には赤色風化礫・雲母の混じる7mm以下の砂粒を含み、色調は、内面が橙色、外面がにぶい橙色を呈する。979はB-2類で、口縁部と胴部の約1/4が残存し、口径19.2cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫の混じる3mm以下の砂粒を少量含み、色調は、内面が橙

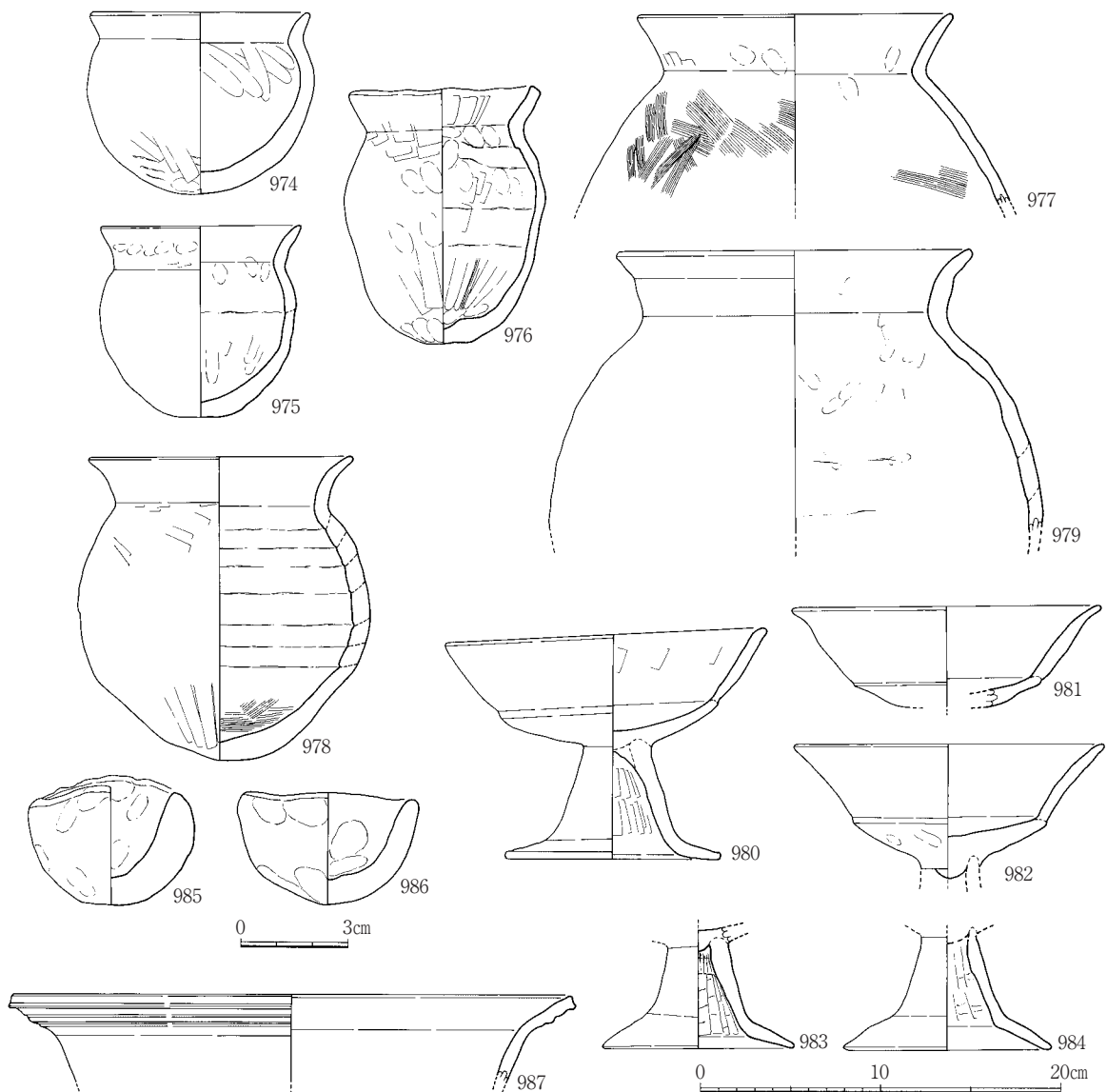


Fig.109 SF-10出土遺物実測図

色、外面が灰黄褐色を呈する。

980～984は高杯である。980はA-1類で、約4/5が残存し、口径17.5cm、器高12.9cm、底径11.8cmを測る。口縁部および裾部はヨコナデ調整、杯部内底面はナデ調整、脚柱部内面はヘラ削り調整を施す。胎土には赤色風化礫の混じる7mm以下の砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。981と982はA類の杯部で、981は約1/3が残存し、口径16.8cmを測る。胎土には赤色風化礫の混じる4mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。982は約2/3が残存し、口径17.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。胎土には5mm以下の砂粒を含み、色調は、内面がにぶい褐色、外面が褐灰色を呈する。983と984は2類の脚柱部で、983は約1/2が残存し、底径10.4cmを測る。裾部はヨコナデ調整、脚柱部内面はヘラ削り調整を施す。胎土には赤色風化礫・角閃石・雲母の混じる5mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。984は約2/3が残存し、底径11.0cmを測る。裾部はヨコナデ調整、脚柱部内面はヘラ削り調整を施す。胎土には5mm以下の砂粒を含み、色調は、内面が橙色、外面がにぶい橙色を呈する。

手づくね土器 (Fig.109-985・986)

985・986はB類である。985は完存し、口径3.8cm、器高3.6cmを測る。胎土には1mm以下の砂粒をわずかに含み、色調は、内面が灰色、外面がにぶい黄橙色を呈する。986も完存し、口径4.6cm、器高3.1cmを測る。器面には指頭圧痕が残る。胎土には3mm以下の砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい褐色を呈する。

須恵器 (Fig.109-987)

987は甕で、口縁部の一部が残存し、口径30.8cmを測る。口縁部外面には断面三角形の凸帯が巡る。胎土は精良で、色調は内外面とも灰色を呈する。

SF-11 (付図10)

調査区西部、SF-10の西隣りに位置する祭祀関連遺構で、標高4.26～4.70mから検出し、東西6m、南北3mの範囲に遺物がまとまって出土した。なお、遺構の南側は調査区外にも拡がるものとみられる。遺物は60点出土し、土師器(甕・鉢・高杯・甑)、須恵器(杯蓋・甕)、土製品(管玉)で構成され、須恵器は東側の標高4.50～4.70m、土師器は西側の標高4.26～4.50mに集中しており、時期差が看取される。また、土師器では甕が6割、高杯が2割を占める。これらのうち土師器8点(988～995)、須恵器3点(996～998)、土製品1点(999)が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.110-988～995)

988・989は甕である。988はA類で、口縁部と胴部の約1/4が残存し、口径18.2cm、胴径17.6cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫の混じる4mm以下の砂粒を含み、焼成はやや不良で、色調は、内面が浅黄橙色、外面がにぶい黄橙色を呈する。989はB-2類で、口縁部と胴部の一部が残り、口径22.8cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫の混じる4mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。

990はB-1類の鉢で、約2/3が残り、口径14.6cm、器高5.2cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、体部内面にはヘラナデ調整の後にナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫・角閃石の混じる5mm以下の砂

粒を多く含み、色調は内外面とも橙色を呈する。

991~994は高杯である。991はB-2類で、約1/4が残存し、口径は約14.8cm、器高約12.1cmを測る。杯底部に丸みを有し、杯部が深い。裾部はヨコナデ調整、脚柱部内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には2mm以下の砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。992はA類の杯部で、約2/3が残存し、口径16.6cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、内底面にはナデ調整を施す。胎土には赤色

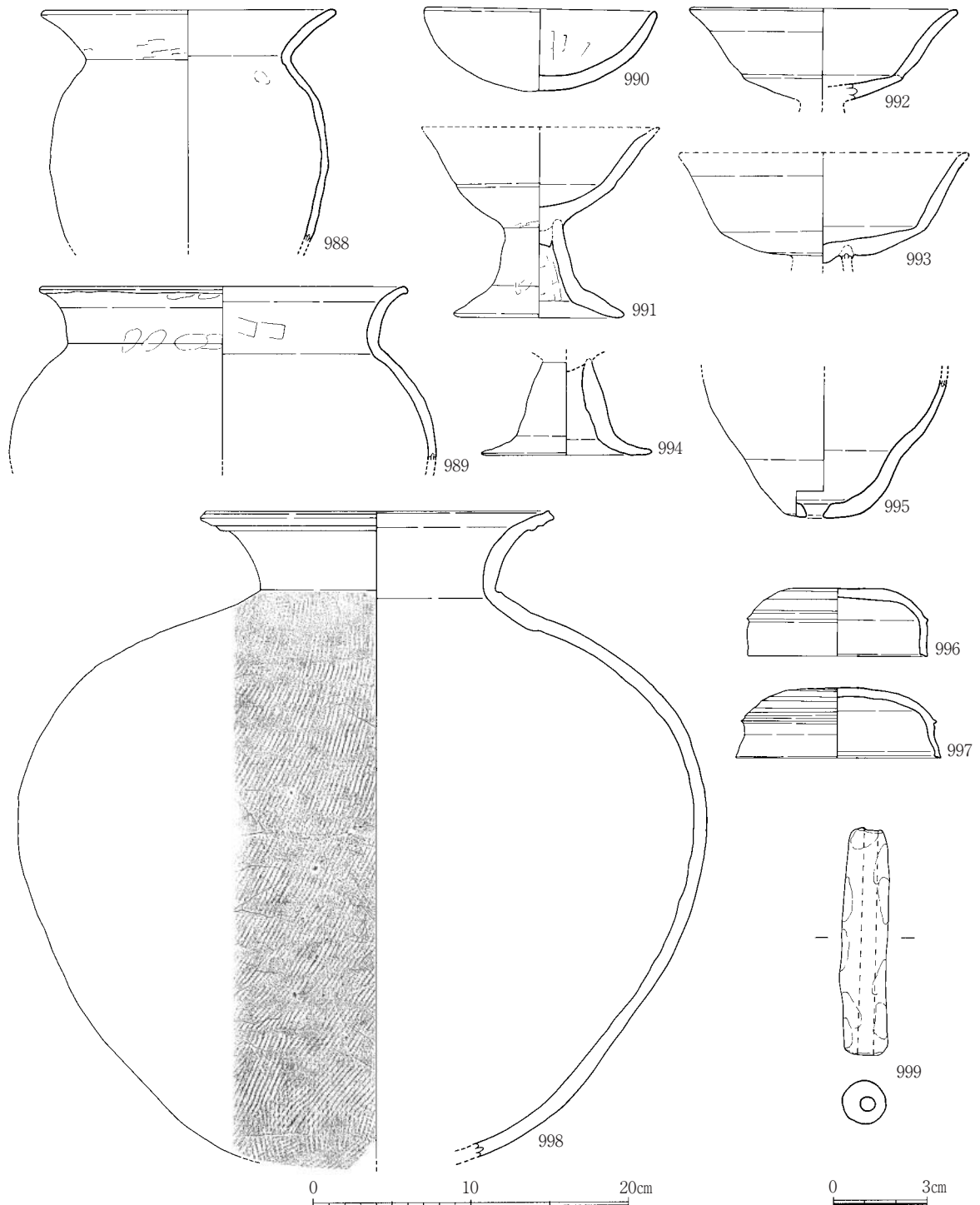


Fig.110 SF-11出土遺物実測図

風化礫の混じる6mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。993はB類の杯部で、約2/3が残存し、口径18.0cmを測る。底部外面には指押えの痕が残る。胎土には赤色風化礫の混じる6mm以下の砂粒を多量に含み、色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい橙色を呈する。994は2類の脚柱部で、約2/3が残存し、底径10.2cmを測る。器面は摩耗しており調整は不明である。胎土には5mm以下の砂粒を多量に含み、色調は、内面がにぶい黄褐色、外面が灰黄褐色を呈する。

995は甗で、底部に径1.0cmの円孔1個を穿つ。底部にはナデ調整を施す。胎土には7mm以下の砂粒を多く含み、色調は、内面がにぶい赤褐色、外面が橙色を呈する。

須恵器 (Fig.110-996~998)

996・997は杯蓋である。996は約1/2が残存し、口径11.4cm、器高4.3cmを測る。綾は断面三角形で、口縁端部は内傾する凹面をなす。天井部外面はほぼ全面に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整で、天井部内面にはナデ調整を加える。胎土には3mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも灰色を呈する。997は約2/3が残存し、口径12.9cm、器高4.5cmを測る。綾は断面三角形で、口縁端部は内傾する浅い凹面をなす。天井部外面約4/5に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整で、天井部内面にナデ調整を加える。また、天井部外面には自然釉がかかる。胎土には3mm以下の砂粒を若干含み、色調は内外面とも青灰色を呈する。

998は甗で、口縁部と胴部の約2/3が残存し、口径21.8cm、残存高40.9cm、胴径43.5cmを測る。口縁部下に断面三角形の凸帯が1条巡る。胴部外面は平行のタタキ、内面はナデ調整を加え、タタキ目を消す。口頸部内外面には部分的に自然釉がかかる。胎土には4mm以下の砂粒を多く含み、色調は、内面が灰色、外面が灰白色を呈する。

土製品 (Fig.110-999)

999は完形の管玉で、全長7.3cm、全幅14.5mm、全厚13.5mm、孔径3.5mmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を多く含み、焼成は不良で、色調は内外面とも灰色を呈する。

SF-12 (付図11)

調査区西南端、SF-11の西側に位置する祭祀関連遺構で、標高4.20~4.48mから検出し、東西5m、南北3mの範囲に遺物がまとまって出土した。遺構の中心は西側と南側でさらに調査区外に続くものとみられる。遺物は616点出土しており、土師器(壺・甗・鉢・高杯)、手づくね土器、須恵器(甗)で構成され、中でも標高4.30~4.40mに集中していた。土師器では甗が6割を占め、土師器甗(1021)の大半は南端から出土した。これら遺物のうち土師器22点(1000~1021)、手づくね土器1点(1022)、須恵器1点(1023)が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.111-1000~1019)

1000・1001は壺である。1000はC類で、口縁部約1/2が残存し、口径9.2cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整が施される。胎土は精良で、色調は、内面が明褐色、外面がにぶい褐色を呈する。1001はD類とみられる壺の底部で、約1/2が残存し、胴径13.3cmを測る。内外面ともハケ調整の後にナデ調整が施される。胎土には角閃石の混じる3mm以下の砂粒を含み、色調は一部赤変する部分もみられるが、基本的に内面がにぶい黄橙色、外面が暗灰黄色を呈する。

1002～1004は甕である。1002はA類で、口縁部と胴部の約1/4が残存し、口径19.4cm、胴径18.8cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、胴部はナデ調整を施す。胎土には5mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。1003はB-2類で、口縁部と胴部の約1/2が残存し、口径17.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、胴部内面は指ナデ調整、外面はナデ調整を施す。胎土には2mm以下の砂粒を含み、焼成はやや不良で、色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が浅黄色である。1004は丸底の底部の破片で、胴部の張りが大きいものとみられる。内外面ともヘラナデ調整が施される。外底面には焼成時にできたとみられる花卉状の剥離が認められる。胎土には6mm以下の砂粒を多く含み、色調は、内面が橙色、外面がにぶい赤褐色を呈する。

1005～1009は鉢で、1005～1007はB-1類である。口縁部は1005が直立し、1006・1007が外反する。1005は約2/3が残存し、口径13.7cm、器高6.0cmを測る。全面にナデ調整が施され、外底面には黒斑が認められる。胎土には赤色風化礫・雲母・角閃石の混じる2mm以下の砂粒を少量含み、色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。1006は約2/3が残存し、口径12.6cm、器高5.3cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整を施す。また、外底全面に黒斑が残る。胎土には赤色風化礫の混じる3mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面とも橙色を呈する。1007は約4/5が残存し、口径13.5cm、器高5.3cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、底部はナデ調整を施す。胎土には6mm以下の砂粒を多量に含み、色調は内外面とも橙色を呈する。1008と1009はC類で、1008は約1/5が残存し、口径12.8cm、器高3.8cmを測る。口縁部は直立し、端部は丸く仕上げる。口縁部はヨコナデ調整、内底面はナデ調整を施し、外底面には指押えの痕が残る。胎土には3mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。1009はほぼ完存し、口径14.2cm、器高4.5cmを測る。口縁部は短く外傾する。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。胎土には5mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。

1010～1019は高杯である。1010はA-2類で、約2/3が残存し、口径17.6cm、器高13.4cmを測る。杯底部は丸みを帯び杯部が深い。口縁部および裾部はヨコナデ調整、脚柱部内面はヘラ削り調整、他はナデ調整を施す。胎土には3mm以下の砂粒を含み、色調は、内面がにぶい褐色、外面がにぶい橙色を呈する。1011は底部と脚柱部が残存するもので、A-1類に当たる。杯底部は丸みを帯び杯部が深くなるものとみられる。器面はナデ調整、内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には5mm以下の砂粒を多量に含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。1012～1016は杯部が残存するものである。1012と1013はA類で、杯底部が平らで口縁部が外反し、杯部が浅いものである。1012は約1/4が残存し、口径17.8cmを測る。口縁部はヨコナデ調整を施す。胎土には6mm以下の砂粒を多量に含み、色調は内外面とも橙色を呈する。1013は約4/5が残存し、口径18.5cmを測る。器面はヘラナデ調整の後に内底面にはナデ調整、他はヨコナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫が混じる砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。1014～1016はB類である。1014は約2/5が残存し、口径15.8cmを測る。杯底部が丸みをもち杯部が深く、口縁部は外反する。杯部内底面はナデ調整、他はヨコナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫の多く混じる2mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。1015は約2/3が残存し、口径18.6cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、底部はナデ調整を施す。胎土には赤色風化礫の混じる4mm以下の砂粒を含み、色調は、内面が橙色、外面がにぶい橙色を呈する。1016は約1/3が残存し、口径18.8cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、底部はナデ調整を施す。胎土に

は赤色風化礫が混じる5mm以下の砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。1017と1018は2類の脚柱部である。1017は約2/3が残存し、底径12.8cmを測る。裾部はヨコナデ調整、脚柱部内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には赤色風化礫の混じる5mm以下の砂粒を多量に含み、色調は内外面とも橙色を呈する。1018は約2/3が残存し、底径11.0cmを測る。裾部はヨコナデ調整、脚柱部内面にはヘラ削り調整を施す。胎土には4mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。

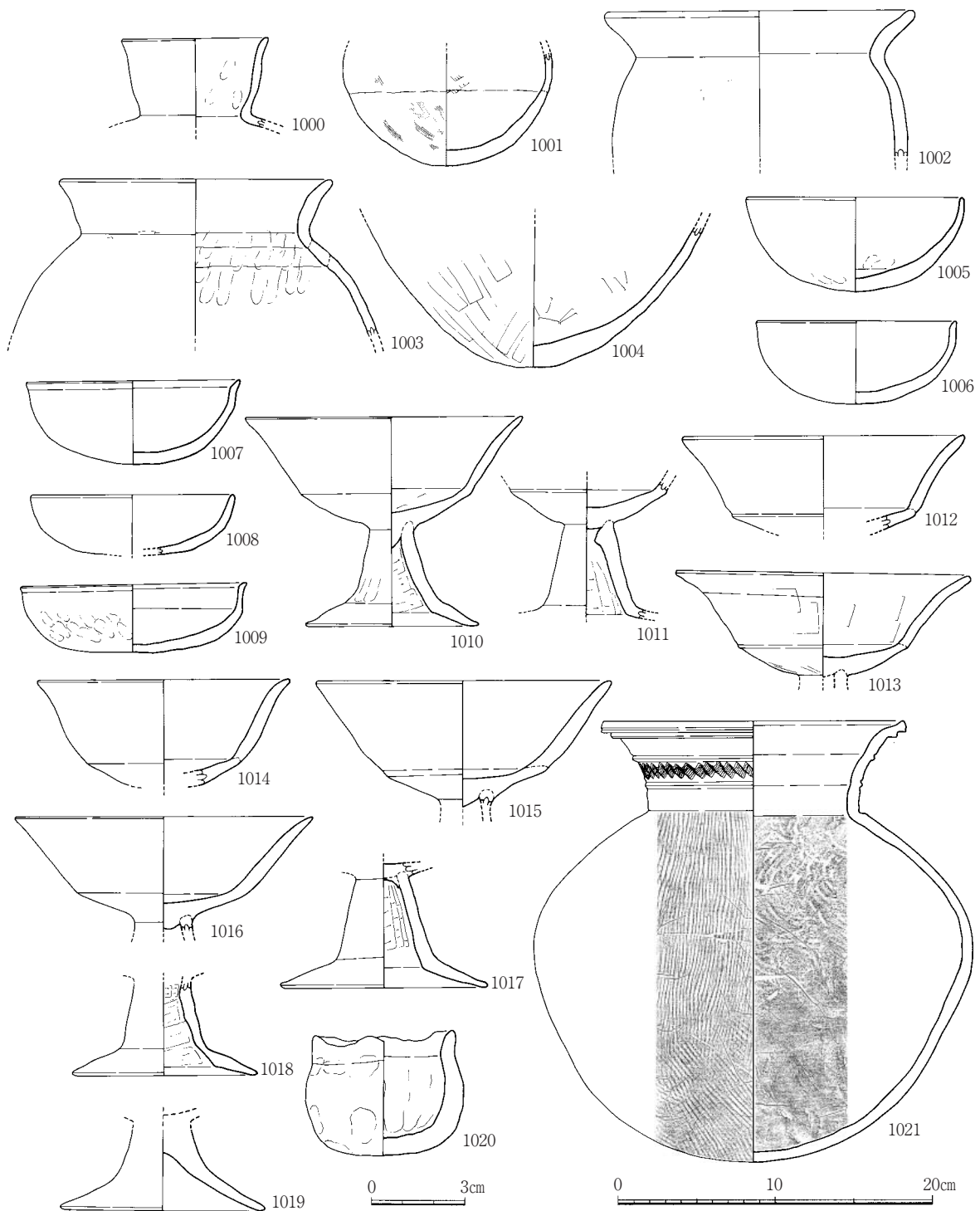


Fig.111 SF-12出土遺物実測図

1019は3類の脚柱部で、約1/2が残存する。器面は摩耗のため調整は不明である。胎土には4mm以下の砂粒を多量に含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

手づくね土器 (Fig.111-1020)

1020はA-2類で、完存し、口径4.4cm、器高4.0cmを測る。底部は平底で、口縁部は摘み上げて成形する。器面には指頭圧痕が残り、外底面に黒斑が認められる。胎土には3mm以下の砂粒を含み、色調は内外面とも橙色を呈する。

須恵器 (Fig.111-1021)

1021は甕で、約2/3が残存し、口径19.0cm、器高28.1cm、胴径27.7cmを測る。口縁部には3条の凸帯が巡り、下の2条の凸帯の間には櫛描波状文が施される。口頸部は回転ナデ調整、胴部外面にはタテ方向のタタキ、内面には同心円文のタタキを施し、部分的にナデ調整を加える。胎土は精良で、色調は内外面とも淡灰色を呈する。

(3) 古代

古墳時代同様、地形は東から西に向って徐々に傾斜しており、西側は後背湿地になっていたものとみられる。遺構はすべて調査区東部に位置し、SK-6・7、SX-2・3、SC-10~13が第V層、SK-8~10が第VI層に伴うものである。

① 土坑

SK-6

調査区南東端部で検出した楕円形を呈する土坑で、長径0.88m、短径0.68m、深さ7cmを測る。埋土は炭化物を含む暗灰褐色シルト質粘土単一層であった。出土遺物は土師器片5点、須恵器片1点、土師質土器片4点、製塩土器片7点、土錘1点であり、土師器1点(1022)と土錘1点(1023)が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.113-1022)

1022は甕で、口縁部の一部が残存し、口径18.0cmを測る。口縁部内面にはヨコ方向のハケ調整、外面はヨコナデ調整、胴部にはタテ方向のハケ調整を施す。胎土には4mm以下の砂粒を含み、焼成はやや不良で、色調は、内面がにぶい橙色、外面がにぶい赤橙色を呈する。

土製品 (Fig.113-1023)

1023は管状土錘で、両端を欠損するが紡錘形を呈し、全長3.9cm、全幅1.3cm、全厚1.2cm、孔径0.5cm、重さ4.2gを測る。

SK-7 (Fig.112)

調査区北東隅で検出した不整円形を呈する土坑で、SK-9を切っていた。長径1.05m、短径0.93m、深さ6cmを測る。埋土は3層に分層され、1層が炭化物・土器を多く含む明黄褐色粘土質シルト、2層が黄灰色粘土質シルトで骨片を含み、3層が暗灰褐色

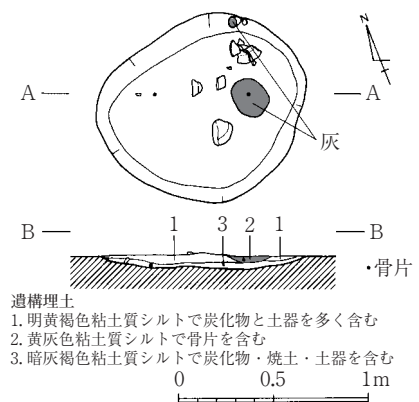


Fig.112 SK-7

色粘土質シルトで炭化物・焼土・土器を含む。出土遺物には土師器15点、須恵器5点、土錘1点があり、1層出土の須恵器1点(1024)、3層出土の土師器3点(1025~1027)と土錘1点(1028)が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.113-1024) 1層出土

1024は杯で、約2/3が残存し、口径14.4cm、器高3.9cm、底径8.4cmを測る。器面は回転ナデ調整、内底面にはナデ調整を加える。底部は回転ヘラ切りの後にナデ調整を施す。器面には数本の火襷、焼成時の歪みがみられる。胎土は精良、焼成はやや不良で、色調は内外面とも灰白色を呈する。

土師器 (Fig.113-1025~1027) 3層出土

1025~1027は甕である。1025は細片で、口径18.8cmを測る。口縁部外面はヨコナデ調整、胴部外面はタテ方向のハケ調整を施す。胎土には4mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面とも橙色を呈する。1026は口縁部の一部が残存し、口径24.6cmを測る。口縁部内面はヨコ方向のハケ調整、外面はタテ方向のハケ調整の後にヨコナデ調整を施す。胎土には石英・長石・角閃石の混じる3mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい褐色を呈する。1027は細片で、胴部外面には斜め方向のハケ目が残る。胎土には5mm大の砂粒を多量に含み、色調は内外面とも褐色を呈する。

土製品 (Fig.113-1028) 3層出土

1028は管状土錘で、紡錘形を呈し、全長4.5cm、全幅1.6cm、全厚1.5cm、孔径0.5cm、重さ8.5gを測る。

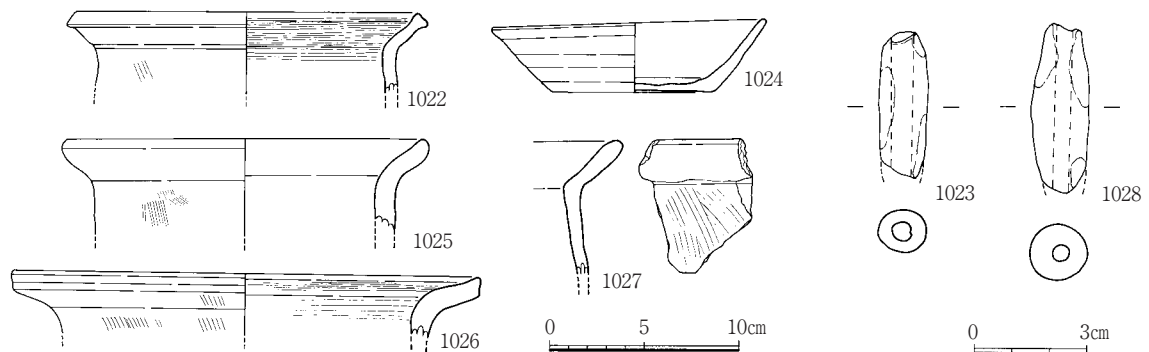


Fig.113 SK-6・7出土遺物実測図

SK-8 (Fig.114)

調査区北東隅で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SK-10を切り、東側は調査区外に出る。長辺1.05m、短辺0.78m、深さ0.28mを測る。埋土は炭化物を多量に含む暗オリーブ灰色シルト質粘土単一層であった。遺物は上層から須恵器1点、土師質土器片1点、土師器17点、製塩土器14点、土錘4点、底面から須恵器片5点、土師器片1点、製塩土器片2点、土錘1点が出土し、上層から出土した須恵器2点(1029・1030)、土錘4点(1031・1032・1034・1035)と底面から出土した土錘1点(1033)が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.115-1029・1030)

1029は杯で、底部約1/4が残存し、底径8.0cmを測る。器面は回転ナデ調整、底部外面はヘラ切りの後にナデ調整を加える。器面には火襷がかかる。胎土は精良で、色調は内外面とも灰白色を呈

する。

1030は長頸壺の頸部とみられるもので、約1/2が残存する。器面には回転ナデ調整を施す。胎土には細砂粒を若干含む。色調は、内面が灰白色、外面が淡黄色を呈する。

土製品 (Fig.115-1031~1035)

1031~1035は管状土錘で、いずれも紡錘形を呈し、1031が全長3.2cm、全幅1.1cm、全厚1.1cm、孔径0.4cm、重さ3.2g、1032が全長3.5cm、全幅1.3cm、全厚1.3cm、孔径0.4cm、重さ4.5g、1033が全長2.8cm、全幅1.5cm、全厚1.4cm、孔径0.5cm、重さ5.4g、1034が全長5.0cm、全幅1.4cm、全厚1.2cm、孔径0.4cm、重さ7.2g、1035が全長5.1cm、全幅1.4cm、全厚1.4cm、孔径0.4cm、重さ8.1gを測る。

SK-9 (Fig.114)

調査区北東隅で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SK-10を切り、長辺0.80m、短辺0.70m、深さ18cmを測る。埋土は炭化物を多量に含む暗オリーブ灰色シルト質粘土単一層であった。遺物は上層から須恵器片2点、土師質土器片18点、土師器片4点、製塩土器片15点、底面から製塩土器片1点が出土するが、図示できたのは須恵器1点(1036)であった。

出土遺物

須恵器 (Fig.115-1036)

1036は杯で、底部約1/4が残存し、底径8.2cmを測る。外底面は回転ヘラ切りの後に雑にナデ調整を加える。胎土には2mm以下の砂粒を若干含み、色調は内外面とも灰白色を呈する。

SK-10 (Fig.114)

調査区北東隅、SK-8とSK-9に切られた状態で検出した楕円形を呈する土坑で、長径1.08m、短径0.53m、深さ19cmを測る。埋土は炭化物を多量に含む暗灰褐色シルト質粘土単一層であった。遺物は上層から須恵器片1点、土師器2点、製塩土器片2点、土錘2点、下層から土師質土器片21点、土師器片2点、製塩土器片1点、床面から製塩土器片3点が出土し、上層から出土した土錘2点(1038・1039)と下層から出土した土師器1点(1037)が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.115-1037)

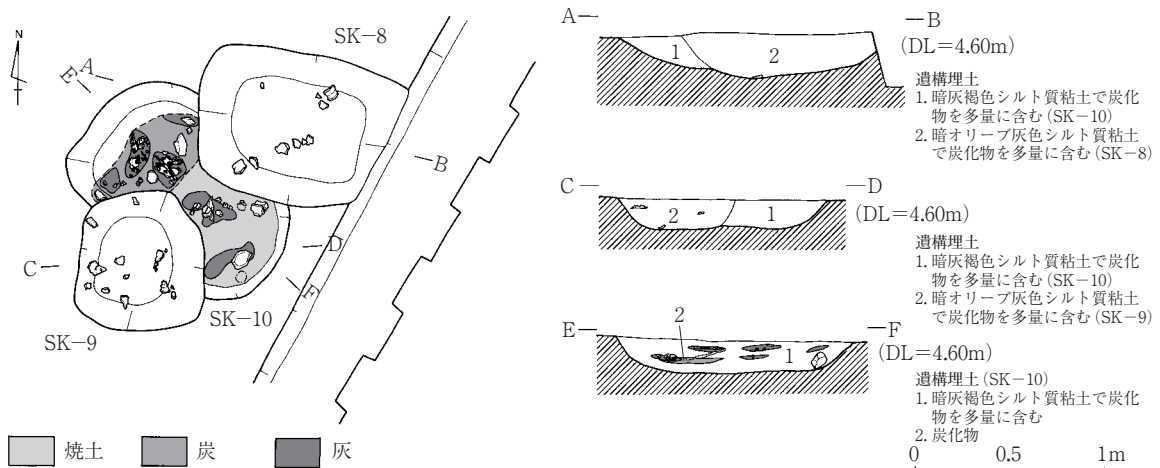


Fig.114 SK-8~10

1037は甕で、口縁部約1/2が残存し、口径19.2cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、胴部内面はナデ調整、外面は斜め方向のハケ調整を施す。胎土には1~5mmの砂粒を多く含み、焼成は良く、色調は、内面が褐色ないしにぶい褐色、外面がにぶい黄橙色を呈する。

土製品 (Fig.115-1038・1039)

1038・1039は管状土錘で、紡錘形を呈し、1038が全長4.0cm、全幅1.8cm、全厚1.8cm、孔径0.6cm、重さ10.8g、1039が全長3.8cm、全幅1.2cm、全厚1.2cm、孔径0.4cm、重さ5.1gを測る。

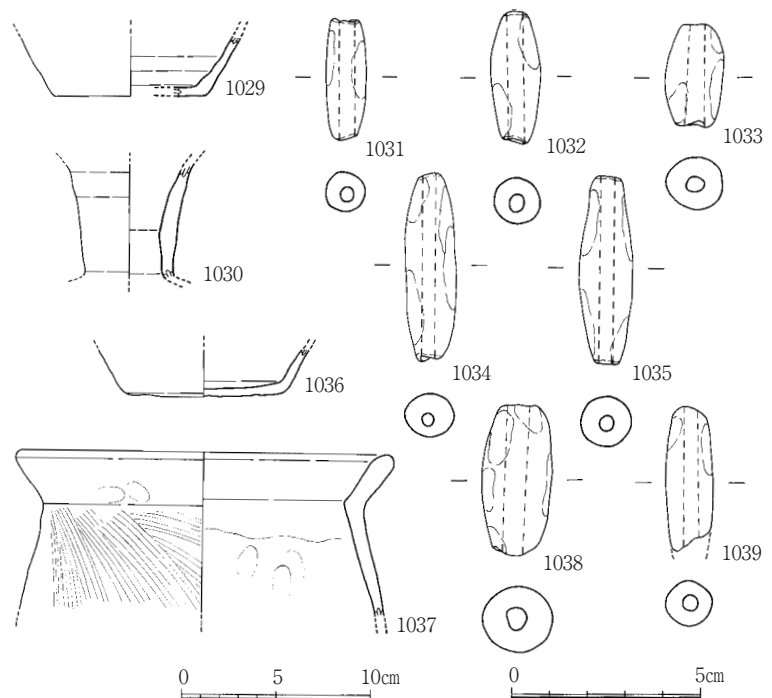


Fig.115 SK-8~10出土遺物実測図

② 性格不明遺構

SX-2 (Fig.116)

調査区南東で検出した遺構で、南北0.86m、東西0.53mの範囲に須恵器1点と製塩土器片が炭化物、焼土と共に検出された。掘方はなく、薄く堆積した炭化物の上に製塩土器が潰れた状態で出土した。図示できたのは須恵器1点(1040)と製塩土器1点(1041)であった。

出土遺物

須恵器 (Fig.118-1040)

1040は杯で、約1/3が残存し、口径13.4cm、器高3.5cm、底径7.8cmを測る。器面は回転ナデ調整で、外底面は回転ヘラ切りの後にナデ調整を加える。胎土には2mm以下の砂粒を少量含み、焼成はやや不良で、色調は内外面とも灰白色ないし淡黄色を呈する。

製塩土器 (Fig.118-1041)

1041は口縁部から胴部の約1/3が残存し、口径25.9cm、残存高17.4cmを測る。内面は主にタテ方向のヘラナデ調整、外面は不定方向のヘラナデ調整と指ナデ調整を施す。内面に布目痕は確認できなかった。二次被熱を受けて内面は明褐色、外面は明赤褐色を呈し、器壁は脆くなっている。胎土は粗く砂粒を多く含み気泡が多い。

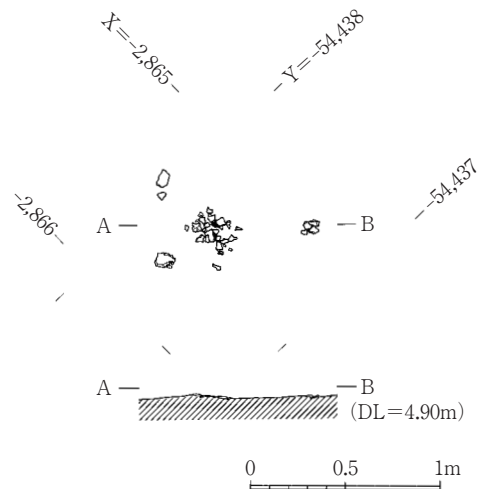


Fig.116 SX-2

SX-3 (Fig.117)

調査区南東部で検出した集石遺構で、南北1.15m、東西0.82mの範囲に砂岩、チャートの角礫が40数点散在して検出された。遺物は図示できた土師器1点(1042)と須恵器1点(1043)が礫中から出土した。

出土遺物

土師器 (Fig.118-1042)

1042は皿で、一部が残存し、口径18.0cm、器高2.3cm、底径13.7cmを測る。体部にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。胎土は精良で細砂粒を若干含み、焼成は良好で、色調は、内面が赤褐色、外面が明赤褐色を呈する。

須恵器 (Fig.118-1043)

1043は杯蓋で、約3/4が残存し、口径12.8cm、器高3.1cmを測る。天井部外面には回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整で、天井部内面にはナデ調整を加える。胎土は精良で、色調は内外面とも灰白色を呈する。

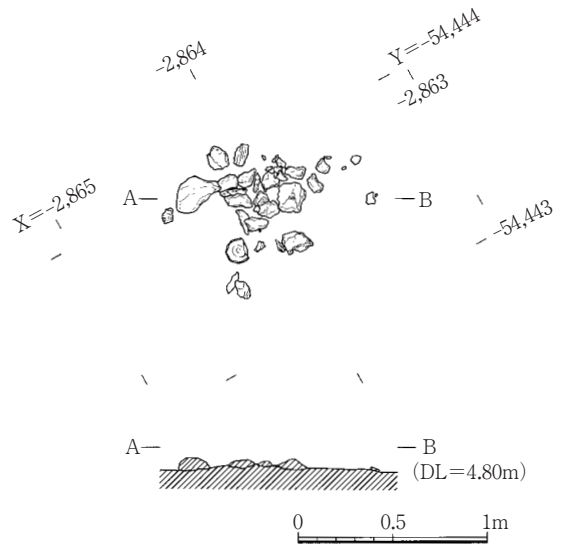


Fig.117 SX-3

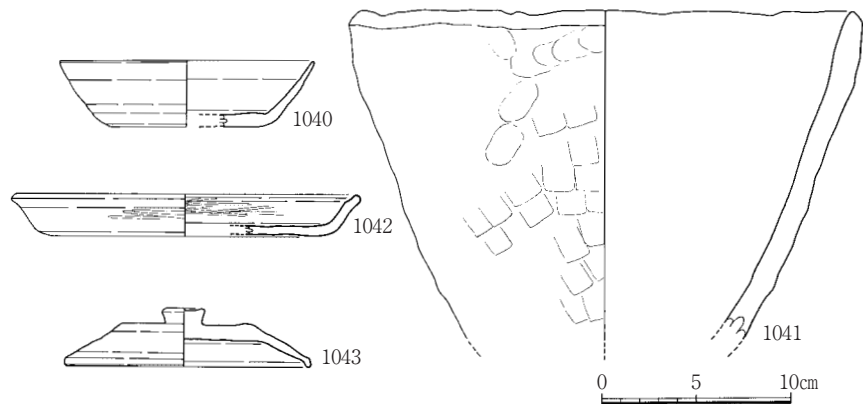


Fig.118 SX-2・3出土遺物実測図

③ 炭化物集中遺構

SC-10

調査区東端部で検出した楕円形を呈する炭化物の集中箇所、長径0.40m、短径0.34mの範囲に炭化物と灰が2.0cmの厚さで堆積していた。遺物は伴出していない。

SC-11

調査区南東部、SX-3の南隣りで検出した楕円形を呈する2つの炭化物の集中箇所、約0.30m離れており、長径0.30m、短径0.25mと長径18cm、短径15cmを測る。掘方はなく、炭化物と灰が0.8~1.5cmの厚さで堆積していた。遺物は伴出していない。

SC-12

調査区東部、SC-11とSC-13の間で検出した楕円形を呈する炭化物の集中箇所、長径0.51m、短径0.40mの範囲に灰を多く含む炭化物が3.0~6.0cmの厚さで堆積していた。伴出遺物には須恵器3点、土師器片5点等があり、須恵器3点(1044~1046)、土錘3点(1047~1049)が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.120-1044~1046)

1044と1045は杯蓋である。1044は口縁部から天井部の一部が残存し、口径11.6cmを測る。器面は回転ナデ調整を施す。胎土には細砂粒を若干含み、色調は、内面が褐灰色、外面が灰褐色を呈する。1045も口縁部から天井部の一部が残存し、口径13.5cmを測る。器面は回転ナデ調整で、天井部内面にはナデ調整を加える。胎土には砂粒を少量含み、色調は内外面とも灰色を呈する。

1046は杯で、約1/3が残存し、口径16.6cm、器高5.3cm、底径10.4cmを測る。器面は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。外底面は回転ヘラ切りの後にナデ調整を加える。器面には自然釉がかかる。胎土は精良で、色調は内外面とも灰色ないし灰オリーブ色を呈する。

土製品 (Fig.120-1047~1049)

1047~1049は管状土錘で、紡錘形を呈し、1047が全長4.6cm、全幅1.3cm、全厚1.2cm、孔径0.3cm、重さ6.3g、1048が全長3.6cm、全幅1.4cm、全厚1.4cm、孔径0.5cm、重さ6.9g、1049が全長4.2cm、全幅1.6cm、全厚1.4cm、孔径0.5cm、重さ7.9gを測る。

SC-13 (Fig.119)

調査区北東部で検出した不整形を呈する炭化物の集中箇所、長辺1.06m、短辺0.45mの範囲に灰を多く含む炭化物が9.0~12.0cmの厚さに堆積していた。伴出遺物には須恵器1点、土師器片2点があり、土師器1点(1050)、須恵器1点(1051)が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.120-1050)

1050は甕で、口縁部から胴部の約1/3が残存し、口径21.4cm、胴径21.4cmを測る。口縁部はヨ

コナデ調整、胴部はタテ方向のハケ調整の後に内面にナデ調整を加える。胎土には雲母の混じる6mm以下の砂粒を多く含み、焼成は良く、色調は、内面が褐色、外面がにぶい褐色ないし橙色を呈する。

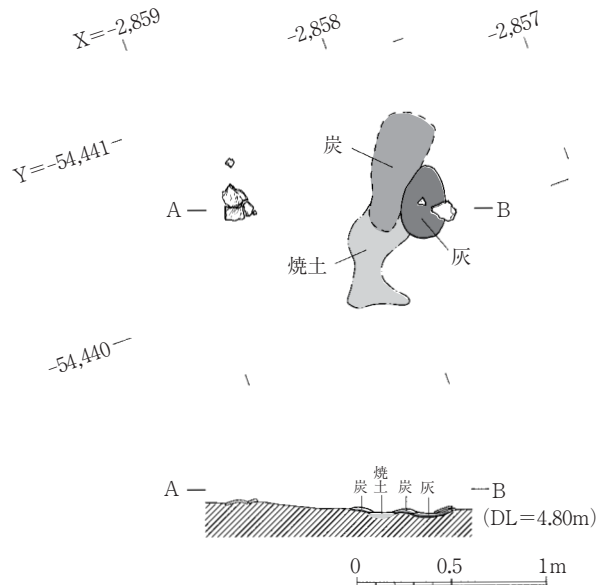


Fig.119 SC-13

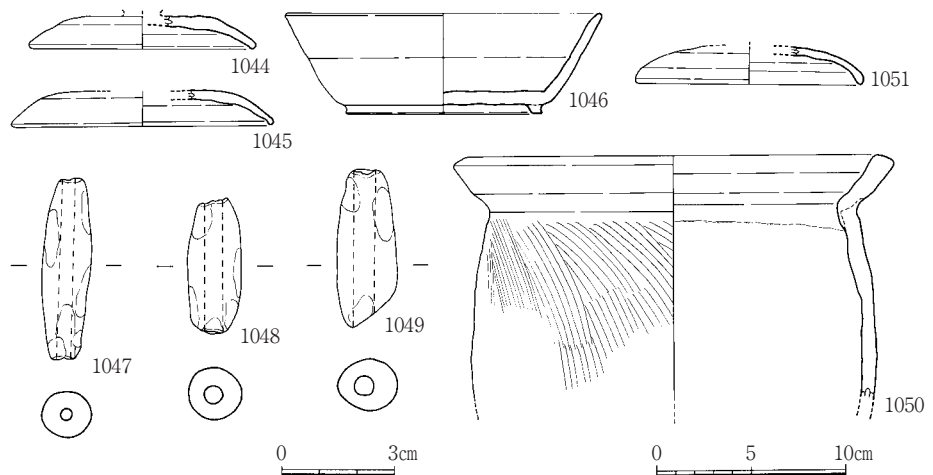


Fig.120 SC-12・13出土遺物実測図

須恵器 (Fig.120-1051)

1051は杯蓋で、一部が残存し、口径11.8cmを測る。器面には回転ナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は内外面とも灰白色を呈する。

第Ⅳ章 自然科学分析

—具同中山遺跡群から出土した木材の年代と樹種—

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

具同中山遺跡群は、四万十川支流の中筋川下流左岸に位置する。発掘調査により、古墳時代の河川祭祀遺構などが検出されている。このうち、Ⅲ-3区では、祭祀遺構と共に掘立柱建物跡2棟と、竪穴住居跡1軒が検出された。竪穴住居跡と掘立柱建物跡の柱穴では、柱材の一部が残存していた。また、竪穴住居跡では、垂木の可能性がある炭化材も出土している。

本報告では、これらの木材・炭化材の放射性炭素年代測定を行い、遺構の構築時期に関する資料を得る。また、樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。なお、試料が柱材であることから、年代測定は残存している中から最も外側の年輪を採取し、少量でも分析可能な加速器質量分析法(AMS法)で行う。

1. 試料

試料は、SB-1とSB-2の柱穴から出土した柱材13点(試料番号1・2・4~14)と、竪穴住居跡から出土した木材3点(試料番号3・15・16)である。このうち、試料番号3は炭化材であった。放射性炭素年代測定は、試料番号1~3の3点について行い、樹種同定は16点全点について行う。

2. 方法

(1) 放射性炭素年代測定

各試料について、実体顕微鏡で年輪の様子を観察した上で、残存している中で最も外側の年輪が含まれるように測定用試料を採取した。

測定は、東濃地科学センターが行った。

(2) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡および落射蛍光顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

炭化材は、3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3. 結果

放射性炭素年代測定結果および樹種同定結果をTab.4に示す。放射性炭素年代測定値は、1665±

33BP~1748±39BPで、補正年代では1659±38BP~1711±38BPであった。補正年代では、全ての試料が誤差範囲で、試料番号2は、他の試料よりも若干古い年代を示す。これらの木材は、樹種同定により、針葉樹2種類(ヒノキ・マキ属)と広葉樹1種類(アワブキ属)に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型~トウヒ型で、1分野に1~3個。放射組織は単列、1~15細胞高。

・マキ属(*Podocarpus*) マキ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。樹脂細胞が早材部および晩材部に散在する。放射組織は柔構成され、柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1~2個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・アワブキ属(*Meliosma*) アワブキ科

散孔材で、管孔は単独または2~6個が複合して散在する。道管は単穿孔または階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は大型で異性II型、1~3細胞幅、1~50細胞高。

Tab.4 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

番号	遺構名	試料の質	樹種	年代値	$\delta^{13}\text{C}$	補正年代	試料ID
1	SB-1	生木(柱材)	マキ属	1671±33	-25.50‰	1668±32	2614
2	SB-2	生木(柱材)	マキ属	1748±39	-27.26‰	1711±38	2804
3	ST-1	炭化材(垂木?)	アワブキ属	1665±39	-27.71‰	1659±38	2626
4	SB-1	生木(柱材)	マキ属	—	—	—	—
5	SB-1	生木(柱材)	マキ属	—	—	—	—
6	SB-1	生木(柱材)	マキ属	—	—	—	—
7	SB-1	生木(柱材)	マキ属	—	—	—	—
8	SB-1	生木(柱材)	マキ属	—	—	—	—
9	SB-1	生木(柱材)	マキ属	—	—	—	—
10	SB-1	生木(柱材)	マキ属	—	—	—	—
11	SB-2	生木(柱材)	マキ属	—	—	—	—
12	SB-2	生木(柱材)	ヒノキ	—	—	—	—
13	SB-2	生木(柱材)	マキ属	—	—	—	—
14	SB-2	生木(柱材)	マキ属	—	—	—	—
15	ST-1	生木(柱材)	アワブキ属	—	—	—	—
16	ST-1	生木(柱材)	アワブキ属	—	—	—	—

4. 考察

(1) 住居跡・掘立柱建物跡の年代

竪穴住居跡と掘立柱建物跡は、出土遺物の状況などから共に5世紀前後頃に建築・利用されたと考えられている。竪穴住居跡では1665±33BP(補正年代1659±38BP)、掘立柱建物跡では1671±33BP

(補正年代 $1668 \pm 32\text{BP}$)と $1748 \pm 39\text{BP}$ (補正年代 $1711 \pm 38\text{BP}$)の年代値がそれぞれ得られた。全ての試料が誤差範囲で一致している結果は、各建物が同時期のものと考えられていることと調和的である。しかし、これらの年代測定結果を換算すると、おおよそ3世紀中葉～末頃の年代を示しており、推定されている5世紀前後よりも約150年ほど古い値となっている。同様の年代値は、Ⅲ-2区SB-1から出土した木材3点の年代測定結果でも得られている。

試料のうち、掘立柱建物の柱材は、いずれも針葉樹のマキ属であった。年代測定は、測定用試料の中で最も外側の年輪を含み、できるだけ年数が少なくなるように試料を採取したが、少なくとも測定用試料には樹皮は認められなかった。また、一般に外側の辺材部の木材は、心材に比べて耐水性等が低く、削られることが多い。これらの点を考慮すれば、樹齢の誤差等(東村, 1992)によって、実際よりも古い年代が得られた可能性がある。しかし、竪穴住居跡のアワブキ属の木材も含めて、3点の試料が全て誤差範囲で一致することや、同様の年代値が隣接区でも得られていることを考慮すると、建物の構築年代がさらに遡る可能性もある。

竪穴住居跡と掘立柱建物跡では、今回測定した以外にも柱材などが出土している。今後、これらの木材についても年代測定を行い、今回と同様の結果が得られるのか確認したい。

(2) 柱材などの用材選択

竪穴住居跡は、通常の居住用の住居跡の可能性の他、祭祀や掘立柱建物を管理する建物の可能性も考えられている。出土した木材は、試料番号3が径が10cm程度あることから、垂木の可能性が考えられている。他の2点については、出土状況の詳細は不明である。樹種は、3点全てが広葉樹のアワブキ属であった。本地域では、落葉性のアワブキや常緑性のヤマビワが山地の林内に生育する。材は比較的厚重であるが、アワブキの木材は、狂いやすくて脆いため、垂木としてはあまり適材とはいえない。一方、ヤマビワは、比較的軽いが、緻密で折れ難い材質を有する(柴田, 1957)。このことを考慮すれば、木材はヤマビワの可能性が高い。

具同中山遺跡群では、Ⅲ-2区SB-1から出土した木材も全てアワブキ属に同定されている。これらの結果から、竪穴住居の垂木などにアワブキ属が選択的に利用された可能性がある。住居構築材については、これまでも各地で樹種同定が実施されている。しかし、アワブキ属を主とする結果は報告されていない。Ⅲ-2区SB-1が祭祀に関係すると考えられていることなどを考慮すれば、祭祀などを行う特殊な建物の構築材としてアワブキ属が利用されていた可能性がある。

一方、掘立柱建物跡の柱材は、2棟とも全て針葉樹材が利用され、マキ属を主とした種類構成が認められる。マキ属は、本地域の現在の植生を考慮すれば、イヌマキあるいはナギと考えられる。いずれも樹高20mに成長する高木であり、暖温帯でカシ・シイ・タブ林内によく生育する(矢頭, 1964)。木理は通直で、耐水性・耐朽性に優れた材質を有する(平井, 1980)。一方、SB-2で1点のみ認められたヒノキは、樹高30mになる高木で、暖温帯～温帯の山地の尾根などに生育する(矢頭, 1964)。木理が通直で耐水性・耐朽性に優れた材質を有する点で、マキ属の材質と共通する。これらの結果から、掘立柱建物の柱材には、針葉樹材で耐水性・耐朽性に優れた木材を選択的に利用していたことが推定される。マキ属が多いことについては、遺跡周辺においてヒノキよりもマキ属の方

が入手が容易であったこと等が考えられる。

引用文献

平井信二(1980)木の事典 第7巻. かなえ書房.

柴田桂太編(1957)資源植物辞典(増補改訂版). 904p., 北隆館.

矢頭献一(1964)図説 樹木学 一針葉樹編一. 189p., 朝倉書店.

第V章 考察

1 弥生時代について

今回の調査では弥生時代中期後半から後期初頭に属するとみられる土坑1基(SK-1)と炭化物と焼土の集中が9ヵ所確認された。また、遺物包含層中からは弥生時代中期後半から後期前葉に位置付けられる遺物が出土している。出土遺物点数は310点を数え、うち図示できたものは26点であった。

SK-1からは炭化物、焼土、灰、骨片と共に壺、甕、円礫が出土し、その出土状態から一括性の高いものと考えられる。一方、9ヵ所確認された炭化物集中遺構は遺物を伴わず、主に炭化物が円形に薄く堆積するもの(SC-1~6)と焼土を中心に炭化物と灰が混じりやや厚い堆積をなすもの(SC-7~9)の二つのタイプがみられた。これらの遺構の性格付けを行うに当たり、具同中山遺跡群の中で類例を求めると、平成9年度調査(具同中山遺跡群IV)において検出された弥生時代後期前葉に位置付けられる土器、丸木材、炭化物、骨片等が出土した浅い皿状の土坑を挙げることができる。この土坑を含む数地点の焼土から検出した骨片の分析結果から「祭祀的色彩の強い動物遺体焼成土坑」と性格付けられている。SK-1と土坑の規模に差異がみられるもののその出土状態および出土遺物において類似性が看取され、炭化物と焼土の集中箇所が周辺に広がる状況からも同様の性格であった可能性も考えられる。

一方、遺物では、SK-1出土の甕のうち口縁部が確認できるものはすべて外面に粘土帯を貼付し櫛描直線文、浮文、列点文を施すものであった。壺は長頸で甕と同様に施文される。これらは神西式土器と呼ばれる土器に共通する特徴を持つものである。725の二重口縁壺は、県内に類例が認められず、搬入品の可能性も残るが、胎土や施文は隔絶したものとは言えない。また、遺物包含層出土遺物は大半が甕で、口縁部に薄い粘土帯を貼付し施文されないものと粘土帯の貼付はみられないものの刻み目や櫛描波状文が施されるものがある。高杯(242)は、口縁部が直立する形態のものであり、後期前葉に位置付けられる。これら土器の形態および施文の特徴は、胎土の特徴¹⁾とも概ね一致する様子が見られた。このような遺物を包含する第IX層から第XI層は弥生時代中期後半から後期前葉にかけて堆積したものと考えることができよう。

祭祀遺跡としての具同中山遺跡群は古墳時代中期に代表されるが、最近の調査では弥生時代中期後半まで遡り得る資料が出土し、祭祀形態を変化させながら長期に亘って祭祀行為が行われていたものと考えられるようになっている。今回の遺構と遺物もその初現を示す資料といえよう。

(山本)

2 古墳時代について

今回の調査では掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡1軒、祭祀関連遺構12基を確認することができた。竪穴住居跡は昭和61年度から続けられている具同中山遺跡群の発掘調査において初例となる²⁾。また、検出された層位や埋土から同時期と考えられる掘立柱建物跡2棟も当該期のものとしては類例

が少なく、上部構造を持つ遺構の確認は注目されよう。これら遺構と遺物は調査区全域に拡がるものの中央部の密度がやや薄い傾向がみられた。

まず、遺物をみると甕の大半はタタキ目が消失しており、壺は僅少で各祭祀関連遺構とも数点もしくは含まれない。形態は直口壺が大勢を占めるがSF-3とSF-8から胴部が球形をなし口頸部が内湾するタイプの壺が各1点出土しておりやや古い様相を示す。甕の内面にヘラ削り調整を施す個体は確認されたもので2点(265・611)のみである。高杯脚部内面は、大半がヘラ削り調整を施すが中実でしぼり目がみられるものも含まれる。小型器台は遺物包含層から1点出土し、小型丸底壺は2点(264・740)出土しており、口縁部が退化して短くなる時期のものである。また、子持ち壺(234)が遺物包含層から出土しており、県内では古墳以外の出土としては初例となる⁽³⁾。祭祀関連遺構の中には須恵器を伴うものと伴わないものがあり、ST-1出土の把手付き椀が古い様相を持つ可能性が考えられる他は、陶邑のTK208からTK47に併行するものが中心である⁽⁴⁾。各遺構とも数型式にわたる須恵器が含まれており、このことから複数回の祭祀行為の可能性が考えられよう。

次に、上部構造を持つ遺構についてみる。SB-1・2は総柱建物とみられ、遺存した柱根の放射線炭素年代測定および樹種同定の結果では、SB-1が250～314年、SB-2が201～277年を示し、SB-2がSB-1よりやや古い結果となっており、遺物の年代とはやや異なる結果となっている。樹種はマキ属およびヒノキとの結果が出ている。いずれの材質も木理が通直で、耐水性・耐久性に優れており、昨年度Ⅲ-2区で検出した建物跡⁽⁵⁾とは異なり、長期間の使用に耐え得る木材を使用したことになる。よって自ずとその性格を異にするものと考えられる。一方、ST-1でも、柱根が遺存したP-1とP-5の生材の樹種同定および2層出土の炭化材の放射線炭素年代測定を行った結果、年代はSB-1とほぼ同じ253～329年、樹種は前述の昨年度Ⅲ-2区で検出した建物跡と同じアワブキ属アワブキ科との結果が得られた。木材についてはヤマビワの可能性が指摘されており、軽く緻密で折れ難い材質を有するとされ垂木などに選択的に利用されたとみられる⁽⁶⁾が、明らかにSB-1・2とは異なる性格を有していたと推測される。すなわち、短期間の使用を目的とした材の選定は祭祀的性格が強いものといえるのではなかろうか。また、検出された柱穴数が多く、祭祀に関連しての幾度かの建て替えが行われた可能性が考えられる。床面からは土師器甕(741)と杯部の綾が明瞭な高杯(749)が出土しているが、2層出土遺物のものとの明確な時期差は看取されなかった。これらの建物は立地場所、出土状態を考慮すると、現状では祭祀に関係した特別な空間に設けられた特定の用途を持つ建物との可能性も考えられるが、用材が異なっていることを考慮するとST-1⁽⁷⁾と昨年度確認した建物跡は祭祀に直接関連したもので、SB-1・2は祭祀に用いるものを保管した施設であったことも考えられよう。ただし、これら遺構が3世紀まで遡り得るかは今後の検討課題であるが、少なくとも5世紀前半以前に存在したものとみることができよう。これら遺構の廃絶後には引き続き祭祀行為あるいは祭祀に関する土器廃棄が行われたものとみられる。

今回検出した祭祀関連遺構については、手づくね土器と土師器を主体とし須恵器をほとんど含まないもの(A類：ST-1の2層、SF-3・6・8)、手づくね土器を中心に多量の土師器と少量の須恵器を用いるもの(B類：SF-4・5・9～12)、須恵器甕などと少量の土師器を用いるもの(C類：SF-2・11)、土製・石製模造品を多く用いるもの(D類：SF-1・7)の概ね4種類に分けることができる。A類では、

ST-1の2層とSF-8は上下の関係にあり、この2基とSF-3は下部に遺構または浅い落ち込みを持つ。ST-1の2層の遺物組成は土師器高杯32%・鉢21%・甕16%・壺10%である。甕に明瞭なタタキ目は残らず、底部は丸底と平底が混在する。鉢や内湾する椀状の脚付きの鉢(746)など古い要素が散見される。また、757の須恵器把手付き椀は県内では高知市介良遺跡に続いて2例目で、介良遺跡出土のものはTK216併行と報告されており、口径6.5cm、器高3.9cmを測る。今回出土したものとは比して小型で扁平であり、底部の静止ヘラ削り調整はヨコ方向である。一方、757は口径9.7cm、器高9.9cmを測り、口径に比して器高がやや高く、体部の装飾が凸帯のみであること、底部の静止ヘラ削り調整が粗いなどの特徴から介良遺跡出土のものより前出する⁹⁾とみられる。ST-1の上部のSF-8からは4期に位置付けられる布留式土器が出土しており、5世紀前半の中での前後関係もしくは併存が考えられる。SF-3は破片が多く土師器高杯25%・鉢22%・甕16%・壺4%で、鉢と高杯の割合が高い。鉢には器高の浅いものが多く含まれる。下部の落ち込みは炭化物を多量に含んでおり、火を焚く何らかの行為が行われたことが推察される。SF-8では、土師器甕が47%を占め今回の調査ではその多さが突出する。以下、土師器高杯39%・壺8%・鉢2%の順である。甕には下半にタタキ目を残すものが存在し、底部形態は明瞭な平底が1点ある以外は丸底であり、体部は球形と長胴が混在する。二重口縁壺(912)¹⁰⁾も確認されている。915は畿内からの搬入品とみられ、口縁部の肥厚の退化、体部外面の不定方向のハケ調整、体部内面にヘラ削り調整が認められないなどの特徴から布留4期(5世紀前半)に比定されるものとみられる¹¹⁾。直接搬入されたか否かは胎土分析を経て考慮する必要があるが、隣接するⅢ-2区からも同時期とみられるほぼ完形品が出土しておりその可能性は高いと考えられる。B類では土器組成中、高杯が優位を占める。SF-4の遺物組成は土師器高杯33%・甕29%・鉢10%・壺4%である。576の高杯は脚部に円孔を穿つものであり、古い様相を示すものである。SF-5は土師器高杯38%・甕29%・鉢19%・壺1%を占める。広範囲に広がりを持ち破碎されたものが多い。祭祀遺物は手づくね土器のみで、鉢は全体に浅い形態が目立つ。678は波状文が施された須恵器杯身で、口径が6.4cmと小さいものである。SF-12は図示できた遺物のうち土師器高杯46%・鉢23%・甕14%・壺9%である。鉢は浅いものが大半である。須恵器はTK23~47に併行するものが中心であるが、679・1021などにはやや古い様相がみられる。C類では、SF-2が祭祀遺物55%、須恵器21%を占め、SF-11の須恵器25%に次ぐ。他の遺構では須恵器は10%に満たない。SF-1出土の遺物との接合関係がみられる個体が多い。須恵器の中心はTK23~47併行のものであるが、487・488・490などはやや古い様相を持ちTK208に併行するものとみられる。489の器台はSF-1出土の器台(330)より作りにやや粗雑感がみられ時期差として捉えることもできよう。土師器甕はやや平底気味であり古い様相を示すものである。SF-11は図示できた遺物のうち土師器高杯34%・甕17%・鉢8%で壺はみられない。須恵器甕は比較的大きな破片が点在しており、破碎されたものとみられる。西側の土師器群とレベル差がみられた。D類では、SF-1とSF-7はそれぞれ手づくね土器を含めた祭祀遺物が68%と74%を占める。SF-1は遺物の出土範囲が広くかつ破片が多く、特に、白玉を始め石製模造品が多量に出土している。SF-7は手づくね土器が32点と大半である。SF-1の土師器甕(265)は外面にヘラ削り調整が施される。330の須恵器器台は原形に復元でき、複数の地点での接合関係がみられる。突帯は鋭さを欠き、TK23に併行するものとみられる。

SF-7出土の土師器甕(762)は内外面とも丁寧なハケ調整が施され、同様なハケ調整が施される甕底部(3点)もみられる。このように丁寧なハケ調整はSF-7でのみ確認された。これまでの具同中山遺跡群の調査においても類例がみられないが、全体の形態的には中期後半から後期に比定される甕の形態の範疇であるとみられ、系譜について検討を要する。供伴する須恵器はTK23~47が中心であるが、321や323などは天井部が平らで口縁端部に丸みを持ち、やや古い様相を示すものとみられる。

以上、祭祀関連遺構についてみたが、すべての祭祀関連遺構において出土遺物の時期幅が看取され、場所を変え、繰り返し祭祀行為を行っていたものとみられる。各祭祀関連遺構は時期的に重なりをもちながら、5世紀前半から6世紀初頭にかけて行われたものとみられる。

今回の調査では、柱根の分析結果から導かれる年代と最も後出するとみられる須恵器との間に最大で250年余り、最小でも150年近くの幅が考えられ、遺物の中にも4世紀代に比定されるとみられるものが散見された。隣接するⅢ-2区においても4世紀代の祭祀が示唆されており¹¹⁾、また同じく自然堤防に位置するⅣ区においては弥生時代後期に比定される竪穴状の遺構¹²⁾も確認されている。Ⅲ-3区における5世紀前半から6世紀にかけての祭祀関連遺構および前出するとみられる複数の建物跡の確認はこれまでに蓄積された資料と共に広範囲かつ長期に亙る当地での祭祀行為をさらに裏付ける資料となり、同時に自然堤防上の空間利用については広い視野からの検討を要するものである。(山本)

3 白玉について

今回の調査において、白玉が1,649点出土した。平成9年度に調査した具同中山遺跡群Ⅳ区でも695個の白玉が出土しており、これまでの調査分も合わせると具同中山遺跡群全体では約2,500個に上るものとみられる。県内では最多の白玉数を誇り、四国では愛媛県出作遺跡(約5,500個)に次ぐものである。これらのほとんどは完成品であり、破片はごく少数であり、遺構の立地密度が高いとみられる自然堤防上の調査がさらに進めば、その数はさらに増えるものとみられる。

祭祀関連遺構の中ではSF-1から1,530点と多く、総点数の約93%を占める。SF-1以外ではSF-2から14点、SF-3から16点、SF-4から5点、SF-9から9点、SF-7から43点が出土している。遺構以外ではSF-1とSF-2の間から5点、SF-5付近から5点、その他から22点が出土している。SF-7からの43点(約2.6%)を除き、すべて20点以下で1%に満たない。

最も出土数の多いSF-1における出土分布をみると付図1の通り、標高4.17~4.56mで検出され、中でも標高4.42~4.52mの範囲に収まり、かつ90%以上が、SF-1北西部の東西5.2m、南北8.0mの範囲に集中し、土製・石製模造品、須恵器器台・杯・大甕等の出土範囲とほぼ重なる。これら須恵器とSF-2出土の須恵器とは同一個体が多く認められ、同時期の祭祀関連遺構の可能性が考えられる。

材質は滑石であり、硬度、色調等に見て差異が認められるものも出土しているが、これは含有する鉱物の種類や量による差異¹³⁾とみられる。

これら白玉は形態により大きく4類に分類できる。すなわち、側面(周縁)断面が直線で、円筒形

を呈するもの(A類)、側面の中央部が膨らむが、明瞭な稜をなさないもの(B類)、側面中央部に明瞭な稜をなすもの(C類)、截頭円錐形を呈するもの(D類)である。ただし、遺存個体で明確にB類とC類に分類し難いものもあるが、B・C類を合わすと全体の約9割前後を占め、A類、D類の順となる。これは出作遺跡¹⁴とほぼ同じ結果である。また、大きさは、直径が4.0~7.0mm、全厚が1.0~5.0mm、孔径が1.1~3.3mmの範囲に収まり、全厚に5倍の差が認められ、非常に薄いタイプと厚いタイプが存在する。薄いタイプは、概してカット面が平滑であり、薄いタイプに前述の純粹な滑石がやや多い傾向がみられる。これは、軟質であることに起因するのかもしれない。全厚の分布は、1mm以上2mm未満が12個(6%)、2mm以上3mm未満が75個(36%)、3mm以上4mm未満が98個(47%)、4mm以上5mm未満が22個(10%)、5mmが2個(1%)であり、3mm以上4mm未満がほぼ半分を占め最も多く、2mm未満の薄いものは全体の6%、4mmを越える厚いものは11%であり、これも出作遺跡と同じく3.6~4.3mmのものが最も多い結果と類似する。径は大きな違いはなく、4.0~7.0mmの間に収まる。内訳は、4.0~4.4mmのものが29個(14%)、4.5~4.9mmのものが63個(30%)、5.0~5.4mmのものが92個(44%)、5.5~5.9mmのものが23個(11%)、6.0mmが1個(0.5%)、7.0mmが1個(0.5%)である。大半は5.0mm前後のもので、径4.5~5.4mmのものが全体の74%を占める。孔径はほとんど2.0mm前後に収まり、最大で3.3mmであった。

製作並びに調整技法をみると、白玉の側面はすべて主軸に平行な研磨痕が認められ、上下面については、研磨痕の認められるもの、研磨痕は認められないが、丁寧なカットにより比較的平坦で平滑なもの、カットが粗雑で上下面の一方が未調整のまま凹凸が激しいものがある。最も多いのは、研磨痕は認められないが比較的平坦で平滑なものである。

前述のとおり当遺跡群からはこれまでに多数の滑石製白玉が出土し、石製模造品や土製模造品を用いた祭祀が古墳時代中期を中心に盛んに行われたことはすでに広く知られていることである。今回、まとまった量の白玉が一定の範囲から出土したことは祭祀形態を考えるうえで貴重な資料となるものと思われる。また、四国最大級の出作遺跡との比較では、材質に差異がみられるものの、形態、大きさ、調整法等はほぼ共通しており、白玉の生産地を考えるうえで注目されよう。(田坂)

4 古代について

今回の調査では、土坑9基、性格不明遺構3基(集石遺構も含む)、炭化物集中遺構4基の遺構を検出することができた。遺構、遺物は標高の高い東端で検出され、西側ではほとんど確認することはできなかった。

まず、遺構ではSK-2~4にその配置と掘方に一定の企画性が看取されたものの製塩土器等の出土がみられ、かつ、掘立柱建物跡としての全容が不明であるため土坑として報告したが、実際は建物跡として捉えた方が適切であるのかもしれない。また、それ以外の遺構については出土遺物数も少なく、明確な性格付けはできなかった。

一方、遺物では、土師器の甕などの煮炊き具と貯蔵具、土師器、土師質土器¹⁵、須恵器の供膳具の出土以外に、多量の製塩土器と土錘の出土が注目される。製塩土器と土錘については別項で詳述するとし、時期的には、供膳具に底部糸切りのもがないこと、甕などの煮炊き具に10世紀前半代に出現する羽釜がみられないなどから下限が9世紀末ないし10世紀初め頃ではないかと考えられる。

また、供膳具の器種において、Ⅰ区(南側)では須恵器と土師器・土師質土器の比率が1:5であるのに対しⅡ区(北側)では4:1と須恵器の方が多く、Ⅱ区に赤色塗彩され口径24.5cmを測る断面長方形の貼り付け高台の付く皿(122)や調整にヘラ磨きの認められるもの、口径27.3cmを測る須恵器皿(130)のように法量の大きなものがみられるなど古い様相が看取される。(田坂)

5 製塩土器と土錘について

ここでは今回の調査で比較的まとまって出土した製塩土器と土錘についてみてみたい。

まず、当該期の製塩土器については、県内では官衙あるいは古代寺院関連遺跡からの出土例がみられるものの遺跡数⁹⁶は少なく、当遺跡群周辺では船戸・風指遺跡などから緑釉陶器や蛇尾、丸軻などの官衙関連遺物と伴出したことから官衙との関連が指摘されており、今回、具同中山遺跡群Ⅳ区に引き続き製塩土器が出土したことは、律令期における当地方の状況を知る上で重要である。製塩土器そのものは、弥生時代から近世まで連綿と存在し、古代の製塩土器について海の中道遺跡では大きく2種類に分類⁹⁷している。それによると塩製造用の製塩土器は形態を変化させながら弥生時代から古墳時代、古代、中近世まで引き続いて存在するが、円筒形Ⅱ類土器は、塩の生産と流通が国家の強力な統制下で製造用に加えて法量が一定で、運搬しやすい製塩土器が必要とされたため古代律令国家体制と連動して8世紀後半から9世紀前半を中心としたものとされる。塩の貢納⁹⁸、流通の運搬と深く関係したⅡ類土器は、律令国家体制の衰退で製塩の国家統制が衰退すると共に姿を消し、本県においても10世紀以降の遺跡からは官衙関連遺跡であっても出土しない。

県内から出土した製塩土器は、この円筒形のⅡ類土器であり、遺跡の時期もⅡ類土器が流通する時期内に相当する。海の中道遺跡で出土したⅡ類土器は概ね口径10.0~12.0cmに収まるものであるが、県内出土のものは、下の坪遺跡⁹⁹が口径8.0~15.0cm、小籠遺跡が口径8.0~9.5cm、具同中山遺跡群Ⅳ区出土の製塩土器が口径10.1~13.1cm、今回出土したものは前述のとおり2種類に分かれる。製作技法も法量を一定にするため、型に粘土を貼り付けて成形し、口縁端部の余分な粘土をヘラまたは指で切り落としたものとみられる。

製塩土器が出土する遺跡は、官衙関連遺跡が多いことは前述のとおりであるが、注目されるのは、県内のⅡ類製塩土器の出土する遺構や遺跡から土錘の出土頻度が高いことである。土錘の出土は当然漁網の存在を表し、漁労生産業の存在を示すものである。例として、曾我遺跡、下ノ坪遺跡、具同中山遺跡群などがある。これまでで最も多くの製塩土器が出土した下ノ坪遺跡では土錘の伴出が比較的多く、有溝土錘と管状土錘の2種類が確認されている。一方、具同中山遺跡群Ⅳ区では4基の土坑から製塩土器に土錘が伴出するが、すべて管状土錘である。

今回当遺跡群出土の円筒形Ⅱ類の製塩土器も、伴出する土錘の存在と考え合わせれば、当地方における貢納用の海・水産物の加工生産に関係する可能性もあるが、風指遺跡など周辺部の状況からすれば祭祀関連の可能性が高そうである。一般に官衙関連遺跡から出土する製塩土器は、労働の対価や食品加工用、儀礼用、祭祀用、食用等さまざまな用途が考えられるが、今後8世紀から9世紀頃の内陸部の四万十川、物部川、仁淀川など水系近くの官衙関連遺跡でⅡ類製塩土器が出土した場合、土錘その他の生業に関係する伴出遺物の有無が注目される。

Tab.5 土錘計測表

番号	出土位置	全長	全幅	全厚	孔径	重さ	P値	番号	出土位置	全長	全幅	全厚	孔径	重さ	P値
9	第V層	4.0	1.7	1.6	0.6	12.0	2.3	175	第V層	5.4	2.2	2.1	0.6	23.6	2.5
10	〃	4.6	1.5	1.4	0.4	8.1	3.1	176	〃	6.3	2.3	2.3	0.5	26.4	2.8
11	〃	5.1	1.9	1.8	0.5	18.0	2.7	177	〃	5.1	2.6	2.6	0.8	32.5	2.0
12	〃	5.1	2.0	2.0	0.6	17.3	2.6	178	〃	4.8	1.9	1.9	0.6	13.0	2.5
13	〃	5.1	2.0	2.0	0.5	17.0	2.6	179	〃	4.3	2.0	1.9	0.6	16.3	2.2
14	〃	5.4	1.5	1.4	0.4	9.7	3.6	199	第VI層	2.5	2.6	2.4	0.7	12.9	1.0
15	〃	5.2	1.6	1.7	0.6	12.0	3.3	200	〃	3.8	1.3	1.3	0.4	6.0	2.9
16	〃	4.6	1.6	(1.4)	0.4	7.7	2.9	201	〃	4.4	1.4	1.3	0.4	7.2	3.1
17	〃	4.4	1.6	1.5	0.4	8.7	2.8	202	〃	5.2	1.6	1.5	0.4	9.9	3.3
18	〃	3.7	1.4	1.2	0.4	4.2	2.6	203	〃	4.8	2.2	2.3	0.7	20.0	2.2
19	〃	4.7	1.5	1.5	0.5	8.4	3.1	204	〃	5.5	2.2	2.2	0.6	24.6	2.5
20	〃	4.6	1.7	1.6	0.6	10.1	2.8	205	〃	4.5	2.8	2.5	0.7	21.1	1.6
21	〃	5.0	1.7	1.6	0.6	12.0	2.9	690	SK-2	3.6	1.4	1.4	0.4	5.6	2.6
22	〃	4.2	1.6	1.5	0.5	9.5	2.6	691	〃	5.6	1.3	1.3	0.4	8.0	4.3
23	〃	4.8	1.8	1.7	0.6	12.1	2.7	692	〃	5.1	1.7	1.6	0.6	10.9	3.0
24	〃	4.3	1.3	1.2	0.5	6.0	3.3	693	〃	5.0	1.4	1.5	0.5	9.4	3.6
25	〃	3.9	1.8	1.7	0.6	11.8	2.2	696	SK-3	5.0	2.2	2.0	0.5	20.2	2.3
26	〃	4.7	1.8	1.9	0.5	12.8	2.6	697	〃	4.9	1.0	1.0	0.4	3.8	4.9
27	〃	4.2	1.5	1.6	0.5	8.2	2.8	698	〃	4.5	1.0	1.0	0.3	3.3	4.5
28	〃	4.5	1.4	1.5	0.5	7.8	3.2	699	〃	4.2	1.0	0.9	0.3	3.5	4.2
29	〃	5.1	1.2	1.0	0.3	4.6	4.3	700	〃	4.7	1.5	1.6	0.4	8.1	3.1
30	〃	6.0	1.1	1.0	0.4	5.3	5.5	701	〃	3.8	1.3	1.3	0.4	5.6	2.9
33	第VI層	4.4	1.6	1.5	0.6	9.7	2.8	702	〃	3.9	1.5	1.5	0.4	7.5	2.6
154	第V層	3.7	1.2	1.1	0.5	4.0	3.2	703	〃	3.5	1.5	1.4	0.4	5.8	2.3
155	〃	3.9	1.3	1.3	0.3	5.1	3.0	704	〃	3.4	1.1	1.0	0.4	2.4	3.0
156	〃	4.7	1.4	1.2	0.3	5.8	3.4	705	〃	3.8	1.0	1.1	0.4	4.4	3.8
157	〃	4.7	1.4	1.2	0.5	6.0	3.5	706	〃	3.1	1.0	0.9	0.4	2.1	3.3
158	〃	3.9	1.4	1.4	0.4	6.2	2.8	715	SK-4	3.4	1.1	1.0	0.4	3.4	3.1
159	〃	4.3	1.3	1.3	0.3	6.5	3.3	716	〃	4.5	1.6	1.6	0.5	9.5	2.8
160	〃	5.1	1.3	1.4	0.5	6.6	4.1	717	〃	5.0	1.5	1.5	0.6	7.8	3.3
161	〃	5.0	1.5	1.5	0.5	8.7	3.3	718	〃	5.1	1.5	1.4	0.5	8.8	3.5
162	〃	4.7	1.6	1.5	0.4	9.1	2.9	724	SX-1	4.1	1.0	1.0	0.4	3.1	4.1
163	〃	3.6	1.8	1.8	0.6	9.8	2.0	1023	SK-6	3.9	1.3	1.2	0.5	4.2	3.0
164	〃	4.0	1.6	1.5	0.5	10.8	2.5	1028	SK-7	4.5	1.6	1.5	0.5	8.5	2.9
165	〃	3.7	1.9	1.9	0.6	12.2	1.9	1031	SK-8	3.2	1.1	1.1	0.4	3.2	2.9
166	〃	4.1	1.9	1.9	0.7	12.3	2.1	1032	〃	3.5	1.3	1.3	0.4	4.5	2.7
167	〃	5.2	1.9	1.9	0.6	13.8	2.7	1033	〃	2.8	1.5	1.4	0.5	5.4	1.8
168	〃	3.8	2.0	2.1	0.6	15.4	1.9	1034	〃	5.0	1.4	1.2	0.4	7.2	3.7
169	〃	3.9	2.0	1.9	0.5	16.0	2.0	1035	〃	5.1	1.4	1.4	0.4	8.1	3.6
170	〃	4.8	2.1	2.0	0.7	16.1	2.3	1038	SK-10	4.0	1.8	1.8	0.6	10.8	2.2
171	〃	5.6	2.1	2.1	0.6	18.5	2.7	1039	〃	3.8	1.2	1.2	0.4	5.1	3.2
172	〃	5.0	2.2	2.2	0.7	19.0	2.3	1047	SC-12	4.6	1.3	1.2	0.3	6.3	3.5
173	〃	5.3	2.0	2.2	0.6	22.6	2.7	1048	〃	3.6	1.4	1.4	0.5	6.9	2.6
174	〃	5.9	2.2	2.1	0.6	22.7	2.7	1049	〃	4.2	1.6	1.4	0.5	7.9	2.6

- 註 1. 番号は遺物番号を示し、本文、挿図、図版の番号と同じである。
 2. 全長、全幅、全厚、孔径の単位はcmで、重さの単位はgである。
 3. 計測数値の中で()表示のものは残存値を示す。

土錘についてみると、今回出土したものはすべて管状土錘で、ほとんどが紡錘形を呈する。これら土錘は、20g未満のものが約90%、残り約10%が20.0～32.5gのものであり、紐孔は0.3～0.8cmで、0.5cm以下が67%を占め、平川敬治氏の分類²⁰⁾に従うと80%の土錘が投げ網用、20%が固定式刺し網・流し網用に使用されたものとみられる。また、真鍋篤行氏の指標²¹⁾でみると55%が $L=0.25$ 以下(孔径0.5cm以下)で、 $1 < P > 3.5$ の数値のものに当たり、 $L=0.25$ 以下(孔径0.5cm以下)で、 $1 < P > 6$ の数値のものは67%であり、投げ網系ないし刺し網系の漁法が考えられる。何れにしろ、今回出土した土錘は投網漁ないし刺し網漁に使用されたものといえよう。(田坂)

6 まとめ

今回の調査では、各時代注目される遺構、遺物を検出することができた。中でも注目されるのは古墳時代の掘立柱建物跡と竪穴住居跡の検出であり、祭祀関連遺構との関わりであろう。平成11年度の調査で、西に隣接するⅢ-2区から掘立柱建物の梁部分とみられる柱穴3個の検出に次ぐもので、建物跡が復元できたのは初めてである。用材に違いがみられ、耐久性のある針葉樹材(ヒノキ、マキ属)と建築材としては適さないアワブキ属(ヤマビワか)の使い分けは使用目的の違いではないかとみられ、それぞれどのような役割を果たしていたかも注目される。

まず、その存続時期について、周囲で検出されている祭祀関連遺構も含めて考えてみたい。祭祀関連遺構は明瞭な掘方を伴わず、祭祀遺物と土師器や須恵器で構成され、場合によっては炭化物や焼土を伴う。須恵器を伴出する場合は、一定の時期を特定することが可能であるものの祭祀関連遺構からは少なくとも4型式、60年以上の時期差が看取される。これらが同じ遺物包含層に含まれ、上下関係も一定せず出土する。このことは複数の綿々とした祭祀行為の結果とみることができる。一方、土師器に関しては編年私案は試みられているものの良好な資料に乏しく不確定な要素を含んでいる。一般的に、土師器になれば弥生土器で盛行したようなタタキ調整はみられなくなり、減少するものの漸次的である。少なくとも須恵器を伴う土師器にはみられなくなる。Ⅲ-2区の調査の際も底部にタタキ目が残る個体がみられたり、古墳時代初めの小型丸底壺の出土等、少なくとも4世紀代に位置付けられる祭祀関連遺構が想定され、今回もそのような個体を散見することができた。前述のような状況でこれら土師器が土製模造品や石製模造品と伴出することもある。また、特に出土量の多い土師器の甕では、須恵器のような型式変化とは異なり緩やかな型式変化が想定され、土師器のみで構成された祭祀関連遺構などでは時期の特定が難しい。このような状況であるが、古墳時代前期に位置付けられる祭祀関連遺構も存在したのと考えられる。そこで、今回行ったSB-1・2及びST-1に遺存していた用材の放射性炭素年代測定の結果を検討してみたい。それらの補正年代を暦年代に置き換えてみるとSB-1の用材(試料番号1)が西暦250～314年(3世紀後半から4世紀前半)、SB-2の用材(試料番号2)が西暦201～277年(3世紀)、ST-1の用材(試料番号3)が西暦253～329年(3世紀後半から4世紀前半)となり、すべて3世紀代まで遡り得る結果がでていいる。分析試料は最も外側を採取したが、樹皮は遺存しておらず、一定削られたことが想定されるものの、数センチ内で多くても十数年程度の誤差ではないかとみられる。一方、遺存した柱根すべてに対して行った訳ではなく、分析試料は各遺構1点であり、暦年代の決め手とは言い難く、かつ、ST-1の試料は須

恵器(757)の伴出した同じ埋土から採取した炭化材²⁴⁾で、その結果には疑問が残る。Ⅲ-2区で行った分析結果²⁴⁾では、4世紀代を中心とした時期が想定されているが、今回はそれより遡ることとなった。これらを総合すると今回の放射性炭素分析結果は実年代よりやや古い時期を示しているのではないかと思われる。しかし、土器では前述のように4世紀代に位置付けられるものも存在するとみられ、当該期の祭祀関連遺構としては抽出できなかったものの土師器で構成されたものの中にはそれが含まれるものとみてよいであろう。

次に、視点を換え、今回の調査区の立地について考えてみたい。現標高についてはFig.2に示すとおり、自然堤防が南北に蛇行する中筋川の左岸に形成され、南部に最も高い部分がみられる。また、北部は平成9年度にⅣ区として発掘調査が実施されており、古墳時代の標高²⁵⁾は今回の調査区よりやや高くなっている。丁度今回の調査区は南北の自然堤防頂部の間に位置するとみることができよう。一方、遺跡の立地する自然堤防、すなわち具同中山遺跡群(現標高約5.0m以上)の推定遺跡面積は約37万 m^2 で、自然堤防頂部(現標高7.0m以上)は約12万 m^2 を占める。このうち、発掘調査を実施した面積は約30,000 m^2 (約8%)で、かつ、自然堤防頂部を調査したのは今回を含め過去3回で、調査面積は4,147 m^2 (約3.5%)である。特に、当初の発掘調査が河川改修に伴うものであったため自然堤防頂部から外れた標高の低い箇所に集中した。結局のところ、遺跡の中心部とみられる自然堤防上でも標高の高い7.5m以上(現標高)の部分の調査は行われておらず、言わば遺跡縁辺の調査に終始した感もある。その中で、標高の高い部分の調査では多くの祭祀関連遺構が検出され、さらに今回の上部構造を有する遺構の確認に至ったことになる。

これらを整理すると、まず、柱の用材がⅢ-2区の掘立柱建物跡や今回の竪穴住居跡とは異なり、かつ、Ⅲ-2区の掘立柱建物跡に比べ柱間寸法が広く、規模が大きい点が挙げられる。これは目的の違いを表しているといえよう。すなわち、今回の建物は一定期間の使用を前提としているのに対しⅢ-2区の掘立柱建物跡は短期間の使用のためにのみ作られたといえるのではなかろうか。竪穴住居跡についても同様のことが推察される。ただし、床面から祭祀遺物の出土はなく一般の住居跡と捉えても問題はないのではないかとみられるが、住居が一定埋まった段階で祭祀行為(埋土²⁾が行われ、かつ、埋没後もその真上を中心に祭祀行為(SF-8)が行われており、一種特異な状況を呈している。また、柱用材も一般の竪穴住居では使用することのない材を使用しており、やや様相を異にすると考えられる。次に、その立地についてみれば具同中山遺跡群の中では最も立地に適した場所とはいえないまでも標高が高く比較的安定した場所に位置しているとみられる。周囲の遺構の状況をみれば、標高が高くなるほど祭祀遺構・遺物が多く検出される傾向にあり、また、建物の周囲では盛んに祭祀行為が行われた痕跡がみられ、かつ、建物と重複して小規模であるが祭祀行為も行われている。

これらを総合すると、今回の建物は祭祀に関わるものを保管した建物であったとみた方が現況に則しているものと考えられる。ただ、南側に標高の高い部分が拡がること、周辺部に集落と考えられる遺跡が発見されていないことを考え合わせれば集落が存在する可能性も捨てきれない。昭和61年度から始まった当遺跡群の発掘調査は本年度のⅡ-2区の調査を持って一旦終了するが、解明していかなければならない問題点も多い。なお、平成14年度に刊行予定の『具同中山遺跡群Ⅱ-2』

ではこれまでの発掘調査を総括してみたい。

(廣田)

註

- (1) 土器の胎土は概ね2種類に分けることができる。すなわち、7mm大のチャートと頁岩の砂粒を多量に含むもの(235・237・239・241・247・249・250・255・257・260・261)と石英、角閃石、雲母等の細砂粒を含むもの(238・243・246・248・251・254・258・259・262)である。前者は、焼成がやや軟質で器壁が剥落しやすく、色調は、壺が灰色から黒灰色を呈する以外、褐灰色ないし灰黄褐色から淡桃色を呈し、櫛描沈線文、列点文、浮文の施される個体が多い。後者は、胎土が概して精良で焼成も良く、色調はにぶい橙色ないし橙色を呈する。さらに後者には赤色風化礫を含むものと含まないものがみられる。SK-1出土の土器はすべて前者に属し、遺物包含層出土の土器には両方が確認でき、後者には薄い粘土帯を貼付した甕が1点、他は貼付されていないものであった。後者の胎土は古墳時代の土師器のそれと共通性がみられ、識別が困難な個体もあった。また、今回赤色風化礫として識別したものはにぶい赤色ないし赤褐色を呈し、透明感のない円砂粒である。一部被熱により胎土に同化するものも含まれる。なお、胎土中に含まれるこれら砂粒は胎土分析を行ったものではなく、すべて肉眼の観察に拠るものであり、石英、角閃石、雲母は厳密に言えば四十帯に由来する花崗岩類というやや曖昧な意味合いを持つ。
- (2) 井本洋子「高知県の祭祀遺跡について」『高知の研究1地質/考古篇』清文堂 1983年 「工事中の立合調査のため遺構の全貌は明らかでない」と断った上で「中村市具同小字石丸の石丸遺跡は中筋川の左岸にあり、流路からわずか10mの場所に位置する。工事中に住居跡2基、焼失家屋を思わせる炭化物・焼木などが発見された。」と報告されており、5世紀代のものとみられる土師器高杯、手づくね土器、深鉢形土器、石製白玉が出土したとの記述がある。現在は具同中山遺跡群に含まれている。
- (3) 県内では、安田町大木戸古墳群、土佐山田町伏原大塚古墳、同桜ヶ谷1号古墳、南国市舟岩古墳群3号古墳の4例が確認されており、すべて古墳出土である。廣田典夫『土佐の須恵器』平成3年
- (4) 廣田佳久「南四国の須恵器—周辺地域における須恵器の変遷—」『王朝の考古学』雄山閣1995年、『日本土器辞典』雄山閣1996年、『古墳時代の研究6』雄山閣1991年、『陶邑古窯跡群Ⅰ』平安学園1966年
- (5) 『具同中山遺跡群Ⅲ—2』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年11月
- (6) 詳細は第Ⅳ章自然科学分析で報告している。
- (7) 平成12年度に行われた中村市古津賀遺跡群ハウシボウ地区第2次調査において5世紀後半から6世紀初頭の祭祀関連遺構に近接して竪穴住居跡1軒が確認されている。古津賀遺跡は具同中山遺跡群より後出する祭祀遺跡としてみられており、このような大規模な祭祀が行われる場所における竪穴住居跡という共通点が見られる。『古津賀遺跡群ハウシボウ地区第2次調査』—記者発表資料—中村市教育委員会 平成12年度
また、ST-1と堆積状態に類似がみられるものとして高知県土佐市天神遺跡で確認された竪穴住居跡がある。時期的には弥生時代後期後半から終末期とみられるが、床面から15~25cm上に薄い焼土を有する面があり、2時期に互って使用され、その堆積状態から祭祀的性格が指摘されると報告されている。『天神遺跡Ⅱ』—土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ— 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年度
- (8) 『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会 1995年、『陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ』大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会 1996年
- (9) 二重口縁壺は口縁部がやや開く形態で高知県南国市小籠遺跡で出土しているものに類似がみられる。小籠

遺跡では古式土師器Ⅰ期に新たにみられるようになる形態とされる。

- (10) 『矢部遺跡』－奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第四十九冊－ 奈良県立橿原考古学研究所1986年
 (11) (5)に同じ
- (12) 具同中山遺跡群Ⅳ区の竪穴状遺構は円形であり、今回の竪穴住居跡は隅丸方形である。『具同中山遺跡群Ⅳ』
 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年度 また、Ⅳ区では縄文時代から古墳時代、具同中山遺跡群Ⅴ
 (平成10年度調査)では弥生時代終末から古墳時代前期初頭、昨年度調査された具同中山遺跡群Ⅲ－2区
 では弥生時代中期に比定される遺物が一括性の高い遺構からまとまって確認されている。高知県西部地域
 における当該期の資料は、近年の調査の成果により蓄積されつつあるが、土器編年が確立するには至って
 おらず不明な点も多い。
- (13) 滑石の含有量が多い(純粹の滑石)ほど白く光沢を持ち、軟質になり、今回の調査ではこの純粹の滑石に近い、
 白色を帯び、軟質で光沢を持つ滑石が一定の割合で出土する。なお、石材については高知大学理学部吉倉
 伸一教授のご教示を得た。
- (14) 愛媛県松前町教育委員会『出作遺跡Ⅰ』－出作圃場整備事業埋蔵文化財調査報告書－平成5年
- (15) 回転台を使用して作られた素焼土器の総称として用いる。今回の調査では所謂左手手法の土師器と粘土紐
 を巻き上げた上で回転台を使用して仕上げた土師質土器の2種がみられた。廣田佳久「南四国における古代
 末の土器様相－素焼土器を中心に－」『考古学論究』第7号 立正大学考古学研究会
- (16) 県内では香我美町曾我遺跡、野市町下ノ坪遺跡、南国市白猪田遺跡・小籠遺跡・奥谷南遺跡、土佐市西鴨
 地遺跡、大方町宮崎遺跡、中村市具同中山遺跡群・風指遺跡などから出土例がある。
- (17) 海の中道遺跡では古代の製塩土器について大きく「主に海岸遺跡から出土する塩水煎煮によって塩を製造
 するための叩き目を有する甕型のⅠ類土器」と「海岸遺跡だけでなく内陸部の遺跡からも出土する口径が
 小さく、容量一定化の意図がみられる円筒形で内面に布目痕を有し、塩運搬あるいは固形の焼き塩作製の
 Ⅱ類土器」の2種類に分類している。福岡市教育委員会『海の中道遺跡』昭和57年
- (18) 8世紀の中頃、平城京の予算のうち銭の支出はわずか4%で、残り96%は品物であったという。官人の出張
 旅費として米、酒、塩が支給されていたことが、各国の正税帳に記載されている。このような現物取収・
 現物支給の律令体制下で、塩は重要な調庸品であり、調味料、食品加工用、工業用、儀礼、祭祀用としての
 用途以外に労働の対価としても使用し、目的に応じて塩が再配分され、地方の国衙や郡衙には広義の塩倉
 が存在したと考えられている。また、本来税として都へ納められるべき調塩が、都城外へ直接貢納された
 ことを表す例として、律令国家が、直営した国営銅山である山口県長登鉦山跡から周防国より調塩三斗を
 納めた付札の木簡が出土しており、これらの調塩は功食として雑工たちに支給されたと考えられている。
 また生産地から都城へ塩を貢納したことを示す塩木簡が出土していない薩摩国、肥後国、肥前国、筑前国
 の4国は延喜民部式の規定により直接太宰府へ納めたとされる。
- (19) 高知県野市町教育委員会『下ノ坪遺跡Ⅱ』1998年
- (20) 平川敬治氏によれば、土錘の重量増大は網の大型化を意味し、10g前後か、それ以下は投網用、20g前後～
 40g前後は、固定式刺し網・流し網用とされる。平川敬治「漁網における伝統的沈子についての2, 3の問題」
 『九州考古学』65
- (21) 真鍋篤行氏は土錘は漁網の重りとして装着されるため、装着部である孔径、溝幅(有溝土錘の場合)と漁網と
 の装着縄の太さ(強度)は、漁網の操業形態と関連するとして、重量分布だけに頼らない、新しい漁法推定
 の指標を提案している。土錘の孔形の2乗値(L)は土錘を装着する沈子網の強度を表し、それに土錘のプロ

ポーション＝長さ／最大幅の値(P)の二つの指標を組み合わせ、刺し網系、袋網系二つの漁法の推定復元を試みている。すなわち、軽い土錘を細い縄に装着した漁網を、少人数で実施可能な刺網ないし投げ網系の漁法、重い土錘を太い縄に装着した漁網を大人数による曳き網系漁法(地引き・船曳きなど)に想定している。P値を縦軸、L値を横軸とした瀬戸内地方の各時代(弥生時代前期・中期、弥生時代後期、古墳時代前期、平安時代末、鎌倉時代)の土錘の分布図では、各時代の土錘分布の変化が明確に表れており、弥生から古墳時代前期まではP値が約3.5までに留まり($1 < P < 3.5$)、4を越えるものが見られないのに対し、平安時代末、鎌倉時代の刺し網系の土錘のP値はより高く、つまり細長い形に変化し、P値は2.5～5.5の間($1 < P < 6$)に集中し、L値は1以下のものがほとんどとなっている。つまり、瀬戸内地方では、弥生時代前期・中期・後期、古墳前期は、 $L=0.25$ 以下(孔径0.5cm以下)で、 $1 < P < 3.5$ の数値のものが刺し網系、平安時代末、鎌倉時代では $L=0.25$ 以下(孔径0.5cm以下)で、 $1 < P < 6$ の数値のものが刺し網系としている。真鍋篤行「瀬戸内における弥生時代の食と暮らし」『絵とモノによる漁業技術の復元』 広島歴史フォーラム 1999年

(22)(4)に同じ

(23) 分析部位は明確ではないものの年輪が100年もある材を使用しているとは考え難い。

(24) III-2区で検出したSB-1の柱根3個の放射性炭素分析では暦年代で260～420年であるとの結果が出ており、4世紀代を中心とした時期が想定される。高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『具同中山遺跡群III-2』 2001年11月

(25) 古墳時代の最高標高(遺物包含層上端)は今回のIII-3区で4.74m、IV区で4.96mであり、自然堤防北部に向けてやや標高を増すようである。一方、南部は未調査であるが、現標高から推測すると当時の標高は北部よりさらに高いものとみられる。

圖 版

主な撮影機材

1. 現場作業

Nikon F3 higt-eyepoint×2

Zoom-Nikkor 28～85mm F3.5～F4.5S

Micro-Nikkor 55mm F2.8S

Mamiya 645 PRO

Mamiya-SEKOR MACRO 80mm F4

Mamiya-SEKOR Zoom 55～110mm F4.5

2. 整理作業

Nikon F4S

Micro-Nikkor 55mm F2.8S

Micro-Nikkor 105mm F2.8S

Mamiya RZ67 PRO II

Mamiya-SEKOR M140mm F4.5m/L-A

Mamiya-SEKOR Z180mm F4.5W-N

オート中間リングRZ (No.1)

TOYO WEIGHT STAND81

COMET CX-124T

COMET CX-25ⅢH×2(ウェーハー・バンク付)



調査前全景1(東より)



調査前全景2(東より)

PL.2



I区北壁セクション1(南より)



I区北壁セクション2(南より)



II区南壁セクション1(北より)



II区南壁セクション2(北より)

PL.4



I区古代遺構検出状態(西より)



I区古代遺構調査状態(北より)



SK-2(西より)



SK-2(西より)

PL.6



SK-3(西より)



SK-3(西より)



SK-4(南より)



SK-4(西より)

PL.8



SK-5(南より)



SK-5(東より)



SK-5(南より)



SK-5(西より)

PL.10



SK-3・4(西より)



SX-1(西より)



SK-7~10(西より)



SK-7~10(東より)

PL.12



SK-10遺物出土状態(西より)



SX-3遺物出土状態(東より)



SB-1・2(東より)



SB-1・2(東より)

PL.14



SB-1柱根



SB-2柱根



ST-1上層遺物出土状態1(北より)



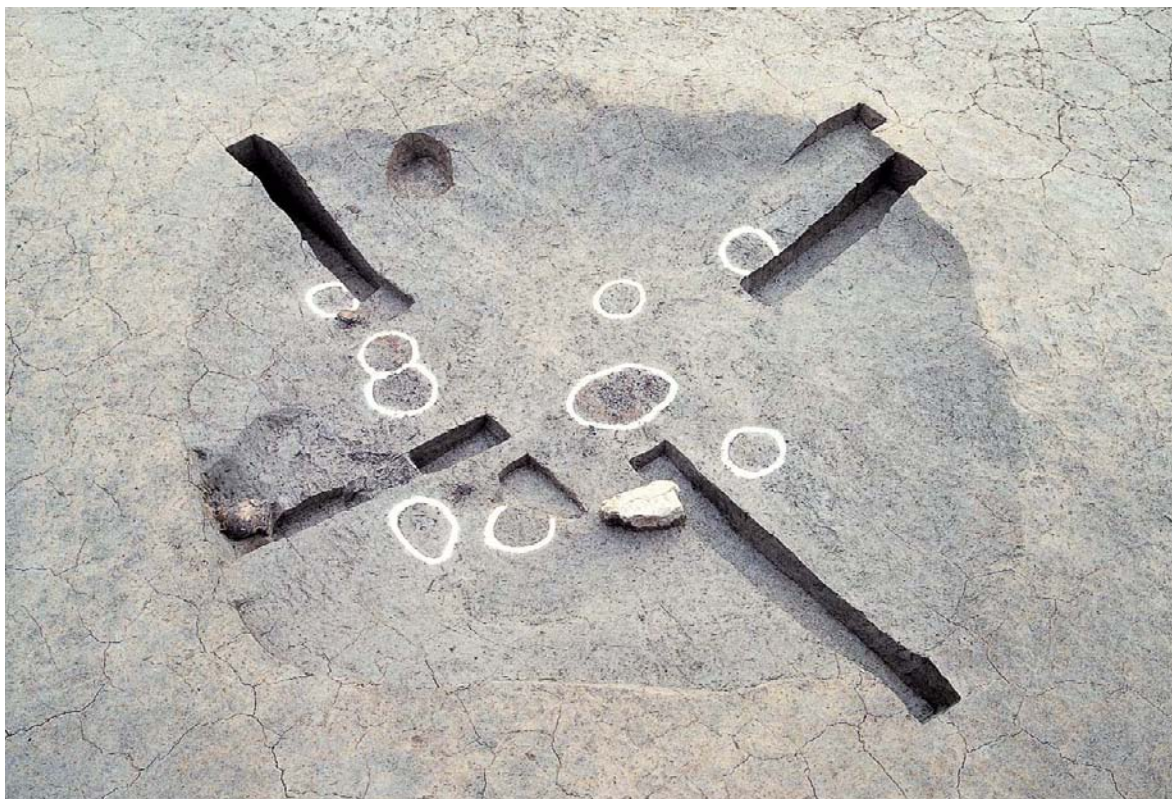
ST-1上層遺物出土状態2(南より)



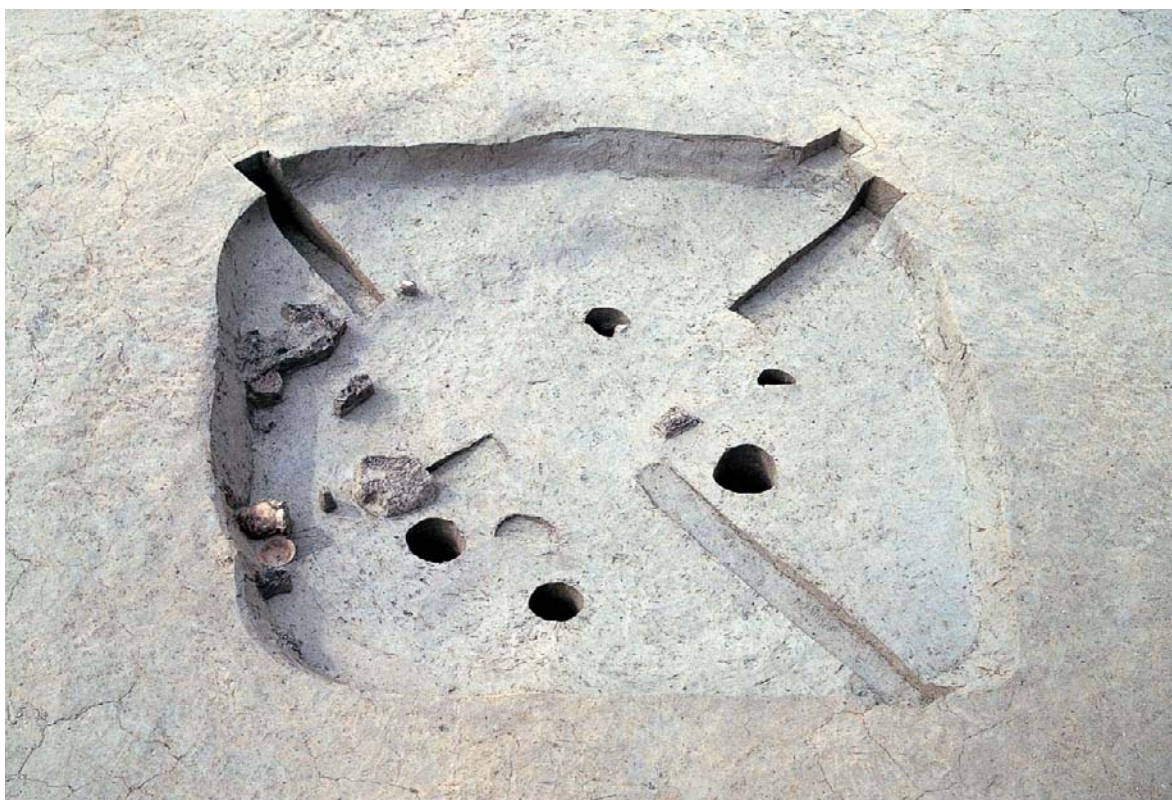
ST-1上層遺物出土状態3(西より)



ST-1上層須恵器把手付き碗(757)出土状態



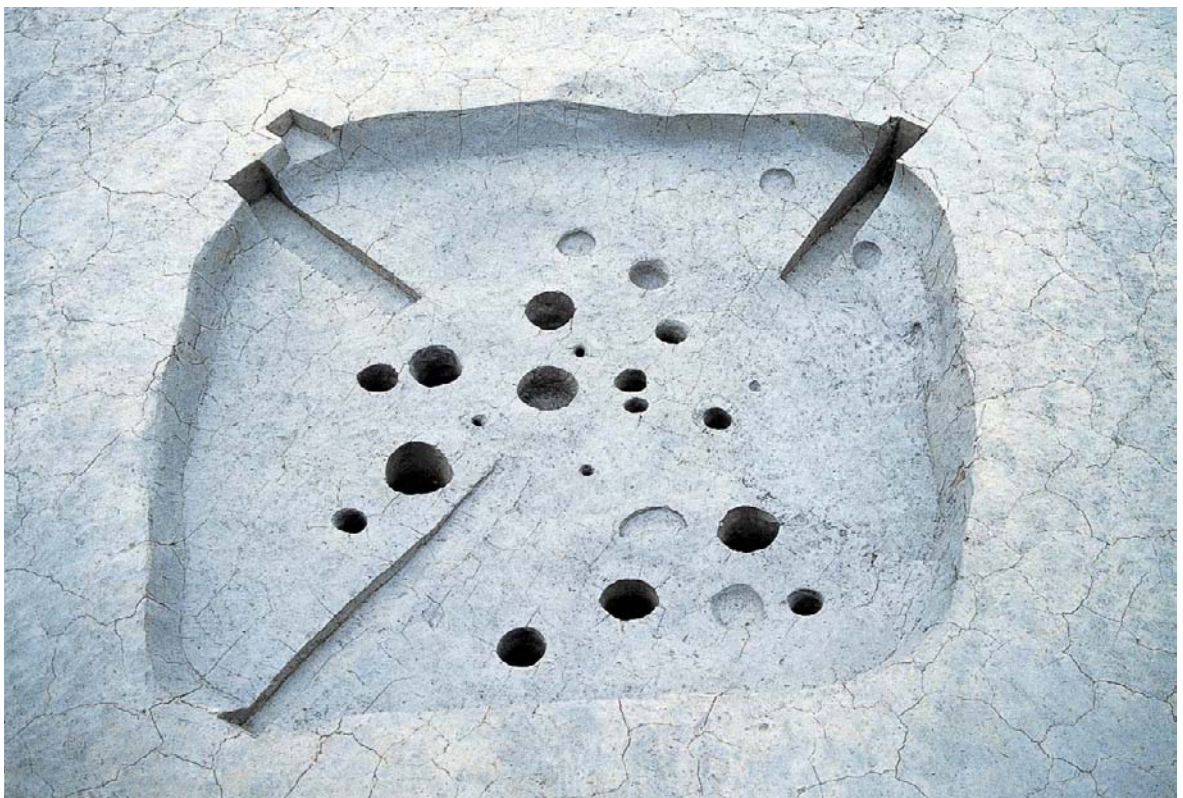
ST-1(北より)



ST-1(北より)



ST-1土師器甕(741)・高杯(745)出土状態



ST-1(北より)



SF-1(東より)



SF-1(南より)

PL.20



SF-1(西より)



SF-1(北より)



SF-1(東より)



SF-1(南より)

PL.22



SF-2(東より)



SF-2(東より)



SF-3(北より)



SF-3(西より)

PL.24



SF-3落ち込み(北より)



SF-3落ち込み(西より)



SF-4(東より)



SF-4(東より)

PL.26



SF-5(北より)



SF-5(東より)



SF-5(北より)



SF-5(西より)



SF-6(西より)



SF-6土師器鉢(687)・直口壺(681)出土状態



SF-7(西より)



SF-7(北より)

PL.30



SF-8(北より)



SF-8(北より)



SF-8遺物出土状態(北東より)



SF-8遺物出土状態(北東より)



SF-9土師器甕(953・954)出土状態(南より)



SF-10遺物出土状態(東より)



SF-11遺物出土状態(西より)



SF-12遺物出土状態(西より)

PL.34



I区古墳時代面完掘状態(東より)



I区古墳時代面完掘状態(西より)



I区下層確認トレンチ(西より)



I区下層セクション(南より)

PL.36



Ⅱ区下層確認トレンチ(西より)



Ⅱ区下層セクション1(南より)



Ⅱ区下層セクション2(南より)



Ⅱ区弥生土器出土状態(南より)

PL.38



Ⅱ区弥生時代完掘状態1(西より)



Ⅱ区弥生時代完掘状態2(南より)



第Ⅷa層土製勾玉(103)出土狀態



第Ⅷa層土製模造鏡(106)出土狀態



SF-1須惠器杯身(325)出土狀態



SF-1須惠器器台(330)出土狀態



SF-1須惠器甕(331)出土狀態



SF-1土製勾玉(333)出土狀態



SF-1土製勾玉(334)出土狀態



SF-1石製有孔円板(350)出土狀態



SF-1石製白玉出土狀態



SF-2須惠器甗 (488) 出土狀態



SF-2須惠器甗(493) 出土狀態



SF-2土製勾玉(494) 出土狀態



SF-5土師器高杯(643) 出土狀態



SF-5土師器高杯(648) 出土狀態



SF-5須惠器高杯(679) 出土狀態



SF-6土師器碗(687) 出土狀態



SB-1のP-1柱根(735) 検出状態



SB-1のP-2柱根(733) 検出状態



SB-1のP-3柱根(734) 検出状態



SB-2のP-4柱根(736) 検出状態



SB-2のP-5柱根(737) 検出状態



SF-7手づくね土器出土状態



SF-7検出手づくね土器(828)



SF-7検出手づくね土器(837)



SF-7須恵器杯蓋(844)出土状態



SF-7土製模造鏡(854)出土状態



SF-7石製勾玉(868)出土状態



SF-10須恵器甕(987)出土状態



SF-11須恵器杯蓋・壺(997・998)出土状態



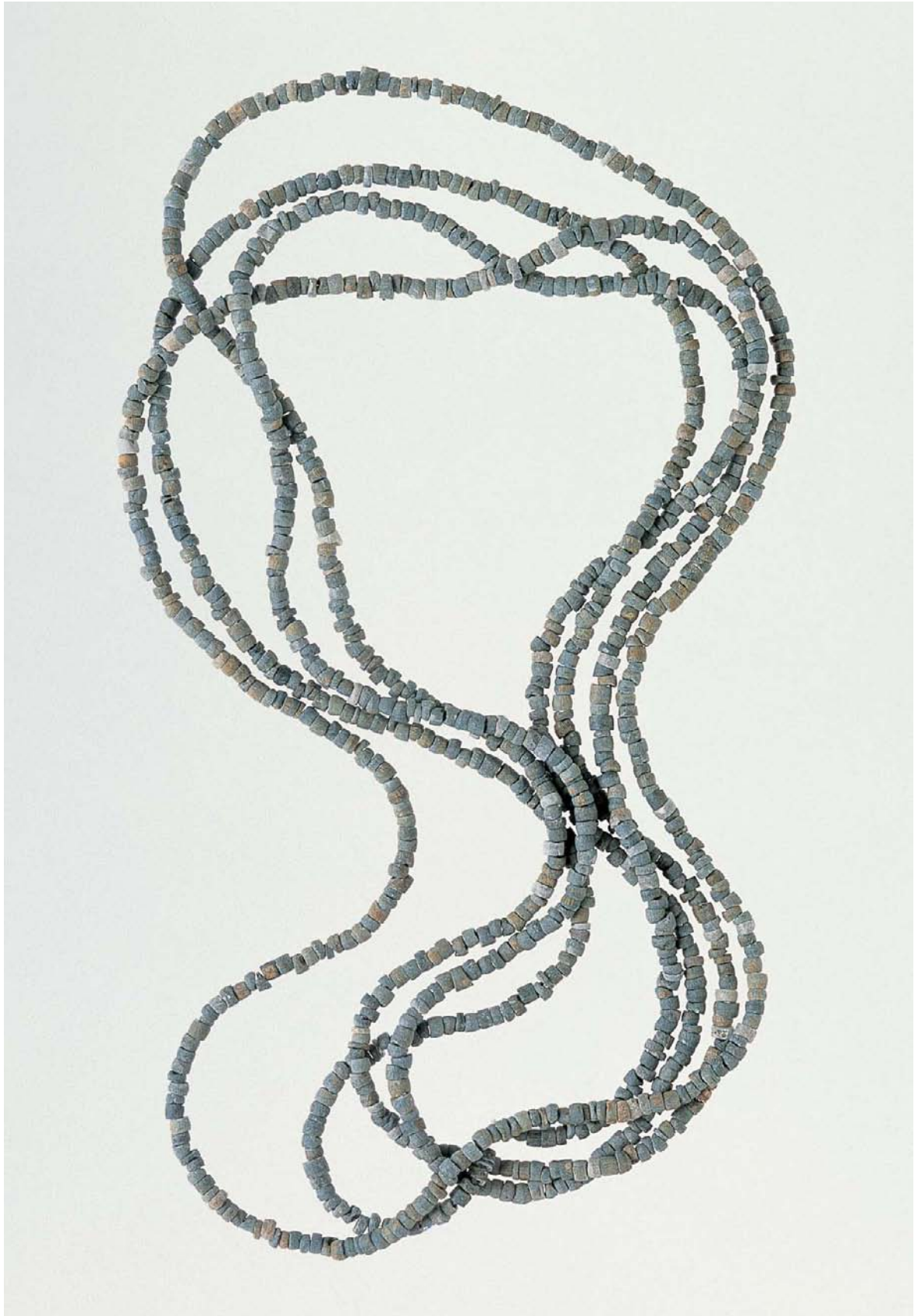
SF-11土製管玉(999)出土状態



SK-7須恵器杯(1024)出土状態



SX-3遺物出土状態

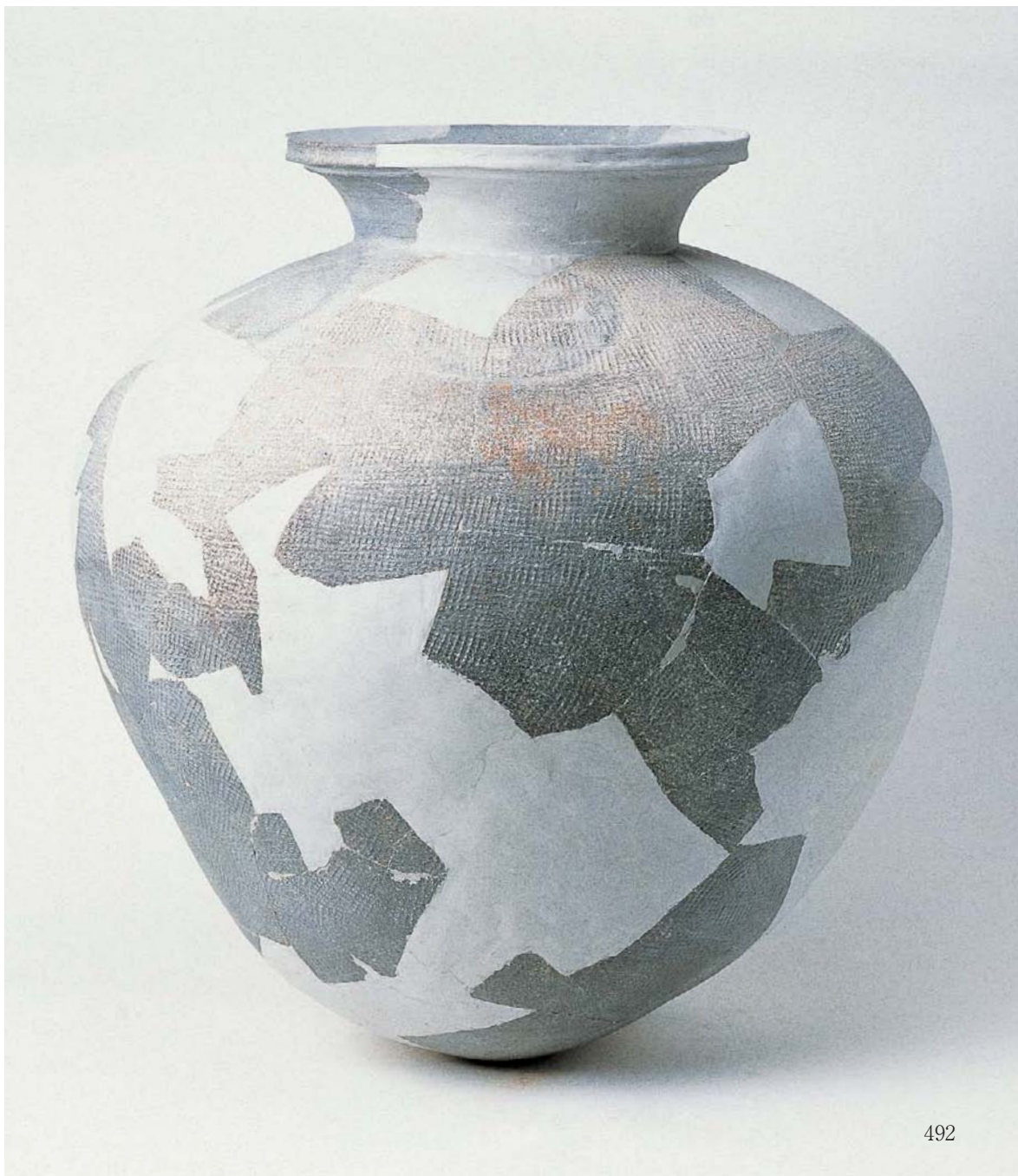


石製模造品(白玉)

PL.44

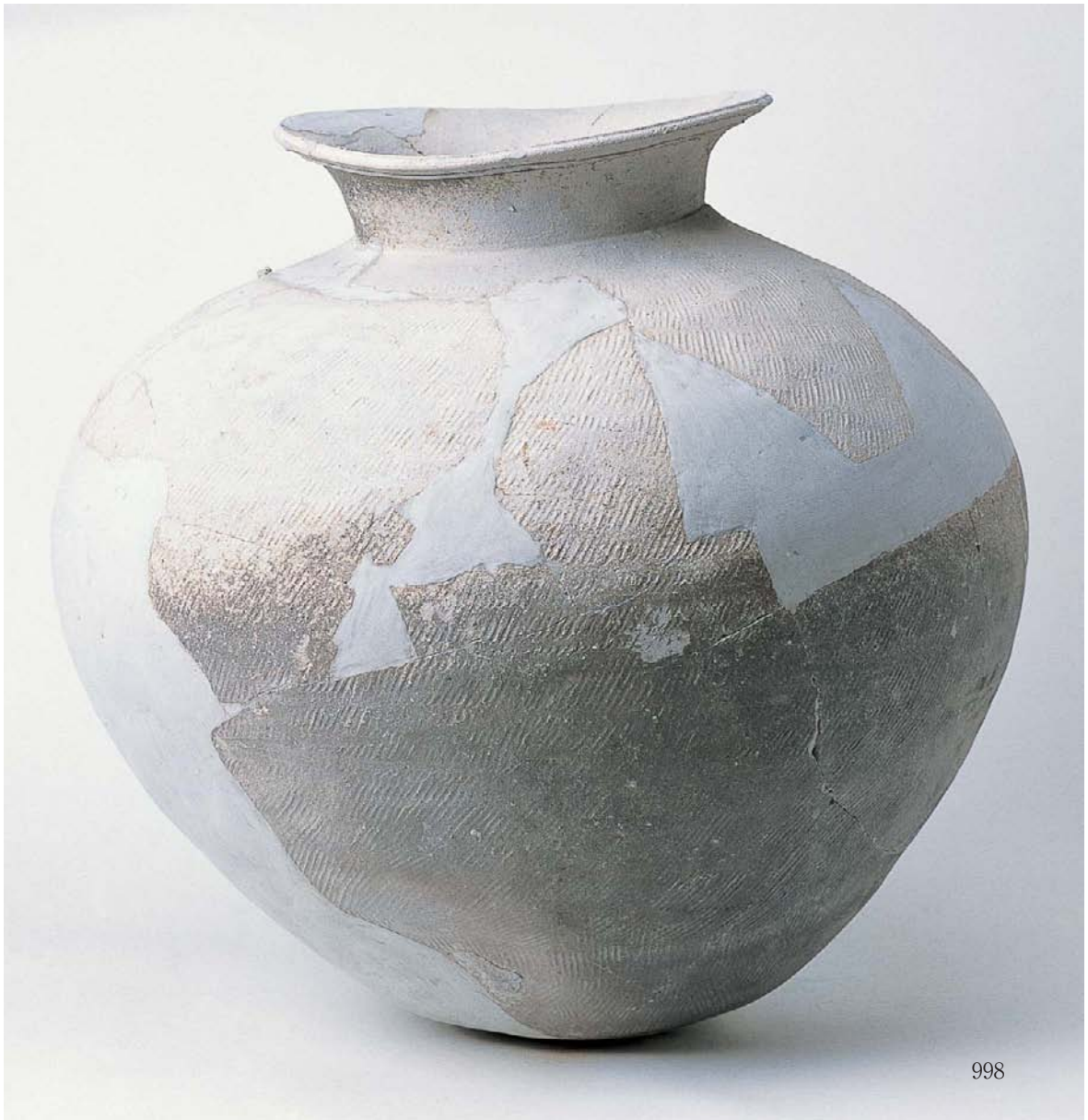


須恵器(器台)



492

須惠器(甕)



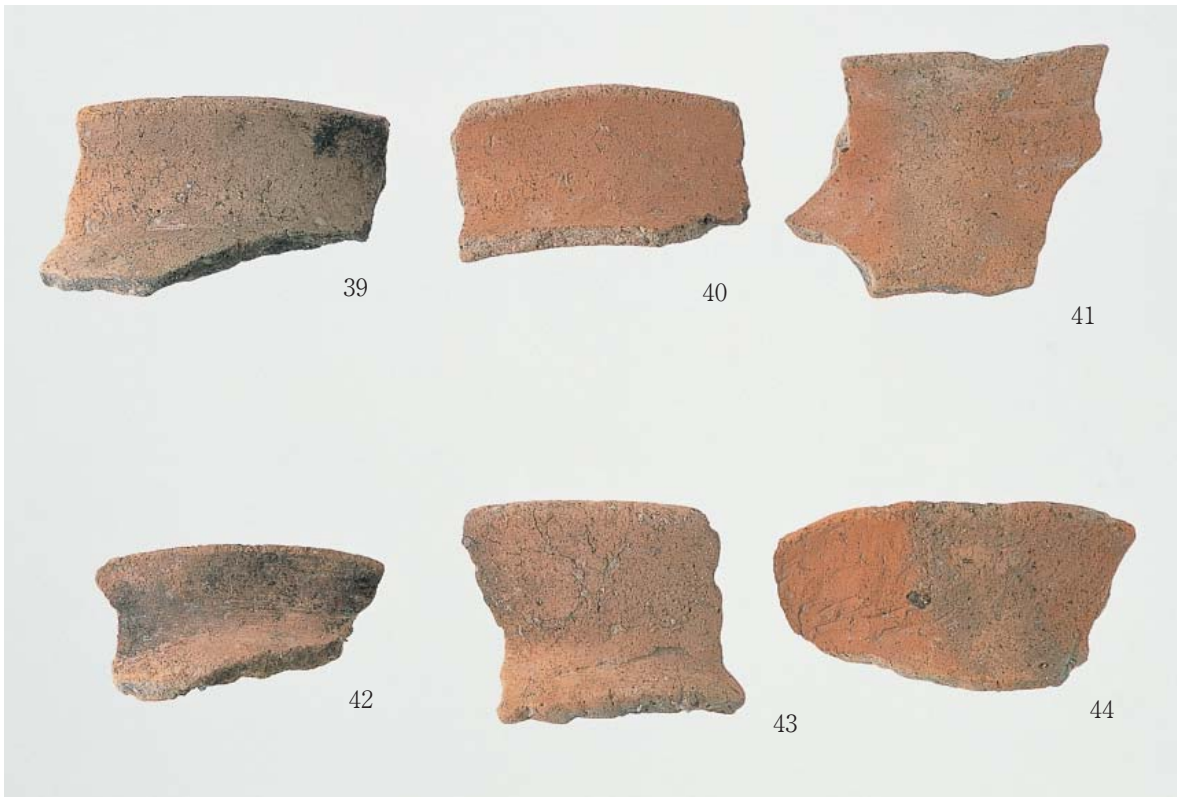
須恵器(甕)



土製品(土錘)



土製品(土錘)



土師器(甕)



土師器(甕)



土師器(甕)



土師器(甕)



土師器(鉢)



須恵器(杯蓋・杯身)



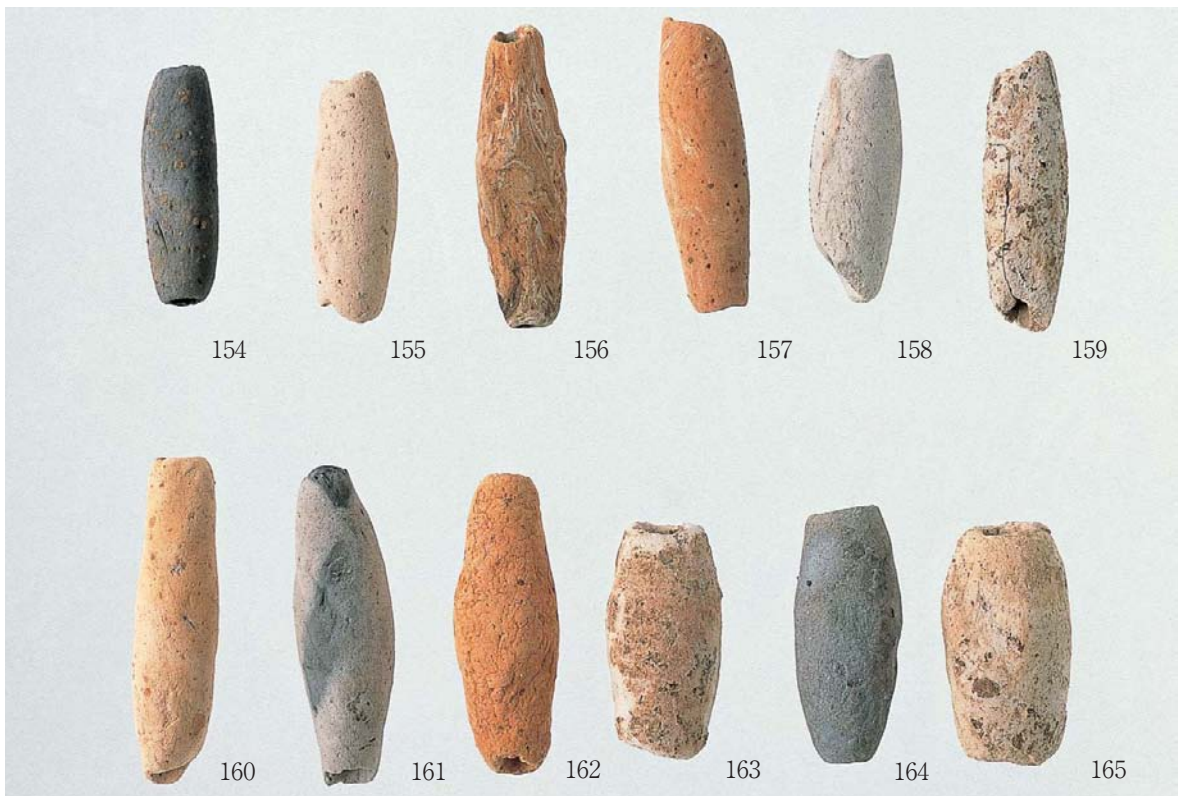
土製模造品(模造鏡)



須恵器(杯蓋)



須恵器(杯蓋・杯)



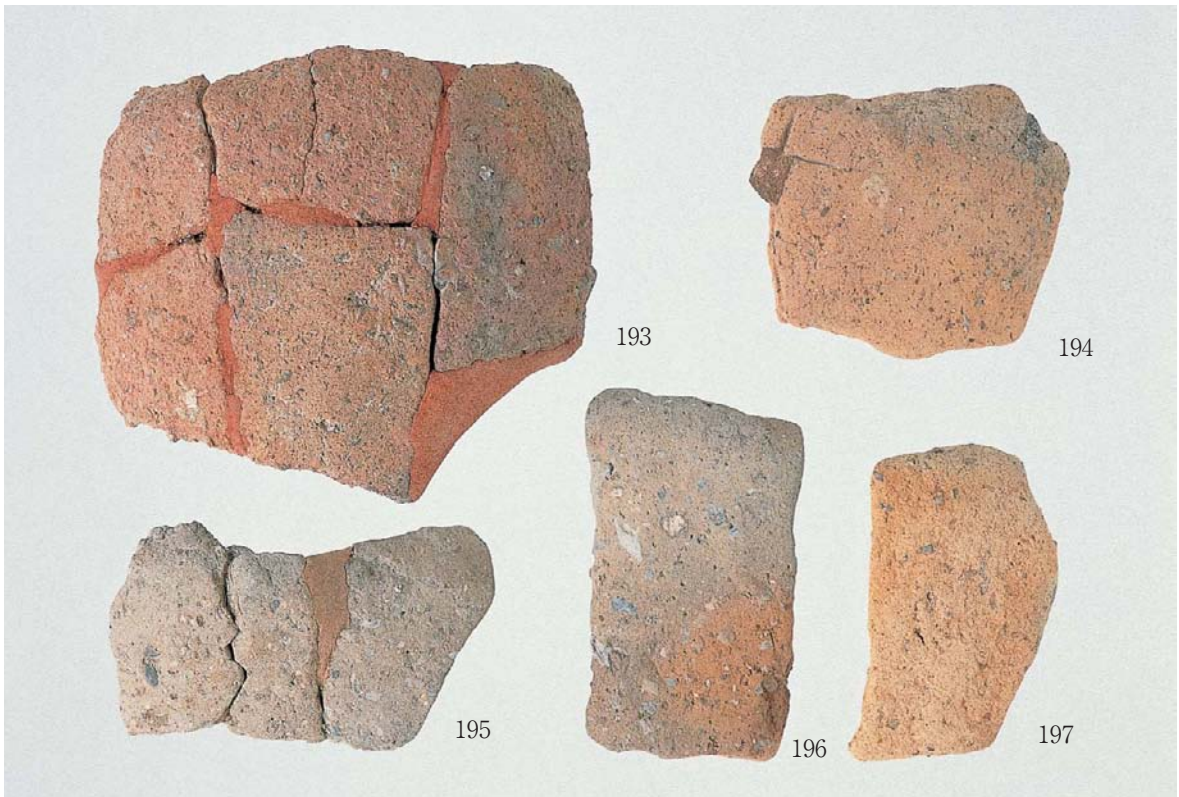
土製品(土錘)



土製品(土錘)



土製品(土錘)



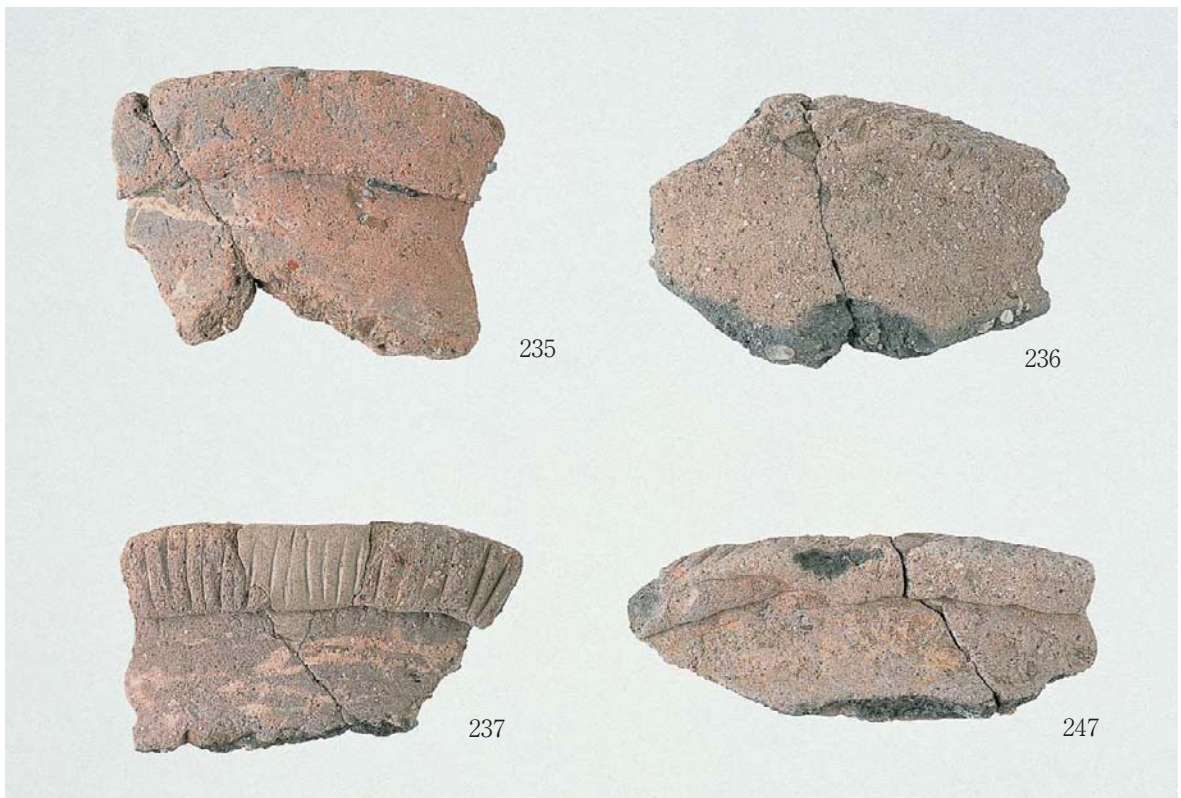
製塩土器



土製品(土錘)



須恵器(甕)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



土師器(甕)



土師器(甕)



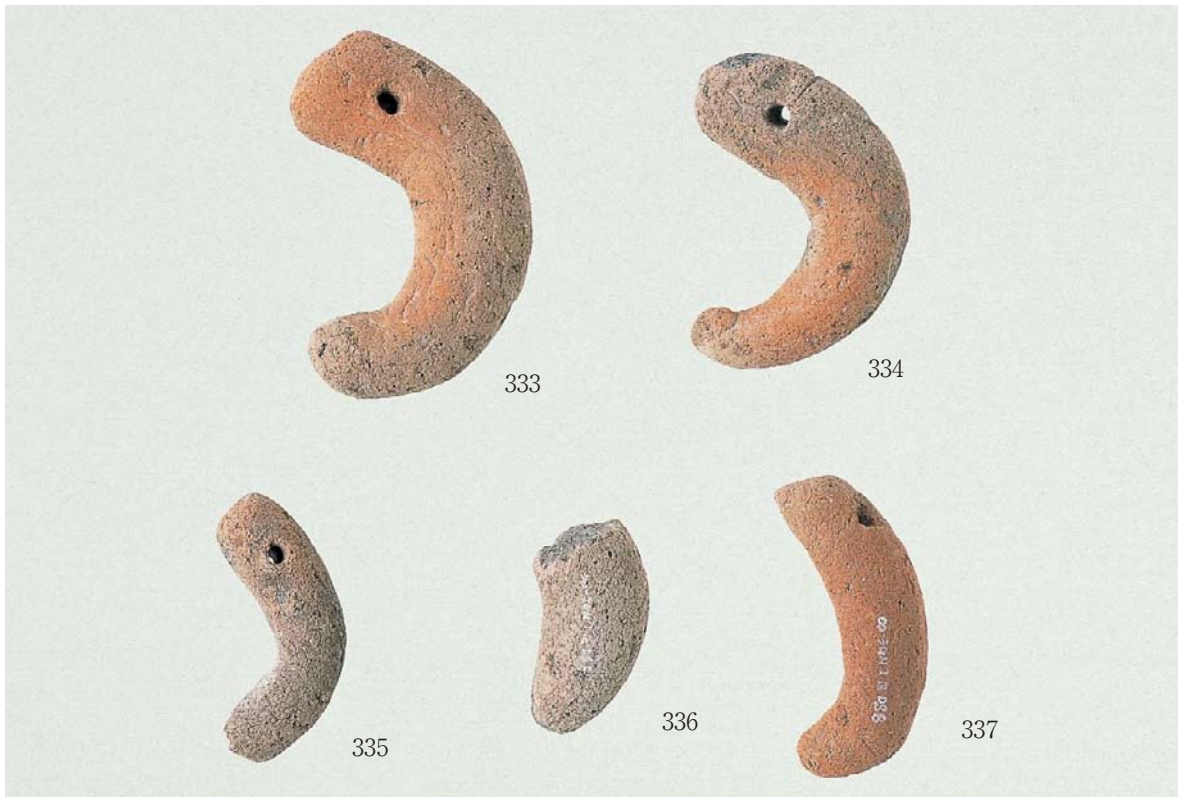
土師器(甕)



土師器(甕)



土師器(甕)



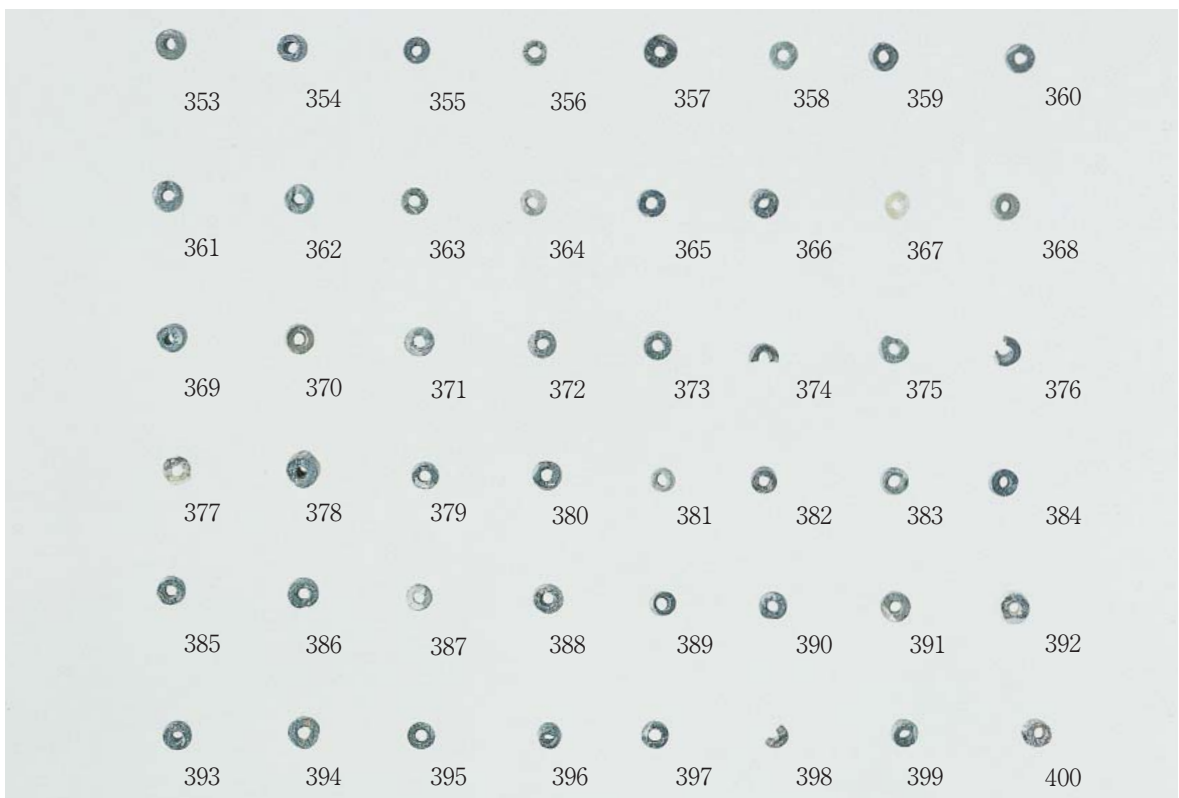
土製模造品(勾玉)



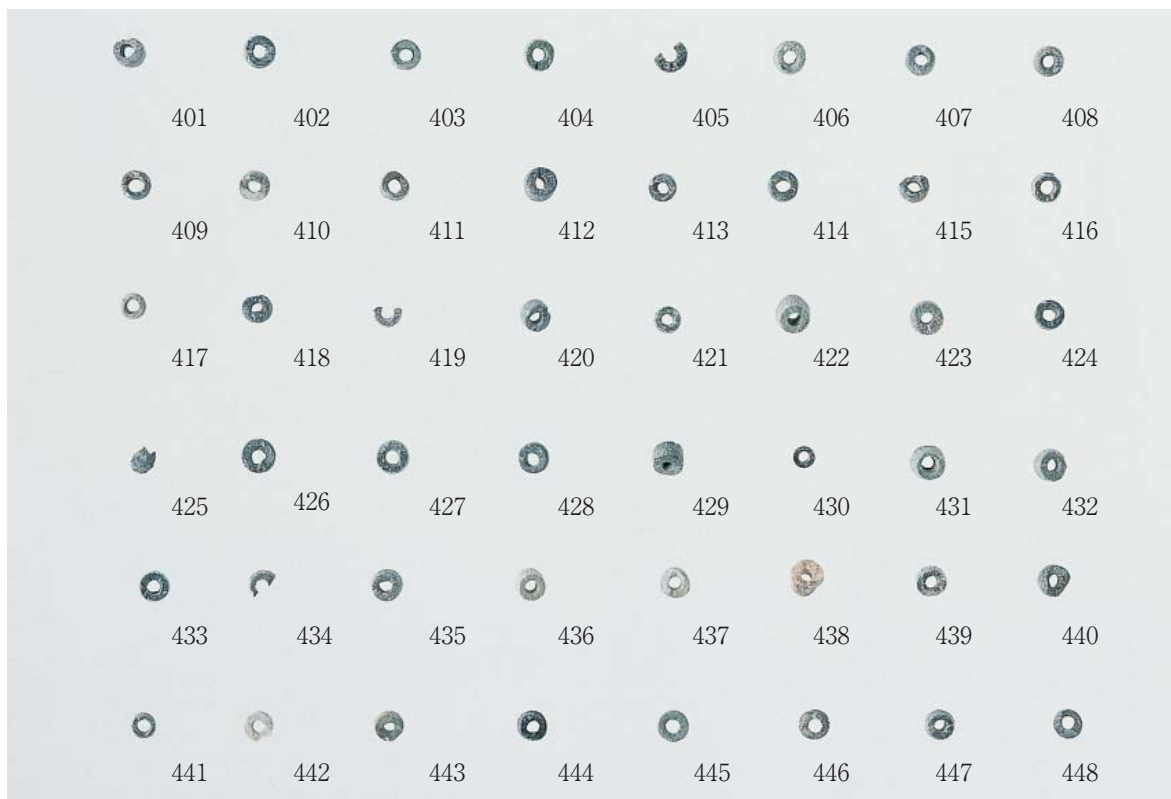
土製模造品(模造鏡)



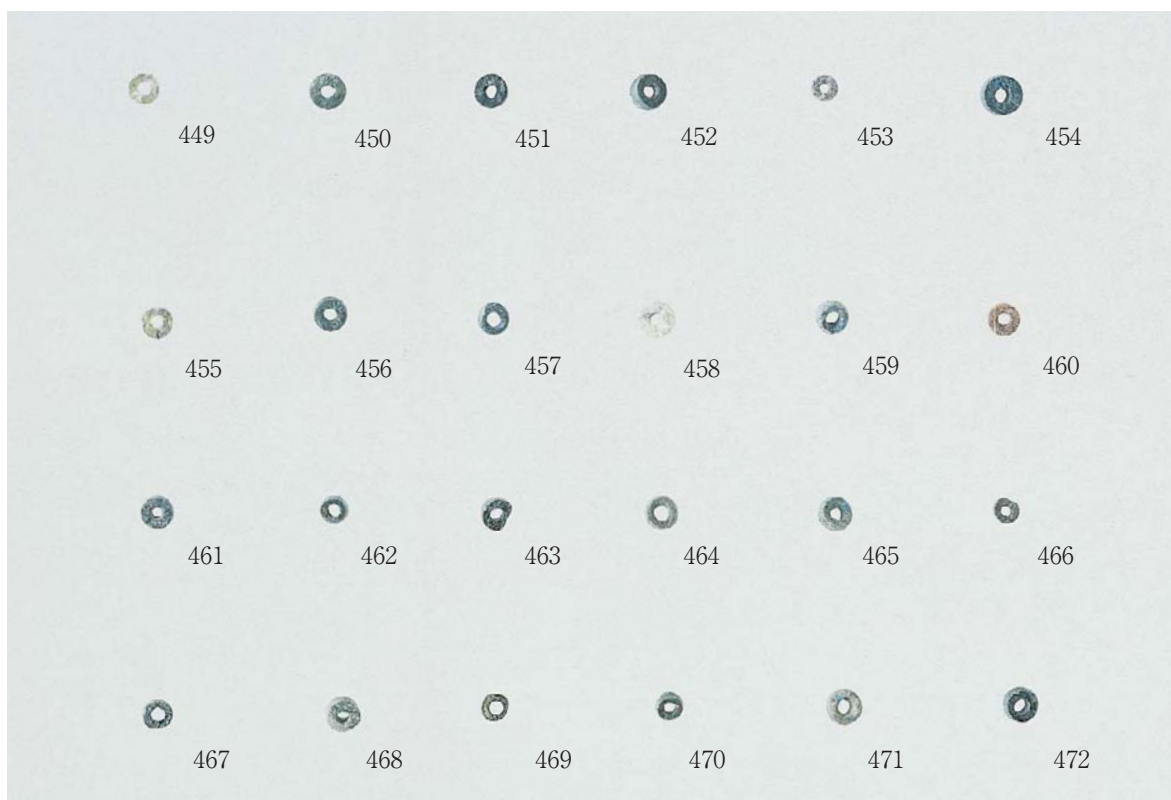
土製模造品(模造鏡)



石製模造品(白玉)



石製模造品(白玉)



石製模造品(白玉)



土師器(甕)



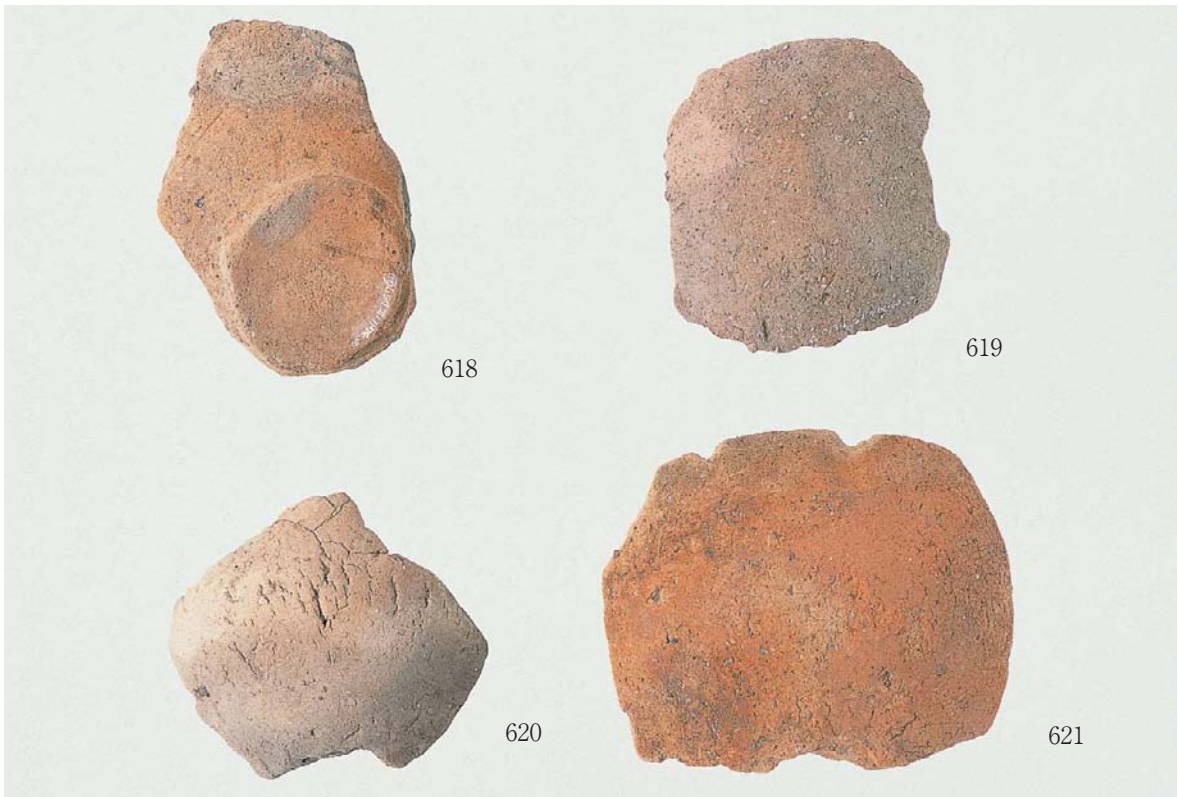
土師器(甕)



土師器(甕)



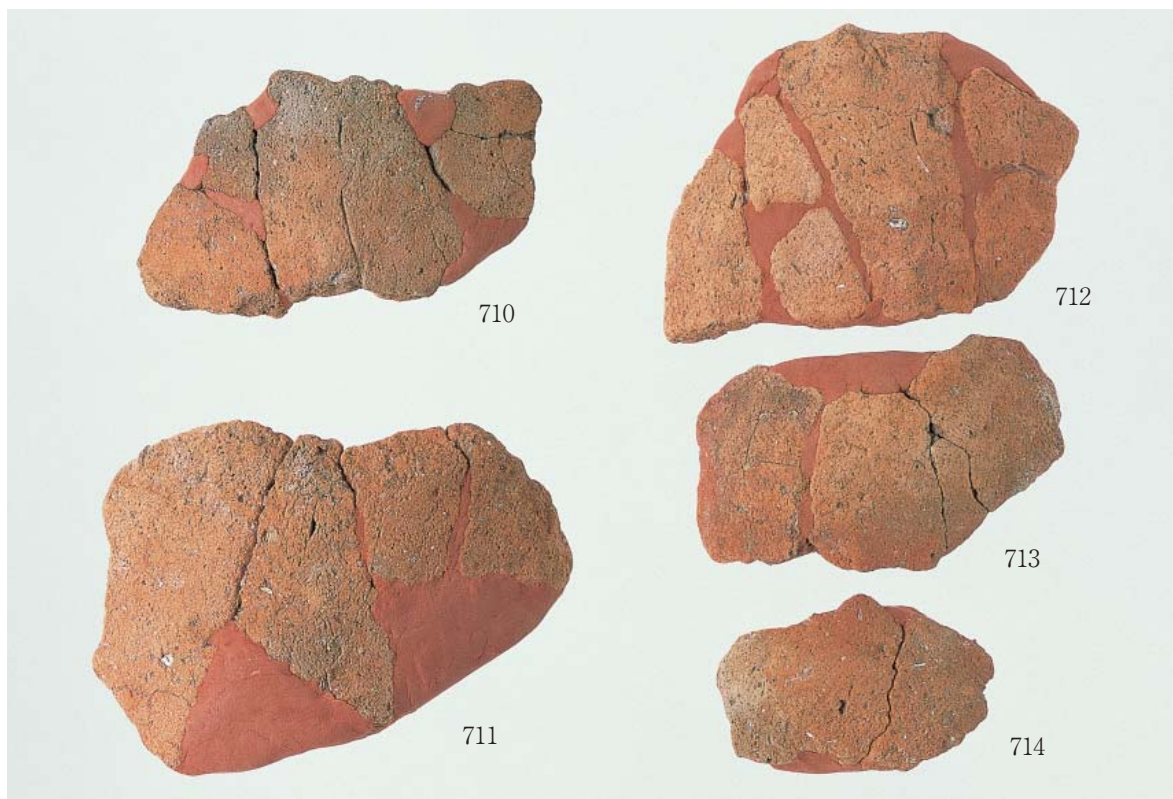
土師器(甕)



土師器(鉢)



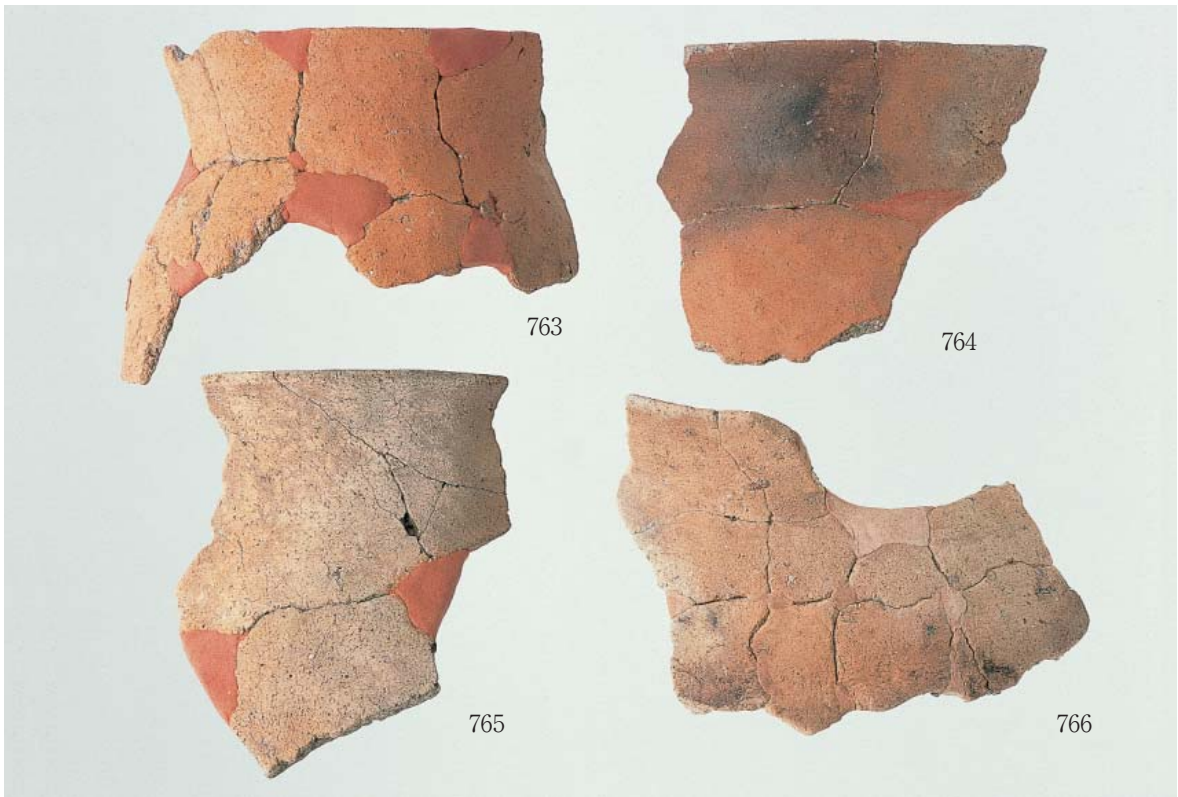
土製品(土錘)



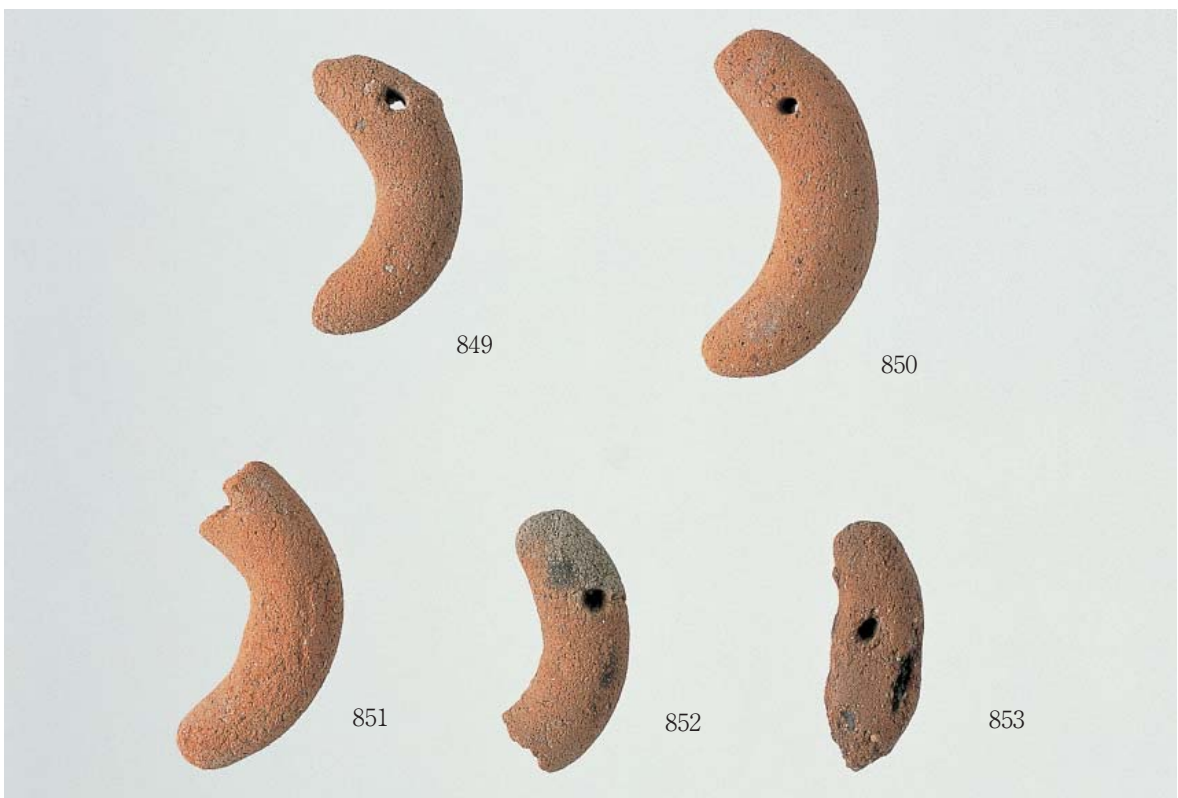
製塩土器(外面)



製塩土器(内面)



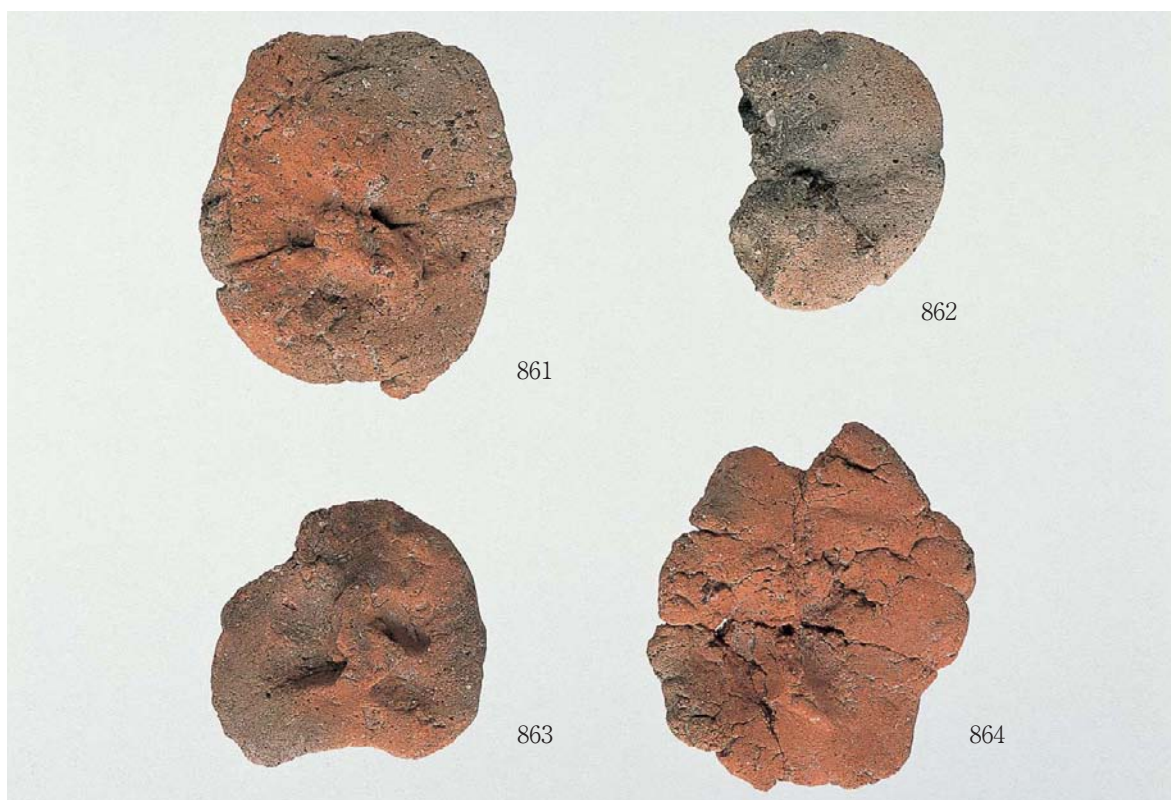
土師器(甕)



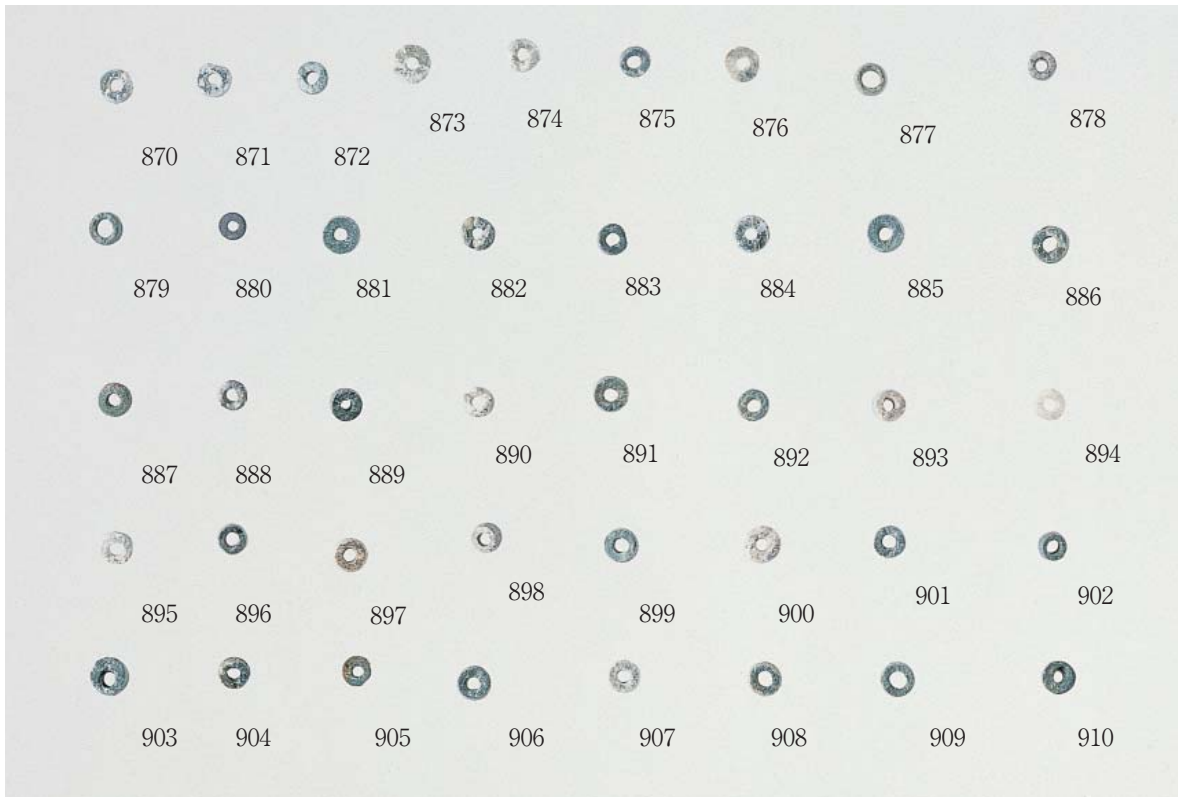
土製模造品(勾玉)



土製模造品 (模造鏡)



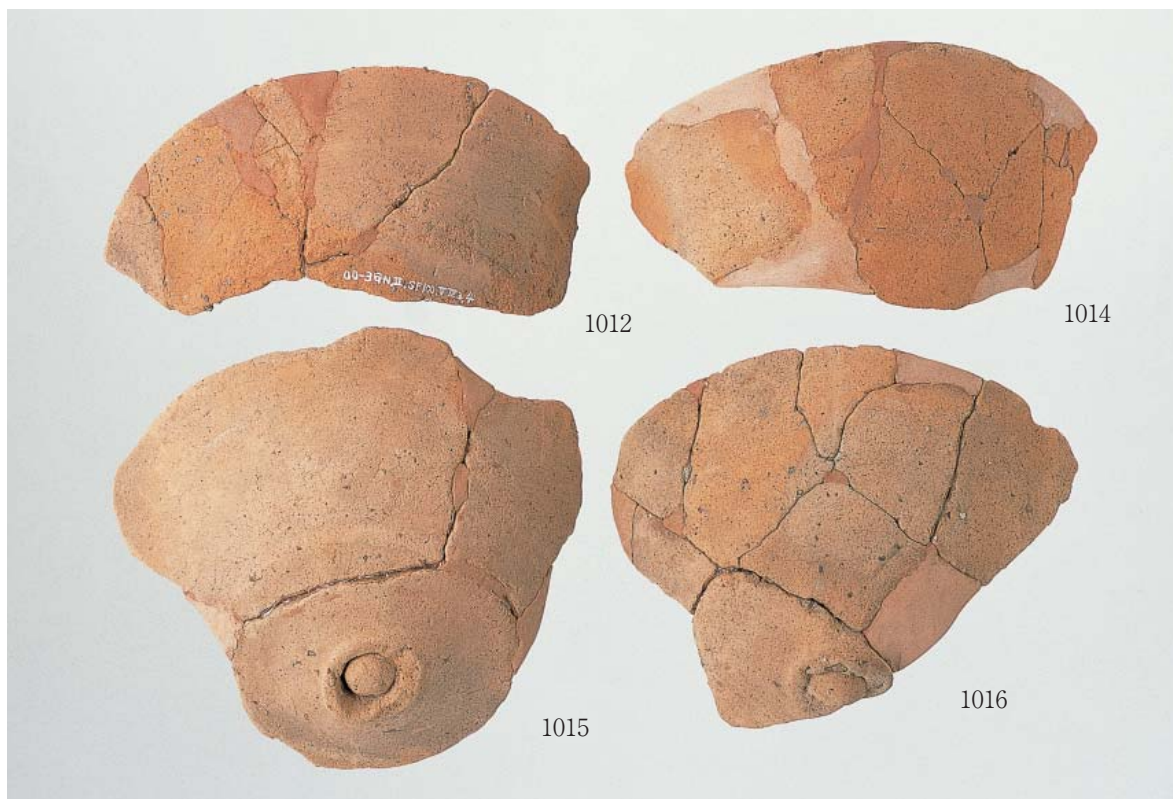
土製模造品 (模造鏡)



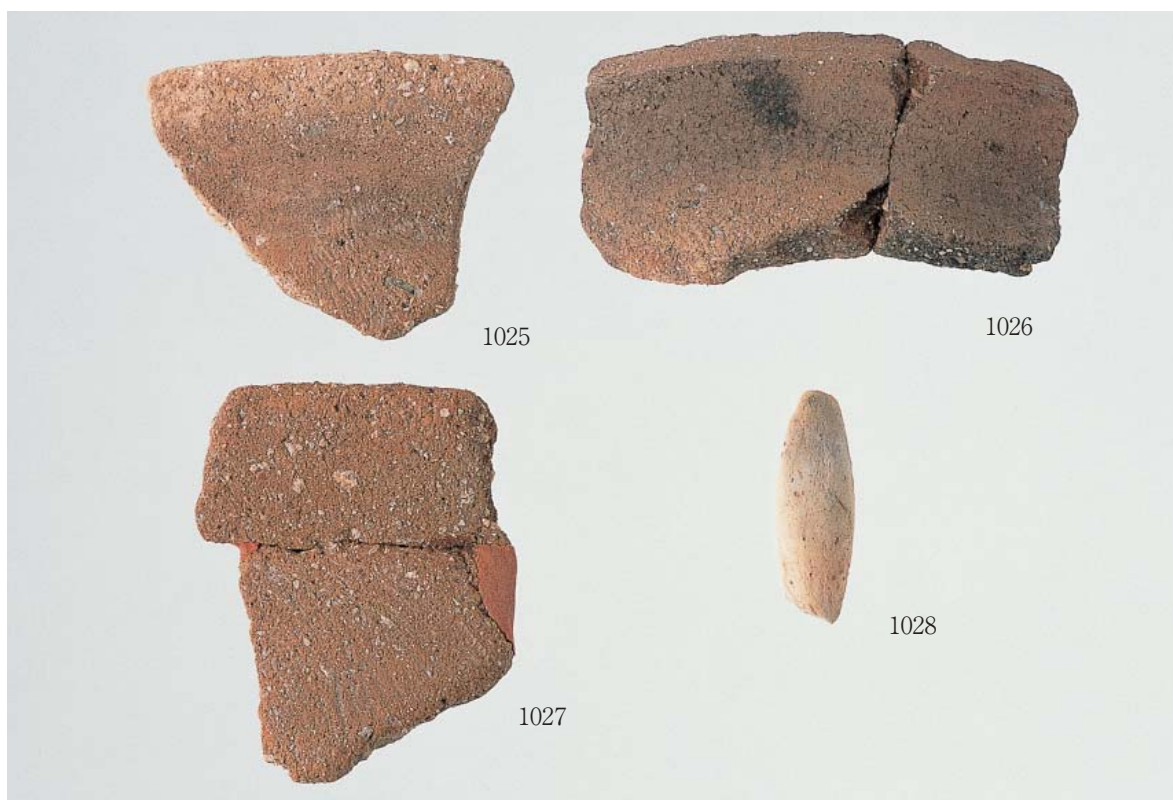
石製模造品(白玉)



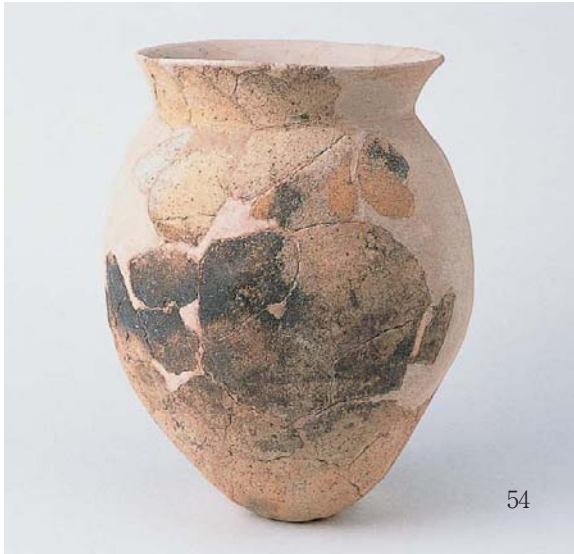
土師器(甕)



土師器(高杯)



土師器(甕), 土製品(土錘)



弥生土器(甕), 土師器(甕・高杯), 鉄製品(鉄鏃)



土師器(高杯), 須恵器(高杯・器台・甕), 石製模造品(紡錘車)



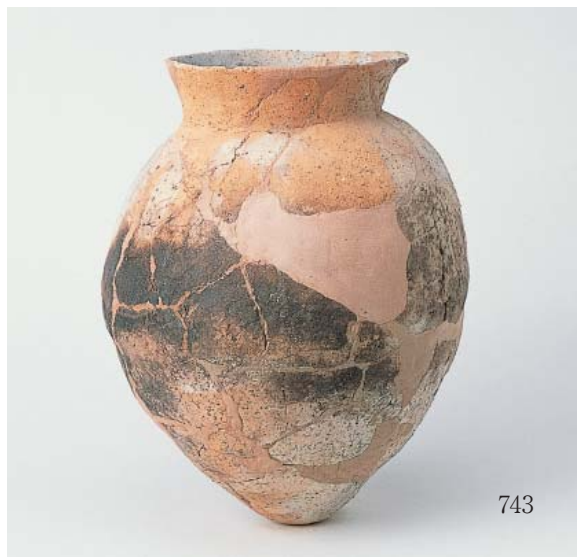
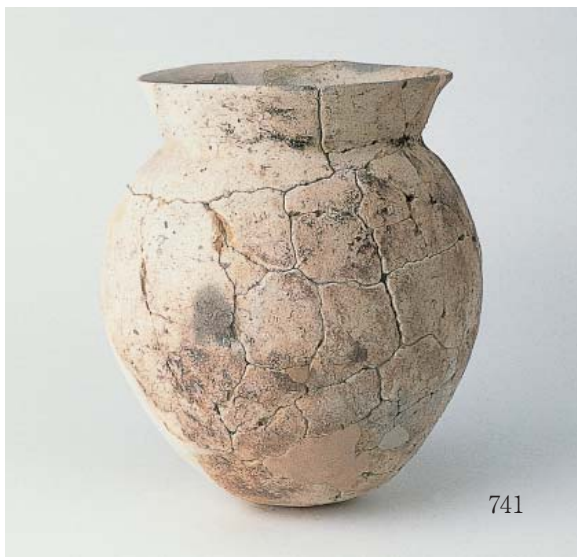
土師器(高杯), 須恵器(甗), 石製模造品(白玉)



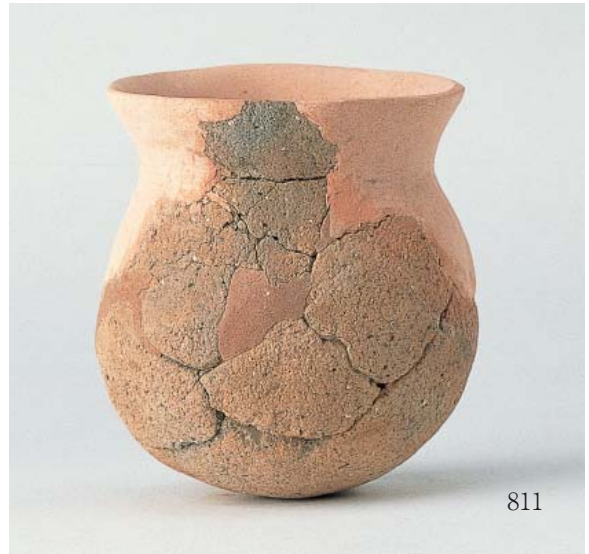
土師器(高杯・甑), 土製模造品(模造鏡)



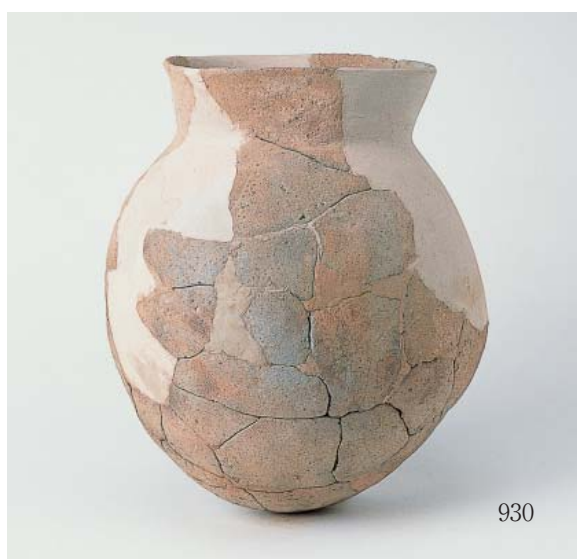
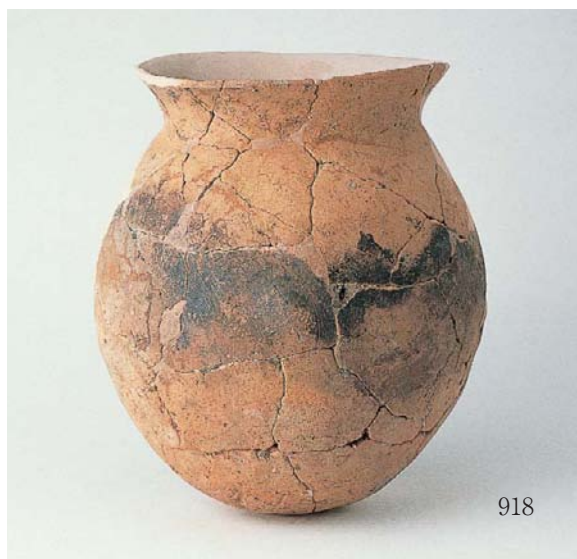
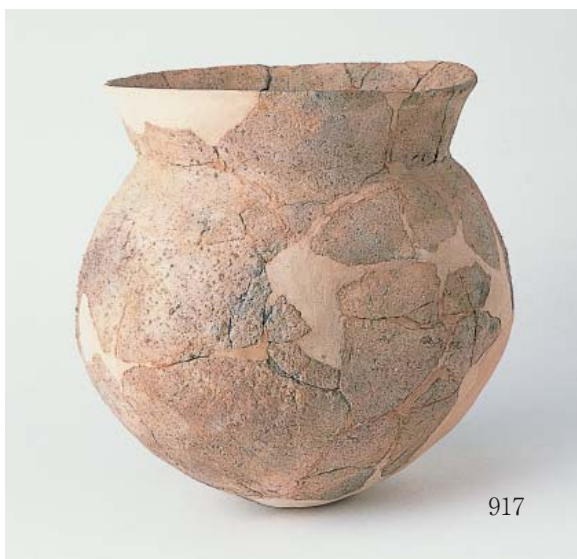
弥生土器(壺), 土師器(壺・甕・高杯)



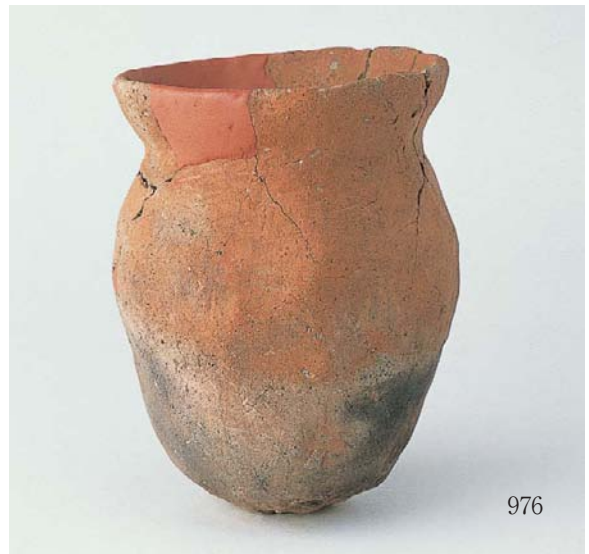
土師器(壺・甕), 須恵器(把手付き碗)



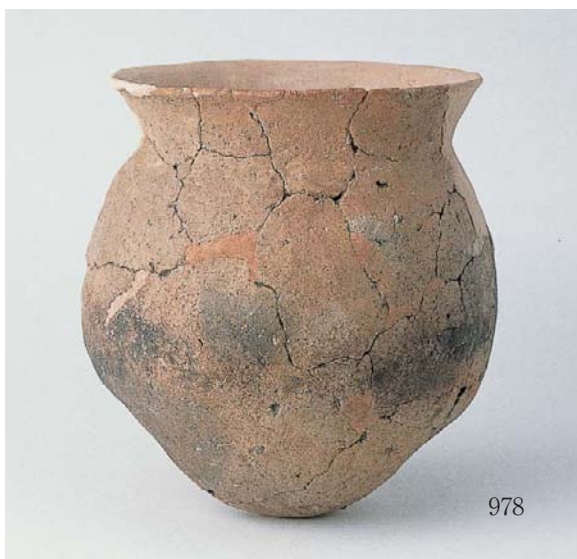
土師器(甕・鉢), 手づくね土器, 石製品(叩石)



土師器(甕)



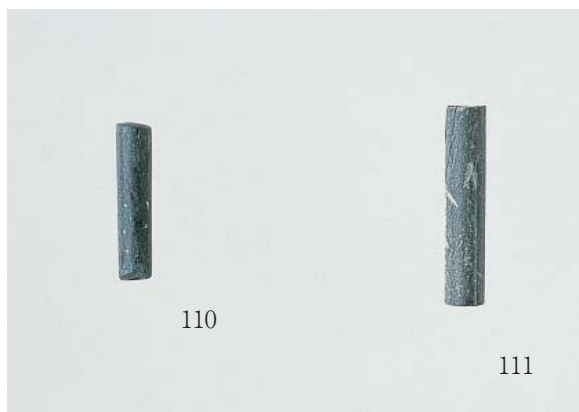
土師器(壺・甕・高杯)



土師器(甕・高杯・甑), 須恵器(甕), 土製品(管玉)



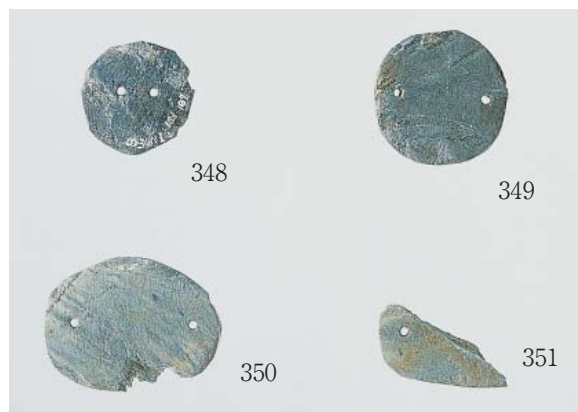
土師器(甕・高杯), 手づくね土器, 須恵器(杯身・高杯), 土製品(土錘), 土製模造品(勾玉), 石製模造品(有孔円板・剣形品)



土師器(甕), 土師質土器(杯), 製塩土器, 石製模造品(管玉), 石製品(叩石), 鉄製品(鉄鏃)

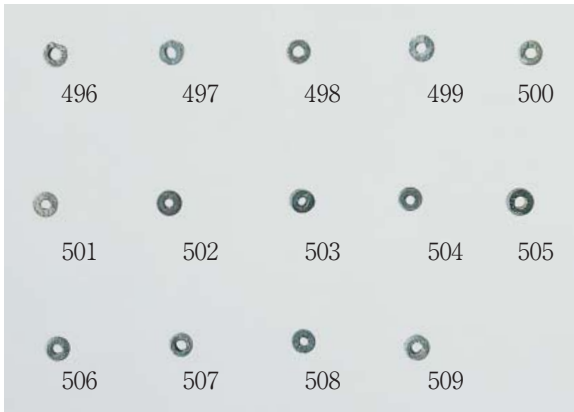


弥生土器(甕・高杯), 土師器(甗・高杯), 須恵器(高杯・子持ち壺・甕)



須恵器(甗), 土製模造品(勾玉), 石製模造品(有孔円板・剣形品), 石製品(叩石・砥石)

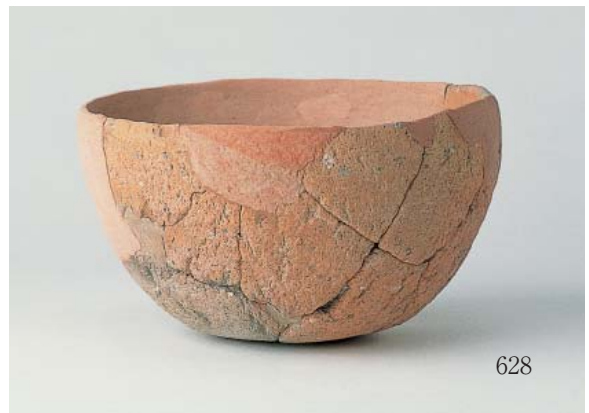
PL.84



土師器(甕・鉢・高杯), 石製模造品(白玉)



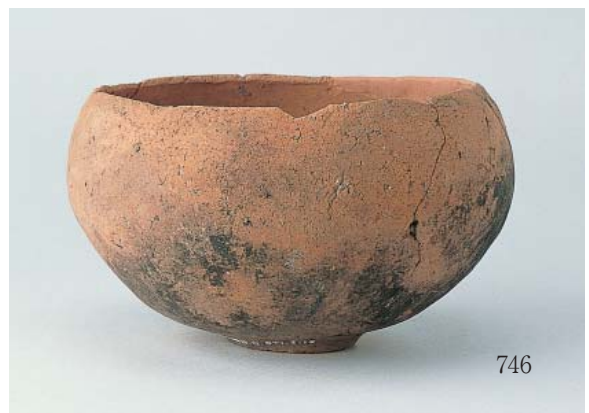
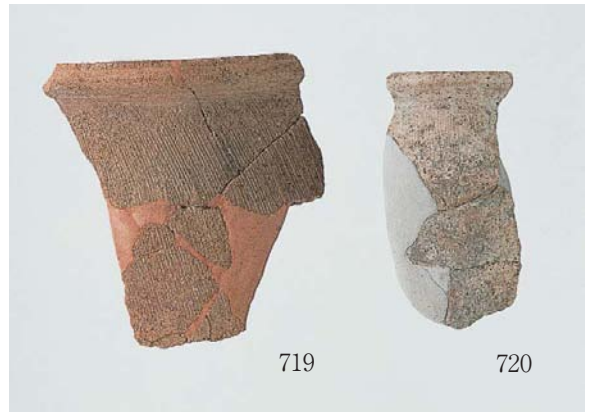
土師器(壺・甕・高杯), 手づくね土器, 石製模造品(白玉), 石製品(叩石)



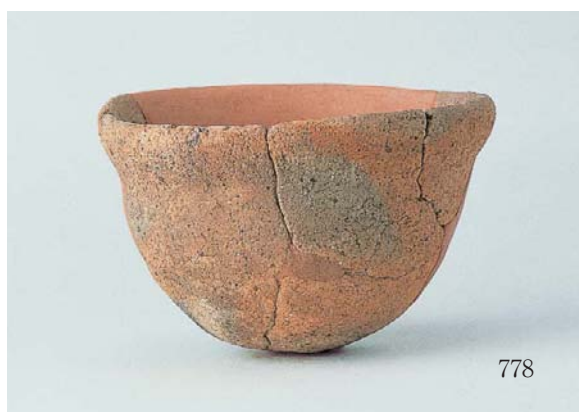
土師器(甕・鉢・高杯)



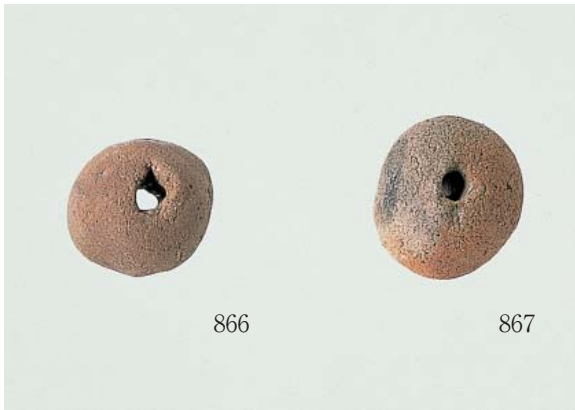
土師器(鉢・高杯・杯・碗), 須恵器(杯身), 土製品(土錘)



弥生土器(壺・甕), 土師器(甕・鉢), 土製品(土錘)



土師器(鉢・高杯)

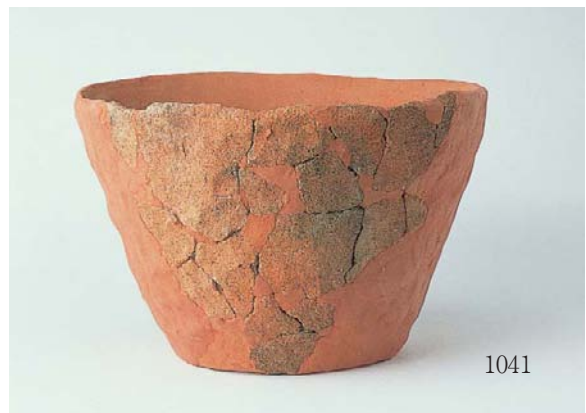


土師器(壺・甕・高杯), 手づくね土器, 土製模造品(模造鏡・土玉), 石製模造品(勾玉・劍形品)



土師器(甕・高杯・甑), 須惠器(杯身), 石製品(叩石)

PL.92



土師器(甕・高杯), 製塩土器, 土製品(土錘), 石製模造品(白玉)



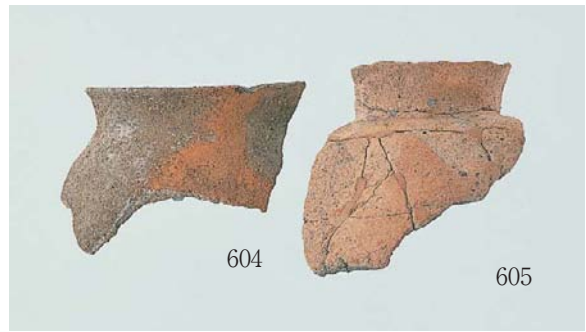
土師器(甕・鉢・杯・皿), 須恵器(杯蓋・杯身)



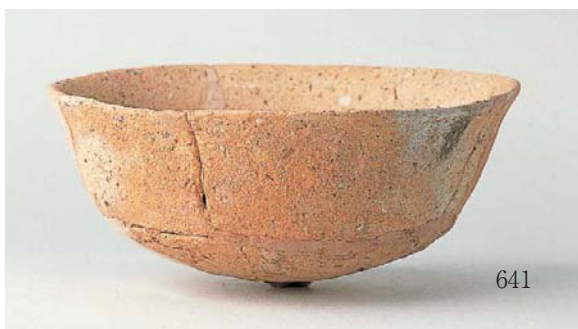
土師器(鉢・高杯), 須恵器(杯蓋・杯身)



土師器(鉢・高杯), 須恵器(杯身)



土師器(甕・鉢・高杯)



弥生土器(甕), 土師器(高杯・杯), 須恵器(杯蓋・杯身・高杯), 土師質土器(椀)

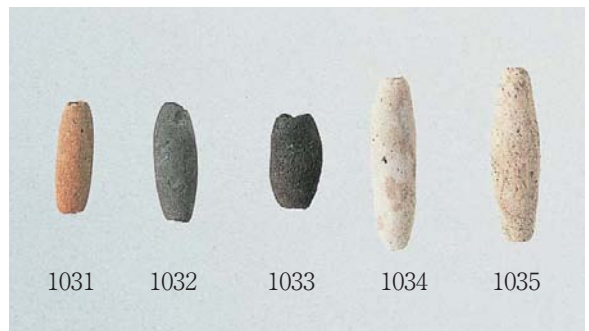


土師器(鉢・高杯), 須恵器(杯蓋・杯身)



土師器(甕・鉢・高杯・甑), 須恵器(杯蓋・杯身)

PL.100



土師器(甕・鉢・高杯), 須恵器(杯蓋・杯), 土製品(土錘)



90



92



93



94



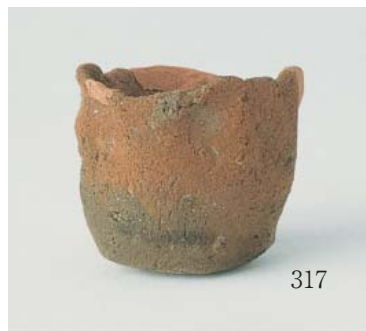
224



313



314



317



318



485



486



669



670

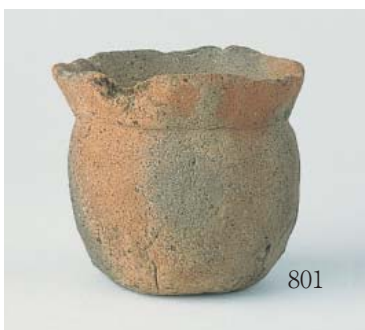
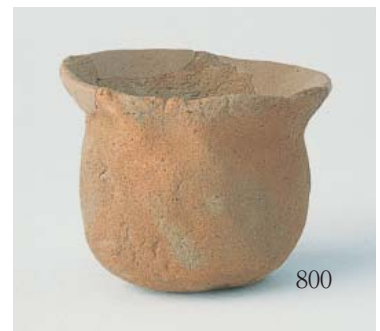
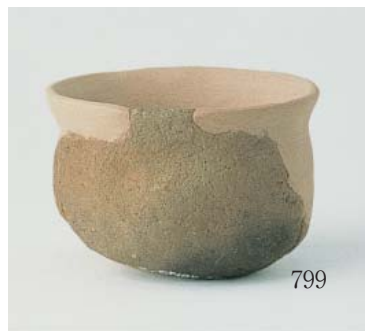
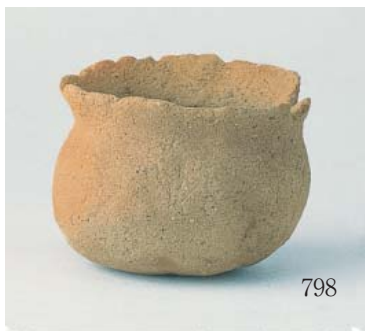


673



674

手づくね土器



手づくね土器



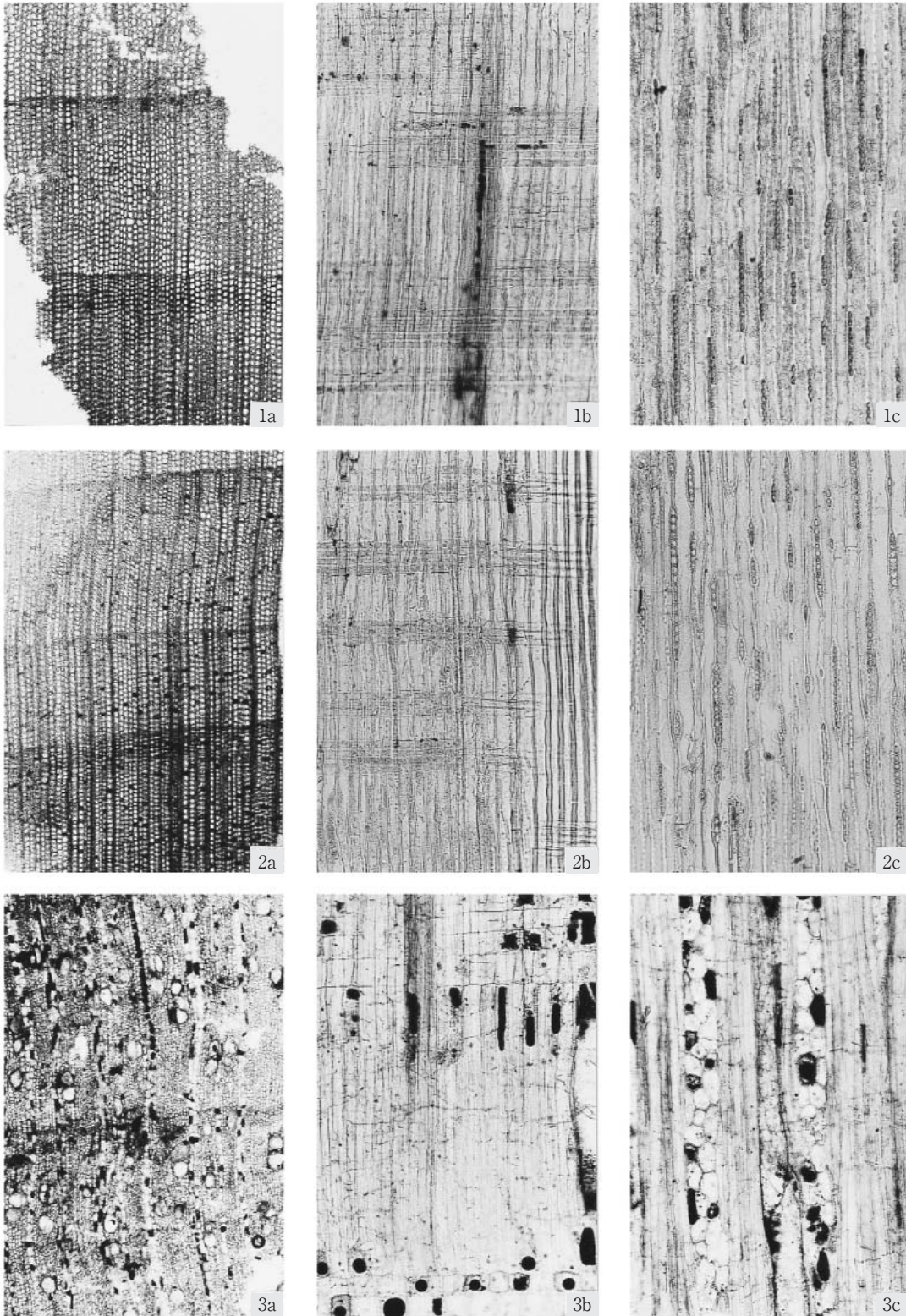
手づくね土器



手づくね土器

自然科学分析

図版1 木材



木材 1. ヒノキ(試料番号12)

2. マキ属(試料番号1)

3. アワブキ属(試料番号16)

a:木口 b:柁目 c:板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

報告書抄録

ふりがな	ぐどうなかやまいせきぐんさんのさん								
書名	具同中山遺跡群Ⅲ－3								
副書名	中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書								
巻次	XI								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書								
シリーズ番号	第70集								
編著者名	廣田佳久・田坂京子・山本純代								
編集機関	(財)高知県埋蔵文化財センター								
所在地	高知県南国市篠原南泉1437-1								
発行年月日	2002年2月28日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
ぐどうなかやまいせきぐん 具同中山遺跡群	こうちけん 高知県 なかむらし 中村市 ぐどうなかやま 具同中山	39207	70052	32度 58分 21秒	132度 55分 02秒	20000601 / 20001110	1,676m ²	中村宿毛 道路建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項			
具同中山遺跡群	祭祀跡	弥生時代	土坑 1	炭化物集中遺構 9	弥生土器	古墳時代の掘立柱建物跡と竪穴住居跡を具同中山遺跡群で初めて確認した。 また、祭祀関連遺構から須恵器の器台・把手付き椀などの出土例の少ない遺物や一連の調査では最多の白玉が出土した。			
		古墳時代	掘立柱建物跡 2	竪穴住居跡 1	祭祀関連遺構 12				土師器 須恵器 土製品 石製品
		古代	土坑 10	炭化物集中遺構 3	性格不明遺構 4				土師器 須恵器 製塩土器 土錘

本書作成データ

本書の作成には、MacOS9.1と以下のハードとソフト及びフォントを使用した。

まず、基礎作業はPowerBookG3/400とiBookSE、編集作業ではPowerMacintoshG4/733を使用し、原稿執筆とデータ処理にはJedit (PPC) 1.08 bとExcel2001を用いた。編集はすべてQuarkXpress4.1r2Jを使用した。なお、表組はExcel2001で作成したものをタブ変換しIllustrator9.02にFlexTableを介して取り込み編集しEPSデータとした。

第IV章自然科学分析に掲載している表と挿図は納品されたExcelのデータをIllustrator9.02で編集し直し、IllustratorEPSデータとした。

フォントはすべてNewCIDフォントで、和文フォントにモリサワリュウミンL-KL・太ミンA101・中ゴシックBBB・太ゴシックB101・見出ミンMA31、欧文フォントにビブロスRmAlpha, TimeItalic, 外字にエヌフォア外字DXを使用した。なお、字詰めはDr.カーニングを併用した。

また、入稿までの編集・校正作業はCOLOR LASER SHOT LBP-2260PSおよび DocuCentre 401 FS (Adobe PS3) で印刷したもので行った。

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第70集

具同中山遺跡群Ⅲ－3

中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書XI

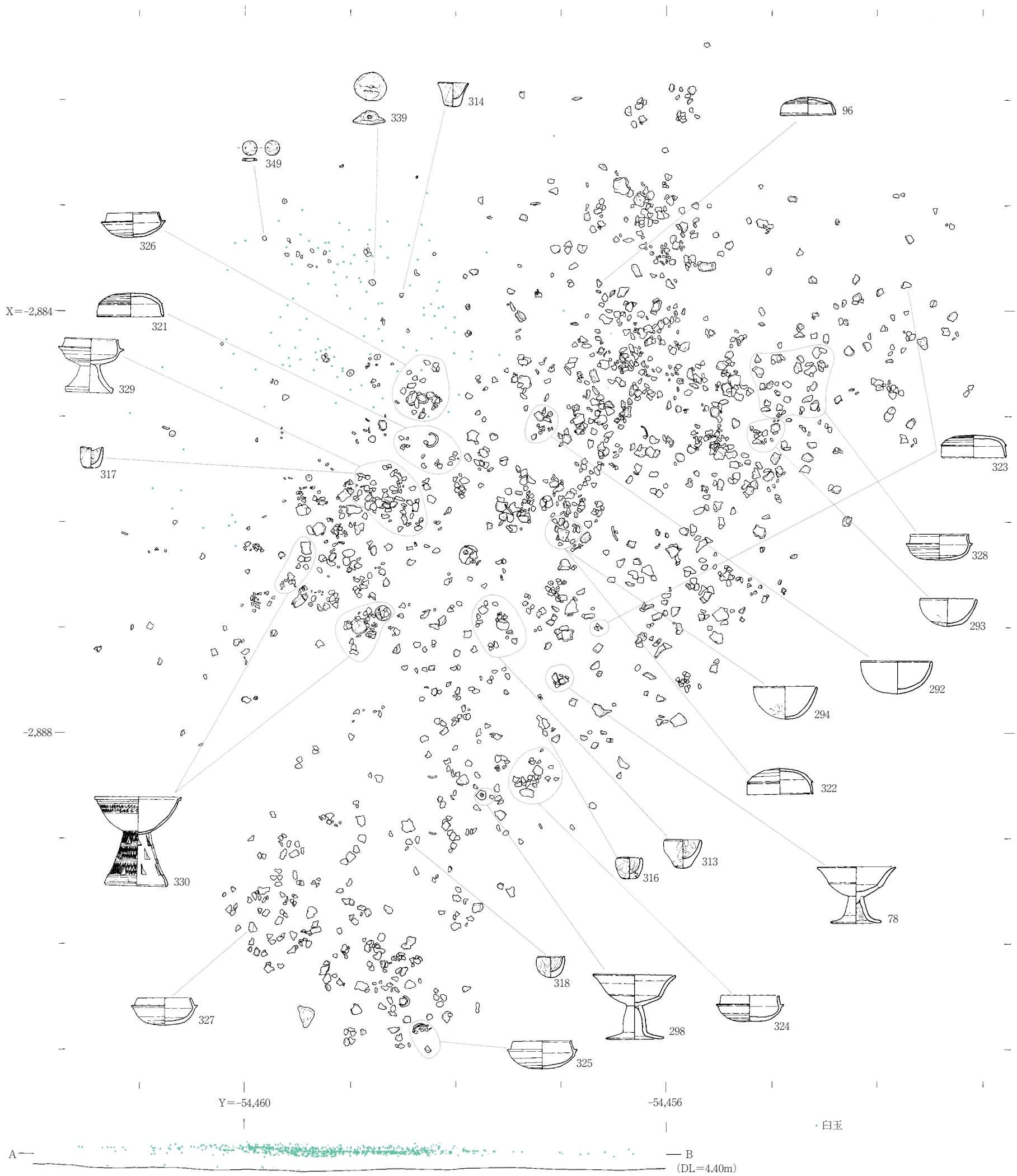
2002年2月28日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

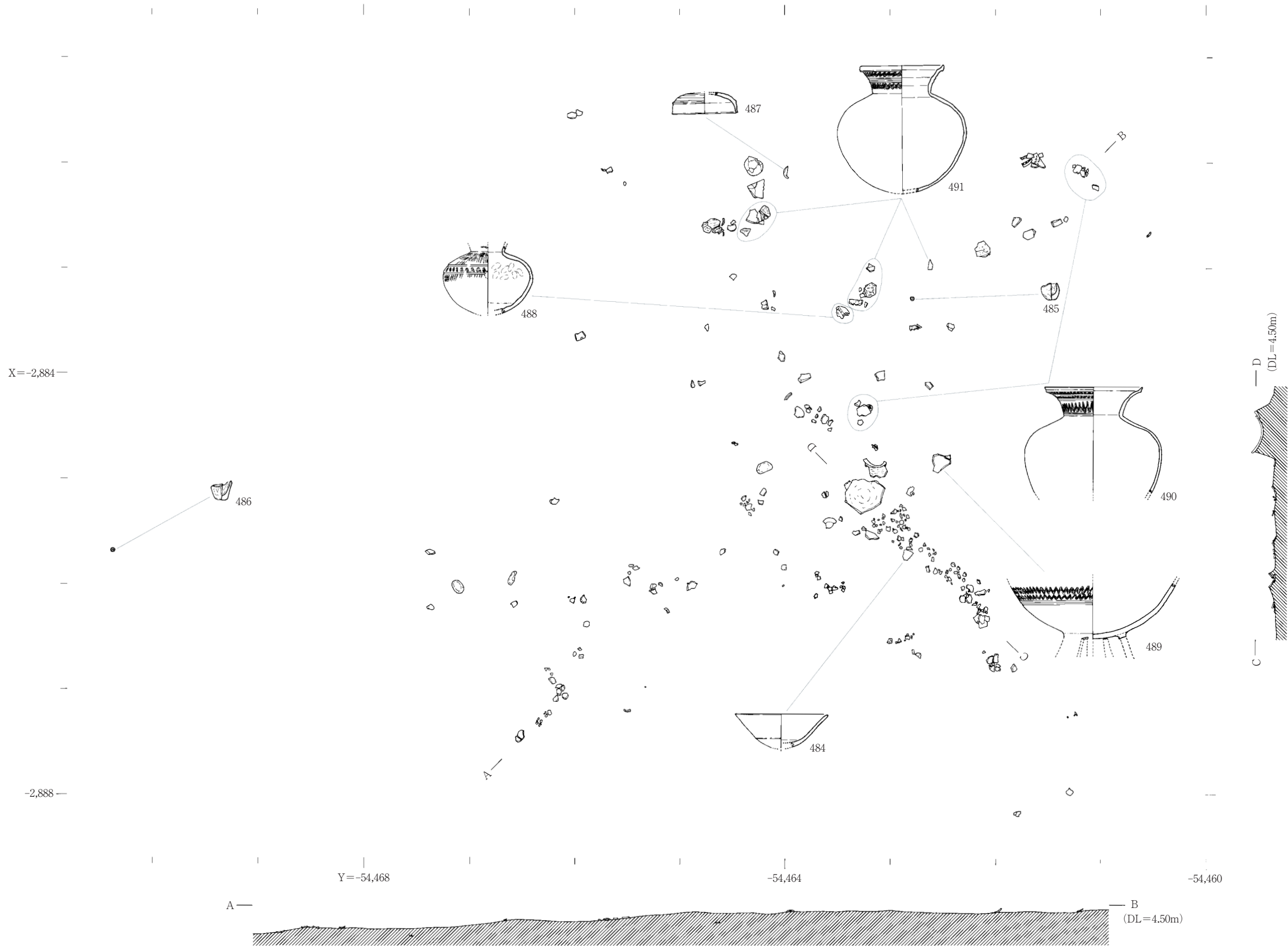
高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088-864-0671

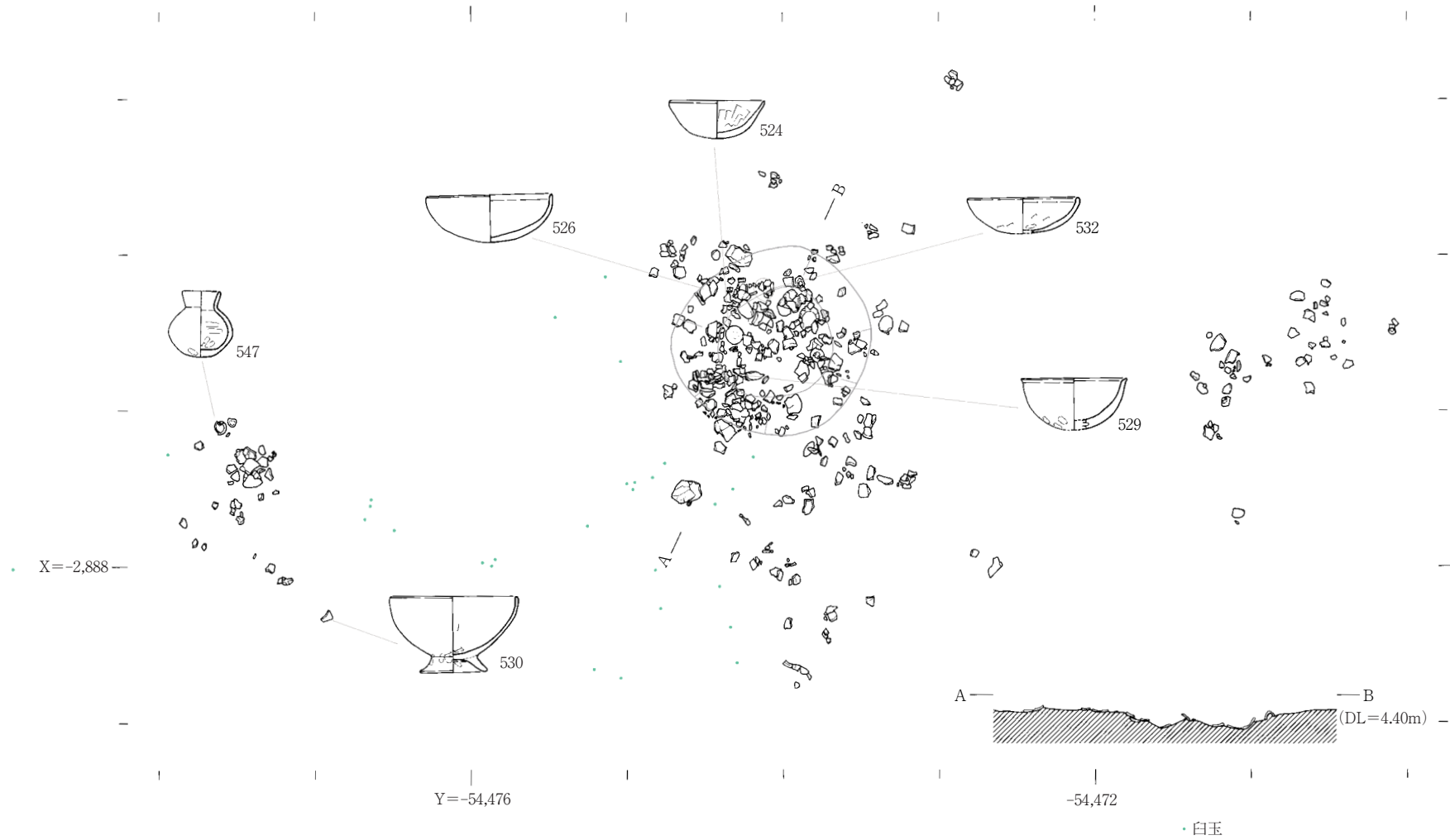
印刷 川北印刷株式会社



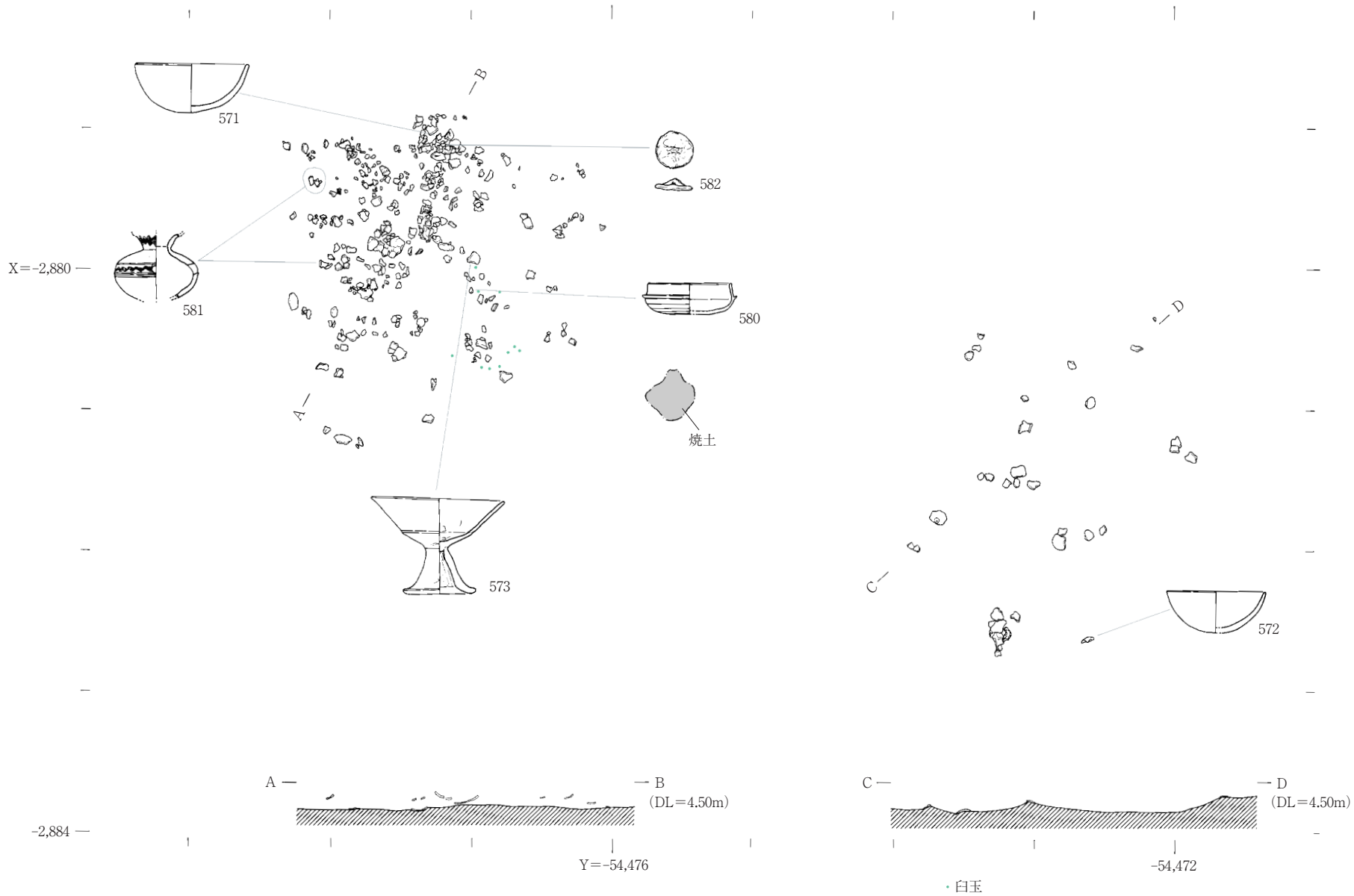
付图1 SF-1遺物出土状态(S=1/40)



付図2 SF-2遺物出土状態 (S=1/40)



付図3 SF-3遺物出土状態(S=1/40)

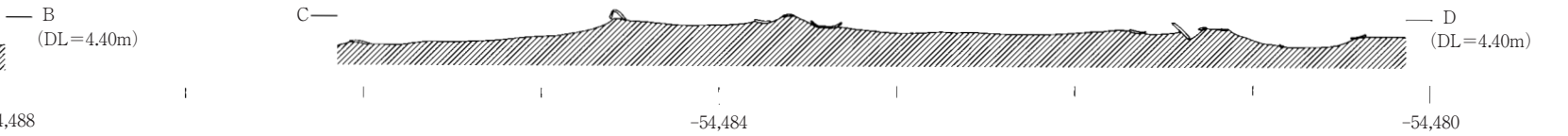
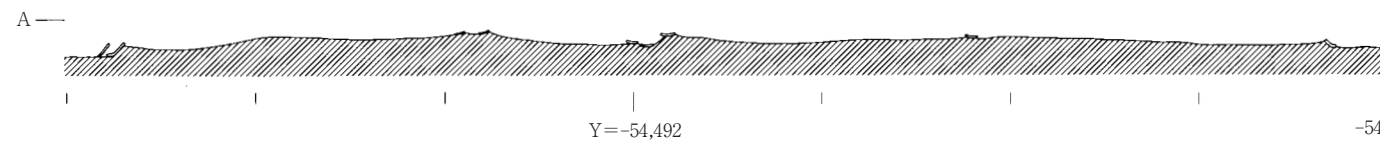


付図4 SF-4遺物出土状態(S=1/40)

X=-2,880

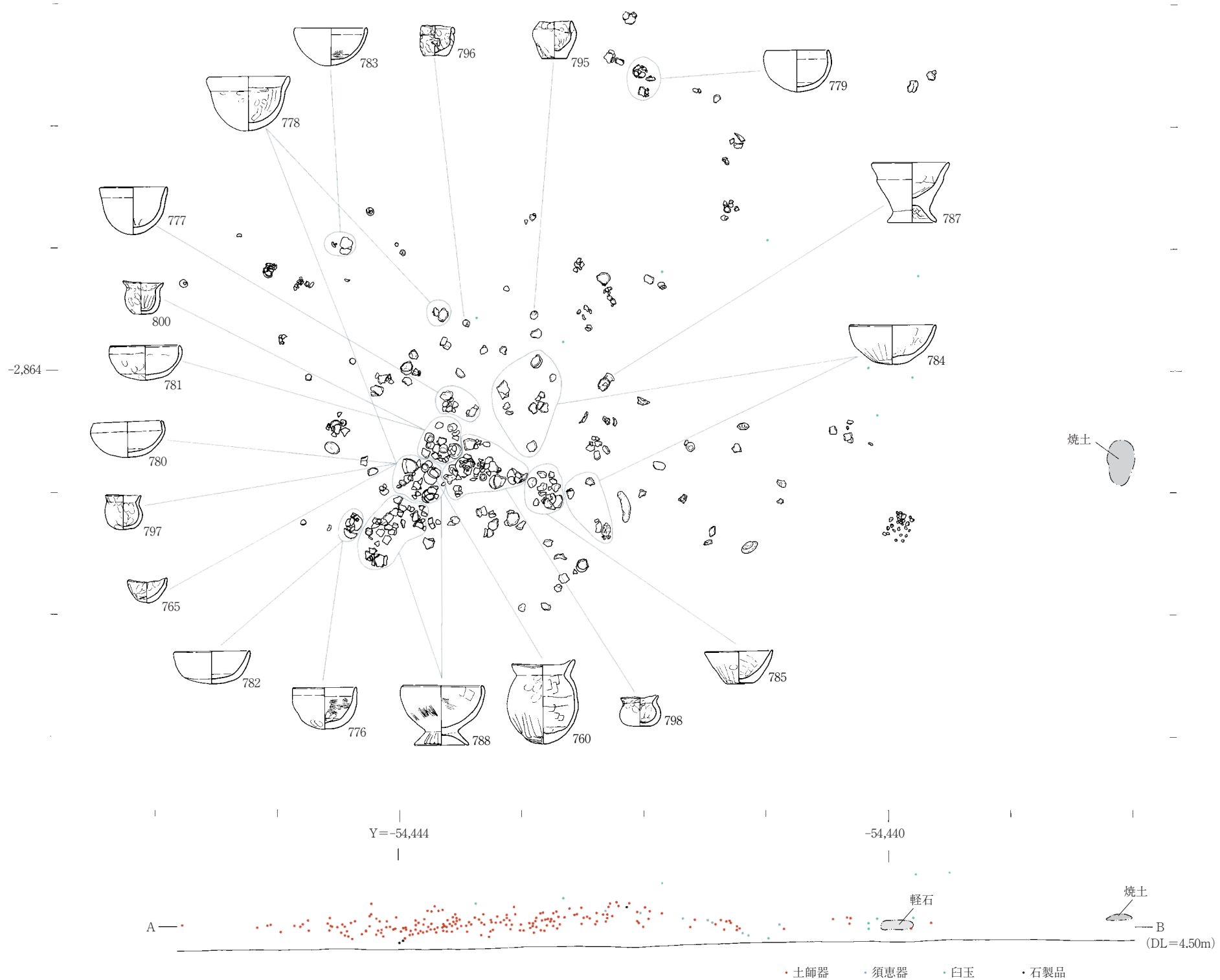
-2,884

-2,888

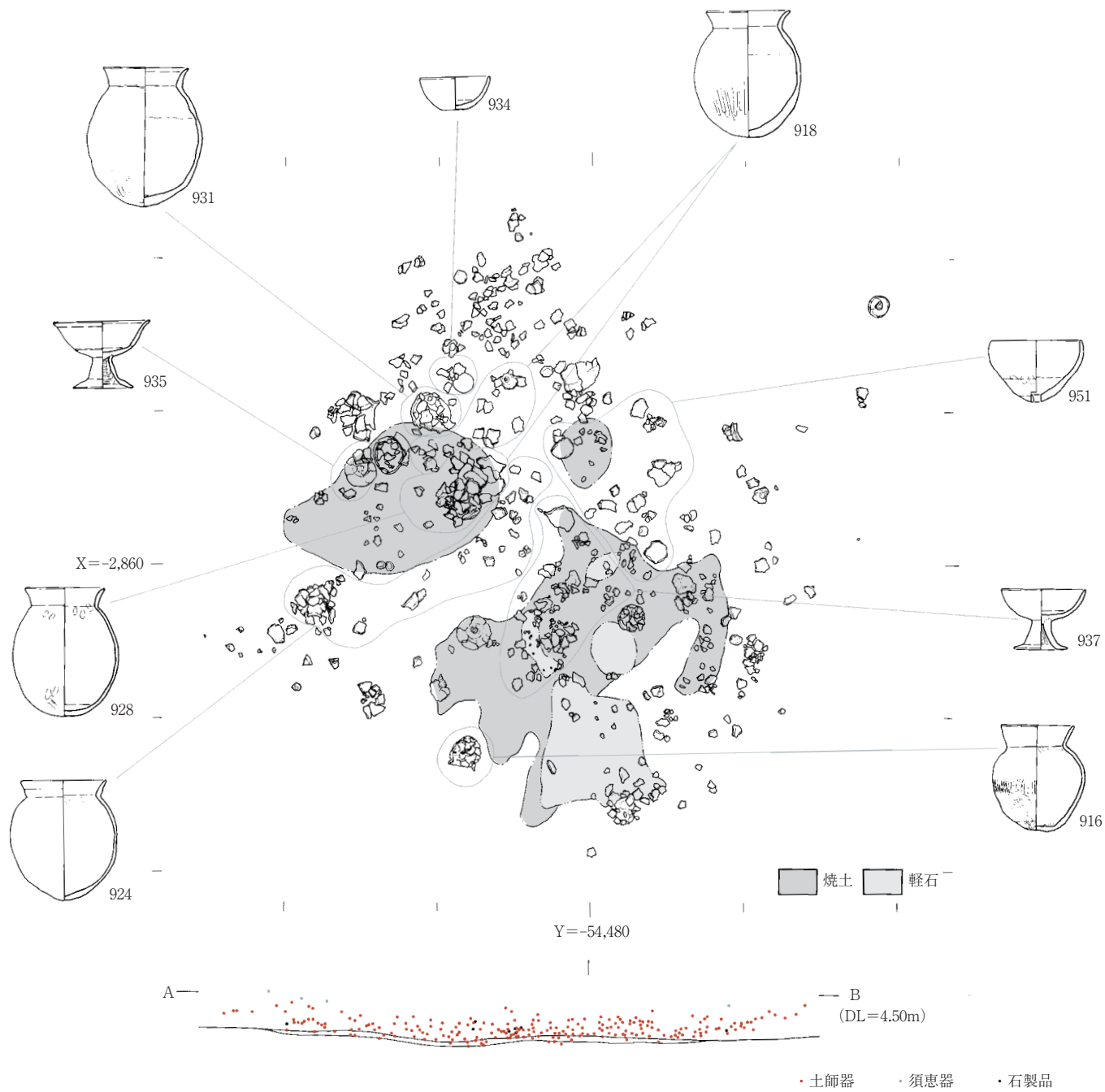


付図5 SF-5遺物出土状態(S=1/40)

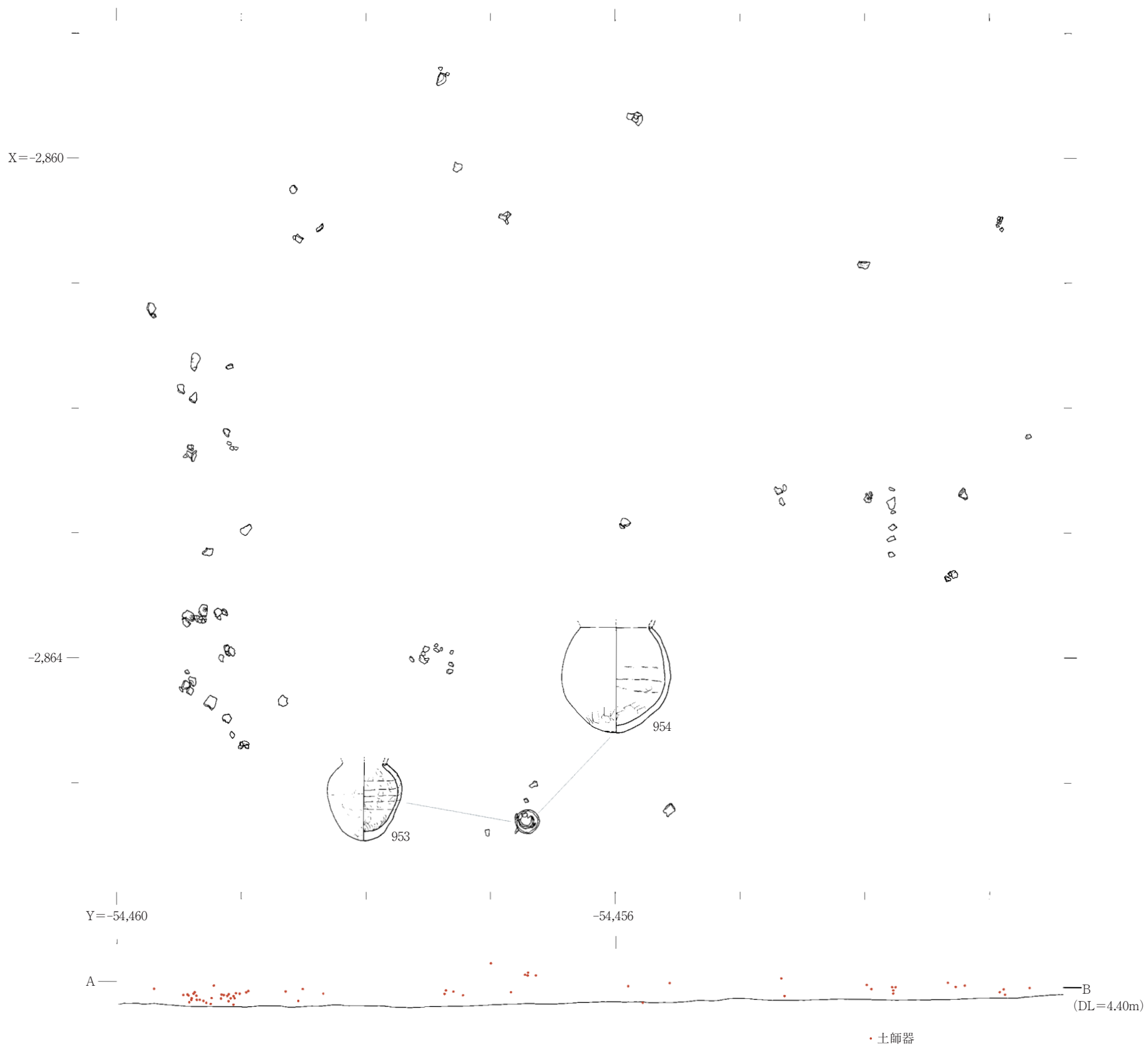
X=-2,860



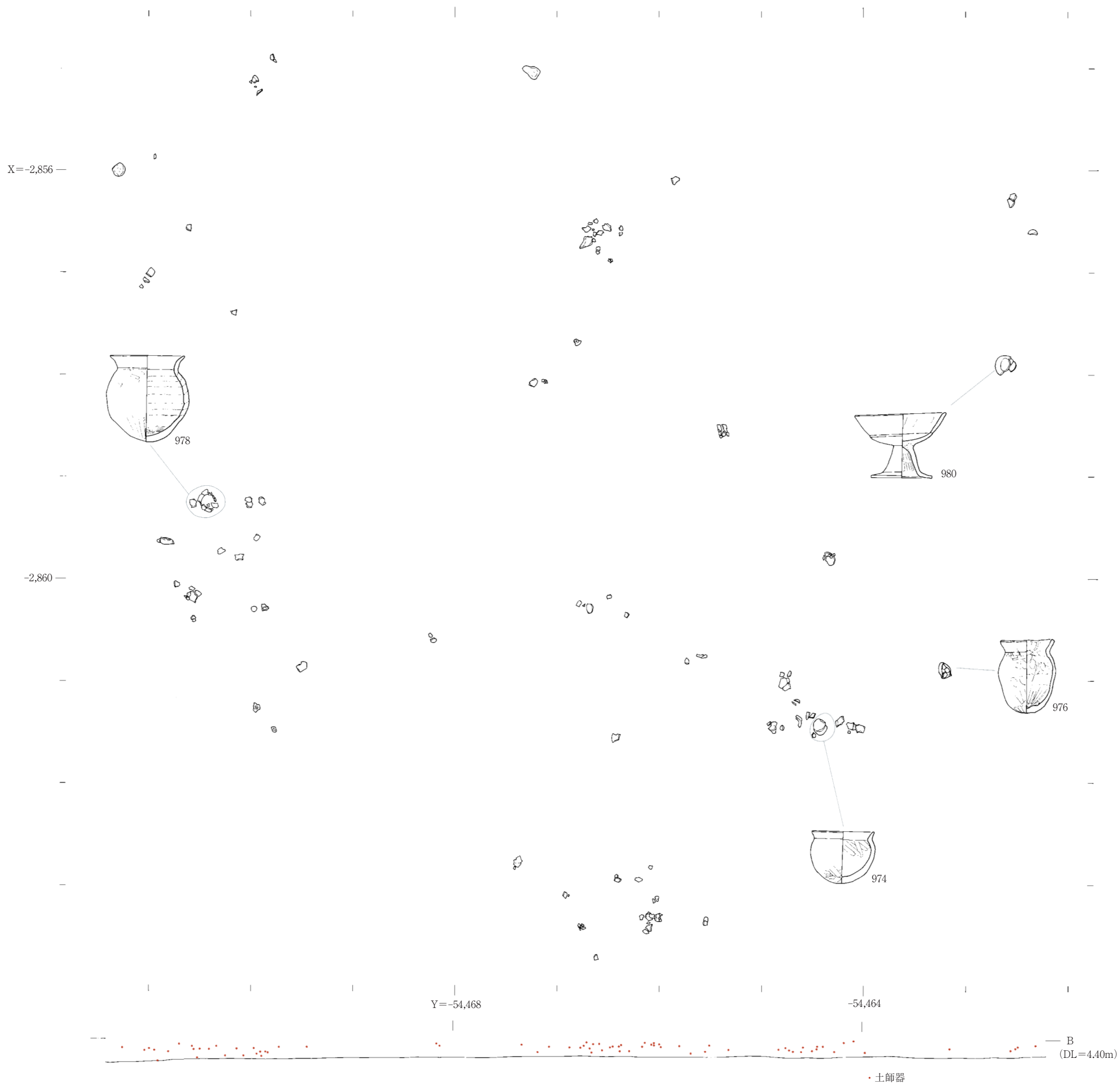
付図6 SF-7遺物出土状態(S=1/40)



付図7 SF-8遺物出土状態(S=1/40)

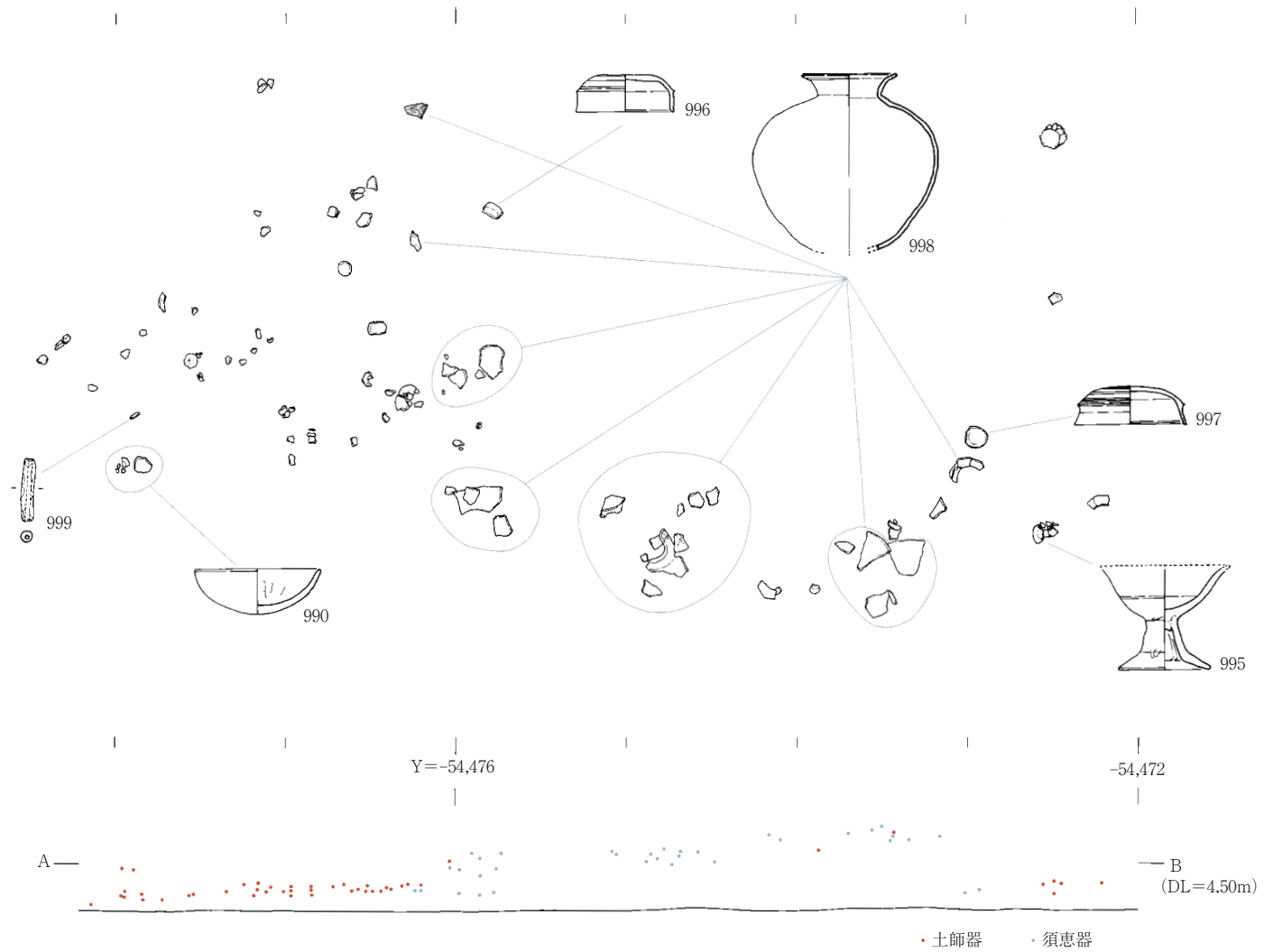


付図8 SF-9遺物出土状態(S=1/40)



付図9 SF-10遺物出土状態(S=1/40)

X=-2,860 —



-2,864 —

Y=-54,476

-54,472

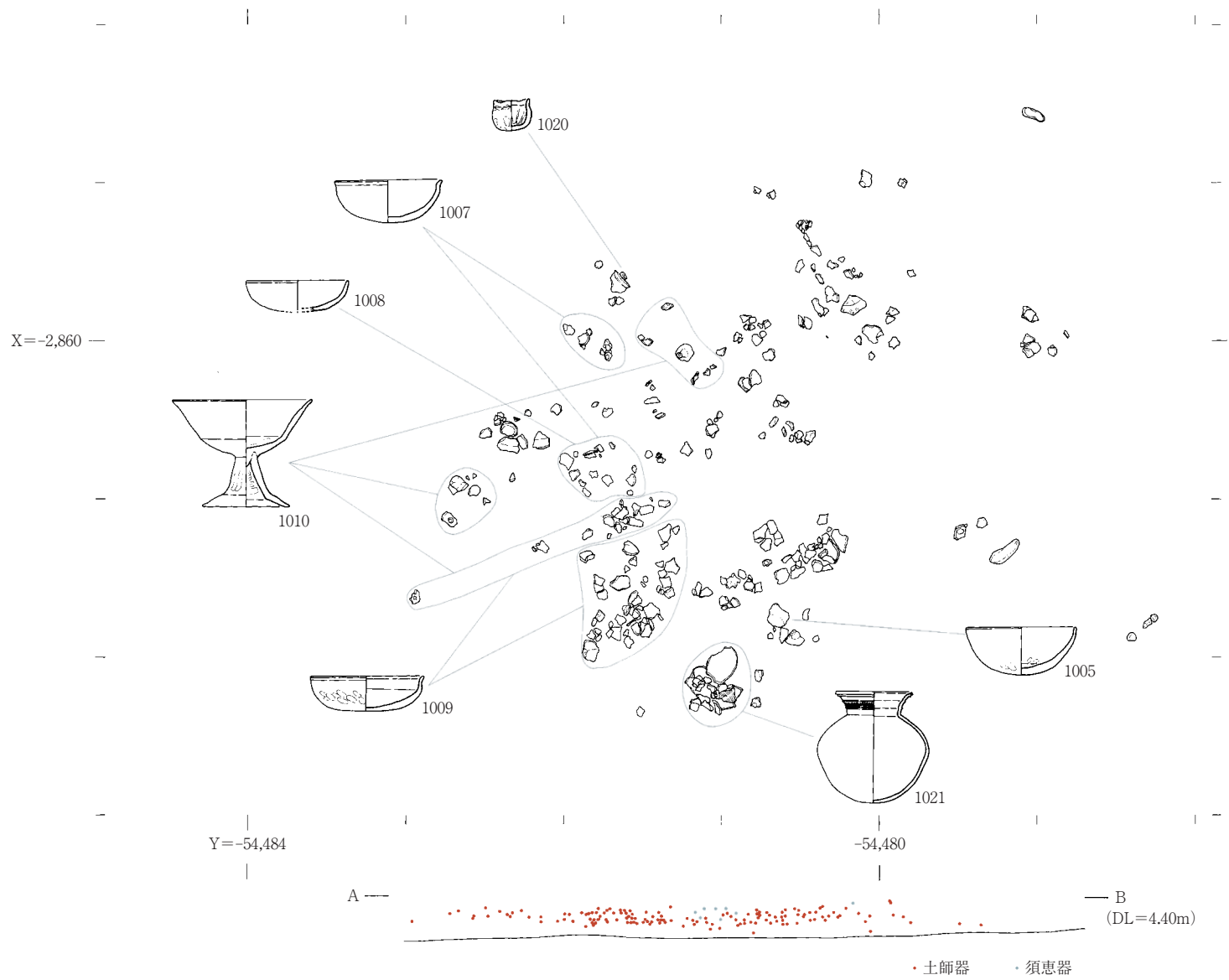
A —

— B

(DL=4.50m)

・土師器 ・須恵器

付図10 SF-11遺物出土状態(S=1/40)



付図11 SF-12遺物出土状態(S=1/40)